

イギリス生まれの日本文学研究者 R.H.ブライス

**(Reginald Horace Blyth)研究**

—足跡と業績—

文学研究科英語圏文化専攻

博士課程後期

吉村侑久代

## 目次

はじめに：筆者と R.H.ブライス研究 p.6

### 第一部

序章 俳句の国際化 p.12

第一節 俳句を「無形文化遺産」に申請の動き

第二節 世界の俳句作品

第三節 外国語の俳句の定義

第四節 21 世紀の世界の俳句

第五節 ブライスの先見の明

第一章 R.H.ブライスの再評価 p.16

第一節 イギリスで *The Genius of Haiku* 『俳句のこころ』の出版

第二節 ブライスとジェイムズ・カーカップ

第三節 最近の R.H.ブライス研究

第二章 ブライス小伝 p.21

第一節 内なる運命

第二節 ロンドン時代（出生から朝鮮行きを決意するまで 1898-1924）

(1) 出生地はレイTONSTON

(2) 自然と詩と孤独を愛する少年

(3) ブライスの両親

(4) 宗教と政治にはまる母方の祖父

(5) ブライスの従姉妹

(6) 十代の教師

(7) 強靱な精神と体躯

(8) 良心的徴兵忌避者

(9) 菜食主義者

(10) 恩師ロンドン大学ウィリアム・ペイトン・ケア教授との出会い

(11) 藤井秋夫との出会い

第三節 朝鮮時代（京城帝国大学予科教員時代から日本内地への移住 1924-1940）

(1) 東洋との出会い

(2) 朝鮮の暮らし

(3) 離婚・養子李仁秀・再婚

(4) 音楽狂

- (5) 俳句との出会い
- (6) 俳句から禅へ
- (7) 基督教を捨て、禅仏教へ
- (8) 友人藤井秋夫の急死、そして本土へ

#### 第四節 日本時代（内地移住～旅立ちまで 1940-1964）

- (1) 第二の内なる運命
- (2) 金沢第四高等学校の傭入教師に
- (3) 帰化願いの申請
- (4) 帰化申請手続きの消滅
- (5) 1940年代における日本人識者の民族文化観
- (6) 交戦国民間人抑留収容所での暮らし
- (7) 鈴木大拙と対面
- (8) 学習院へ就職
- (9) 宮内省とGHQのパイプ
- (10) ブライスの理想像・山梨勝之進との出会い
- (11) 天皇制維持のための黒衣
- (12) 鈴木大拙と *The Cultural East* 『カルチュラル・イースト』の出版
- (13) 幻の英文雑誌 *The Cultural East* 『カルチュラル・イースト』
- (14) ブライスと民芸運動
- (15) 旅立ち

### 第三章 R.H.ブライスの主な著書

p.74

#### 第一節 『禅と英文学』

- (1) 出版目的
- (2) 構成と内容

#### 第二節 *The Cultural East* 『カルチュラル・イースト』

- (1) 出版目的
  - The Cultural East: Editorial* の翻訳
- (2) 構成と内容
- (3) ブライスの論文「禅と俳句」
  - ① 構成
  - ② 内容

#### 第三節 *Haiku* 4 vols. 『俳句』 4巻

- (1) 出版目的
- (2) 構成
- (3) 内容

- ① 四人の俳人
- ② 歳時記風体裁

#### 第四節 ブライスの俳句観

- (1) 俳句は全東洋の精華
- (2) 俳句と禅は同義語
- (3) 自己の内的世界の表現

### 第四章 R.H.ブライスと川柳

p.91

#### 第一節 英訳川柳の黎明期から興隆期まで

- (1) 初めての英訳川柳：和田謙三著『吐雲録』（1914）
- (2) 英訳川柳書の出版：成見延亀・上床新助共訳 *Senryu, short witty odes* 『英訳川柳名句選』（1924）
- (3) 古川柳研究誌に上床新助の英訳川柳：『やなぎ樽研究』（1925）
- (4) 辞典の訳例に川柳：斎藤秀三郎『斎藤和英大辞典』（1928）
- (5)阿部佐保蘭の活動：「川柳翻訳研究会」（SHK）の創設

#### 第二節 ブライスと川柳の出会い

#### 第三節 ブライスと川柳人の交流

- (1) 宮森麻太郎
- (2) 吉田機司

#### 第四節 川柳は諷刺詩：（『世界の諷刺詩川柳』出版）

#### 第五節 ブライスの川柳観

#### 第六節 俳句と川柳の違い

#### 第七節 ブライスの創作した俳句と川柳

#### 第八節 川柳の現況

## 第二部

### 第一章 R.H.ブライスに影響を受けたアメリカの詩人 p.106

#### 第一節 ブライスのアメリカ俳句への影響

#### 第二節 ジャック・ケルアックと俳句

#### 第三節 アレン・ギンズバーグと俳句

#### 第四節 アメリカ俳句の真髄（アメリカ俳句におけるブライスの俳句観の受容）

### 第二章 ジェイムズ・W・ハケットの世界

p.110

#### 第一節 ハケットの経歴・俳句との出会い

#### 第二節 ブライスとの交流

#### 第三節 ハケットの俳句観

第三章 川柳・俳句の英訳 3 行の定着	p.119
第一節 川柳の場合	
第二節 俳句の場合	
第四章 海外に広がる俳句の未来—スウェーデンの俳句活動	p.124
第一節 俳句に魅せられた駐日スウェーデン外交官	
あとがき	p.127
注	p.128

#### 資料

1. R.H.ブライス年譜
2. R.H.ブライス著作目録
3. R.H.ブライスに関する参考文献
4. その他
  - ①David Cobbから筆者への手紙(January 8,1993/June 11,1993/December 8,1993).
  - ②James Kirkupから筆者への手紙(June 19,1993/July 17,1993/October 3,1993).
  - ③Hetty Blythから山田達子（ブライスの秘書）への手紙(April 6,1959).
  - ④H.G.HendersonからJames W.Hackettへの手紙(Dec.25,1964,Hackett氏提供) .
  - ⑤ブライス出生届（1899年1月13日Leytonの出生登録所に父Horace Blythにより提出）.
  - ⑥ブライス両親結婚証明書(1887年9月Hertfordの独立教会にて結婚).
  - ⑦ブライス履歴書2種類（神戸抑留所提出・学習院大学提出）。
  - ⑧ブライスの自筆筆跡コピー.
  - ⑨鈴木大拙とブライスの初会見を示す英文原稿(武田ナナ氏提供).
  - ⑩⑪Newsletter of British Haiku Society(May,1993/Nov.1993).
  - ⑫THE CULTURAL EAST表紙.
  - ⑬『俳句のこころ』出版前（1993年ごろ）のイギリスにおけるブライスの情報（David Cobb氏提供）.
  - ⑭The Cultural East Vol.1, No.1のEditorial（英文）の掲載部分pp.1-6.

## はじめに：筆者とR.H.ブライス研究

R.H.ブライス(Regenald Horace Blyth 1898-1964 以後ブライス)に関心を抱いたのは、筆者が英語俳句の創作と俳句の英訳・英語俳句の和訳に関わっていたことにより、ブライスの俳句の翻訳および彼の俳句観に興味を持ったことが出発であった。

1994年、イギリス俳句協会は、日本滞在中にブライスと親交があったジェームズ・カーカップ：イギリス俳句協会長 (James Falconer Kirkup 1923-2009)を代表執筆者に据えて、ブライス没後30年を記念する*THE GENIUS OF HAIKU Readings from R.H. Blyth on poetry, life, and Zen*『俳句のこころ』<sup>1</sup>(以後『俳句のこころ』)を出版した。

この出版の目的は、生涯の大半を日本で過ごしたために母国イギリスにおいても認知されていない俳句の先達であるブライスをイギリス俳句協会が評価し、ブライスをイギリス俳句協会のシンボルに据えるというものであった。

『俳句のこころ』のブライス小伝部分の執筆を担当したカーカップと、筆者の旧知であるイギリス俳句協会事務長のデビッド・コブ (Devid Cob) は、日本におけるブライスの生活に関する調査を筆者に依頼してきた。かねてよりブライスに関心を持っていたこともあり、この依頼が筆者のブライス研究を促進させた。

したがって本書執筆の目的は多様な業績にもかかわらず、日本でも母国でも知る人の少ないブライスの人物像と、彼の俳句、川柳の解説に記述される日本文化観研究を第一義とした。

ブライスの生まれ故郷であるエセックス州のタウン誌「エセックス」<sup>2</sup>に“ミスタータイムレス”と題したブライス紹介のエッセイが、『俳句のこころ』の出版と同時に掲載された。このエッセイは一般には浸透していない俳句という短詩をイギリスの一般人に紹介するとともに、故郷を離れたブライスのお披露目となった。これからは世界の俳句ブームに乗って、ブライスはイギリスの街おこしの起爆剤になるかもしれない。イギリス人にとっては、一鉄道員の息子が、日本の皇太子の英語教師になったということに興味をそそられるのであろうか、ブライスの出生地であるレイトンストーンでは、イギリス俳句協会が「ブライス通り」を誕生させ、生家の壁には「俳句の先達者ブライスの家」というプレートをはめ込もうと町に働きかけている。近い将来には、レイトンストーンや幼年期から過ごしたイルフォードの家、そして通学していた学校周辺がブライスの俳句史蹟巡りとして、イギリスをはじめ世界の俳人たちのメッカとなるのも、あながち夢物語ではなさそうである。

ブライスは1898年12月3日、グレート・イースタン鉄道に勤務する鉄道員の一人息子としてイギリス、エセックス州レイトン(現在レイトンストーン)で生れた。ロンドン大学で英文学を専攻し、優秀な成績で卒業した。その後ロンドン大学教育科教員免許を取得する。当時、親しくしていた日本人の留学生、藤井秋夫から京城帝国大学予科外国人教師の職を紹介された。ブライスは大学で同級生であった新婚の妻、アニー・バーコヴィッチ(Annie Bercovitch, 1900-?)<sup>3</sup>を伴い、1924年8月、神戸に着いた。そして当時日本の統治下にあった朝鮮の京城で9月より教職についた。その後、朝鮮に16年、日本

に 24 年滞在した。その後アニーと法的な離婚の手続きのためにイギリスに帰国 (1935-1936) した以外、通算 40 年の長い年月を日本で暮らした。

ブライスは文学・宗教関連において、海外に禅を広めた鈴木大拙の信奉者、第二次世界大戦後の俳句・川柳海外普及の立役者、膨大な数の古典俳句と古川柳の英訳・解説者として知られ、その解説は1950～60年代のアメリカ詩壇への俳句の影響を促した。また、第二次大戦終戦時にはGHQと皇室の間に立って連絡役を務め、昭和天皇の「人間宣言」(1946)の草案の作成や、戦後に学習院が私学として継続することに貢献した。さらに明仁皇太子(現天皇)の英語教師、皇太子の家庭教師となったアメリカ人作家のエリザベス・ジャネット・グレイ・ヴァイニング (Elizabeth Janet Grey Vining 1902-1999)の招聘などに深く関わった他、宮内省とGHQのメッセンジャーとして戦後の皇室の維持に重要な役割を担った。

彼の最初の出版物である*Zen in English Literature and Oriental Classics*<sup>4</sup>『禅と英文学』(以後『禅と英文学』)が1942年に出版されて半世紀以上になる。ブライスの著書は現在も版を重ね、世界各地で俳句の基本図書として海外の読者を獲得している。彼の日本語で書かれた数点の著書<sup>5</sup>を除き、学生用に執筆したテキスト版を含め40数点以上におよぶ著書の全ては英語で書かれている。そのため海外の読者を獲得したうえ、日本の俳句の海外への普及に寄与した。また「俳句は禅と同義語」と云った禅仏教を背景にしたブライスの俳句観は、他の外国人俳句研究家には見られない特徴である。

日本の短詩型文学を外国人として初めて本格的に紹介したブライスの功績は、俳句・川柳・禅に関する彼の著書を通じて日本文化に出会った文学者が、1950年から60年代にかけて欧米諸国を中心に多数現われたことに示されている。特に、当時米国詩壇の一大潮流であったビート派詩人たちはブライスの影響を強く受け、彼らの中で「俳句は禅なり」と説くブライスの著書『俳句』を読破しなかった詩人はいなかったと思われる。そして米国の禅ブームとともに、ブライスの著書は俳句愛好者(米国では当時日本の俳句に模した短詩が多く試作された)の聖典とみなされるようになった。したがって、今日、俳句が日本のみならず世界各地で盛んに作られるようになった背景には、ブライスの著書の影響が少なからずあると言っても過言ではない。

ところが、英文で書かれたブライスの著書は、海外の愛好家には熱烈に支持されたものの日本人読者を獲得することは難しく、その後、現在に至るまで、彼の業績が紹介されることは、それほど多くはなかった。しかし、世界各地で多様な言語による俳句が盛んに作られるようになり、芭蕉、蕪村などの古典俳句から現代俳句にまで大きな関心を寄せる外国人研究者や詩人が多くなってきた昨今にあって、俳句紹介の先駆者としてのブライスの業績を再考察してみるのもあながち無意味なこととは思えないのである。

本論の第一部では、*Japanese Life and Character in Senryu*『川柳にみられる日本人の生活と気質』の序文で、ブライスが述べる「内なる運命」に焦点をあてる。ブライスはアニミズム、菜食主義、俳句、禅、川柳の出合いを「内なる運命」と記している。筆者はさらにもう一つの「内なる運命」を政治へのかかわりと仮定し、ブライス

の小伝に据えた。

それはブライスが日本の天皇制維持に宮内省とGHQの黒衣として働き、一方で朝鮮時代から研究し続けた禅仏教、そして禅仏教を背景とした日本の俳句・川柳の翻訳を行った姿にほかならない。母国イギリスから京城帝国大学教員として赴任、そして日本での戦後から逝去に至るまでを小伝として記した。

またブライスの業績の記述では『デジタル版日本人名大辞典』や『来日西洋人名事典』においても、禅と俳句のみに偏っているように、日本ではブライスの川柳への貢献は俳句や禅ほどには認識されていない。「ブライスと川柳」に関する先行研究は殆どなく、ブライスの日本文化観や翻訳活動を語るには、俳句同様に川柳にも着目しなければならないと考える。川柳を翻訳した最初の外国人であったブライスの川柳翻訳運動を英訳川柳史の中で捉えて考察した。

第一部の序章においては、俳句の国際化として外国語俳句の位置づけを明確にする目的で、第一節は「俳句を「無形文化財」に申請の動き」、第二節に「世界の俳句作品」、第三節に、「外国語俳句の定義」、第四節に「21世紀の世界の俳句」、第五節に「ブライスの先見の明」を取り上げた。日本の俳句界が外国語俳句をどのように見ようとしているのか、俳句の国際化と合わせて論じた。またブライスがすでに50年前の1964年に、俳句が世界各地で詠まれることを予想していたという「ブライスの先見性」に着目し考察した。

第一章では「ブライスの再評価」を取り上げる。1994年にブライス没後30年を記念して出版された『俳句のこころ』によって、ブライスは母国に里帰りすることが出来た。出版の経緯、出版の意義、またブライスが日本およびイギリスで正確に業績を認識されていない現状が如何に起こったかを記述する。序文を執筆したジェイムズ・カーカップとブライスの交流、最近のブライス研究の動向を紹介する。第一節に「イギリスで『俳句のこころ』の出版」、第二節は「ブライスとジェイムズ・カーカップ」、第三節は「最近のブライス研究」を取り上げる。

第二章「ブライスの小伝」執筆は、ブライスの死から20年後の1986年に、ブライスと親交のあった新木正之介学習院大学名誉教授を中心として出版された『回想のブライス』（回想のブライス刊行会事務所）（以下『回想』）を出典の拠り所としている。『回想』の出版は、ブライスが日本で知られるきっかけを作った。この「ブライスの小伝」では彼の出生を掘り起こし、ロンドン時代、日本統治下の朝鮮時代、そして日本時代と彼の生きざまを俯瞰しつつ、禅と俳句と川柳に捧げた彼のパーソナリティを追求する。ブライスと天皇制に関する著書にはすでに、平川祐弘著『平和の海と戦いの海一・二六事件から「人間宣言」まで一』（以下『平和・戦い』）や高橋紘・鈴木邦彦著『天皇家の密使たち一占領と皇室』などがあるが、ブライスの生涯を通じた小伝はイギリスでも日本でも多くは書かれていない。またイギリスの俳句詩人の協力を得て入手した資料や、ブライスが京城帝国大学教員時代に執筆した論文 *How I became a Buddhist*（『文献報国（京城帝国大学図書館1937）「余は如何にして佛教徒となりしや」を新資料として入手することができた。その結果、今まで明確にされな



かったブライスの宗教変革、つまり基督教から佛教徒になった事実が明らかになった。

第一節では「内なる運命」、第二節は「ロンドン時代」、第三節は朝鮮時代、第四節は「日本時代」を取り上げる。

第三章「ブライスの主な著作物」では、『禅と英文学』、英文雑誌*The Cultural East* (以後『カルチャル・イースト』)、*Haiku* (以後『俳句』)の分析を中心にブライスの俳句観を探る。ブライスの主要著書であり、東京大学より文学博士号授与の対象となった『禅と英文学』と『俳句』を紹介し、これら三冊の関連性を検証する。また鈴木大拙とともに、主に占領軍の将校らに日本文化を紹介する英文雑誌『カルチャル・イースト』はどのような目的で出版され、また意義を持っていたのかを検証する。2号で終刊となった『カルチャル・イースト』は散逸し、幻の英文雑誌と云われている。また『カルチャル・イースト』の1巻1号に掲載されたEditorial (創刊にあたって)の翻訳を加えた。Editorialの執筆者は記されていないが、鈴木大拙とブライスとの共作であると推測される。Editorial (Vol. 1, No.1, 1946年7月)を紹介することで、鈴木大拙とブライスが『カルチャル・イースト』をもって戦後の日本に何を発信しようとしたのかを検証する。『カルチャル・イースト』にはブライスの初期の論文が掲載されていて、その内容はブライスの著書『俳句』の草稿となっている。

第一節は『禅と英文学』、第二節は『カルチャル・イースト』、第三節は『俳句』4巻、第四節「ブライスの俳句観」を取り上げる。

第四章「ブライスと川柳」では、ブライスの俳句活動や禅への傾斜を語る資料や先行研究はあるが、ブライスの川柳翻訳に関する研究は現在に至っても僅少である。むしろ殆どないと言っても過言ではない。ブライスの日本文化観や翻訳活動を語るには、俳句同様に川柳にも着目しなければならない。特に川柳の翻訳史からブライスの活動を考察する。そのため川柳英訳史として川柳の英訳の歴史を概観し、その中でのブライスの業績を考察する。第一節は「英訳川柳の黎明期から興隆期まで」、第二節はブライスと川柳の出合い、第三節は「ブライスと川柳人の出合い」、第四節は「川柳は諷刺詩：(『世界の諷刺詩川柳』の出版)、第五節は「ブライスの川柳観」、第六節は「俳句と川柳の違い」、第七節は「ブライスの創作した俳句と川柳」、第八節では「川柳の現況」を取り上げる。特に第七節の「ブライスの創作した俳句と川柳」では、創作に関心がなかったブライスではあるが、二句の俳句、(葉の裏に青い夢見るかたつむり)と辞世の句として知られる(山茶花に心残して旅立ちぬ)を残した。また、『月刊オール川柳』6月号(葉文館出版1998)に、ブライスの詠んだ川柳、(ねずみ取り買うぼんさんのまあるい目)が発見された経緯が掲載された。創作を第一としなかったブライスが、朝鮮時代に詠んだ(葉の裏に青い夢見るかたつむり)、死の直前に詠んだ日本的な俳句、(山茶花に心残して旅立ちぬ)、そして『日本の諷刺詩川柳』の共著者である吉田機司の誘いで出かけた川柳祭で反古にされた川柳、(ねずみ取り買うぼんさんのまあるい目)の作品成立の経緯を読み解く。

本論第二部では、アメリカにおけるブライスの受容と影響を検証する。第二次世界大戦後の俳句の海外普及は、ブライスに負うことが大であり、彼の功績を抜きにし

ては語れない。戦後アメリカでは、日本文化や日本の宗教への強い関心が沸き起こった。俳句への関心も例外ではなく、鈴木大拙の説く禅仏教とともに高まった。1960年代には多くの若い詩人がブライスの影響を受けた。サンフランシスコやバークレイの知識階級の若者の間に広がった東洋思想や、東洋の宗教への関心はヨーガや禅の実践、そして日本の俳句へと彼らを誘った。

またブライスの禅と俳句はアメリカの英語俳句運動と結びつく。今日、世界各地で様々な言語の俳句を作る詩人のほとんどが、英語で書かれたブライスの『俳句』4巻を入門書の一つとして参考に行っているほど、彼は俳句紹介の先達としての役割を果たしてきた。禅と俳句を同義語におくブライスが著わした『俳句』4巻は、ジャック・ケルアックやアレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg)、ゲイリ・スナイダー、リチャード・ライト(Richard Wright)、J.D.サリンジャー(J. D. Salinger)ら詩人や小説家にも多大な影響を与え、1950年代のアメリカの詩壇を席卷したのである。俳句は世界各地に普及し、俳句愛好家協会があるほどグローバルに浸透しているが、その世界への普及の基盤を作ったアメリカ俳句とブライスのメンターとしての業績を紹介する。

第一章は「ブライスに影響を受けたアメリカの詩人」を紹介する。第一節「ブライスのアメリカ俳句への影響」、第二節「ジャック・ケルアックと俳句」、第三節「アレン・ギンズバーグと俳句」、第四節「アメリカ俳句の真髄」、を紹介する。今日のアメリカ俳句の礎を築いた1950年代から1960年代のアメリカ俳句を紹介するとともに、ブライスに依ってもたらされたアメリカ俳句の特質を紹介する。

第二章「ジェームズ・W・ハケットの世界」では、ブライスを師と信奉するハケット(James W. Hackett)が、如何にブライスと禅俳句でリンクしていたを探り、ブライスの禅俳句の一系譜を考察する。アメリカ俳句の創始者の一人である禅俳句の巨匠、ジェームズ W.ハケットは、ブライスの唯一の弟子として、「俳句の道は人の道なり」(the way of haiku is the way of man)をモットーに現在も詩作を続けている。俳句を禅仏教と結びつけて欧米に広めたのは鈴木大拙やブライスであるが、それを創作として具現化し、創作の上で俳句は禅なりという俳句観を確立したのがハケットである。第一節「ハケットと俳句の出会い」、第二節「ブライスとの交流」第三節「ハケットの俳句観」において、ブライスからハケットへの禅俳句の系譜を論じる。

第三章は、「川柳・俳句の3行訳の定着」を考察する。川柳と俳句の3行訳の定着までの経緯を考察する。1899年に*A History of Japanese Literature*『日本文学史』において俳諧の形式を言及したW.G. アストン(William George Asuton)からブライスに至るまでの3行に定着した経緯を考察する。

第四章は「英語圏以外の国での俳句活動」として、第一節「俳句に魅せられた駐日外交官」でスウェーデンの俳句と俳句受容の経緯を紹介する。特に1960年代には、鈴木大拙の禅著書やブライスの俳句著書に影響を受けた詩人が、アメリカのみならずスウェーデンをはじめ他の英語圏以外の国でも多くみられた。スウェーデンの俳句受容は、日本では話題になることは皆無であったが、前駐日スウェーデン大使のラーシュ・ヴァリエ(Lars Vargö 1947-)の「スウェーデンとヨーロッパの俳句」の講演か

らスウェーデンの俳句受容を紹介する。

本論は、ブライスという人物像を母国イギリス、日本統治時代の朝鮮、そして戦後の日本での生きざまを纏めたブライス小伝と、彼の俳句観が鈴木大拙の禅仏教の伝播とともに、1960年代のアメリカの詩人に受容され、影響を与えたかに焦点を当てた。さらにブライスとハケットの禅俳句の系譜を描くことで、日本から欧米に自己の日本文化観を発信したブライスの姿を描いた。さらに先行研究が殆どなされていない「ブライスと川柳」を加えることが出来た。またブライスの朝鮮時代の資料は入手困難であったが、*How I became a Buddhist* 「余は如何にして佛教徒になりしや」(『文献報國』京城帝國大學國書館 I(1939.7)II,(1939.8), III (1939.9)) を見つけ、ブライスの基督教徒から佛教徒への宗教的変遷を加えることが出来た。またブライスの年譜、ブライスの著作目録、さらにブライスに関する新資料も加筆することができた。

## 第一部

### 序章 俳句の国際化

#### 第一節 俳句を「無形文化遺産」に申請の動き

松尾芭蕉生誕地である伊賀市<sup>6</sup>や日本の俳句界<sup>7</sup>で、日本の文化を代表する俳句を芭蕉生誕370年にあたる2014年度に、ユネスコ（国連教育科学文化機関）の「無形文化遺産」に登録しようという動きが浮上した。俳句の翻訳が海外に普及するにつれて、外国語で書かれる俳句（HAIKUやハイクとも表記される）<sup>8</sup>の愛好家が増加している。日本国内でも外国語で俳句を書く日本人が増加している。英語俳句サークル、自治体主催の英語俳句講座開設、英字新聞の英語俳句欄、企業の英語俳句も含む英語俳句コンクール<sup>9</sup>なども見聞することが多くなった。俳句の「無形文化遺産」登録の動きは、「本家」である日本の俳句にも国内外の俳句にも影響を与え、活発な創作活動に結び付く可能性がある。

#### 第二節 世界の俳句作品

海外の俳句作品と言えば、筆者の手に南アフリカの詩人であるステーブ・シャピロ(Steve Shapiro)による英語俳句集、*Steve Shapiro of little consequence HAIKU*<sup>10</sup>がある。作品は四季に分別され、著者による墨絵が付いている。その作品の一例である (A fly / on the frog's back / the heat:蛙の背に蠅一匹の暑さかな：吉村訳)は、まるで一茶の俳句に見られるような小動物の動きが、日本の俳句の世界を想起させるほどである。しかし日本の俳句では、「蛙」も「蠅」も「暑さ」も、季語と呼ばれる俳句の重要な要素である。伝統的な俳句は「有季・定型・切れ字」という三要素を備える。シャピロのこの俳句には季語が三語も入っている。これは日本の俳句では季重ねと称して避けるべきとされている。

しかし海外の詩人にとっては、どれが季語に相当する語であるか判別ができない。季語が上手く使われた例もある。米国のアーネスト・J・ベリー(Ernest J. Berry)の俳句、(alcartraz manacles of kelp<sup>11</sup>:アルカトラズ島 海藻の足かせ:吉村訳)が、米国の俳句誌*Modern Haiku*（1969年創設）の2014年度俳句コンテストで1位に選ばれた。ベリーの俳句は、海外の俳句に定着している3行分けではなく1行で書かれ、全体の語数は4語、そして7音節で成立し、短く簡潔な俳句である。(alcartraz manacles of kelp)に出ている kelp を、海藻とも、昆布とも捉えることが可能である。昆布とするなら日本語俳句の要素である季語が入ったアメリカ俳句と言える。しかしこの俳句に季語が組み込まれたのは、日本の季語を意識したのではなく、偶然に彼の詩想に浮かびあがった語句が季語にもなる昆布 kelp であったとも推測される。しかしこの短い俳句の中に、米国への移民の扉となったアルカトラズ島の歴史とその姿が描写されていることは別の問題であるが、英語俳句としての完成度の高い俳句である。

南アフリカの詩人、ステーブ・シャピロが描く俳句 (A fly / on the frog's back / the heat: 蛙の背に蠅一匹の暑さかな：吉村訳)は、季語のずれはあるが日本的な感性

を伝えている。ステーブ・シャピロもアーネスト・J・ベリーも短い簡潔な俳句で、刹那の瞬間をとらえている。両者の作品から、日本の俳句が国境を超え、其々の土地の文化を吸い込みクロスオーバーし、増殖し、外国語の俳句として定着して行く姿が見えてくる。一方、日本の俳句界としては、外国語では俳句の美意識は伝わらないのではないかという懸念があり、外国語俳句は日本の俳人や研究者から少なからず異端児扱いをされてきたことは否めない。

### 第三節 外国語俳句の定義

しかし1999年9月、俳句革新を提唱した正岡子規の故郷である松山市で開催された「しまなみ国際HAIKU大会」で外国語俳句の定義がなされた。それは「世界に俳句が広がるとき、俳句を短詩とみなし、季語・定型については其々の言語のふさわしい手法をとることが適当である」と定義され、松山宣言として世界に発信された。この定義の発信は、世界各地に普及し定着した外国語俳句が、日本の俳人や研究者の間でようやく市民権を得た事を意味する。

日本の伝統俳句における季語は、四季の移ろい、そして自然への同化意識から生まれた季節感である。しかし海外の多くの国では、日本のように四季が明確ではなく、まして南半球と北半球では季節は逆転する。日本の国土の25倍を占める米国ではアラスカとマイアミの自然は異なる表情をみせる。このことから日本の季語を俳句にあてはめることは無理がある。外国語俳句では季語に替わるものとしてできるだけ季節感や自然を詠み、3行・17音節以内で詠むことが定着した。その意味で季語や定型の縛りを解いた松山宣言は、遅まきながら海外の外国語俳句の許容を日本の俳句界が認めたと云えよう。

また世界的な視野から21世紀の俳句の在るべき姿を展望するとき、2000年松山で「正岡子規国際俳句大賞」を受賞したフランスのイヴ・ボヌフォウ(Yves Bonnefoy)は、「俳句の命は極端な短さによる凝縮と省略、余白の暗示性にある。生きて体験した一瞬の現実を、論理的な思考の介入を経ず直接、具体的に表出することにある。」と受賞講演のメッセージで語った。俳句の真髓がみなぎった言葉である。そして彼のメッセージは「松山宣言」の追補として加わった。前述した南アフリカの詩人、ステーブ・シャピロや米国のアーネスト・J・ベリーの英語俳句は、まさに松山宣言で定義された外国語俳句の具現化といえよう。

### 第四節 21世紀の世界俳句

現在は世界各地で俳句は創作され、さらにインターネットをはじめとする通信機器の発達で世界のどの地からも瞬時に発信できるようになった。日本の俳句の活性化と海外の俳句創作活動は今後インターネットを媒介にさらに広がる可能性がある。

21世紀に入ると、世界各地で俳句の国際化に焦点を合わせた国際大会が開催された。例えば2000年4月には米国俳句協会協賛による「グローバル俳句祭」(Global Haiku Festival (Millikin University, USA)、同年8月にはイギリスで「ワールド俳句2000」

(World Haiku 2000)、さらに9月にはヨーロッパのバルカン半島にあるスロベニアで「世界俳句会議」(World Haiku Congress)の開催と、それに伴って「世界俳句協会WHA」(World Haiku Association)が設立された。筆者はそれらのいずれにも参加する機会を得て、俳句が英米を中心にした英語圏だけでなく、世界のかなりの範囲に広がっていることを実感した。

どの会議も、21世紀における世界俳句World Haikuへの展望が主なるテーマであった。例えば、「グローバル俳句祭」では、俳句の国際化をテーマに据えて、欧米と日本の俳句・俳句の現状把握及び21世紀の世界の俳句の動向を探ることであった。そして*Haiku World- An International Poetry Almanac*『世界俳句歳時記』<sup>12</sup>の執筆者であるウィリアム・J・ヒギンソン(William J. Higginson)が、「世界俳句—その現状と展望」と題する基調講演を行い、米国における俳句の受容から定着に至るまでの50年の歴史を振り返った。そして彼は今後、各国の俳句は有機体のように成長し、新しい挑戦や環境へ触手を伸ばすであろうと述べた。さらにインターネットを媒介にした俳句創作や投句が国境を越えて、つまりボーダーレスに進むであろうと示唆した。イギリスでの「ワールド俳句2000」では、俳句の世界文芸としての可能性が論じられた。南欧スロベニアでの「世界俳句協会WHA設立」では、日本の俳句の模倣や踏襲を越えて、有季定型を越えたキーワードによる俳句創作、またインターネットのサイトを発表媒介にすることが論じられた。コミュニケーションの手段として、母国語は尊重するが共通言語を英語とすることが「世界俳句協会WHA設立」では採択された。これらの会議は21世紀の俳句が世界規模で多様化して行くこと、つまり世界俳句の時代が到来したことを参加者に知らしめた。

筆者のもとには、日本語の俳句に、中国語、英語、インドネシア語の翻訳を加えた日本人の作者による俳句が届いたこともある。海外の俳句作家から作品に日本語の翻訳を付けてほしいとの依頼もある。例えばモンテネグロ出身の俳句作者ダミール・ダミール (Damir Damir)は、作品の日本語翻訳を筆者に依頼してきた。その結果、セルビア語・英語・日本語の三言語による俳句集 *Otisci snova* 『夢の痕跡』 *Imprints of Dreams*<sup>13</sup>が生まれた。作品には、(Bezim od rata. / Kroz rupu na cipeli / jesenja kisa. fleeing the war / through a hole in my shoe / autumn rain 戦争が靴穴抜ける秋の雨)のように、短い俳句が母国の戦禍を描写する。作者のダミール・ダミールは船員として各地を航海し、偶然アメリカで英語俳句に出会い、さらに日本の港で日本の文化に出会った。母国モンテネグロで経験した民族紛争や人々の暮らしを詠むモンテネグロの数少ない俳人である。人間の普遍的な文化、地域的な文化が俳句という短詩に凝縮される様は、これからの世界俳句の姿であろう。2000年の「世界俳句協会WHA設立」で、俳句の共通言語としての英語が取り上げられたが、英語圏以外の出版物では母国語と英語、時にはダミール・ダミールの句集のように日本語を加える傾向がある。それは外国語の俳句が日本の俳句を源としていることへの敬意に由来すると思われる。

外国語による俳句は最新の情報機器や通信機器の進歩で、全世界に瞬時に交信・交

流できるようになった。そしてヒギンソンの予想通り、各国の俳句は有機体のように成長し、新しい挑戦や環境へ触手を伸ばすであろうし、各地の文化背景を取り込んで、文学的にも芸術的にも多様な形態を備えていくであろう。俳句という短詩が異文化の壁を飛び越え、文化の相互理解のツールになる可能性も期待できる。このような俳句の国際化を今までに誰が予想したであろうか。

## 第五節 ブライスの先見の明

本論で取り上げるR.H.ブライス<sup>14</sup>こそ、すでに50年前に俳句の世界的な盛況を予知していたのである。明治以来、俳句は日本文化、日本文学や言語学に興味を持ったW.G.アストン(William George Aston)、バジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)、ポール・ルイ・クーシュ(Paul Louis Couchoud)ら在外外交官やお雇い外国人らによって翻訳され海外に紹介された。

宮森麻太郎や野口米次郎らが翻訳をした例はあるものの、俳句は日本人の手で積極的に海外に紹介されたのではなかった。そして第二次世界大戦後における俳句の海外普及はブライスに負うことが大であり、彼の功績を抜きにしては語れない。

1964年、ブライスの死の直前に出版された*History of Haiku*『俳句の歴史』2巻の最終章World Haiku「世界の俳句」において、次のように述べている。

The latest development in the history of haiku is one which nobody foresaw,—the writing of haiku outside Japan, not in the Japanese language. We may now assert with some confidence that the day is coming when haiku will be written in Russia, in the Celebes, in Sardinia. What a pleasing prospect, what an Earthly Paradise it will be, the Esquimaux blowing on their fingers as they write haiku about the sun that never sets or rises, the pygmies composing jungle haiku on the gorilla and the python, the nomads of Sahara and Gobi deserts seeing a grain of sand in the world! <sup>15</sup>

「日本の国外で作られる日本語によらない俳句の発展を誰も予見することはできない。私は俳句がロシア、セレベス<sup>16</sup>、イタリアのサルデニア島で書かれるだろうと確信している。日の出や日没のないエスキモー<sup>17</sup>の人々が、俳句を作るために指を折って5-7-5を数えたり、ゴリラやニシキヘビのジャングル俳句を書くピグミー<sup>18</sup>の人々、サハラやゴビ砂漠の遊牧民が一粒の砂に寄せて俳句を書くと云うことは、なんて嬉しい事であろう、この世のパラダイスであろう。」

ブライスのこの予見は的中し、今やモンゴル<sup>19</sup>にもアフリカ<sup>20</sup>にも俳句を書く詩人がいる。ブライスは俳句の世界普及をすでに50数年前に予見するという先見性があったことが上記のブライスの記述からも理解できる。

## 第一章 ブライスの再評価

### 第一節 イギリスで *The Genius of Haiku* 『俳句のころ』の出版

1994年は芭蕉没後300年に当たり、国内はもとより海外でも多様な催しが行なわれた。東欧のルーマニア・コンスタンタ俳句協会が世界の詩人や俳人による記念アンソロジー、*OCOLIND IAZUL ROUND THE POND*<sup>21</sup>を出版するなども、芭蕉没後300年行事の多彩さを示すものといえる。さらに1994年は、禅を海外に広めた鈴木大拙の信奉者であり、日本の古典俳句・川柳を海外に紹介した、イギリス生まれの元学習院大学教授R. H. ブライス(1898-1964)が没して30年になる年でもあった。この年、ブライスの母国イギリスで彼の再評価が始まった。それまでブライスを知らなかった母国の俳句詩人の間にブライスが登場したのである。

1924年にイギリスを離れ、日本で俳句を発信してきたブライスは、『俳句のころ』の出版によって没後30年にして、70年目の里帰りを果たしたのである。カーカップとコブは『俳句のころ』の序文の執筆に際して、日本におけるブライスの生活に関する調査を筆者に依頼<sup>22</sup>してきたことは「はじめに」に述べたが、当時のイギリスではブライスの資料は限られ、そのうえ正確な資料は少なかった。またどれが正確かさえも不明瞭であった。コブによるとブライスに関しては、以下の項目がイギリス俳句協会では判明していたが、果たして正確かどうか確認できていなかった。

- ①ブライスの出生地がイギリスの北部かどうか不明。
- ②出生は1898年かどうか。
- ③ロンドン大学で英文学を学ぶ。
- ④1930年の初め、失恋の為に日本に移住。
- ⑤朝鮮のソウルにある京城帝国大学で教える。
- ⑥ソウルでは大義師より仏教を学ぶ。しかし、ブライスの著作には、「わたしが知らないことを全て教えてくれた人である」と鈴木大拙への献辞がある。
- ⑦1939年以前に、日本人と結婚、しかしいつのことか、誰とかは不明。
- ⑧1941年から45年まで、日本政府に寄って収監される。
- ⑨第二次世界大戦後、皇室の一人またはそれ以上の人数の家庭教師に指名される。
- ⑩1964年10月28日、死亡。東京かまたはどこで死亡したのか不明。

この⑩の項目はコブがジェイムズ・W・ハケット(James W. Hackett)<sup>23</sup>から入手している。これら①～⑩の項目は、次章のブライス小伝で明らかにする。

『俳句のころ』の序文を担当したカーカップは*Insect Summer, An Introduction to Haiku Poetry* (Hokuseido Press 1981)、*Shooting Star* (Hub Editions, 1992)、*Throwback, Poems Towards an Autobiography* (Rockingham Press 1992)など、数多くの詩集、エッセイ、さらに日本の大学生向け英文学テキストの執筆者として知られるイギリス生まれの詩人である。

『俳句のころ』は、カーカップ執筆の序文とブライスの著作、『俳句』、『禅と英文学』、『俳句の歴史』、『ゼン・クラシックス』、『川柳に見る日本人の暮らし



と気質』の抜粋で構成された146頁のペーパーバック版で、日本の俳句、川柳、禅詩を西洋へ紹介したブライスに関する格好の入門書といってよい。

筆者は『俳句のこころ』の出版記念会（1994年4月）にイギリス俳句協会の招きを受け、参加する機会を得た。出版記念会に先立って、ブライスが通学したIlford（イルフォード）の小・中学校周辺散策及び中学校へブライスの肖像画を贈呈した。その後、近くにあるイルフォード中央図書館で出版記念会が催され、カーカップが「ブライスとの出会い」、ブライスの教え子であり、当時イギリスで研究中の星野恒彦早稲田大学教授が「ブライス先生の思い出」、そして筆者も「ブライスとバーナード・リーチ（Bernard Leach）の交流」についてスピーチをした。少し余談になるが、イギリス俳句協会のニューズレター<sup>24</sup>には、『俳句のこころ』の出版の目的は、「イギリスの一般読者や俳句に興味を持つ読者への俳句入門書としてブライスの業績を紹介することにある」と、出版までの経過が報じられている。そしてそのアンソロジーの題名は『俳句のこころ—ブライスの詩、生涯、禅』と決まったが、カーカップは筆者への手紙で、「題名を俳句の道、禅の道に通じる *Blyth's Way* "ブライスの道"と希望したが、イギリス俳句協会のメンバーの賛同を得られなかった」<sup>25</sup>と記している。そこでカーカップは『俳句のこころ』の序文の見出しを”ブライスの道”と付けて、自分の思いを果たした。

『俳句のこころ』に関する書評は、日本でもイギリスでも、出版から時間をおかずになされた。ブライスと交流のあった日本在住のジャーナリスト、ドナルド・リチー（Donald Richie 1924-2013）は、*The Japan Times*に「ブライスはイギリスと日本、この二つの島国の美学を溶け合わせた、ただ一人の作家である。『俳句のこころ』は遅まきの出版であるが、ブライスが比較文化・文学における偉大な業績を成しながら、現在その業績に学問的に評判が芳しくないことへの救済策として、心地よい企てである。」<sup>26</sup>と評すとともに、鎌倉の円覚寺におけるブライスとの出会いを「思い出のブライス」として描いている。

一方イギリスでは、詩誌編集者ステラ・ストック（Stella Stocker）が、「東西文学の懸け橋を生み出すのが彼の意味することであるように、東洋の文学や哲学に関するブライスの著作が日本で高い敬意を得たことを、『俳句のこころ』は明らかにしている。俳句に興味を持ち、俳句の持つ背景や英詩との比較、対比を知りたい読者には貴重な書物である。」<sup>27</sup>と、詩誌*Orbis*で述べている。

また詩人ケビン・バイレイ（Kevin Bailey）は、彼の主宰する俳句誌*HQ*『俳句』で、「『俳句のこころ』は実用的で判りやすく編纂されているので、机の上に置いてよし、ポケットに入れてよし、ナップザックにしるばせてよし、いつでもどこでも、ブライスの俳句観の要点を知ることが出来る。この著書で私が得たものは、イギリスの文学の伝統をこよなく愛し、誇りを持っている一人のイギリス人ブライスの存在確認と安堵感であった。勿論東洋の文学を極めたゆえにブライスは偉大であるのだが。」<sup>28</sup>と述べるなど一様に出版を歓迎する様子が見える。

ブライスは1924年、26才の時にイギリスを出て以来、活動の場所が旧日本統治時

代の朝鮮と日本に限られていたために、彼を知る人はイギリスには残念ながら非常に少ない。筆者が彼の母校であるロンドン大学資料室を訪ねた時（1994年4月25日）には、彼の死亡記事（*The Japan Times*、*Mainichi Daily News* 共に1964年10月30日付）と、北星堂書店から出版された彼の著作物のリストが保存されている程度であった。そして日本においても、彼の著作物が全て英文で書かれていることから多くの読者を得ることはなかった。没後20年の1984年に、ブライスの親友であった新木正之介学習院大学名誉教授が中心となってブライスの業績と人柄をしのぶ文集『回想のブライス』が出版され、彼の名前と業績が日本でようやく知られるようになった。その文集出版を紹介する新聞記事（夕刊フジ 1985年1月13日）の見出しには、「もう一人のラフカディオ・ハーン」とあるが、ブライスはラフカディオ・ハーンほどには日本においても知られていないのが現状である。

ブライスが母国イギリスで初めて紹介されたのは、1950年3月3日、*Haiku Vol.1*『俳句』一卷（鎌倉文庫1949）と*Senryu, Japanese Satirical Verses*『川柳一日本の風刺詩』（北星堂1949）の出版を紹介した*The Times Literary Supplement* 「タイムズ文芸付録」においてであり、それは実にブライスがイギリスを出てから26年目のことであった。

また、香港生まれのイギリス人で、著名な陶芸家バーナード・リーチが、ブライスをイギリスの友人に紹介した文章がある。1953年から1954年にかけて日本各地の陶器窯を訪ねたリーチは、その時の紀行文『日本絵日記』（謄写版摺りの英文）を西洋にいる約三、四十人の友人に送った。しかしこれもほんの僅かの人に知れただけであった。この『日本絵日記』はリーチの友人である柳宗悦の翻訳で、1955年『日本絵日記』として毎日新聞社より出版された。リーチは紀行文の1953年6月30日付け日記に、ブライスとの出会いの喜びを次のように記している。

「ブレーカー一家との夕食の席上、ロバート・ブライスと会う。五時間ほど語り合った。禅、俳句、工芸芸、日本、生活などについて。私は東洋の内面を知っている感覚豊かな英国の詩人と会えてまったく嬉しかった。私たちは意気投合した。私は俳句についての彼の著書を一行一行読んでいた。その本は東洋の詩心に対する窓を私に開いてくれた。それも一彼の翻訳一彼の翻訳は東洋的形式をいたずらに追うものではない—によってだけでなく、刺激的で示唆的な説明に負うものだ。ブライスは永年朝鮮の禅院で過ごし、その源泉から深く学んだ。彼は東京では多種の英文書を出しているが、英国では一冊もない。私は彼の『英文学と禅』という本に大いに啓発された。彼は東京の学習院で教えている。」

29

リーチはブライスの著書『英文学と禅』に大いに刺激を受けた。ブライスの東洋文芸に対する解説はリーチに東洋の詩心を目覚めさせたのである。当時の日本在住のイギリス人でリーチはブライスの理解者であったといえよう。さらにリーチは『イース

タン・ブッディスト』でブライスに言及し、「鈴木大拙博士とその友人の柳宗悦やブライスは、私の人生観を変えた」<sup>30</sup>と語っている。

またカーカップは、「スイスの詩人・評論家であるフィリップ・ジャコテエ (Phillippe Jaccottet) が、1954年にローザンヌでブライスに関するエッセイ *L'ORIENT LIMPIDE* (Haiku, de R.H.Blyth) 「清澄な東洋—R. H. ブライスの俳句—」を著わした。このエッセイは、『ある交渉秘話』 *UNE TRANSACTION SECRETE* (Gallimard 1987)<sup>31</sup>に収録されて、パリで再版された」と、筆者に文献を送ってくれた。このエッセイはフランスにおけるブライスの最初の紹介であった。

## 第二節 カーカップとブライス

イギリスを離れたブライスがイギリス文学界に働きかけなかったのは、ブライスが第一次世界大戦時に非戦の思いから良心的兵役拒否を貫き収監された経験を持つことにある。同様に、カーカップも第二次世界大戦中に非戦抵抗運動のため、イギリス各地を6年間も労働キャンプで過ごすという経験があった。<sup>32</sup> ブライスとカーカップの二人を結びつけた抵抗運動は、それぞれ時代は違うものの彼らのイギリス離れの要因の一つであると思われる。

さらに彼らには、日本で生活し日本の大学で教えたという共通点もあった。ブライスは第一次世界大戦後、カーカップは第二次世界大戦後にイギリスを離れた。ブライスの初任地は、当時日本の植民地であった朝鮮・京城であったが、両者には日本人の知己も多く、かつ文学者であり詩人であった。またカーカップが特に強調する点だが、二人には”母親思いの一人っ子”という共通点もあった。二人はブライスが亡くなる前年の1963年に東京で出会った。そしてカーカップが編集に携わっていた英文日本紹介誌 *Orient West* 『オリエント・ウエスト』に、2編のエッセイをブライスは寄稿している。カーカップが、双方の母国イギリスで『俳句のこころ』の「ブライス小伝」の執筆に力を入れたのも、二人の交流の時を越えた友情の印といえよう。

またカーカップが会長、デビッド・コブが事務局長を務めるイギリス俳句協会 (1991年12月創設) の機関誌は、ブライスとP.B.シェリー (Percy Bysshe Shelly 1792-1822) の名前を取り入れて *Blithe Spirit* “ブライズ・スピリット” と名づけている。<sup>33</sup> この名称はイギリスのロマン派の代表的な詩人であるシェリーと関連している。シェリーの名高い詩、*To a Skylark* にある “Hail to thee, blithe Spirit!” (ようこそ、陽気な精霊よ!) の “blithe” と、ブライズ<sup>34</sup> “Blyth” の音とを振っているのである。そしてこの振りによってブライスを俳句の先達としてイギリス俳句協会が讃えているように思われる。

今回の『俳句のこころ』出版によって、ブライスに注目する気運が盛り上がり、ブライスが母国で脚光を浴びることが少しは期待できるようになった。

1992年に、筆者はほとんどが絶版になっているブライスの著作物の再版計画について北星堂書店に問い合わせたが、出版事情の厳しさから再版の見通しはないという返事<sup>35</sup>を受けた。しかし1993年5月発行のイギリス俳句協会のニューズ・レター<sup>36</sup>は、

ブライスの著書のほとんどの著作権を所有する日本の北星堂書店が、『俳句のこころ』のEC諸国での限定販売に限りイギリスでの出版許可に応じたあらしを伝えていたが、現在は日本国内においても入手可能になった。

北星堂書店はイギリスにおけるブライスの著書の出版に先立って、ブライスの初めての出版物で永らく絶版になっていた1942年初版の*Zen in English Literature*『禅と英文学』(以下『禅と英文学』)を新装版として1993年4月に再版した。海外におけるブライスへの関心の高さが『禅と英文学』の新装版出版という急激な展開に結びついたように思われる。再版を望む者にとってはうれしい出来事である。

ブライスの著作は筆者の知る限りでは43点に及ぶ。現在入手出来る著書は『禅と英文学』、『俳句』4巻、*Edo Satirical Verse Anthologies*『江戸川柳』、*Easy Poems (Book 1 & 2)*『イーजी・ポエムズ』1, 2巻、*Zen and Zen Classics (Vol. I, II & IV)*『ゼン・クラシックス』1, 2, 4巻、*Dorothy Wordsworth's Journal*『ドロシー・ワーズワースの日記』、*A Survey of English Literature*『英文学概論』(以上、北星堂書店)、*A Short History of English Literature*『英文学小史』(南雲堂)の数点にすぎない。さらなる再版が望まれる。

### 第三節 最近のブライス研究

1994年には『俳句のこころ』の出版と時期を同じくして、ブライス研究者であり、ブライスの教え子である上田邦義静岡大学名誉教授と、マイケル・ゲスト(Michael Guest)の編集によって*Essentially Oriental* (北星堂書店)と題するブライス選集が出版された。

ブライスに関する著作では、1983年にブライスの東大での教え子である平川祐弘教授が、「人間宣言」をめぐるブライスと山梨提督の交流を描いた『平和の海と戦いの海—二・二六事件から「人間宣言」まで』(新潮社)(以下『平和・戦い』)を出版して日本占領初期に果たしたブライスの役割を紹介している。この著書は、1993年5月に講談社学術文庫に入った。文庫版出版は広く一般にブライスへの関心を高めるであろう。1996年にエイドリアン・ジェイムズ・ピニングトン(Adrian James Pinnington)早稲田大学教授による「R.H.ブライス」<sup>37</sup>、筆者による『R.H.ブライスの生涯—禅と俳句を愛して』(同朋舎1996)、ブライスの教え子であり、学習院大学で同僚でもあった荒井良雄駒沢大学名誉教授による『ブライス禅の世界—平和は詩心から—』(北星堂書店 2004)が出版された。さらにブライスの『俳句』第一巻の翻訳が村松友次・三石庸子共訳『俳句』(永田書房2004)でなされ、日本人読者はブライスの俳句観をより身近に知ることができるようになった。上田邦義『ブライズ先生、ありがとう』(三五館 2010)は、恩師への強烈なオマージュである。またスコットランドの禅学者・詩人であり、白隠に関する著書*Night Boat*<sup>38</sup>で知られるアラン・スペンス(Alan Spence)は、ブライスの自伝を出版するため2014年来日し、筆者に協力を求めた。これらの出版物により今後ブライスへの関心が一層高まることを期待したい。

## 第二章 R.H.ブライス小伝

### 第一節 内なる運命

1961年、北星堂書店より出版された*Japanese Life and Character in Senryu*『川柳にみられる日本人の生活と気質』の序文の文頭で、ブライスは自分の過去をいくつかの局面に分け、自分は『内なる運命』に導かれていくつかの局面を越えて来たと述べている。

“I find that I was led by my inner destiny to pass through certain phases, which however were not mutually exclusive, and indeed have all persisted strongly to the present time. I began with an inborn animism, the origin of all Wordsworth’s poetry, and then passed rather naturally to vegetarianism, which was or should have been one of the bases of Buddhism. By a fortunate chance I then came across haiku, or to speak more exactly *Haiku no Michi*, the Way of Haiku, which is the purely poetical (non-emotional, non-intellectual, non-moral, non-aesthetic) life in relation to nature. Next, the biggest bit of luck of all, Zen, through the books of Suzuki Daisetz. Last but not least there appeared senryu, which might well be dignified by the term *Senryu no Michi*, the Way of Senryu, for it is an understanding of all things by laughing or smiling at them, and this means forgiving all things, ourselves and God included. It is strange that animism, vegetarianism, haiku, Zen, and senryu should blend so easily and comfortably, and there seems to be something oddly right too about their chronological order.”<sup>39</sup>

「自分は、『内なる運命』に導かれて、いくつかの局面を乗り越えてきた。それらはあい矛盾はしていないが、実に現在までも持続し続けている。はじめに、生まれながらのアニミズムがあり、それはワーズワースの詩作の根源にあるものと同じだった、それから自然に、菜食主義に移っていった。それは仏教の基盤のひとつであり、あるいはそうあるべきものである。そして偶然、幸いにも俳句、つまりもっと具体的にいえば俳句の道に出会った。俳句の道は、感情的でなく、知的に陥ることもなく、道徳にはめ込まれるのではなく、審美的でなく、詩の本質に関連して真に詩的に生きる道である。次にこれらすべての中で一番幸いなことは、鈴木大拙の書物を通して禅に出会ったことである。最後だが、そこで川柳を見出した。川柳の道という言葉ではいかめしくするかもしれない、というのは川柳の道は、川柳を笑ったりほほ笑んだりしながら万物を理解する。この道は万物も我々も、そして神をも含んで許すことを意味している。アニミズム、菜食主義、俳句、禅そして川柳に至ったが、それらほうまく心地よく混じり合うのは奇妙なことだ。」

筆者はこのブライスの述べる『内なる運命』を「第一の内なる運命」と呼び、さらにもうひとつの『内なる運命』を「第二の内なる運命」として付け加えたい。つまり第二次世界大戦直後の日本で、ブライスが政府・宮内庁とGHQのパイプ役を果た

した政治への橋懸りを「第二の内なる運命」とする。

つまりアニミズム、菜食主義、俳句、禅、川柳を「第一の内なる運命」とした東洋文化への憧れを縦軸に、そして横軸に彼の政治へのかかわりを「第二の内なる運命」として置く。そして新しく入手した資料を加えながら、彼の生涯をロンドン時代（少年期から青年期）、朝鮮時代、日本時代（日本永住の決意からの時期から学習院大学教授時代）の三つに分けて概観する。

## 第二節 ロンドン時代（出生から朝鮮行きを決意1898~1924）

自然と詩と孤独を愛し、昆虫採集に熱中した少年期に不殺生の信念が芽生え、やがて第一次世界大戦での良心的徴兵忌避により自己の信念の確立をしていくブライスを、両親、娘、従姉妹、友人、秘書の記述、インタビューなどから考察してみる。年代では1898年の誕生から極東、朝鮮の京城帝国大学予科英語教師として赴任する1924年までの26年間にあたる。

### （1）出生地はレイトンストン

レジナルド・ホレス・ブライス（R. H. ブライス）の出生を『回想のブライス』では、「1898年（明治三一）十二月三日、英国サセックス州の西南、ロンドンに近い町イルフォードに生まれる。父ホレス・ブライス(Horace Blyth)、母ヘンリエッタ(Henrietta)の一人息子である。父はグレイト・イースタン鉄道に勤めていた。ブライスの誕生より数か月前に従妹（父の妹の娘）ドーラ(Dora)が生まれている。ドーラはブライスの唯一人の近親である。」とある。ここには、エセックスEssex州の西南、ロンドンに近いイルフォードIlfordに生まれるとあるが、ブライスの育った地はイルフォードだが、出生地はイルフォードから数マイル西のレイトンLeyton（現在はレイトンストンLeytonstoneの方がよく使われる）である。このことを示す出生証明書が発見された。それによって母の旧姓はウイリアムズ(Williams)であることも判った。

イギリスの俳句作家でありイギリス俳句協会事務長のデビッド・コブから入手したイギリス出生登録所発行のブライスの出生証明書<sup>40</sup>（1899年、エセックス州レイトンの出生登録所へ届け出、West Hanが受理）には、出生地が「トランピングトン通り93、レイトン93 Trumpington Road,Leyton」とある。このことからブライスは小学校入学前の乳幼児時代に、レイトンからイルフォードへ引っ越ししたものと考えられる。幼いブライスには、そんなことは判るはずもなく、「自分は、イルフォードで生まれ育った」と思い込んでしまったのであろう。ただブライスが1942年に神戸の交戦国民間抑留所に提出した履歴書や学習院大学に保管されている履歴書には、原籍ロンドンと記載されているのみである。イルフォードは、現在33の自治区からなる大ロンドンの一つであるバーキング自治区に属しており、ロンドンの中心部から車で約一時間のところにある。労働者や外国からの移民も多く、モスリム、キリスト教会、仏教教会などが乱立している。

## (2) 自然と詩と孤独を愛する少年

ブライスがイルフォードで育ったことは間違いなく、彼はこの地の公立の小学校に通っている。エセックス州には豊かな森があって、田舎暮らしを好むイギリス人の理想の地である。したがって、ブライス少年は豊かな自然に触れながら成長していたと思われる。そのような環境で育ったブライス少年が、自然への畏敬を身につけていったのであろう。

ブライスの少年時代のことを知る手がかりは殆どないが、マロリ・フロム(Mallory Fromn)が「彼は自然に対して畏敬の念を持つ物静かな少年であった」<sup>41</sup>と述べているが、上述のブライスが語った伝記に符合するものである。また、『ゼン・クラシックス』で、少年時代の愛読書『ロビンソン・クルーソー』に言及し、ブライスが『ロビンソン・クルーソー』を少年の好む冒険物語としてとらえず、自己を客観視する手立てとして愛読したことを思わせる記述がある。

“When I was young, like all other English children I read *Robinson Crusoe*. But I think I read it more often, more earnestly than other boys. It was not that I wanted to visit strange lands and lead the life of danger and adventure, --- far from it. It was the idea of living alone like John Clare or Wordsworth, better still like, like the old Chinese and Japanese hermit, such as Kanzan or Chomei. In a way it is a kind of cowardice, a kind of stupidity which brings about this desire, but the desire itself is for nature and poetry and loneliness.”<sup>42</sup>

「『ロビンソン・クルーソー』は、普通の少年が憧れる冒険と未知の土地への憧憬をこめた書物ではなく、自然と詩と孤独への世界への入り口であった。ジョン・クレアやワーズワースの、そして寒山や鴨長明のような中国や日本の隠者のように、一人で暮したいと思う気持ちがあった。それは一種の臆病さと愚かしさであったが、自然と詩と孤独に対する憧れはそこから生まれた」

これらの語り口から、ブライスが少年時代より自然に対して畏敬の念を抱く、静かで内省的性格であったことが窺える。

## (3) ブライスの両親

エセックス州の出生登録所に記載されているブライスの出生証明書には父親の職業欄がある。そこには鉄道員railway clerkと記載されている。ブライスの父ホレス・ブライスはグレート・イースタン鉄道The Great Eastern Railway (現在はThe London and North Eastern Railway)に勤務する駅員であった。ブライスは教え子の金振興(昭和11年 京城高商卒・元韓一銀行頭取)に、駅でチョコレートを売って家計を助けた幼き日の思い出を語っている。

「私は英国の貧しい駅員の家の生まれで、子供の時には、列車が入る度に汽車の窓

の下を、『チョコレート』、『チョコレート』と叫びながら走ってチョコレート  
を売ったものですよ。こちらの駅弁売りがお弁当を売るようにね」<sup>43</sup>

ブライスを知る誰もが彼のチョコレート好きを話題にするほどのチョコレート好きであった。講義中にもチョコレートを噛むこともあり、彼のポケットにはいつもチョコレートが入っていた。チョコレートは父との思い出に連なるものであったのかも知れない。ブライスの父ホレス・ブライスは、ブライスがイギリスを出て6年目の1930年、ブライス32才の時に亡くなった。ブライスにも妻のヘンリッタにも優しい寛容な父であり夫であったという。

母のヘンリッタ（通称ヘッティ）は大柄な婦人で、息子ブライスが1964年10月28日に65才で亡くなった後も、2年近く保養地のブライトンに近い静かな住宅地ロッチェンデンで暮した。その家には京城へ渡った息子を偲んで、[Chosen](朝鮮)と名付けられ、庭には「ほうずき」が植えられていた。イギリスには「ほうずき」に相当する植物はなく、ブライス夫人の富子が「ほうずき」の種子を送り、それが [Chosen]の庭で花を咲かせたのである。やがて「ほうずき」が赤い実だけとなって、ゆらりゆらりと風に揺れている写真や、イギリスでは珍しい日本の花を庭いっぱい植えた写真が日本のブライス家に送られてきた。それらの写真は居間に飾られ、遠く離れた母子が互いを偲びあったという。朝鮮時代にブライスが参禅した京城妙心寺の御手洗義文に「私はよく泣きます。たとえば、夕陽がベランダにあたって、物干し竿など紅く染まり、次第に暮色に変わっていくとき、それを見ていると、故国の母を思い出して泣きます」<sup>44</sup>とブライスは語った。「ブライスは、ロマンチストで、センチメンタルな思い入れが嫌いであったと言っていました、その本人自身が人一倍ロマンチストでありセンチメンタルな人でした」<sup>45</sup>とブライスの二代目の秘書であった岩村智恵子は、ブライスの感情的一面を語っている。

#### （4）宗教と政治好きの祖父

ブライス研究における一つの大きな疑問は、両親の深い愛情の下で育ち、それなりの宗教心を持ち、自然と詩と孤独を愛する内省的な性格であったブライスが、後年、禅や東洋思想、東洋文化にのめり込み、さらに政治や皇室の世界と深い関わりを持つようになったのは何故かということである。これは偶然の産物でそうなったのではなく、ブライスの性格や物の見方、考え方のなかに、その遠因を求めることが出来ると考える。このことを、ブライス自身が意識していたかどうかは知る由もないが、筆者はこれをブライスの「第二の内なる運命」と前述した。この「第二の内なる運命」を示唆している資料が、母ヘッティから三代目の秘書の山田達子へ宛てた手紙である。この手紙は、ブライスが母ヘッティへ日本の生活や家族のことを書くようにと山田達子に依頼した手紙に対するヘッティからの返事である。一部引用する。（カッコ内は筆者注。）



“...I also think that our qualities, both good & bad come through our ancestors. My mother(Hetty's mother, Blyth's grandmother<sup>筆者注</sup>)was an unusually fine character in almost every way and she had a father (Hetty's grandfather) whom she adored, because he was intelligent and good also. Her mother(Hetty's grandmother) was happy and full of loving kindness, so you see, dear, that my Boy (Blyth) has a good inheritance, and last but not least my son's father (Blyth's father), was very gentle, unselfish, very restful to live with. The only one who was out of harmony was my own father (Henry Williams, Hetty's father) who was unloving & selfish, had a very violent temper. His interest were Politics & Religion. I think he would have given his life for either if necessary.”<sup>46</sup>

ヘッティの手紙によると、ヘッティの父親、つまりブライスの母方の祖父、ヘンリー・ウィリアムズ(Henry Williams)は、愛情の希薄な身勝手な人で、暴力的で激しやすい性格であったようだ。そして政治や宗教に生命をかけてもよいと思う程の人であった。また、ブライスの宗教的背景を考えるのに参考となるのが、コブ氏提供によるブライスの両親の結婚証明書<sup>47</sup>である。彼らはブライスの生まれる約一年前の1887年9月に、ハートフォードの独立教会派の教会で結婚式を挙げている。30才の花婿と18才の花嫁であった。

前述のヘッティの手紙から窺い知ることの出来る彼女の父親像と、この結婚証明書に記された独立教会で執り行われた結婚から推測すると、ヘッティは独立教会の会員として、すなわち非国教徒として育てられたように思われる。「幸いにして息子は祖父の性格を受け継がなかった」と言っているが、後年ブライスが祖父の生涯の関心事であった政治と宗教に関わっていったのは、不思議な因縁と云える。これが、ブライスの「第二の内なる運命」の系譜の出発点となったと考えられる。

第一次世界大戦における良心的徴兵忌避者として収監、クエーカー教への理解、禅仏教との出会い、鈴木大拙との知遇、第二次世界大戦での収容所生活、日本の占領前期における日本政府及び宮内庁とGHQとのパイプ役、昭和天皇の「人間宣言」草稿作成、米人クエーカー教徒であるバイニング夫人の招聘、「昭和天皇の戦後巡行」のキーブックなど、ブライスの生涯は日本文学・日本文化研究とともに政治と宗教の世界に身を委ねていたのである。

##### (5) ブライスの従姉妹

ブライスの従姉妹(父の妹の娘)のドーラ(Dora)は、ブライスより数ヶ月早く生まれているが、ブライスは他の従姉妹たちに較べドーラとは姉弟のように親しく、終生文通し合い、母ヘッティとともにブライスにとって数少ない心の通いあった母国の縁者であった。

1976年の夏、ドーラを訪問した岡国臣久留米大学教授(京城帝国大学予科でブライ

スに学んだ)は、『回想』でドーラとブライスの交流を「ワーズワースと妹ドロシイの仲はこのようであったのではなかろうか。音楽、宗教、自然への感じかたが、先生とDoraさんはよく似ていると思った。」と述べている。彼女は結婚前の数年間をブライス家で暮し、ブライスより何ヵ月か先に生まれているのにもかかわらずブライスを兄のように思っていた。また1984年、アメリカ在住のブライスの長女の春海夫妻と大磯に住む次女のナナ夫妻と一緒にドーラを訪ねた。ナナにとっては、ドーラは初めて接する父の縁者であった。ナナはその時のドーラの立ち居振る舞いが余りにも父親のブライスに似ていることに驚き、ドーラが父の肉親であるという思いを強くしたという。また姉の春海は、ドーラが写真を写す場所を選定する時の話し方が、父と瓜二つで、姉妹はブライスとドーラの血の繋がりに感動さえ覚えたと言った。

## (6) 十代の教師

労働者階級の家庭に生まれたブライスは、普通の子供のための学校クリーブランド・ロード・スクールへ入った。小学校時代のブライスは、ドーラの回想によると「学校ではよく出来たが、別に教師に齒向かう子ではなかった」とのことである。<sup>48</sup>その後カウンティ・ハイスクールに入学するが、これら少年時代に学んだ学校の話は、1942年、神戸の交戦国民間人抑留所の係官にブライスが出した履歴書(以下「抑留所履歴書」と略す)では、次のように簡単に触れているにすぎない。

\* 小学校教育7年間

\* 州立中学校教育5年間

\* ハイベリー・パーク・スクールに於いてフランス語、英語、スペイン語教師

\* イルフォード・クリーブランド・ロード・スクールに於いて6ヵ月教師

この「抑留所履歴書」によると、12年間の小・中学校を終了して、16才から18才の間、ブライスは教師をしていたことが判る。なぜ十代で教師になれたのか、その根拠はさだかではない。『平和・戦い』の著者の平川祐弘は、ブライスがなぜ十代で教員免状を取得出来たのか見当がつかない、としている。

だが日本にも戦前、代用教員の制度があったことから、イギリスでも当時教員の資格認定は厳密ではなかったのかもしれないと思った。そこでイギリス俳句協会事務局長のデビッド・コブに確認してみたところ、イギリスでは地域の高校を卒業後、大学入学前に母校の高校で教鞭を取ることは不思議なことではないとのことであった。この種の教師は、「未資格生徒教師」uncertificated pupil-teacherと呼ばれている。ブライスも、このいわゆる「未資格生徒教師」として採用されたのであろう。

1915年ロンドンで出版されたD. H. ロレンス(1885~1930)の『虹』においても、女主人公アーシェラ・ブラングウェンが、大学に入学する前に一年間の教師体験をする様が描かれているが、また炭坑労働者の息子として生まれたロレンス自身も、17才の時、生まれた土地の小学校で無免許の助教師を経験している。したがって、ブライスが十代で教職に就いたのは珍しいことではないといえる。

前述のブライスの両親の結婚証明書には、1897年当時のブライスの父方の祖父母の職業の記述欄がある。そこには父方の祖父はa house painterペンキ職人、母方の祖父はa builder and ironmonger建築金物商となっている。ビクトリア朝後期には、一般庶民への大学教育の拡がりの結果、これらのロークラスの人々の社会進出が拡大し、炭坑夫の息子ローレンスに代表されるようにイギリスの社会、文化に多大な影響を与え始めたのである。

### (7) 強靱な精神と体躯

母親ヘッティは、少年時代のブライスの思い出をブライスの親友の新木正之助に語っている。

「レジーは心のやさしい子でした。まだ小さい時、夕飯に帰ってこないのを探すと、裏の花畑に立っていました。花が可哀そうと言って泣いているのです。バラの蕾が虫にくわれていました」<sup>49</sup>

このエピソードに示されているように、ブライスは、その優しい心ゆえに、あまりにも繊細な面を持っていた。しかし、ブライスは優しいだけの軟弱な性格と弱々しい体付きのひ弱な男ではなかった。次女ナナによると、都内の大学へ非常勤講師として出講する時、彼は教科書を包んだ風呂敷を結わえた自転車を曲芸のように走らせたり、坂道では前に行くトラックの後に片手を掛けて登ったり、あるいは娘の運動会の駕籠かき競争で脱兎のごとく走るなど、優れた運動神経の持ち主であったらしい。私が彼女から譲り受けたブライスの写真のなかには、敬愛するコンコードのソローを真似て、悦に入って木登りをするブライスの姿もある。

ブライスの教え子である平川祐弘は、「ブライス氏は意志堅固な点では、提督にも将軍にもなれそうな、がっしりした体躯たいくの人であった。独立心に富める点では海外に雄飛する企業家にもなれそうな人であった。」と、その著『平和・戦い』<sup>50</sup>の中で述べている。このように、ブライスは自然と詩と孤独を愛し心優しいセンチメンタルなロマンチストであると同時に、堅固な信念と意志、それに強靱な肉体を併せ持っていたのである。

### (8) 良心的徴兵忌避者—Conscientious Objector—

1914年、ブライスが16才の時、第一次世界大戦が起こった。ブライスの年譜(『回想』)によると、16才から18才までの教師をしていた時期にあたる。満18才に達した時、ブライスは軍隊に召集されたが、兵役を忌避したために1916年より1919年の初頭までの約2年間ロンドン市のワームウッド・スクラブルズ(Wormswood Scrubbles)監獄に収監された。

当時イギリスには、祖国の為に戦う事を拒否したC.P. (Conscientious Objector)と呼ばれる良心的徴兵忌避者がいて、その数は16,000人にも上った。彼らは1914年7月28

日（オーストリアがセルビアに宣戦、第一次世界大戦勃発）、同8月6日（ロシアとオーストリア開戦、仏英がオーストリアに宣戦）の重大局面が原因となって突然生み出されたのではなく、C.P.は社会主義や非国教徒の伝統に深く根ざして生まれたのであった。つまり、第一次世界大戦における良心的徴兵忌避者の四分之三は、資本主義の為に戦うのはイヤだという社会主義者の兵役忌避者であり、暴力そのものに反対する徹底した平和主義者や、非戦主義者、人道主義者はほんの一握りの数に過ぎなかったのである。ブライスはその少数派の一人であった。ブライスは母方の独立教会会員としての非国教徒の宗教的信念と、彼自身が持つ平和・非戦の新年によってC.P.となったと筆者は推測する。

京城帝国大学予科でブライスに英語・ラテン語を習い、その後同校の有機化学の教授となった小西英一に、ブライスは自分の徴兵忌避・兵役拒否の理由について述べる。

「私は生命が惜しくて戦争に行かぬというのではない。もしも、コレラかペストのような恐ろしい病気が兵隊の間に流行して、その看護のため軍隊に入れようのなら、何時でも、どこへでも行きます。私は戦場へ行って敵兵を、つまり人間を殺すことが出来ないのです。」<sup>51</sup>

生命あるものを殺すことは出来ないという不殺生の精神は、ブライスの心に深く根付いている信念であった。平川は『平和・戦い』のなかで、「ブライスが良心的徴兵忌避者だったために、イギリス社会で陰に陽に不愉快な目にあつたこともあるに相違ない。後年ロンドンを去って極東へ来たのも、なにがしかの関係があつてのことではあるまいか」という推測をしているが、このことはブライスの故国への対応を考える時の手がかりになるといえよう。

当時のイギリス政府は徴兵忌避者には銃殺刑に処するという脅しを出したくらいであり、徴兵忌避は覚悟のいる反社会的行為であった。第一次世界大戦前から第二次世界大戦に至るイギリスの徴兵忌避・兵役拒否の実態を取り上げた『異議却下—イギリスの良心的兵役拒否運動—』<sup>52</sup>は、丸谷オーの『笹まくら』<sup>53</sup>(新潮文庫、1974)の主人公のように、国権によるムリヤリな召集を忌避して逃げ回るのではなく（これだけでも大変なことであるが）、「自分は殺人に加担しない。どんなに正義のためと言われようとも人を殺める戦争には参加しない」と、公然と宣告したことにより、兵営や軍刑務所であらゆる凄まじい迫害を受けたイギリスの良心的兵役拒否運動の事実を明らかにしているが、18才のブライスも同様の経験をしたのではないかと想像できる。

ちなみに、日本でも徴兵忌避と兵役拒否の例は明治時代から少なからず存在したが、報道管制で固くおし隠されてきたために一般に知られることがなかった。しかし、阿部知二がすでに50年ほど前からこの問題を取り上げて、研究会を重ね、その成果を踏まえて『良心的兵役拒否の思想』<sup>54</sup>の労作をまとめている。

当時18才のブライスは、獄中で良心的徴兵忌避・兵役拒否者であるクエイカー教徒たちの非戦への壮絶な闘いを目にしたであろう。彼と同じ時期に、同じワームウッド・スクラブズの監獄に収監されたあるクエイカー教徒に対する凄まじい弾圧の様子を『異議却下』は以下のように描いている。

「クエイカー教徒の青年、アーネスト・イングランドは以前身体検査ではねられたのに一九一七年召集された。重労働二年の刑に服するためワームウッド・スクラブズに送られ、そこで最初の夜から具合が悪くなったが、当直看守から室内便器はやらんと言われ、散ざん苦しんだあげく、イングランドは床を利用した。すると看守は彼の顔をその排便に突っ込むようなことまでした。数週間にわたり重症が続き、とどのつまりはダートムアに移されたが、そこで衰弱しているのに雪かき作業に就かされ、毎日作業後にマーガリンつきパン一片と茶を一杯という食事しか与えられなかった。休戦後三ヵ月、彼はダートムアで作業を続け、手の施しようもないほど衰弱しきったあげく、一九一九年三月六日、死去した。」<sup>55</sup>

ブライスが兵役を拒否したのは、上述したように、「生命が惜しくて戦争に行かないのではない。私は戦場で人間を殺すことが出来ない」からであった。これはクエイカーの宗教的根幹ともなっている絶対平和主義、非暴力主義と同じ信条であるといえよう。高橋紘は『側近日誌』<sup>56</sup>の「解説部分」で、ブライスの思想はクエイカー派と通じるものであった、と語っている。ブライスの兵役拒否経験、クエイカーへの思想的共鳴は、後年日本の皇太子（現・今上天皇）の英語教師にクエイカー教徒のアメリカ人、バイニング夫人を選んだことにも関連するのではと推測されるが、ブライスはそれを示す文書は何も残していない。

なおブライスは自分の兵役拒否のことを日本ではあまり知られたくないと思ったのか、1942年に神戸の交戦国民間人収容所の係官に提出した「抑留所履歴書」には良心的兵役拒否を示す記述は一行もないし、晩年交流のあったジェームス・カーカップが第二次世界大戦時の兵役拒否者であるとすでに知っていたにもかかわらず、ブライスはカーカップに兵役拒否者として同様の経験をした過去を一言も話さなかったという。

## （9）菜食主義者

ブライスの次女ナナによると、ブライスの子供時代の趣味は昆虫採集だったという。ある時、いつものようにホルマリンを注射して死んだと思っていた虫が、ピンに留められたままぐるぐるまわってもがいているのを見て、子供心に「これはいけない」と思い、それ以後夢中になっていた昆虫採集をいっさいしなくなったという。このエピソードは平川の『平和・戦い』<sup>57</sup>にも、白米満行の論文「R. H. ブライスの人と業績」<sup>58</sup>にも紹介されており、ブライスはすでに子供時代に不殺生の信念を芽生

えさせていたことが判る。

平川は『平和・戦い』の中で、ブライスが「君たちは自分自身ではおっかないから牛や豚を殺すことはできない。しかし他人が屠殺した牛肉や豚肉は喰う。それは卑怯なことだ」と授業中に言ったように記憶していると述べている。また、京城帝国大学時代に、口の悪い同僚から「ブライスさんはセンチだ。動物性の食品は卵と牛乳以外まったく食べぬ。彼は自分が肉食しなければ一年間に一頭でも一尾でも牛豚や魚が助かるだろう、などというが、彼が食べなくても、他人がその分食べるから何にもならぬ」などと冷評されても、断じてその信念は曲げず、肉類は一切口にしなかった、と当時の同僚の小西英一は『回想』<sup>59</sup>の中で述べている。

ブライスの徹底した信念の行使は、その論理は理解出来ても、多くの人々の実践を可能とすることではなかった。ブライスは観念論を信念として徹底した人のようにも映るが、ブライスの「生き物を殺してはならぬ」という信念は、頑固なほど徹底したものであった。良心的徴兵忌避者として服役していた18才以来、ブライスは菜食主義者となり、それを生涯守り通したのである。

#### (10) 恩師 William Paton Ker ウィリアム・ペイトン・ケア教授との出会い

第一次世界大戦後に釈放されたブライスは、1920年にロンドン大学に22才で入学して英文学を専攻する。ロンドン大学は、宗教教育や、宗教上の差別をしない大学教育を行うという理念のもとで1828年に設立された。ブライスは同大学ユニヴァーシティ・カレッジのウィリアム・ペイトン・ケア(William Paton Ker 1855-1923)のもとで英文学を専攻する。

ケアは叙事詩*Beowulf*『ベオウルフ』(以下『ベオウルフ』)に代表される中世文学の権威であり、ちょうどブライスが大学に入った1920年に、オックスフォード大学詩学教授に選任されている。その20年前の1900年秋には、夏目漱石もケアの授業(11月7日から12月)を聴講している。ケアの著書には*Epic and Romance*『叙事詩と伝奇小説』(Oxford, 1897)を始め中世英文学、アングロサクソン文学研究書がある。ケアの業績抜きにはイギリスの中世文学を語ることは出来ず、特に『ベオウルフ』研究の第一人者であった。

ブライスはケアの下で優秀な学徒であった。ブライスが著した日本の学生向けの英文学テキストの文献欄には、ケアの著書である*English Literature: Mediaeval*『英文学—中世』(H.U.L.)が挙げられ、さらに『ベオウルフ』をはじめ数多くの中世詩を引用している。ケアの影響を色濃く受けたブライスにとっては当然のことと言えよう。1942年に出たブライスの処女出版物である『禅と英文学』のなかでも、ブライスは『ベオウルフ』を登場させ、“If we want to find Zen itself, we may begin at *Beowulf* and speak of his Bushido.”「もしも禅そのものを英文学に見いだしたいなら、『ベオウルフ』に始まり、ベオウルフの武士道を語る事ができる」<sup>60</sup>と述べているほどである。

『ベオウルフ』に禅を見だし、武士道を探るのは、ブライスならでのことである。またブライスの晩年期の出版物である『俳句の歴史』には英文学の中に見られる

俳句精神との接点として、『ベオウルフ』を次のように取りあげる。

“In the history of English literature we find the haiku spirit everywhere but often mixed with other elements more or less consciously omitted by the Japanese haiku poets. In Beowulf we have lines such as:

Thence the welter of waters washes up  
Wan to welkin when winds bestir  
Evil storms, and air grows dusk,  
And the heavens weep.

This is the drearier aspect of nature beloved of the haiku poets, but there is a lack of sobriety,..... It lacks “the modesty of nature” that should be seen even in a typhoon.”<sup>61</sup>

「英文学の歴史上、いたるところで俳句の精神を見いだせるが、しかし、それは日本の俳人にとっては、多少とも意識的に取りのぞかれる要素が、混在していることが度々ある。『ベオウルフ』にはこのような詩がある。

滾れる波が沼地より高きかなたへ立ちのぼる  
黒き様にて雲居まで、風が更にはかき立てて  
憎らしげなる嵐をば、辺りはついに暗くなり  
天空すべて涙せん。

この詩は日本の俳人が敬愛する自然のもの寂しい光景である。しかし俳人から見て、そこには節度に欠けるものがある。つまり台風でさえ見せる『自然の節度』をこの詩は欠いている。」（小川和彦訳）

ここでブライスは、『ベオウルフ』に描写される自然の姿に、日本の俳人の理想とする自然をすえ、そこから日本の俳句の特性や、イギリスの中世文学を代表する詩と俳句の異同を私たちに語るという方法を取っている。このことはブライスが日本の自然観を深く認識していることを示し、平川は『平和・戦い』でブライスの俳句への受容の土台にケアの薫陶があったことを説明する。

「キリスト教が根をおろす前のブリテンで人々が自然に対しどのような感情を抱いていたか、という点に関心を持ったケアの弟子ブライスさんが、大学卒業後極東へ来て、日本人の天地山川に対する観念に関心を寄せ、俳諧の詩に同情ある理解を示すにいたったのは、きわめて自然な推移だったに相違ない」<sup>62</sup>

中世詩の権威のケアは、詩の重要性とともにフィロロジー(文献学、言語学)も重んじ、ロマンス語系統はもちろんスカンディナヴィアの古語にまで通じていた。このような中世詩と言語学の権威の師のもとで、ブライスが仏・独・伊・西・羅などの諸言

語を熱心に学んだのも、自然の成り行きであろう。後にブライスが日本語も朝鮮語も漢文もマスターするほどの諸言語の使い手となった根源には、恩師ケアの薫陶があったといえる。

### (11) 日本人留学生藤井秋夫との出会い

ロンドン大学在学中、ブライスは彼の人生を極東へ向かわせるきっかけとなった一人の日本人留学生・藤井秋夫に出会う。藤井は1922年に東京帝国大学文学部英文学科を卒業すると同時に、同大学文学部助教授斎藤勇の推薦を受けて、2年間のロンドン大学留学を命ぜられたのである。

藤井は帰国後、京城帝国大学予科教授就任を予定されていた。そして彼はイギリス滞在中に、京城大学予科および大学で英語・英文学を講ずる英人教師の備入れを依頼されていた。藤井から京城行きの話を受けた時、ブライスは即座に「ウン、行こう」と、いとも簡単に答えたという。<sup>63</sup> 「この至極単純な話し合いで、一人の人の生涯が決定されたもののように思われた。これも、日ごろから竹を割ったような二人の性質のふれあいの結果と、私は思う。どうしてブライスさんは日本に来られたのか、との疑問を持たれる方々へ、これが真相であると申し上げておきたい。」<sup>64</sup>と、藤井の妻、元子は述べている。後に「その時はそれは一大決心でしたよ」<sup>65</sup>と自分の過去についてほとんど語らぬブライスが、珍しく一度東大の教室でもらしたことがあったと平川は語る。しかし京城高等商業学校の兼任講師時代の教え子である金振興に、「私は東洋文化が好きなんだ。それではるばるこちらまで来たんですよ」<sup>66</sup>と語っている。このブライスの言葉には、すでに大学時代に東洋文化への強い関心あったとみられる。しかしブライスが東洋へ関心を持ったのは、良心的徴兵忌避者として、兵役を忌避したために、約2年間ロンドン市のワームウッド・スクラブズ監獄に収監されたことによって、母国での就職に障害が出ると考えたのかもしれない。

ブライスは、1923年にロンドン大学を優秀な成績で卒業した。彼の「抑留所履歴書」によれば、卒業試験に於いて優等第一級バチェラー・オブ・アーツ（文学士）の学位を得るとある。筆者が1994年にロンドン大学資料室で調査したブライスの関連文書においても、優等第一級と記載があった。そして、1924年には、ロンドン・デイ・トレーニング・カレッジ（師範学校）において、ロンドン大学教育科免状（教員免状）を受ける。

その後、ロンドン大学で同級であり学友であった3才年下のアニー・バーコヴィッチと結婚した。アニーは1901年11月24日、ロンドン生まれのユダヤ系イギリス人であった。当時ロンドンのラドブロウブグローブに居住し、大学ではブライスとほとんど同じ科目の授業を受けていた。ブライスと同時期にロンドン・デイ・トレーニング・カレッジで教員免状を取得した。同級生同士の恋は実を結び、熱愛の二人には、はるか遠い朝鮮の地も魅力ある新生活の地と映ったのかもしれない。

1924年8月、新婚の夫妻は海路にて神戸に着く。友人の藤井秋夫夫妻とともに、京都、宮島を旅して京城へ向かい、9月2日に京城帝国大学予科教師備入契約をした。



こうして、ブライスと妻アニーの新生活は、極東・朝鮮で始まったのである。

### 第三節 朝鮮時代（京城帝国大学予科教員時代から日本内地への移住 1924～1940）

#### （1）東洋との出会い

ブライスが朝鮮にいた期間は、ロンドン大学時代の友人藤井秋夫の来日要請を受けた1924年(大正13)から、1940年(昭和15)日本内地への移住までの16年間に相当し、彼の26才から42才の壮年期にあたる。ブライスは、大学の近くに土地を求め、そこに日本式木造家屋を建て、動物に囲まれて生活した。そして藤井をはじめ、ワーズワースとコウリッジの仲と称した新木正之助(『回想』出版幹事責任者)、有機化学の教授小西英一ら同僚との温かい人間関係が生まれた。

ブライスは、学生への熱心な指導と温かい心遣いを忘れなかった。また音楽愛好グループを結成して弦楽四重奏団の演奏を楽しんだ。そして持ち前の語学的才能で、日本語、朝鮮語、漢文、さらにセルバンテス、ダンテ、ゲーテといった西洋古典の研究に勤しみ、そこで俳句に出会い、詩や俳句の実作も試みた。鈴木大拙の禅著書や中国の古典に啓蒙されていった。特に、禅への傾倒ぶりが著しく、臨済宗妙心寺の京城別院の華山大義老師のもとで、参禅実践の日々を過ごしたほどである。

ブライスの朝鮮時代は、東洋、西洋思想に跨がる彼の研究の成果と英文学の専門知識が、整理・分析・体系・統合されて、1942年の処女作『禅と英文学』への結実へと向かう準備期間に相当する。東洋文化に対峙し潜龍の修業時代であった。

しかしながらこの時期は、私生活では10年におよぶアニー・ベールコヴィッチとの結婚生活の破綻とアニーの帰国・離婚、ブライスのイギリス一時帰国、朝鮮での復職、日本人女性来島富子との再婚、そして第二次世界大戦勃発、親友の藤井秋夫の急死、日本内地への移住など、ブライスにとって多事多難な年月でもあった。

#### （2）朝鮮での仕事と暮らし

昭和初期の外国人教師は、希少価値ということもあって、給与は日本人サラリーマンと較べられないほどよかったそうである。当時朝鮮総督府財務局課長の水田直昌の月給が300円ぐらいだった時、講師のブライスは350円であった。普通のサラリーマンの月給が、80円から100円、帝国大学教授が300円だった。水田は当時京城大学の法文学部長であった安部能成に、破格に高いブライスの月給に対して少しくレームを出したが、安部から日英の常識の尺度の違いと外交上の関係、国際関係という点を考慮に入れてほしいと言われて、しぶしぶ予算を組んだそうである。<sup>67</sup> そんな高給取りのブライスは、どんな生活を送っていたのだろうか。同僚であった小西英一による次の回想は、ブライスの生活を如実に表わしている。

「京畿道崇仁面清涼里<sup>68</sup>、南北へ京元線の鉄路が通り、その線路の西側に京城大予科の赤煉瓦三階の校舎があり、予科の建物から東の方へ徒歩で約十分のところ土の小丘があった。われわれはそこを、「ブライスが丘」と呼んでいた。

多分、近藤先生が名付親であったろう。ブライスさんは、ここに二百坪くらいの土地を買い求め、四十坪ほどの木造二階建の日本式住宅を建てて住んだ。畳敷、障子、襖の和室が大半で、それが如何にもうれしそうであった。庭には犬と山羊、時には馬も飼って乗馬で出歩いていたこともあった。動物愛好、むしろ愛護は徹底的で、それがブライスさんをして一切の肉食を遠ざけ、芯からの菜食主義に及び、反戦にまで通じていたのであろう。」<sup>69</sup>

ブライスの動物好きはつとに有名で、「何か料理が出来た時、それを分けてやる生き物がいないのが一番悲しい」<sup>70</sup>と言って、どんな時代にも彼の周りに動物がいないことはなかった。後年、大磯にあるブライス家では、数匹の犬が絶えることなく客人を迎えた。それはあたかもブライスのスピリットを受け継いだ如く客人を嗅ぎまわっていた。

ブライスは、1926年（大正15）より京城大学で英文学の講義をするかたわら、鈴木大拙の説く禅思想の熱心な信奉者となる。ブライスの数少ない詩作品が生まれたのもこの時期である。1927年には、*London Mercury* 『ロンドン・マーキュリィ』<sup>71</sup>に詩を2編発表している。また翌年、京城帝国大学の学生等の同人誌『開墾時代』の創刊号と第6号に、それぞれ詩を発表するなど英詩を講義するかたわら自らも詩作を試みるなど創作意欲のわく時期を送った。

諸留寛の論文には、『開墾時代』に発表したブライスの英詩が数編紹介されていて、諸留はそれらの詩を、「一読して何となく禅書、例えば『無門関』や『碧巖集』の各則に付けられた頌によく似た感じであるということは私の率直な印象であった。そしてこの事は確かにブライス博士の後日の生活と、彼が果たした一連の学問的成果につながる謂わば必然の因子を暗示して居るように思われるのである。」<sup>72</sup>と示唆する。

『開墾時代』に発表したブライスの2編の詩の一つである *Tree in December* を引いてみる。

Tree in December

One full strong note rose up  
Through airy silence, swelled  
And spread until the air  
With whispering sounds was held  
That threaded wand'ring way-  
Thin hymning melodies-  
Till, fading away, the air  
Renewed its silence.

「十二月の樹

ある強い音が  
広大な静寂から

わきあがり  
大気は響きを囁きかけ  
縫うようにさ迷う道、  
微かな聖歌の調べを持ち続け、  
膨らみ、広がった  
大気が遠くへ消えていくと、  
また静寂が生みだされていく」

諸留は、この詩を「禅書、例えば『無門関』や『碧巖集』の各則に付けられた頌によく似た感じ」と述べている。この一例からブライスの詩の特徴を判断することは難しいが、筆者は浪漫的な雰囲気を持つ宗教詩のように感じる。ブライスがこの詩を発表した1928年は、鈴木大拙の禅書に影響を受け、臨済宗妙心寺の京城別院の華山大義老師のもとで、参禅実践の日々であった。慣れ親しんだイギリス文学と、東洋へのあこがれの入り混じった時期での作品である。キリスト教での12月の意味、永遠の命のシンボルである樹木、静寂の中でわき起こる強い囁きかける音調、聖歌の調べは、数少ないブライスの詩の中でも、宗教詩の一つと見てはどうであろうか。

またブライスはイギリスへの一時帰国から朝鮮へ戻った1936年頃から、東洋・西洋の文学や哲学研究にも勤しんだ。親友の新木正之介は、この頃のブライスの書齋に、(月曜日)セルバンテス：ドン・キホーテ、(水曜日)ダンテ：神曲、(金曜日)ゲーテ：ファウストと記した読書日課表が留めてあったのを記憶している。

ブライスの読書法は原書を繙く前に、英語の翻訳書によって内容を把握し、それから原書を読む方法であったらしい。「ブライスのヨーロッパ言語能力を疑う」と、マロリー・フロム(Mallory Fromn)の指摘<sup>73</sup>があるが、ブライスの読書方法から彼の言語能力を測るのは無理があるように思われる。

さらにブライスはウェイリーの英訳『論語』(1938)によって、中国原書の『論語』を読んだらしい、と新木は『回想』<sup>74</sup>で述べている。英訳『李白詩』、『白楽天』やウェイリー著『中国絵画史序説』を傍らに置くなど東洋文学、中国文学の研鑽に務めた。

### (3) 離婚・養子李仁秀・再婚

1934年4月、ほぼ10年連れ添った妻アニーが、夫妻の養子になっていた李仁秀少年を伴ってイギリスへ帰ってしまう。ブライス36才、夫妻には実子はなかった。結婚破綻の原因を平川は次のように推測している。

「ブライスさんは東洋の天地が気に入り、日本語を学び、朝鮮語の会話を楽しむようになればなるほど、そのアジアへの愛情自体がさえぎりとなって、ア  
ンナ夫人との間の障壁はいよいよ大きくなったのではあるまいか」<sup>75</sup>

またブライスの教え子であった三宅一美は、級友李仁秀のその後を次のように語

っている。

「彼は貧しい家の生まれであったが、京畿道立商業学校に居た時から神童といわれ、その時分から先生に可愛いがられて養子になり、高商一年の終わりにブライス前夫人に伴われて英国に行き、ロンドン大学に入れてもらい、日本の敗戦降伏後韓国に帰って大学の教授になった由である。一九四七年勃発した朝鮮動乱の際、彼はソウルへ侵入した北朝鮮軍に捕らえられ、強制的に英語で米軍の兵士に向けて放送をさせられた。動乱終結後、反逆者の烙印をおされ、居住地阿峴洞の住民や、彼を尊敬する一般国民の熱心な救命陳情も空しく、韓国軍によって銃殺され、数奇な生涯を終えたのであった。」<sup>76</sup>

その後ブライスは、1962年に東京で教え子の金振興と再会した際、二人して李仁秀の苛酷な運命に思いをはせた。<sup>77</sup> 貧しい家に育ち神童とまで言われた李仁秀に、ブライスは自分の青少年期を重ねていたのであろう。ブライスの嘆きは深かったにちがいない。

ロンドン大学での筆者の調査では、アニーはイギリス帰国後、直ちにロンドン大学へ再入学し、哲学を修めようとするが、1933年から1934年の履修登録のみで卒業はしていない。学業は断念したもようである。その後のアニーの消息は不明である。

アニーが去って1年後の1935年3月のこと、ブライスは自分もイギリスへ帰国する決心を固め、親友の新木正之介を訪ねたのである。すでに職を辞し、家も売却していたブライスは、再び京城へ戻るかどうか不確定の帰国であると新木に告げた。京城で生まれた二人の友情の絆は強く、悲しい別れであった。

しかし、ブライスはイギリスでアニーと法的に離婚し、翌年の1936年3月には京城に戻ってきた。シベリア鉄道の中で、アーサー・ウェイリーの英訳した『老子』(1934)を読んで感銘を受ける。その後中国語の原書の『老子』を求め、ウェイリーの英訳の助けを得て学ぶ。そして予科、大学、高商の教職に復帰することになった。

彼は京城の旧市内の梨花町に家を借り、1940年10月に京城を離れ日本内地へ渡るまでそこに居住する。日本では、二・二六事件が起こり、11月には日独防共協定が結ばれる時期であった。1937年3月にブライスは、来島富子(22才)と再婚した。ブライスと日本女性の結婚は、当時京城の日本人を驚かせ、その結婚には号外もでたそうである。

#### (4) 音楽狂

「ブライス家に入入りし親しくなった若者は、必ず音楽を練習させられ、音楽の先生までつけてもらって合奏するところまで音楽の訓練をさせられるのよ。」と、ブライスの秘書を務めた岩村智恵子は、ブライスが自分の嗜好だけでなく、家族、知人、学生も音楽の輪を拡げていった日々を懐かしむ。

ブライスは子供の時から独習でいろんな楽器に親しんでいった。後の学習院時代

でもオルガン、ピアノ、バイオリン、チェロ、フルート、オーボエ、クラリネット、リコーダーを求めた。管楽器用の楽譜を弦楽器用に書き替えたり、チェロをバイオリン用にする等はお手のもので、ついには二台のオルガンを一台にして、バッハのオルガン曲に挑戦したりするほど、音楽制作技術、音楽理論、演奏技術の才能を備えた、根っからの音楽好きであった。

彼は京城大学予科の学生たちに音楽の楽しさを味わせたいと考えて、練習希望者を募った。しかし朝鮮の出身者中には学資が豊かでなく、楽器が入手できぬ学生があることを知ると、古道具屋で古物のバイオリンを集めて修繕し、それらを当時の金額5円で学生に頒け与える程の熱の入れようだった。学生には少なくとも3カ月は毎日音階練習だけで、その間は決して流行歌曲などを弾くことは許さなかった。そのため連日のドレミファ練習に嫌気のさす学生も出始め、次第に参加者が欠けだして、ブライスを大いに失望落胆させた。

この音楽練習のプロセスは、ブライスの性格を知るうえでまたとない具体例である。ここには学生に音楽の楽しさを味わせてやりたいというブライスの親切と優しさ、学生への愛情がにじみ出る一方で、自己流の訓練を押しつけ、結果として学生の心をつかむことができない状態を生み出していく様子が明白である。音楽に親しませたいという誠に歓迎されるべき本来の出発点をも覆してしまう程の成り行きに、深い挫折感を味わうブライスの姿が浮かび出る。だがその挫折感も音楽への強い熱意と愛情で癒されるブライスでもある。

ブライスの秘書を勤めた山田達子(1957年から1959年にかけて約2年間、ブライスの秘書を勤める)は、ブライスの音楽癖について次のように語っている。

「とにかく、先生にとって音楽とは、(生でもレコードでも)、演奏の上手下手に関係なく、まして演奏家の名声等は問題外であり、目にした新聞等の音楽批評等にも全く耳をかさず、御自身の耳と心に訴えるものだけが本物だったようです。……ほとんど演奏会に行くこともなく(二年半の間に一度だけご家族揃ってマタイ受難曲のコンサートに出かけ、同道させて頂きました。)御自分なりに御自分の音楽を演奏するのが一番の楽しみだったのだと思われ  
ます。) <sup>78</sup>

ブライスはことのほかバッハが好きで、禅を論じる場合にも、俳句を解釈するにも、いきなりバッハが出てくるほどのバッハ狂である。次のようにバッハの音楽をして俳句の特徴を語るほどバッハの音楽を好んだ。

“Haiku does not, like waka, aim at beauty. Like the music of Bach, it aims at significance, and some special kind of beauty is founded hovering near.” <sup>79</sup>

「俳句は、和歌のような美を追求しない。バッハの音楽のごとく、俳句は身近に浮留しつつ見出されるある特別な類の美と、意味とを追求する。」

第一節の冒頭で紹介した『川柳にみられる日本人の生活と気質』の序文にも“Zen is what we hear in the music of Bach.”「禅はバッハの音楽のなかで聞こえる」とバッハが登場する。山田達子はブライスの秘書という身近な立場から、バッハに傾倒し、バッハに固執するブライスの姿を次のように語っている。

「バッハは禅そのものであり、先生の全てがここから出発しているように思われます。かたくななまでにバッハを固持し、一つの信仰のようにさえ思われるその強さは、誰にも反発したり批判したりするスキを与えない或る權威を感じさせるものでした。

朝鮮時代にはかなり正式なアンサンブル等を組んで演奏活動をなさったと伺っております。多分に独断的な面や片寄った点があったのでは、とも思われますが、それというのも先生の中には常にバッハというオールマイティがあったからこそといえるのかも知れません。」<sup>80</sup>

しかしブライスのこのような姿勢は、周囲の人々にとってはかなり独善的に見られることが多く、共感を得られることは少なかった。後に禅老師となったロバート・エトケン<sup>81</sup>が「先生は文化に対する御自身の理解こそが一般的な判断の基礎になると考えておられた。」<sup>82</sup>と述べているようにブライスには、音楽に対しても、培った東洋文化・日本文化に対しても、それらへの探求から生まれる自信とそれらへの独善的とも思われる姿勢がある。自分の耳と心に訴えるものだけ本物であるという認識、自分なりに自分流の音楽を演奏することが最高の楽しみであり、そこに喜びを見出すブライスの姿に、自己の信ずる信念への自己陶醉と自己慰謝を見る。ブライスの自己陶醉は他人に理解されないことから生じる自己逃避ではない。音楽に身を委ねることで自己慰謝を施し、さらに信念への自己存在を認識する。他人が音楽をどう捉えようと一切気にかけることはない。内面に優しさと感情的な激しさを秘め、一方で不遜とも取れる自己への陶醉と自己への自信に、筆者は古典主義的ロマンチストの姿を見る。

##### (5) 俳句との出会い

京城での生活は、京城帝国大学予科、京城大学、京城高商の同僚や学生との交流、生涯の親友となった新木正之助と実り多き交流と、1942年に出版された『禅と英文学』（北星堂）で実を結んだ日本文化と東洋思想の研究に費やされた時期である。前にも触れたが『川柳にみられる日本人の生活と気質』の序文で、ブライスが「自分の諸局面を、生れつきのアミニズムがあり、菜食主義になり、そして偶然、幸運にも俳句というか俳句の道というべきものに行き当たり、ついで鈴木大拙の書物を通して禅に出合った。ついで川柳を発見した。」と述べているように、京城時代では、ブライス流に言えば、偶然、幸運にも初めて俳句に出合ったのである。そして非常にわ

ずかだが彼自身の日本語俳句も作られている。さて、一体誰がブライスを俳句の世界へ先導したのであろうか。そもそも実際に先導者はいたのであろうか。

平川は、推測と断ったうえで、「京城大学には俳句、川柳等江戸文学の大家として知られる麻生磯次氏が教授として赴任していた。……これは私の想像にすぎないが、ブライスさんが俳句の世界に入ったのはこの麻生教授が京城大学法文学部に同僚としておられたことと無関係ではなかったのではあるまいか。」と『平和・戦い』<sup>83</sup>の中で述べている。また、戦後の1954年には、ブライスは当時学習院大学教授であったが、東京大学から『禅と英文学』および『俳句』4巻で文学博士号を受けており、その時の学位審査の主査が麻生磯次博士であった。麻生博士は、京城大学に勤めた後、東大で定年を迎えてから学習院に移って学習院院長を務めた。したがってブライスは博士と二度同じ職場にいたことになる。

しかし、ブライスが俳句に接した京城時代は、麻生博士がブライスに俳句の先達者として親しく交わるほど親密ではなかった。このことを『平和・戦い』の翌1984年に出版された『回想』において、ブライスの親友の新木は、「二人の交流は全くなかった」と断定している。新木によれば、麻生博士とブライスの交流は、東京大学に提出したブライスの博士論文の主査を麻生博士が行なってから後のことである。<sup>84</sup>よってブライスの俳句の先導者は麻生博士とはいえない。とすると、ブライスは一体俳句を何によって知ったのであろうか。それはどうやら、書物を通じて知ったのであるらしい。というのは、この頃ブライスの最大限の関心を集める鈴木大拙の禅書とH. G.ヘンダーソン(Herald Gould Henderson)の俳句英訳書、宮森麻太郎の俳句書が刊行されたのである。

ブライスは京城着任3年目の1927年に、鈴木大拙の*Essays in Zen Buddhism, First Series*『禅仏教に関する諸論』第一集を読んで感動し、以後鈴木大拙の禅思想の信奉者となる。<sup>85</sup>したがって当時相次いで刊行された鈴木大拙の禅書を読破したのではないだろうか。1942年出版の『禅と英文学』の序文末尾の謝辞で、ブライスは執筆にあたり、鈴木大拙の幾多の禅書と宮森麻太郎の著書*An Anthology of Haiku, Ancient and Modern*『俳句選集』(1932)、そして後年、戦後の日本で運命的な邂逅をするH. G.ヘンダーソンの著書*The Bamboo Broom, An Introduction to Japanese Haiku*『竹箒・俳句入門』(1933)に多くの恩恵を蒙ったことを記している。白米満行は、ブライスが『俳句』の英文参考書目に、翌年発行のヘンダーソンの『竹箒・俳句入門』(1934)を入れていることから、ブライスが読んだのは1934年版かも知れないと示唆している。<sup>86</sup>

この二冊の俳句関連書がブライスの俳句との出会いに多大な影響を及ぼしたと考えられる。特に宮森麻太郎の著書『俳句選集』は、俳句文学への関心と同時に、日本語の習得をブライスに呼び起こしたのである。そのことを明らかにする資料が、ブライスの次女の武田ナナの手元にあった。彼女より入手したNHKラジオ番組「日本語のおもしろさ、むずかしさ」のシナリオ台本の中に、ブライスと俳句との出会いを明らかにする箇所があるのでここに引用する。

「アナ：ところで、初めはどういう方法で日本語をお覚えになりましたのですか。

ブライス：初め来てから五、六年たってから初めて習いました。何故ならば、日本にはそんなに立派な文学があると思わなくて、習う必要があると思わなくて、習う必要がないと思いましたがけれども、宮森麻太郎の英訳した俳句を通じて日本語を習い始めました。それから鈴木大拙の英語で書いた禅の本を読んで、本文を読まなければならないと思って、漢文も習い始めたのです。これは皆一人で習いました。

アナ：そうですか。すると、先生は日本語の勉強は、俳句からお入りになった。

ブライス：そうですね。」<sup>87</sup>

この対話によると、ブライスは京城に来た当初は日本語も俳句も関心がなかった。京城の生活が軌道に乗った頃、つまり着任後5、6年たって、宮森の俳句書に出合い、俳句文学に触発された。そして俳句を学ぶと同時に日本語も習得していったのである。しかも最初は日本語も俳句も独習であった。元来言語習得能力に秀でたブライスは、日本語という言語を学ぶことにさほど苦労はなかったであろう。さらに本来文学指向の強いブライスが、俳句に傾斜していったのは不思議なことではない。手を貸す日本語の先生も、俳句の先導者もなく、ブライスは独りで俳句の世界に足を踏み入れていったのである。

後に、同僚の藤井秋夫の妻、元子に俳句の勉強相手を頼んだが、その頃にはかなり俳句を読み込んでいて、元子も驚く程の俳句理解を寄せるようになっていた。元子はその頃のブライスの俳句への傾斜の深さを次のように述べている。

「ブライスさんは芭蕉の句が好きだった。ある日、突然、俳句を教えてほしいといわれた私はびっくりし、ととてもとてもそれは出来ない相談、と固くお断わりしたがおきき入れなく、ただ読み合せでいいからとのこと、不安ながら一週一回お相手することにした。……いざ、始めてみると、案の定、豊かなユーモアの持ち主のこととて、一句一句あざやかな解釈振りで、私の方がタジタジ、注意されたり教えられたり、先生と生徒あべこべの始末。」<sup>88</sup>

ブライスは、『川柳にみられる日本人の生活と気質』の序文で、「偶然、幸運にも俳句というか俳句の道というべきものに行き当たり」と述べているが、彼は宮森の英訳俳句を通して日本語を独習し、そして偶然、幸運にも俳句の世界に出合ったといえよう。ブライスの「第一の内なる運命」は花をつけていくのである。

## (6) 俳句から禅へ

ブライスは、鈴木大拙の禅書を通して禅に出合う。『川柳にみられる日本人の生活



と気質』の序文に、彼は「・・・・・・・・そして偶然、幸運にも俳句というか俳句の道というべきものに行き当たり、ついで鈴木大拙の禅書を通して禅に出合った。ついで川柳を発見した。」と述べていることから明らかである。

イギリスから極東の地、京城に来て3年目の1927年、ブライスはその年に出版された鈴木大拙の『禅仏教に関する諸論』(第一集)を読み、鈴木大拙の禅思想に心惹かれたことは既に述べたが、その感動を「禅と鈴木大拙」と題する論文の文頭で次のように述べている。

「・・・・・・・・1927年、朝鮮の地で『禅仏教に関する諸論』の、第一集を読んだ、その時の感激は、ちょうどシベリヤ(ブライスはシベリア鉄道で京城へ戻った。筆者)でウェーリの訳になる『老子』を読んだ時の、あるいは青年時代にロンドンでエマソンを、また幼ないころ『ロビンソン・クルーソー』に読みふけた時の感動と、まさしく同じものであった。」<sup>89</sup>

さらにブライスは、鈴木大拙の『禅仏教に関する諸論』の第一集を、「禅のために、禅について、禅によって書かれたもの」と定義し、鈴木大拙の禅思想がイコール鈴木大拙そのものであることを次のように明記している。

「禅について語る時—それに賛同するにしても、あるいは反論を加えんとするにしても—、その言葉は、『自己の存在の本性に見入り、束縛を脱して解脱の境地へ進む道を示し』ていなければならぬ。換言すれば、かかる言葉が著者の人格そのものでなければならぬ。しかもこの著者は解脱した人でなければならぬのだ。『禅仏教に関する諸論』はじつにこの条件を満たしている。」<sup>90</sup>

1933年以降、鈴木大拙の著書が立て続けに出版され、ブライスはこれらの著書を京城の地でむさぼり読んだことであろう。まず1933年に、*Essays on Zen Buddhism, Second Series*『禅仏教に関する諸論』の第二集(Luzac and Company, London)、1934年には第三集Third Series、さらに『禅の第一義』改版、そして1935年には、*Manual of Zen Buddhism*『禅仏教の教範』(The Eastern Buddhist Society, Kyoto)、翌1936年には*Buddhist Philosophy and Its Effect on the Life and Thought of the Japanese People*『仏教思想の日本人への影響』(Kokusai Bunka Shinkokai, Tokyo)、さらに1938年にはブライスの『禅と英文学』(1942)に多大の影響を与え、多くの引用がみられる*Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture*『禅仏教と日本文化への影響』(The Eastern Buddhist Society, Kyoto 1938)が出版された。(この著は1959年、『禅と日本文化』と改題・増補されプリンストン大学出版 Princeton University Pressから刊行された。)

1938年の初版から1959年のプリンストン版までの20年間に、鈴木大拙とブライス

は互いに刺激しあうほど活発な交流を重ね、鈴木大拙はプリンストン版に、ブライスの俳句論から多くの引用を取りあげた。それは朝鮮時代に鈴木大拙の禅書によって初めて禅思想を学び始めたブライスにとり、長年の研鑽が報われたことを意味した。鈴木大拙の『禅と日本文化』の中には、次のようなブライスの俳句観が紹介されている。

“To quote Dr. R.H.Blyth, an authority on the study of haiku: “A haiku is the expression of a temporary enlightenment, in which we see into the life of things. Whether “temporary” or not, Basho gives in his seventeen syllables a significant intuition into Reality.”<sup>91</sup>

「俳句研究の大家であるブライス博士によると、俳句はほんの瞬時の悟りの表現であり、そしてその中に事象の生命が見える。そして、瞬時かどうか判らないが、芭蕉の17文字の中に物の本体への意味深い直観が示されている。」

ブライスが俳句と禅を、表裏一体のものと認識したことがわかる。この瞬時の悟りが、アメリカの詩人の心を捉えた。俳句的瞬間 ‘haiku moment’ と呼ばれ、アメリカ俳句の特色の一つにまで定着することを誰が予想したであろうか。彼の「第一の内なる運命」は、俳句から禅へと花をつけていくのである。

## (7) 基督教を捨て、禅仏教へ

さて場面を再びブライスの朝鮮時代の1930年代後半に戻すことにする。1938年のある日、ブライスは新木正之助に「六祖壇経」を知っているかどうか訊ねた。新木が知らないと答えると、ブライスは失望した表情を見せ、その後は禅の古典或いは禅匠の語録について話すことはなかった。<sup>92</sup>

華山老師への尊崇の念は強く1942年処女作『禅と英文学』を、「老師がいらなかったら、私は禅のことは何も知らなかったろう」<sup>93</sup>と献辞している。またブライスは参禅の理由を、*Zen and Zen Classics* 『ゼン・クラシックス』第一巻（北星堂 1960）の文頭エッセイ「禅とは？」の中で、愛に失望した<sup>94</sup>からと述べているが、その真意は明らかではない。ブライスの妙心寺の参禅の様子を、朝鮮時代の友人であり同僚でもあった小西英一は次のように回顧している。

「日曜日などは早朝五時から座禅、接心、朝粥を戴いて帰るという修業を長くつづけた。妙心寺では当時、月の三の日と八の日とに夕食後、三八会というのが催され、華山老師の「無門関」の提唱があった。その外、毎土曜日夕には白隠禅師の「毒語心経」の講義もあったが、ブライスさんはそのいずれにも熱心に参加していた。そして仏典を味読する必要から漢字の学習を始め、終には習字までやるに至った。」<sup>95</sup>

ブライスが禅仏教へ傾斜する要因を考える時、1939年に京城帝国大学図書館発行の『文献報国』に発表した論文 *How I became a Buddhist* 「余は如何にして佛教徒となりしや」を見過ごすことはできない。

“I was brought up as a Christian in one of the narrower fundamentalist sects from America. At the mature age of eighteen I became (and have remained) a vegetarian on humanitarian grounds, and ceased to be a Christian....”<sup>96</sup>

「余は米国より来れる偏狭なる原教旨主義派の家庭に於いて基督教徒として成長した。十八歳にして人道主義的見地より菜食主義者となり(以って現在に到っている)、基督教を棄てた....」(橋本徳松譯)<sup>97</sup>

ブライスが非国教徒Nonconformistの家庭で育ったことは知られていたが、ブライス自身が‘Narrower fundamentalist sects from America’つまり、天地創造など聖書の記述すべて事実だとする20世紀初期の米国新教運動原理主義の流れを引く家庭で育ったと記述している。特にブライスは育った家庭の宗教を‘Narrower fundamentalist sectsと客観的に、むしろその宗教を批判的に見ている。

原理主義の基督教を離脱して、禅仏教を身近なものにしていったのが、1930年後半のブライスの暮らしであった。しかしブライスの心は絶えず生と死の迷いの中にあっただ。ブライスの苦悩が読み取れる詩がある。この詩には、“I was troubled too (who is not?) by the thought of death.” 「余は又死の思ひに悩まされた。そうでないものがあるうか。」とする一文が詩の前文にあり、詩の後にブライスの苦悩の姿を示す文章が加わる。

We that change  
Hate change.  
And we that pass  
Love what abides.  
Summer and winter,  
Day and night,  
All times and seasons,  
Winds and waves,  
Vex our spirit  
With an image  
Of its waning,  
And bequeath  
In dying beauty,  
Ashes,  
Darkness,

Dust.<sup>98</sup>

「移り行く者、移り行くを憎み  
過ぎ行く者、留まれるを愛す  
夏、冬、昼、夜、四時、風波  
缺くる姿もて我が魂を痛め  
失せ行く美に灰、闇、埃を残す。」（橋本徳松譯）<sup>99</sup>

“I wanted the coming without the going, good morning without good night, the cause without the effect. I wanted to eat my cake and have it too. Always searching, for what? Now as I look back on my life though I discern no guiding hand of man or God, yet my character has woven a pattern, I see the direction I was always taking-the same direction even when I was walking backwards.”<sup>100</sup>

「余は欲した。来りて去らざるを、夜を伴はざる朝、結果なき原因を。菓子を食べ、尚それを所有せんと欲した。求むること絶えずして、求むる所は何であつたか。余の生活を回顧する時、人神の導きを認めざるも余の性一個の模様を織なせるを見る。余の取り来れる方向、後退する時すら絶えず同一方向を取れるを見るのだ。」（橋本徳松譯）<sup>101</sup>

ブライスの母方の祖父、ヘンリー・ウイリアムズは愛情の希薄な身勝手な人で、暴力的で激しやすい性格であり、政治や宗教に生命をかけてもよいと思う程の人であったことはすでに述べた。またブライスの両親の結婚は、独立教会で執り行われたことはすでに述べているが、‘Narrower fundamentalist sects from America’つまり、天地創造など聖書の記述すべて事実だとする原理主義の家庭で育ったことに苦悩の源があるのではと推察する。16年間に及ぶ朝鮮時代は、ブライスが基督教を離脱し、僧侶になる覚悟さえ生まれ、禅仏教に傾斜していく時期であった。

#### (8) 友人藤井秋夫の急死、そして本土へ

最初の妻アニーと離婚して2年を経た1937年(昭和12)3月、ブライスは17才年下の来島富子と結婚したことは述べた。同年7月に日中戦争が始まり、ブライスは1939年(昭和14)には京城高商の職を解かれる。同年9月3日、イギリス、フランスがドイツに宣戦、第二次世界大戦が勃発した。この頃、「ブライスは陰悪な空気が身にせまるのを感じ、富子夫人と共に日本に移住し、日本への帰化を考えたようである。ブライスは藤井秋夫先生に自分の考えを話し、藤井先生は彼のことを斎藤勇先生にお願いしたのではないかと思われる。」<sup>102</sup>と新木は推測している。

しかし不運なことにブライスが心から信頼していた藤井秋夫は、1940年3月狭心症で急死する。不穏な社会状況の中で、大きな支えを失ったブライスの哀惜と落胆は測り知れない。翌4月、ブライスは16年におよぶ朝鮮の生活にピリオドを打ち、妻の

富子とともに京城を離れ、彼女の郷里山口県萩に向かう。俳句と禅の奥底を覗いたブライスの「内なる運命」は、その針路をイギリスではなく日本に向けられたのである。

#### 第四節 日本時代（1940年から没年1964年まで）

##### (1) 第二の内なる運命

ブライスの日本時代は、朝鮮から日本へ移住してきた1940年から没年の1964年の24年間に相当し、三つの時期に大別することができる。

第一期は、朝鮮から妻の富子と共に日本内地へ移住してきた1940年(昭和15)から、金沢の四高英語教師を経て収容所で日本の敗戦を迎える1945年までの5年間で、その間に処女著作『禅と英文学』(1942)を北星堂書店より出版し、神戸での約4年に及ぶ収容所生活の中で、俳句の英訳と禅に関する執筆に従事した。

第二期は、1945年(昭和20)から1947年(昭和22)までで、この時期は、敗戦によって日本の社会状況が混乱を極めた時代であるが、ブライスにとっては人生で一番多忙で活気のある時期であった。GHQや皇室とのかかわりを持って、日本の方向付けの最前線に身を置いた期間であり、望むと望まぬにかかわらず、ブライスの「第二の内なる運命」が躍動する時期でもある。

1947年以後没年までの第三期は、学習院大学の教授を務めるとともに、数多くの大学へ英文学の講師として出講し、ライフワークともいえる禅書の英語解説に意欲を見せ、ブライス独特の文学論や日本文化論を展開していった時代である。また1954年には、著書『禅と英文学』（英文）および『俳句』（英文）4巻によって東京大学より文学博士号の学位を与えられている。

このように三期に大別できるブライスの日本時代では、主に、ブライスが出会った人々を中心にして、ブライスの「内なる運命」を展望してみることにする。

ブライスの日本時代は、鈴木大拙、山梨勝之進とのつながりを抜きにしては語れない。さらに朝鮮時代に俳句の世界への道標となったH・G・ヘンダーソンと日本占領時代に運命的な出会いをし、それがきっかけとなって天皇の「人間宣言」作成につながっていくのである。彼らとの交流があったからこそ、日本での仕事が開花し、日本文学研究者としての地位を確立することができたと言えよう。

ブライスは朝鮮時代に鈴木大拙の禅書に啓発されて禅世界に足をふみ入れ、『禅と英文学』の序文で、ヘンダーソンの俳句書『竹箒』を“小さな傑作”と評価し、そこから大いに影響を受けたと述べている。鈴木大拙もヘンダーソンも、すでに朝鮮時代から、ブライスの精神世界と文学世界にそれぞれ禅と俳句の先達として影響を与えていたのである。

そして、戦後いち早くブライスを学習院の外国人教師として採用したのが山梨勝之進であった。ブライスは彼と知己を得たことによって、敗戦直後の日本で、政府、宮内庁とGHQを結ぶパイプ役として重要な任務にかかわった。天皇の「人間宣言」の草稿作成、学習院大学の存続への役割、彼自身が皇太子（今上天皇）の英語教師（ブラ

イスの没年まで御進講の形で継続)を引き受け、アメリカ人英語教師としてバイニング夫人を招聘することにも関わった。また戦後の1946年2月19日より神奈川から始まった天皇の「戦後巡幸」の決定に影響をあたえたのは、「ブライスが山梨院長を通じて宮内官に呈上した書物『英国王室の戦時中における活動』であろうと、入江侍従長は武田と新木に話された。」と語っている<sup>103</sup>ように、ブライスは終戦直後の政局の深部に身を置いていた。

この時期にはブライスのアニミズム、菜食主義、俳句、禅、川柳の出会いからなる「第一の内なる運命」と、政治へのかかわりとなる「第二の内なる運命」が交錯する。

## (2) 金沢第四高等学校の傭入教師に

1940年、ブライス夫妻は朝鮮から日本へ移住し、まず富子夫人の郷里である山口県萩市に落ち着く。そして萩市に3ヶ月滞在し、東京に移る。

同年11月21日付きをもって、ブライスは金沢第四高等学校の傭入教師となり、京城大学予科での待遇と同じ月手当て400円が支給され、さらに高等学校の官舎に居住する厚遇も受けた。当時の緊迫した社会情勢の中で、ブライスにこのような好条件の職場を紹介することが出来たのは、斎藤勇をおいて外には考えられないと、新木は『回想』<sup>104</sup>の中で語っているが、事実、親友の新木正之助はまだ京城にいて、ブライスの就職の世話をすることは無理であった。この時期にブライスは、死亡した藤井秋夫の恩師である斎藤勇を訪ねており、そこでブライスは斎藤勇に求職を依頼したと思われる。

三月に親友藤井秋男の死、四月には日本へ移住し、萩、そして東京を経て落ち着いた地が金沢であった。ブライスは金沢に来て、ようやく大きな安堵感に浸ることができた。彼は北国毎日新聞のインタビュー記事で、金沢の街に託してその心境を語っている。

「京城の帝大の藤井先生の斡旋でロンドンから京城へ来まして十六年間の月日は夢のように過ぎた。そして今度縁あって四高へ来たのですが、金澤は丁度ロンドンを思はせるような街です。このドンヨリ曇った空は本当によく似てみます。そして金澤人は真面目で落ちついてます。こんなことをいふと金澤の人達に叱られるかも知れませんが人格の點でもよくロンドンの人達と似てみるのです。」<sup>105</sup>

金沢の天候と人々の暮らしを出身地のロンドンと較べてみるなど、ブライスにとって金沢は永久に落ち着ける土地と思われた。そして記者に、読書中の佐藤紅緑著の『蕪村俳句集』を見せて一頻り俳句論を語り日本文学への傾倒ぶりを示した。そして「明春四月に帰化して金澤に骨を埋める覚悟です。今後ともどうぞよろしく願ひします」と付け加えた。かくして、ブライスは、富子という内助を得た上に好条件の職も得て、前年から書きはじめていた『禅と英文学』の著述に全力投入していった。

### (3) 帰化願いの申請

『回想』の年譜によると、ブライスは1941年4月に日本政府へ帰化願いを出している  
とある。ブライスの帰化願いは、新木正之助、鈴木大拙と安倍能成の三人が保証人にな  
って1941年(昭和16)4月に日本政府へ出された。しかし 帰化願いは一度出したまま  
で、その後の手続はされずに終り、結局ブライスは終生イギリス籍のままであった。

106

朝鮮にいた1939年ごろから、富子夫人と日本に移住し、日本への帰化を考えていたよ  
うである。この時期のブライスの日常を表す新聞記事がある。「祖国英に三下り半を  
叩きつけて翻然佛門に歸依—日本歸化願を正式に提出—城大豫科のブ講師」の見出し  
である。そこには仏教に傾斜し、僧侶になることを熱望するブライスの姿が記述さ  
れている。僧侶になるために日本人になることが先決を日本政府(南総督宛)に帰化  
嘆願書を出している。

「氏は京城在住既に十六年、ロンドン大学を卒業後直ちに京城帝大に聘せられて  
来鮮、英文学の教鞭をとっていたもので、その間日本古典文学を通じて東洋思  
想研究に没頭した。昨年秋からは仏教に興味を持ちはじめ京城府長沙門臨濟宗妙  
心寺華山大義老師について参禅、仏道境涯を開くにつれて仏教僧侶たることを  
熱願、それには先ず日本人になることだと南総督宛歸化嘆願書(1939.6.28提出)を  
出すに至ったものである。」<sup>107</sup>

さらにブライスの日本帰化願望の側面と当時の身辺事情を語る『北国毎日新聞』の  
記事(1941.4.13)がある。「何の惜しかる祖国—英国籍を捨てて日本の籍へ—日本人  
を夫人に持つブライズ四高教授」という見出し記事の一部を紹介してみよう。

「四高の教授レヂナルド・ホレス・ブライズ氏(四四)は、特に枯淡な日本の文藝  
である俳句までひねくる通ぶりであったが、これに共鳴した山口懸萩市大字  
山田生れの来島富子さん(二七)と朝鮮京城大学在任時代国境を越えた熱愛にむ  
すばれてつひに婚約までにいたった。それより前すでに切なる心は日本臣民  
としての帰化を願ひ出たものの朝鮮には戸籍法が施行されなかったため悶々  
の日々おくり昨年春同女を携へて金澤に轉任、昨年春から金澤市鷹匠町に住  
居を定めてゐるが今年四月をもって同棲満一年を經過し、また富子さんの實  
家でも結婚をゆるして同女を分家し女戸主として一人だちの戸籍を與へてく  
れたので、今度富子さんの家に入夫婚姻を行ひ英国々籍を離脱することにな  
り富子さんから今度内務大臣あて許可の申請書を出した。この法的處置はど  
うなるか解らぬ。ブライズ氏はその身高等学校教授にありながら正式に結婚  
してゐない内縁関係では生徒に對しても申譯ないといつてゐる。ともかく國  
と國との間に横たはる感情の垣を乗り越えて眞に日本を愛し日本人たらんと  
するこの異邦人のためにやがて恵まれる日が期待されてゐる。」<sup>108</sup>

この記事は、金沢転入時期や同棲満一年という不正確さがあるが、ブライスがこの時期真剣に日本帰化を考えていたことを示す資料である。またこの記事に依って朝鮮時代に南総督宛の歸化嘆願書は、朝鮮には戸籍法が施行されなかったために受理されなかったことを示唆している。

日本に生活の基盤を持ち、日本人の妻を持つブライスにとって、日本への帰化は自然な成り行きであったが、しかし何よりも日本へ帰化しようと考えたのは、朝鮮時代からの東洋古典、日本文学そして禅への研究研鑽に賭ける熱い思いがあったのと、「ロンドン時代」で既述したように、イギリスへ帰ったとしても、第一次世界大戦での良心的兵役拒否のために収監されたという過去の事実のためにイギリスでの自分の将来は暗いと考えたからではないか、と筆者は推測する。

#### (4) 帰化申請手続き消滅

ブライスは朝鮮時代から願望していた帰化をどのような理由で断念したのであろうか。その理由について、第二次世界大戦中、神戸の交戦国民間人抑留所で抑留中のブライスから俳句および禅の手ほどきを受け、その後本格的に禅に取り組んだアメリカ人ロバート・エトケン老師は、「先生は戦前、すでに日本への帰化申請の手続きをとっておられたが、戦争勃発後、この手続きは消滅し、そのままになった。日本がこの戦争に負けたら、あらためて申請の手続きをすると先生は言っておられた。結局、先生はイギリス国籍のまま亡くなられた。帰化申請手続きの消滅をそのままにされたことは、戦争勃発当時、日本人および日本人の意識の中に欠けていたものが、戦後は成長しているという先生の十分な理解を示しているように思われる」と『回想』<sup>109</sup>の中で説明している。ブライスが指摘する「日本および日本人の意識の中で戦前欠けていて、戦後、ますます大きく欠けていったもの」とは、何を指すのであろうか。何が欠けたのか。ブライスは英語で‘Dignity’と表現している。それはかつて日本人が持っていた「尊厳の喪失」であった。

ブライスをして日本への帰化をあきらめさせた原因には二つあると筆者は思うのだが、その第一は、日本人の{尊厳の衰弱}であった。ブライスは、自分が日本人の中に感じていた尊厳が、年々衰弱していくことに腹立たしく思ったのであろう。新木正之助によると、1950、1951年ごろ、ブライスは日本人と接触して、不愉快なことがいくつか重なったらしく、ある時、新木に「戦後の日本人は尊厳を失った」と言って慨嘆したそうだ。また学習院大学の同僚であった岡本通は、教室でたびたび冗談や諧謔で学生に、知的ショックをあたえたブライスを偲んで、「ブライスの言葉の裏には烈日の厳しさがあり、おもねる者、謙虚さをもたぬ者に対する強い嫌悪の情を抱いていて、短期大学の授業で普段からやや礼儀に欠けるところのあった一学生の、礼を失した行動に憤り短大の授業を受け持つことを断りたいと言い出した」と、ブライスの死を悼んで出された学習院大学の「英文学会報」<sup>110</sup>で紹介している。

尊厳の意味は、「(風采・態度などの)威厳、(人格などの)品位」ということを指



し、人間に自然と備わっている心の高さ、そしてその内面的品性が具現化されたものを、辞書的には尊厳と言う。

新木の言葉を借りれば、「‘Dignity’は『精神、人格などの尊厳』である。人間の殺傷、盗み、騙し<sup>だま</sup>などについて、法は、すでに起きてしまった行為にしかタッチしないが、それ以前に、その行為を起させないものは、各人のもつ内的規範しかない。人が普段にこの内的規範を保持しているならば、それが‘Dignity’となって現れる。戦後日本人の多くが、この内的規範を無視し、否定し、罵倒し、そして‘Dignity’の喪失となったのである」<sup>111</sup>となる。

神戸の抑留所で、人々を虫けら同然に扱う監視人を見て、ブライスは「ここにいる監視人のような人間によるアメリカ領土の占領を君は想像できるかね」<sup>112</sup>とエトケンに言ったという。そして、エトケンは「先生は東南アジアにおける占領軍としての日本人の責任の果し方がひどいものであることをそれとなく感じておられた。真の成熟が必要な国にとって、敗北を経験することは有益なことである、ということ先生は知っておられたのである。」と語っている。<sup>113</sup>

ブライスにとって、真の成熟こそ尊厳そのものであり、それは国に対しても人間に対しても意味を持っている。ブライスはすでにイギリスを捨てていた。彼は、第一次世界大戦時における良心的兵役拒否者に対する国家権力による弾圧を経験し、母国イギリスに対して、尊厳の喪失を経験していた。イギリスを出て東洋に向かおうとする彼の「内なる運命」を動かしたのは、他ならぬイギリスでの尊厳の喪失も一つの要因になったと思われる。

1956年(昭和31)の神戸新聞の学芸欄の記事でブライスは、「日本に望むもの」というタイトルで「日本に望むもの—というより、日本の人々に望むもの、といい直そう(国家というものは私にとって無情無心の怪物に見えるから)—」<sup>114</sup>と書いて国家を揶揄している。しかし移住先と決めた日本でも、彼は人々の心に尊厳の衰弱と喪失を見たのである。さらにブライスが日本への帰化をあきらめた二つめの理由は、敗戦国日本があまりに物質本位になってしまったことへの失望と、洪水のように押し寄せるアメリカ文化に対して無節操に飛びついていく日本人の姿に対する失意であった。

特にブライスは、日本人の尊厳を自身の尊厳の証に求めていたために、その失意は大変大きかったと言える。東洋の古典、そして日本の古典文学研究や禅仏教に心身ともに打ち込んでいるブライスにとって、敗戦後の日本の急速なアメリカナイズはショックであり、自国の文化・日本文化をいとも簡単に捨て去る日本人の変わり身の速さは、とうてい理解できなかつたのである。

同僚であった岡本通は、「ブライスの日本文化への強い愛着を全国英語弁論大会に出場する学生原稿の下読みに同席したブライスが、アメリカ文化を日本文化以上に誉め讃えた文章に出くわした時、顔色を変えて怒った」<sup>115</sup>と述べているが、これは日本人の変わり身の速さに対するブライスの日頃の怒りと失意を象徴していると言えよう。

当時の社会情勢を、『近代日本総合年表』(第三版、岩波書店1991)から拾ってみると、そのには怒涛のごとく押し寄せるアメリカ文化に吸い込まれていく1945年の日本の姿

がある。

1945年8月15日、正午戦争終結の詔書を放送。終戦。

8月28日、GHQを横浜に設置。

9月15日、東京日比谷第一生命相互ビルがGHQ本部となる。

同日、『日米会話手帖』（誠文堂新光社）より刊行。360万部売れる。

9月19日、実用英語会話放送開始。

1946年2月 1日、平川唯一の「英語会話」放送開始。

「カム・カム・エブリボディ」が評判になる。

終戦の一ヵ月後には、360万部という途方もない部数の日米英会話の出版や、実用英会話の放送開始という現象は、たとえ戦争に負けたとしても、英語文化吸収への変わり身の速さを物語り、ブライスでなくとも驚愕するばかりである。また1946年7月5日の朝日新聞には、東京進駐軍勤労部(アメリカン・クラブ内)の英文翻訳および英文タイピスト急募(いづれも英語会話堪能)の広告や、米会話講習会(中野米会話学院)の受講生募集の広告が掲載され、当時の社会情勢が急速にアメリカナイズされていった様子を物語る。すさまじい勢いでアメリカ文化に呑み込まれていく日本人を見たブライスは、「日本人はまるでカメレオンだ」と感じる。ブライスは在日外国人の日本人観として、朝日新聞に次のような意見を述べている。

「・・・ホーム・ユニヴァーシティ・ライブラリのイングラム・ブライアンが書いた『日本の文学』では彼は俳諧をハッカイと呼びHAKKAIの人気は極度に小さくした芸術に対する愛の現れである。寸鉄詩は人々が自己満足している時代の文学である。それは陳腐な考えを見いだされないように小さな型に入れられ小さいけれど重みがあり、完成された、箱に入った安物である。このようなことが起こったについては日本人に責任がある。日本人は俳句をだれにでもできるものだと思い、川柳を俳句の形で書かれたコッケイな言葉だと思っている。日本人自身が俳句を低く考えるならば外国人がどうして日本のこのすぐれた表現力を持つ短詩型文学を高く評価するだろうか・・・日本人がまず昔の日本文化を味わい、これは自分の本心だと悟ってそれから外国文化を取り入れ、消化して頂きたいと思う。そうでないと日本はまるで環境によってくるくると色を変えるカメレオンのようになってしまう。」<sup>116</sup>

ブライスの日本人に対する彼独特のブライス風ユーモアと皮肉の混じった提言は、彼の日本人に対する失望の表れである以上に、「日本人の尊厳はどこへ行ったのだ」というブライスの叫びであり、日本人に対して発した檄でもあった。

彼は俳句、禅を媒介にして見た日本文化の本質を尊厳という座標軸に置いた。しかし彼の日本文化に寄せる深さと愛着を理解しない多くの日本人には、ブライスの檄は

心に届かぬメッセージであった。日米英会話の読本が飛ぶように売れ、アメリカ文化に人々の心が吸い寄せられている時期に、イギリス人のブライスが、日本文化の価値をどんなに高く評価しても、ブライスの言葉に耳を傾ける日本人は少なかったであろう。むしろ彼の意見は、捨て去りたい日本の過去に目を向けるユニークなイギリス人として、大多数の日本人から無視されることが多かったのである。

#### (5) 1940年代における日本人識者の民族文化観

アメリカ文化受容一辺倒の社会情勢においても、当時の日本の論壇にはブライスの言う尊厳を日本固有の哲学として守り続けなくてはならないとする人々がいた。

例えば当時の知識人にかなりの読者を得ていた月刊誌『日本評論』(2月号、第24巻第2号、1949)は、蔵原惟人、石母田正、勝本清一郎、橋浦泰雄の参加による「わが民族文化の特質」という16頁にわたる特集座談会を掲載しているが、そこでは、日本人の民族文化を問題にすると、日本人の中に過去の軍国主義的イメージが必ず沸き起こる状況があることを指摘している。

「戦争前に、軍国主義的なファシスト的な陣営から盛んに民族主義とか、民族文化ということが唱えられていた。それが終戦後すっかり情勢が変わってきて、あらためて民族文化が取り上げられているのに対して、なんといいですか、「羹にこりて膾を吹く」というような、「民族」と名のつくものはてんから厭だというような気分が社会の一部には、まだ残っているように感じられます。それからもう一つは、敗戦という大きな事実があるために、日本の民族固有のものに対して、絶望的な気持が相当強いのではないかと。もう民族文化なんか値打がない。そんなことはどうでもいいというような捨てばちな気持もあって、現在提起されている民族文化を、正しく評価するというのを妨げていると思われるわけです。」<sup>117</sup>

さらに民衆文化の国際性について、座談会参加者の橋浦泰雄は次のように述べている。

「日本の民衆のもっている短歌にしても俳句にしても日本のものにも特徴があるということ、それが、国際的にみても民衆の藝術としてそれを生かしていく要素というものが日本の文化の中に非常に豊富にあるということ。そのことについて、われわれは非常に樂觀しているのですがね。非常に有為な文化が、日本からも国際的に、西洋に寄與していこう。しかも民衆を基礎においた点にそれがあると思うのです。」<sup>118</sup>

このように、ブライスが日本人に対して日本文化の認識の必要性を訴えたのと同じ意見が、1949年(昭和24)に月刊誌『日本評論』で一部日本人識者からも提出されていた

のであるが、ブライスの意見同様、大きな潮流にはならなかったのである。

約40年後の1985年6月、文部省は臨時教育審議会・第1次答申で日本文化の発信を国際化教育の一環として位置付けた。<sup>119</sup> 40年経てもなお、日本文化を文部省という権威が位置付けること、また位置づけねばならないような日本文化の有り様を、ブライスが生きていたらどう反応するのか興味深いことである。

## (6) 交戦国民間人抑留所での暮らし

ここで時代を太平洋戦争勃発時のブライス一家の姿に戻してみる。第四高等学校の英語教師として金沢にいたブライスは、1941年12月8日、開戦と同時に石川県警察に保護され、広坂（現在の中警察署）の建物内に抑留される。3月、係官に付き添われて神戸に赴き、「交戦国民間人抑留所」となった神戸市北野町のイースタン・ロジ・ホテルに収容された。富子夫人は1ヵ月前に生まれたばかりの長女・春海とともに神戸に移り、元町に家を借りた。抑留所の週一回の面会には、ブライスの好物の干瓢の海苔巻きずしを作り、必要な書物や文房具をせっせと運んだ。何年続るか判らぬ戦争である。この状況をよく堪え忍び、ブライスに著述を続けさせた富子夫人の内助の功は測りしれぬほど大きい。ブライスはこの抑留所で彼の代表的な著書である『俳句』4巻の原稿を書き上げている。さらにロバート・エトケンによると、『川柳』、『聖書の句の仏教的解釈』もこの時期の仕事であったようだ。

戦争中の1942年12月、『禅と英文学』が北星堂書店より刊行される。ブライスが神戸の抑留所にまだ収監中であったあの時代に、交戦国の人間の著書を出版した北星堂書店の度量の深さに驚くとともに、そのような出版社が日本に存在していることをとても嬉しく思うのは、筆者だけではないと思う。

後にブライスを師と仰ぐようになるロバート・エトケンは、グアム島から連行されて、日本での抑留生活を経験していた。神戸の収容所で、エトケンは出版されたばかりの『禅と英文学』に出会い、むさぼるように読んだという。

「内容をほとんど暗記してしまったので、どこに何が書いてあるかはすぐにはわかった。これは私にとって最も重要な書物となった。……いまこの書物を見てみると、ふだん見なれた英文の本よりも活字がちよっと変っていて、いくらか小さめであり、禅についての言及もさほど深いとは思われない。しかし、ともかくこの書物によって現在、私が歩んでいる人生の方向が決定されたのであり、文化、つまり文学、美術、そして音楽に対する私の見方は、元をただせばこの一冊の書物にまでさかのぼる。」<sup>120</sup>

老師として修業を積んだエトケンが、今日読み返してみると禅の言及もさほど深くないと思われる『禅と英文学』に、当時は深く心酔する。ブライスが鈴木大拙の『禅仏教に関する諸論』に感銘をうけたように、エトケンはブライスの書物に感動したのである。1944年5月、神戸に数ヶ所あった収容所は、六甲山の布引滝に近い「再度公園」の中

にある、かつては感化院であった建物に統合された。ここでエトケン は初めて著者のブライスに出会い、二人は心を許しあう子弟関係を結ぶ。『回想』の中で、エトケン はブライスと他の収容者との交流を次のように述べている。

「彼らは皆、日本問題の専門家で、中には日本人の血を引いている人たちもいた。

一般的に言って、ブライス先生は抑留者仲間では好感をもたれていた。先生を日本びいきと見ているグアム島から来たアメリカ人たちも、その学識と勤勉には敬意を示し、先生から率直な話をきく過程において、重要なことが学べるのだと理解していた。彼らは先生をミスターBと呼んでいたが、これは先生がちょっと気に入っている綽名だった。これは先生が求めておられた、つかず離れずのバランスのとれた人間関係を表わしている呼び名のように思われた。」<sup>121</sup>

このように、抑留者仲間はブライスの東洋文化、日本文化そして俳句、禅に関する巨人的な博識と学識さらに研究への勤勉さに対して敬意を示した。しかしエトケン が次に述べるように、ブライスが強い関心を示す日本の古典文学や禅といったものは、もはや古色蒼然とした過去の遺物にすぎないと思う抑留者も多かった。

「日本人の血をいくらか引く抑留者にとって、先生の日本に対する姿勢は、彼らのそれにくらべてはつきりしないものに思われた。彼らからみると、先生は日本に関しては新米のようなものであったろう。彼らは日本の政治、歴史、経済の研究に余念がなかったが、先生は文学と宗教に没頭していた。先生は彼らの関心事から御自分の関心のあるところへ話の方向を変えてしまわれた。御自身の関心事の方がずっと重要なものだと考えておられるからだった。相手方は、先生の関心事はまったく旧式で、見当違いだと感じているようであった。だから、大勢仲間の集まる、煙草の充満した先生の部屋では、白熱した論議が繰り返された。」<sup>122</sup>

残念なことに、アメリカ人抑留者は、エトケンを除いてブライスに興味を持つものはなかった。エトケン は「アメリカ人抑留者たちが、仲間のミスターBについてもっと個人的に知っていたら、彼の日本に対する姿勢が盲目的な支持といったものではなく、現実に即したものであることが理解できたであろうと思われる」<sup>123</sup>と述べている。このことから判断できるように、ブライスの日本理解への支持者に関しては、エトケン以上に評価する抑留者は他にいなかった。エトケンとブライスの交流はブライスの没年まで続いた。ハワイに居住したエトケン は、来日の度にブライスを訪問したと、ブライスの次女ナナは語る。彼はイギリス俳句協会主催の『俳句のこころ』出版記念会（1994年4月開催）に対して「ブライス博士の影響なくしては、私の道はなかった。私が最

高の刺激を受けた人である。」とハワイからメッセージを送ってきた。

1945年8月15日、終戦を迎え、ただちに抑留者は解放された。ブライスにとっては約4年間の抑留所生活であり、1916年に、母国イギリスで第一次世界大戦の兵役忌避による監獄への収監に続く二度目の禁固生活であった。

この二つの禁固生活は、ブライスの「第一の内なる運命」の必然の流れと考えられる。ブライスは非戦の信念から入獄し、その過程で国家への不信をつのらせていったのである。そして2度目の抑留所体験を経て、国家に信頼を置かず、国家を無情無心の怪物と見て、日本の政治や経済、歴史への関心は余り起こさず、日本の古典文学、俳句・川柳の研究に没頭していく反面、終戦直後のGHQと宮内省の間の黒衣として活動する。

## (7) 鈴木大拙との初対面

ブライスは金沢に来る前に、つまり時期的には妻富子の故郷である萩から上京した1940年8月から金沢第四高等学校に就職する11月21日までの期間になるが、鎌倉で鈴木大拙(以下大拙)に会ったらしいと新木は語る。<sup>124</sup>白米満行は、「鎌倉か大谷大学か、どこかで面識を得、指導を仰いでいるにちがいないと思われる」<sup>125</sup>と示唆している。

また、平川は『平和・戦い』の中で、「ブライスさんが一九三九年ごろ、もう直接鈴木大拙と面識があったかどうかよくわからない」<sup>126</sup>と述べているが、帰化願いが出されたのは1941年4月である。

白米満行が語るように、大拙とブライスとの間柄については、推測ではあるが、大拙の著書に感銘を受けたブライスは、すでに朝鮮時代にに熱烈な書状を大拙に送って弟子入りを懇願したものと考えられる。

新木も白米も、ブライスが初めて大拙と会見したのは、鎌倉か京都ではないかと想定しているが、私の手元にブライスの次女であるナナさんから頂戴した「鈴木大拙と禅を讃えて」というブライスの論文がある。これは秘書によってタイプ打ちされた‘In Praise of Suzuki Daisetsu and Zen by R.H.Blyth’ という題名の三つパーツからなる論文である。この論文の第一パーツは、“The first time I met Suzuki Daisetsu was in Kanazawa, his native place, just before the beginning of the Pacific War.”と始まり、今まで確定出来なかった大拙とブライスの初めての会見の場所と時期が記録されている。それによると、初見は太平洋戦争の始まる少し前、鎌倉でも京都でもなく、金沢で行なわれていることが判った。

ちなみに坂東性純博士が*The Eastern Buddhist*(Vol.1, No.1, 1965)『イースタン・ブディスト』(1巻1号 1965)のブライスの追悼号で、鈴木大拙選集、解説pp.4-5(追巻第三巻春秋社1957)からの出典として、この第二の部分を英文で紹介している。さらに『回想』でもそれが『鈴木大拙博士と禅を讃えて』と翻訳されて紹介されている。筆者の手元にある第二のパーツの英文と坂東性純博士の紹介している『イースタン・ブディスト』(1巻1号 1965)の英文は全く同じものである。第一のパーツの英文は未発表のままブライス家にあったと思われる。

また『鈴木大拙博士と禅を讀んで』の文頭には、「私と大拙先生との間の第二の逸話は、戦後大拙先生が鎌倉円覚寺に住んでおられた時のことである。私はしばしば鎌倉に行って先生にお会いしていた。」との記述があり、第二の逸話から明らかに第一のパーツがあることを示唆している。未発表のままブライス家にあったと思われる第一のパーツの英文は、ブライスが大拙に初会見をした時の興奮をありありと伝えている。ここに未発表の第一のパーツを記載する。

“The first time I met Suzuki Daisetsu was in Kanazawa, his native place, just before the beginning of the Pacific War. I had read his books and done Zazen. I was in the middle of Zen in English Literature, and my mind was full of the question, “What is Zen?” When Dr. Suzuki asked me to go and see him at inn where he was staying, I was of course most excited. I pictured him as a very fierce looking person, something like Daito Kokushi, who would rap me over the knuckles and ask me that most unanswerable of questions, “what is Zen?” Anyway, I prepared my answer and went to the inn. I found him to be a very gentle, sympathetic person, more interested in me and my life than in philosophizing .....Dr. Suzuki asked me how I came to be interested in Zen. I answered eagerly that it was through his Essays on Zen Buddhism. He bowed his head, and I cannot how much that action impressed me. It was not modesty, hardly gratitude, rather a kind of expression of the inevitable. At last I said to him, “Dr. Suzuki, I thought you would ask me what Zen was, I will tell you anyway. The answer is, “There is no such thing as Zen” “yes,” he said, smiling, “That is true; There is no such thing as Zen.” <sup>127</sup>

この初見でブライスは、大拙のことを大灯国師(妙超のこと。鎌倉後期の臨済宗の僧。字は宗峰。播磨の人。南浦紹明らに師事し、のち大徳寺開山となって朝廷の帰依を受ける。諡号は大灯国師など。1282~1337)のように鋭い眼差しで不可能な質問を浴びせかけ、自分を厳しくしかりつけるような禅僧だと心に描いていたが、実際に会った大拙は穏やかで思いやりのある人物であったと告白している。会見で、大拙は哲学的な質問よりも、ブライスのいままでの人生の越し方に興味を持ち、ブライスが1927年刊行の『禅仏教に関する諸論』に感銘を受けて以来禅に興味を持った経緯を語ったとき、大拙は深く頭を下げお辞儀をした。ブライスにとって大拙のその行為は衝撃的であった。ブライスは自分の師と決めた人に出会えた感動で、全身がワナワナと震えたという。

ここでブライスは、大拙に、今まで考え続けていた「禅とは何か」の自問の結果を答える決心をする。そして彼は、“There is no such thing as Zen” 「禅に当てはまるような事象はない」と答え、大拙も「その通り」と受けるのである。この時、鈴木大拙に対するブライスの畏敬が氷解し、ブライスと大拙のシンパシーが大きく働いたことであ

ろう。ここにブライスと大拙の子弟関係ともいえる強い絆が結ばれたと筆者は確信する。

ブライスと大拙の初会見は、いつ金沢のどこでなされたのであろうか。ブライスは1940年11月に、第四高等学校の英語教師に採用されていて、彼の『禅と英文学』は翌年1941年5月に脱稿している。そして太平洋戦争が同年の12月8日に勃発している。このことから、筆者はブライスと大拙の初見は、ブライスが就職した1940年11月から、戦争がはじまり交戦国民間人として広坂署の拘束された1941年12月8日までの間に行われたと推測していた。さらに詳細な事実が、北国毎日新聞の記事<sup>128</sup>で判明した。その記事によると、大拙は1941年10月12日から19日まで、金沢の天徳院に滞在している。15日には第四高等学校の学生のために「禅と日本文化」の講演を行っている。大拙の投宿した天徳院は、ブライスの居住する鷹匠町と同じ地区にあった。ブライスはこの10月12日から19日の一週間の間に天徳院の大拙を訪ねたのではないだろうか。この会見は、ブライスが広坂署に連行される約二カ月前の事であった。

## (8) 学習院へ就職

1945年3月の神戸大空襲によって、金沢より元町に移住していた富子夫人の寓居はブライスの家財蔵書とともに灰燼に帰した。このためブライスは抑留解放後、神戸の抑留所で寄居を共にしたイギリス人・ルイス・ブッシュ方に家族と共に暫時寄寓した。ちなみにブッシュは戦後、鎌倉に住居を移したが、ブライスとは親しくはならなかった。ブライスがブッシュの事を口にするのはほとんどなかったと次女のナナは語る。

ブライスは終戦後すぐに鎌倉の鈴木大拙に手紙を書き、家族ともども無事であるところを知らせた。金沢の第四高等学校には外人教師のポストはなくなっていたために、就職の世話を願い出た。大拙からの10月2日付の返事（富子夫人はこの手紙を保存していた）は、ブライスの無事を喜ぶとともに、京都の大谷大学であれば、就職の世話が出来るとのことを知らせてきた。<sup>129</sup>

ブライスは10月中旬に上京し、鎌倉に鈴木大拙を訪ね、さらに斎藤勇を訪問し、ついでGHQのCIE(民間情報教育局)所属のハロルド・G・ヘンダーソン中佐を訪ねた。ヘンダーソンとブライスは、お互いに俳句の著書の上でよく知った仲であるが、会うのはこの時が初めてであった。彼らはこれを契機にさらに交わりを深め、後に二人は、天皇の人間宣言に関して重要な役割を果たすことになる。

平川が『平和・戦い』の中で、「抑留生活から釈放された米英人の大半はアメリカ占領軍関係の職に就いた。日本語を解するものはとくに優遇された。ブライスさんも一時はGHQ(連合軍総司令部)に勤務しようと思ったらしい。」<sup>130</sup>と述べているように、GHQは彼らの将来をとりあえず保障してくれる新しい職場であった。

ブライスも学習院に就職が決定する直前に、仕事を探しにGHQの民間情報局を訪ねている。その時の状況について、当時GHQ民間情報局宗教課調査スタッフであったウィリアム・P・ウッドワード(William P. Woodard)が彼の著書*The Allied Occupation*



of Japan 1945-1952 and Japanese Religions『天皇と神道・GHQの宗教政策』の中で次のように記述している。

「一九四五年一月初旬、英文学教授で後に禅と俳句にかんする著作で日本で有名になったR・H・ブライス博士が、仕事を探しに民間情報教育局を訪れた。ブライス博士は米国海軍予備少佐ロバート・キング・ホールとしばらくのあいだ話をした。少佐は博士を米国陸軍中佐ハロルド・G・ヘンダーソンに紹介し、中佐は、ブライスが同じく日本文学に興味をもつ同好の士であることを知った。最後に、ブライスはダイク准将に紹介され、准将が職務の提示をしたところ、博士は住む場所が見つかることを条件としてこれに関心を示した。

しかし一週間ないし一〇日ほどのちに再訪したブライスは、学習院の教授になり住宅の提供も受けることになったので、民間情報教育局で働くことはできなくなったといってきた。」<sup>131</sup>

ブライスがGHQを取らず学習院に就職することを決心したのは、住宅などの条件の他に、彼自身日本文化の近くに自分の身を置きたかったのではないだろうか。京城帝国大学に勤務以来、ブライスは東洋文化、特に日本の禅仏教に帰依し、俳句と禅との関連に強い興味を寄せていた。そのようなブライスの志向が、日本の文化の神髄、つまり天皇を教育する場所にいることを選んだといえよう。1945年12月1日付けでブライスは学習院の教員になった。

学習院に保存されているブライスの履歴書によれば、採用時の職名は教師・嘱託である。後に1947年4月、学習院が宮内省の管轄を離れ、学校法人・私立大学学習院になって、ブライスは講師に昇格し、1951年に、学習院大学に英文科が創設される際、教授になった。ブライスの就職に際しては、日本の英文学界をリードする斎藤勇と学習院長の山梨勝之進、ブライスの尊崇する師鈴木大拙らの計らいがあったことは間違いない。斎藤勇と山梨勝之進はかねてから親しい間柄であるし、山梨と鈴木大拙もそれ以上に親しかった。

## (9) 宮内省とGHQのパイプ役

皇太子の教育を預かる学習院長として、山梨勝之進(以下山梨)は英語教師の人選を慎重に進めた。1946年春には、皇太子が学習院中等科へ進学する予定となっていたが、しかしその時期は、学習院がGHQの意向で存続出来るか否かの瀬戸際に立っていたのである。

山梨はブライスに会い、ブライスを信頼出来る人間と見た。ブライスも山梨という人間に、ブライス自身が理想とする人間像を見たのである。その信頼がブライスに、山梨の下で宮内省とGHQの橋渡し役を務めさせた。国家嫌い、政治嫌いのブライスが、およそ彼にとって似つかわしくない仕事をするようになったのは、ブライスが山

梨に強く魅せられたからにほかならない。

ウッダードは、ブライスが橋渡し役をしたことについて、「ブライスは、学習院で教えるほかに皇太子に英語で個人教授をすること、および皇室と民間情報教育局との非公式な連絡役をすることを要請されているといった。両者の非公式な連絡という機能は、皇室と民間情報教育局の関係を円滑にし、また、できれば、学習院と皇室がともに防ぎたいと思っていた学習院の政府による接收を防ぐためという意図から出たものであった」<sup>132</sup>と述べている。

この点に関連して、ヘンダーソンがハケットに宛てた1964年12月25日付けのブライスの死を報せる手紙には、「自分とブライスは宮内省とマッカーサーとの密使であった」とブライスの役割を明らかにしている。

こうして、山梨-ブライス、そしてブライス-ヘンダーソンのコンビは、天皇の「人間宣言」、エリザベス G. ヴァイニング(Elizabeth Grey Vining)の招聘と選考、宮内省から離れる学習院の存続、天皇の戦後巡幸などをめぐって精力的に活動したのである。新木は『回想』の中で、ブライスの人脈を紹介しているが、ブライスはヘンダーソンの紹介でマッカーサー総司令官の高級副官フェラーズ准将と副官バンカー大佐とも親しくなっていく。そして小泉八雲研究者であったフェラーズ、そしてハーバード大学卒業後にオクスフォード大学に学んだイギリス勲員のバンカーらの知己も得たが、それらは宮内省、および日本政府の要人につながるルートでもあった。新木は『回想』の中で、ブライスからマッカーサーに至る人脈を次のように説明している。

「マッカーサー元帥は、フェラーズ准将、バンカー大佐からブライスの人物、経歴を聞き、彼に会い、その率直誠実な性格を認めた。マッカーサー元帥は、しばしばブライスに会っている。

ブライスの学習院教師就任後間もなく、山梨院長は彼を外務大臣吉田茂に紹介した。フェラーズ准将やバンカー大佐と親しくなっていたブライスが、日本政府側の連絡役を勤めてくれることは、吉田にとって何よりも有り難いことであった。

吉田茂は、バンカー大佐を通じて、幾度も、マッカーサー元帥に直接面談の約束をとりつけることに成功した。」<sup>133</sup>

ブライスは日本占領前期に黒子に徹した自分の仕事について、山梨との約束を守り、一切語ることはなかった。吉田茂はブライスの労に対して、ブライスの俳句研究の成果である『俳句』4巻(1巻1949、2巻1950、3巻4巻1952)の北星堂書店からの出版費用を援助した。また終戦後、すぐに鈴木大拙と共同編集で出版した『カルチャル・イースト』(1巻1号 1946、1巻2号 1947、松ヶ岡文庫)の出版にも手を貸して、ブライスの労に報いている。

しかしヘンダーソンの手紙には、天皇の「人間宣言」において天皇の神性放棄に責任のある職分にいたブライスが、それに対しても、他の諸々の関与した事柄に対しても、

正当な評価を受けてない、と手紙に記している。<sup>134</sup> 宮内省は、政府は、そして天皇は、ブライスの働きに対して目に見える形でどう報いたのかと、ヘンダーソンは問いかけているようである。

#### (10) ブライスの理想像・山梨勝之進との出会い

平川は『平和・戦い』の中で、ブライスが山梨勝之進に寄せる傾倒ぶりを文部大臣であった前田多門の言葉を引いて次のように語っている。

「それにつけて思い出すのはブライス氏の山梨氏に対する傾倒ぶりである。詔書問題のずっとあと、・・・・・・田島道治氏の許に夕食に招かれ、席上初めてブライス氏にお目にかかった。・・・・・・のときのブライスさんの話に、自分は日本でいちばん尊敬する人間が二人いる。その一人は山梨さんで、いま一人は鈴木大拙さんである。もし日本が、山梨さんを総理大臣にして、鈴木大拙さんが大僧正になるような国になったら、日本はけだし理想的な国になるであろうと、まじめな顔をして言われたことを記憶する。」<sup>135</sup>

この言葉は、ブライス風ユーモアから出たのではなく、ブライスの心底から出た言葉であることに注目したい。ブライスは、山梨の「人となり」に自分の理想の人間像を重ねあわせたのである。それゆえ、ブライスは山梨の下で仕事することに意義を持ち、誠心誠意つくしたのである。そして山梨もまたブライスを信頼していた。1946年から1950年まで皇太子の英語教師を務めたヴァイニングは、山梨がブライスの人柄と学問を尊敬し賞賛する様を、日米でベストセラーになった彼女の著書 *WINDOWS for the CROWN PRINCE* 『皇太子の窓』(以下『皇太子の窓』) で述べている。<sup>136</sup>

山梨は学習院長退官後も度々学習院を訪れ、新木に「ブライスのことをお頼みします。家族の面倒もみてやって下さい」と頼んだという。山梨はブライスに住宅を買うことを勧め、その世話もした。山梨の配慮によってブライスは最も都合のよい条件で、大磯に住宅を手に入れることが出来たのである。山梨は年金のつかない外国人教師の老後の生活まで気にかけて心配りを示したのである。

ブライスを魅了させる何かを山梨は持っていた。それらは具体的には何を指すのであろうか。山梨勝之進には、次のようなイメージが浮かび出てくる。それらをブライスが有している同質性のものと、ブライスが有していないものとに分類してみると、ブライスと山梨が有する同質性のものには、古今東西の文学に通じている教養、語学の達人、宗教への理解(キリスト教と禅)、東西の文化に精通していること、武士道精神への理解、教育者、イギリス風常識、イギリスに居住経験、人間の心を見透かす識見がある。一方ブライスにはなく山梨の有するものは、軍人、政治家、「イギリスの王室」への理解、現実主義者といったものである。

ここでブライスの運命の指針ともなった「第一の内なる運命」を振り返ってみると、それらはアニミズム、菜食主義、俳句、禅そして川柳であり、「第二の内なる運命」は、

政治への関わりである。山梨のイメージの分類から、ブライスの文学、宗教、政治への「内なる運命」は山梨の全体像のイメージのカテゴリーと重なる。ブライスの政治への接近は、ブライスの祖父から系譜された「第二の内なる運命」としてブライスに内在していたのである。

山梨との出会いは、ブライスの第一と第二の「内なる運命」の座標が交わる点、すなわち「尊厳」という交点で起きたのであった。ブライスにとり、山梨こそ求める「尊厳」の権化であった。かくしてブライスの生命の炎は、山梨との出会いで燃え上がったのである。

さらにブライスにとり、天皇制維持は日本文化の崩壊を防ぐことをも意味した。ブライスは天皇に日本文化の神髄を観るとともに、それを護ろうとする山梨が日本文化そのものであるように映ったのである。ブライスは、敗戦後、日本の軍国主義に代わって、占領軍が権力によって日本文化を壊そうとするのを許せなかったのである。

さて、山梨の経歴を観てみると、ここにもブライスの運命を燃え上がらせずにはいられなかった理想像が浮かび出る。

山梨勝之進は1877年、伊達藩士山梨文之進の長男として仙台市中島丁の武家屋敷に生まれ、13才の時、一時期仙台にあった東華学校で学んでいる。「東華学校は、後に日銀総裁、貴族院議員・東京府知事となった官僚富田鉄之助が、民間人同志社大学の創立者新島襄と協力してアメリカン・ボールド（アメリカ伝道社）に資金を仰ぎ、明治十九年（一八八六）年に設立したものである。官民一体となって設立した普通課程の中学校であったが、教員の陣容は有名なJ・H・デフォレストを始めとする四人の宣教師に、他に校長新島襄を始めとして日本人教師七名中五名までがキリスト教信者であった。……校舎正面に‘SEEK TRUTH DO GOOD’真理を探求し徳を修めよ」の額を掲げ、「敬天愛人、独立自助」を校是とした。キリスト教主義の英学校として数多くの生徒を集めた。」<sup>137</sup> 山梨はこの東華中学校でまるでイギリスのパブリックスクールの生徒のような生活を体験した。その後、海軍兵学校を卒業し、後に海軍大将となる。1930年のロンドン軍縮会議に海軍次官として出席し、条約の締結、批准に努力した良識派として知られるが、条約派一掃のあおりで予備役に編入された。その後、山梨は船橋の郊外で薔薇を作りながら、6年間も田園生活を送ったが、1939年、松平恒雄宮相と米内光政海相の推薦で学習院長として招かれ、教育者として官職に戻るようになった。英文科の教授の中でも並ぶ者がいない程の英語の使い手であり、古今東西の文学に通じていた。敗戦後、ブライスとともに、天皇と天皇制を守る大役を黒衣として果たし、存続が危ぶまれた学習院を私立学校として存続させた。しかし、公職追放で院長退任後は、旧仙台藩出身学生の寮として再建された仙台育英会五城寮の舎監として夫人と住み込んだ。

第一回寮生（1951年）であった袖井林二郎は、山梨勝之進が、あの混乱の時代に彼の理想の教育をそこに貫こうとした姿を次のように述べる。「それは戦前にあった旧五城寮の三則にいう「求道の道場」であり、「仙台魂を錬磨」し「尽忠報国の士」となることに始まる。戦前と戦後は、山梨舎監の中でみごとに連続していた。更に、「相互親和

と自治自由」をキリスト教団施設から、「規律と清潔、真剣味」は陸海軍学校を模範とし、「団体精神、礼儀と気品」はオクスフォード、ケンブリッジの学寮に学び、「静粛と捨身の忍苦」は雲水禅堂の生活に従う。これが五城寮のあるべき姿だというのである。」<sup>138</sup> これは山梨勝之進が求めた教育の理想の姿であり、西洋の伝統の紳士道とキリスト教、儒教と禅精神が教育のなかに組み込まれた、山梨ならではの精神世界であった。

伊達藩士の末裔として生まれた山梨の精神世界の礎は、戦後彼が海上自衛隊幹部学校において行なった講話からもうかがい知ることが出来る。ちなみに、毎年の講話は整理収録されて、1968年に『山梨大将講話集』が作成され、それを元に1981年に『歴史と名将一戦史に見るリーダーシップの条件』という本が纏められている。その第11話に所収の{修養の道}より引用する。

「私は、もともと仙台のどじょうとなまずの間で育ったので、根っから偉いのではない。小さいときは、四書五経の素読で育って、漢籍で鍛えられたのであるが、十三歳のときから、当時のキリスト教の学校にはいり、アメリカ人に育てられ、英語を習った。

それで信者にはならなかったが、キリスト教の同情者であり、支持者である。従って、理論は別として、キリスト教を悪く言うということは、わたしにはできないほど、キリスト教にはお世話になっている。その宗派は霊南坂教会の組合教会であって、集会(congregation)というておった。

兵学校にはいった年から、京都の妙心寺の本山に縁故があって、むろん海軍の生活で座禅するなどということはできないが、禅学の話は、そういう関係から大分深く聞いて、敬意を表しているのであって、自分の一生の指導精神になったのは、やはり妙心寺の本山の虎関(小林宗補)という禅師あたりの流れを引いているのである。」<sup>139</sup>

山梨は、幼少時を仙台の山野の近くで育ち、漢籍、キリスト教、英語を身近にして成長したが、禅精神を精神世界の本筋におくことにおいて、ブライスの精神世界との重なりが見られる。かつてブライスが真面目な顔で、「もし日本が、山梨さんを総理大臣にして鈴木大拙さんが大僧正になるような国になったら、日本はけだし理想的な国になるであろう」と言ったように、ブライスにとって山梨こそブライスの理想の人間像であり、かつブライスの理想とする「尊厳」の具現者であった。それがまさにブライスを魅了する「人となり」であったといえよう。

ところで、後にブライスの推薦によって明仁皇太子(今上天皇)の英語教師となったヴァイニングは、山梨について、どのような印象を抱いていたのであろうか。彼女はその著書『皇太子の窓』の中で、鋭い観察眼と繊細さで、山梨の風貌を次のように捉えている。

「山梨氏は、小柄な、姿勢のよい老人で、古い象牙の彫刻などに時折見かける、あの圓熟して、しつかりした、しかも温情のあふれる顔をしている。氏は、海の沖合いに白帆でも探そうとするときのように、遠くその鋭い眼を放つ癖をもっているのであるが、いきなりその眼を相手の身邊に轉ずる。すると相手は、このすぐれた人間通に、自分という人間をすでに見抜かれてしまったことを直感するのであった。

四十七年前に英国に學んだ氏は、英國人と英國の風景と英國の詩に對して、生涯渝わることのない愛情を抱いていた。氏が書物から引用する言葉の豊かさ適切さに、私はいつも驚かされたものだつた。」<sup>140</sup>

皇太子の英語教師として来日したヴァイニングは、アメリカですでに数冊の著書のある作家である。彼女の心と眼に映った山梨の姿は、鋭い先見の明を持った武人であり、文人であった。『皇太子の窓』には、来日直後で心細い心理状態であったところへ、誰かが陰から自分に手を差し伸べていることを感じ、それが山梨であることを暗示する件<sup>141</sup>があるが、このような配慮こそ山梨の皇室への関与の姿であった。

#### (11) 天皇制維持のための黒衣

山梨勝之進はブライスと連携して天皇制保持のため陰の黒衣に徹したことでよく知られている。『天皇家の密使たち[秘録]占領と皇室』の文春文庫版(1989)の解説を担当した袖井林二郎は、敗戦前後のあの時代に、天皇と皇室を守るために密かに動いた密使たちの群像と、密使というより歌舞伎の黒衣のような役割を演じきって、その後の象徴天皇制の足がかりを作った山梨勝之進への興味を次のように語る。

「タイトルにいう天皇家の密使たち」とは、あの危機の中で天皇と皇室を守るためにひそかに動いた人々のことだが、それは何も宮中関係者に止まらない。占領する側の総司令部(GHQ)の中にさえ、密使はいたといえる。マッカーサーの軍事秘書官で知日派のフェラーズがそうだし、「人間宣言」のもとになる文章を起草したヘンダーソン教育課長も、その役割りを知らずして果たしている。東京裁判の首席検察官として天皇を証人に呼ぶことを食い止めたキーンマンもそうである。

もちろん、日本占領を成功させるために天皇は不可欠で、その力は百万の軍隊に働かすとマッカーサーは判断し、アメリカも戦争が終わる前から天皇制の効用を認めていたという大前提があったからこそ、天皇も皇室もその存続を許されたことは確かだ。だが歴史は大前提だけでは作られるものではない。一時は天皇自身が退位を考えるほど危機意識を持ったのである。占領するものとされるものとの間の意思の通いあいはむずかしい。その間に介在した密使たちの一つ一つの動きが結びついてはじめて、天皇は退位することもなく、皇室は今日ある姿で生きのびることができたことがよくわか

る。・・・・・・・・

私の好みからいうと、「人間宣言」発表までの全過程にわたって、密使というよりはまるで歌舞伎の黒子のような役割を果たした、学習院院長山梨勝之進の動きがとくに印象深い。この元海軍大将は、戦前にイギリスの王室制度を実さいに見聞しており、それをモデルとして皇室の生き残りを策し、いわばGHQを巧みにあやつりながら、「人間宣言」によって象徴天皇制への地ならしに成功したのであった。（私自身は、戦後の天皇制のあり方は、その功罪についてもっと国民的な論議を起こした上で決めるべきだったと信ずるもので、山梨大将のやったことは、一種の思想的クーデターではなかったかという思いを禁じ得ないのだが）。」<sup>142</sup>

ブライスは山梨の腹心の部下として誠心誠意つくして働いたが、密使の役割を十分に認識していたことから、その仕事の内容に関しては親友の新木正之介にも語らなかった。ブライスの黒衣ぶりは徹底していたと言えよう。1949年4月のはじめ、学習院大学で同僚であった新木の舎宅を訪ね、「俳句の本を出版することになった。本の表紙の外装ダスト・カバーのために、筆で”HAIKU”と書いてもらいたい」<sup>143</sup>と頼んだ。また「俳句四巻の出版費は吉田茂が出してくれた。」「ヴァイニング夫人を日本に招くようにしたのは自分である。」<sup>144</sup>と『俳句』の出版の経緯や、皇太子の家庭教師としてアメリカ人女性を招聘したことも語った。数日後、ブライスは新木に次のような『禅林句集』から取り出した句を書いたノートの一頁を新木に渡した。

雁無遺蹤之意  
水無沈影之心<sup>145</sup>

この句について「皇室やGHQのことについて、君には何も言わないで申し訳なかったが、禅林句集にはこのような文句もある。そんなことと思って勘弁してもらいたい」<sup>146</sup>と、ブライスが述べた一種の詫状であると新木は述べている。

ブライスは『禅林句集』に託して、「自分の意思是雁が足跡を残さないように、自分の心は水が影を沈めることがないように、自分の意も心も人に申し上げるものではない。無いことを心に据えていることを理解してほしい」と、自分の真意を親友新木正之介に吐露したのではないかと思う。

## (12) 鈴木大拙と*The Cultural East*『カルチャル・イースト』を発行

皇室とGHQの陰のパイプ役を務めるかたわら、ブライスは鈴木大拙と共同で、日本文化を紹介するための英文雑誌『カルチャル・イースト』の執筆および編集発行に着手している。

『鈴木大拙の人と学問』（新版鈴木大拙禅選集別巻、春秋社、1992）によると、鈴木大拙は多年収集の蔵書に夫人、ビアトリスの蔵書を合わせて、1946年(昭和21)2月、

多くの信奉者、友人の協力を得て北鎌倉、東慶寺山上に財団法人松ヶ岡文庫を設立（1945年12月認可）した。親友安宅弥吉が財団の基本金を寄付し、それによって書庫、閲覧室等が出来た。松ヶ岡文庫設立の経緯に関しては、古田紹欽博士(松ヶ岡文庫長)による「松ヶ岡文庫の建った前後ー鈴木大拙先生を思う」(『回想鈴木大拙』、春秋社1975)と、「松ヶ岡文庫の建つまで」(『鈴木大拙ーその人その思想』春秋社1993)で詳細に述べられている。『回想鈴木大拙』の年譜には、「英文雑誌『カルチュラル・イースト』(The Cultural East)をR.H.ブライスの協力を得て松ヶ岡文庫より発刊する。」<sup>147</sup>とあり、『鈴木大拙の人と学問』の年譜には、「同文庫より英人ブライスの協力を得て英文雑誌『カルチュラル・イースト』を発刊。」<sup>148</sup>とある。大拙がブライスの協力を得て英文雑誌を1946年(昭和21)7月と、翌年の1946年8月に松ヶ岡文庫より刊行したが、この英文雑誌はこの2巻をもって終刊になった。『カルチュラル・イースト』の発行は、ブライスが学習院大学の備入教師となり、同時に日本政府・宮内省とGHQとの陰のパイプ役として活躍した時期の直後である。『カルチュラル・イースト』は、ブライス研究の一環を知り得る重要な資料ではないかと考えて、筆者は長らくこの英文雑誌の存在を追い求めてきたが、その雑誌の存在はおろか、解題・概要・内容を紹介した論文や記事は皆無に等しかったのである。ただ、1966年(昭和41)当時、『イースタン・ブuddhist』のエディターを務めていた板東性純が『教化研究』の中でブライスの収録論文に関して次のような記述をしている。

「終戦後ブライス教授は鈴木先生と共同で『カルチュラル・イースト』という雑誌を発刊し、俳句の英訳などを掲載したことがあったが、この雑誌は二号迄で発行停止を余儀なくされたようである。鈴木先生は膝下に集まる人達が同じようなタイプになることを好まれず、各々自己の持ち分を發揮することを殊に喜ばれた様子なので、ブライス博士の奔放自在な筆致に閃く禅味を、興味深く見つめられていられたようである。」<sup>149</sup>

この坂東論文によって『カルチュラル・イースト』に、ブライスの英訳した俳句が掲載されていることが判明した。さっそく国内の機関における所蔵調査を始めたところ、国立国会図書館所蔵の欧文雑誌目録(紀伊国屋書店、昭和54年)に所蔵の記載はなく、文部省学術国際局の学術雑誌総合目録(欧文編:1988年度版)とNACSIS-IR(学術情報センター情報検索サービス)において、東北大学本館図書館が1巻1号のみ所蔵していることが判明した。また東北大学図書館がいかなる経路で、1巻1号のみを保有していたのか、その理由はわからない。その他の機関の保存調査として、日本全国の各県庁所在地の公立図書館、および鈴木大拙の出身地の金沢も、鈴木とブライスの住む神奈川県横浜の県立図書館にも所蔵調査依頼をしたが、返事はどの機関も「所蔵せず」であった。武田ナナさんにも聞いてみたが、彼女も未確認の英文雑誌だとの返事であった。また、鈴木大拙の国外への宗教活動プロパガンダの要素を同誌が持っていたかもしれないと考えて、国外の機関へも確認の問い合わせ



をしたところ、ケンブリッジ大学図書館にも大英博物館にもアメリカの国会図書館も所蔵していなかった。

### (13) 幻の英文雑誌 『カルチュラル・イースト』

1993年(平成5)3月、ブライスの蔵書の一部が納められている北鎌倉の松ヶ岡文庫を訪ねた。鈴木大拙が会長であったThe Culture of The East Society「東洋文化協会」のメンバーで、『カルチュラル・イースト』の出版に際して、その準備や校正に力を尽くした古田紹欽文庫長に会った。「ブライスさんのご縁です」と述べられて、自分用に所蔵されていた『カルチュラル・イースト』1巻1号及び2号の2巻を筆者の研究用にとお譲り下さった。仙花紙に達磨大師の印刷された1巻1号のおもて表紙をめくると、ブライスの論文「禅と俳句」が目飛び込んできた。寒山拾得の表紙の1巻2号にも、「続禅と俳句」が掲載されていて、板東性純博士の『教化研究』で紹介のように、1、2号ともにブライスの英訳俳句とその解説が頁を埋め尽くしていた。『カルチュラル・イースト』は国内外の学術団体・機関へは発送されず、主に占領軍軍人への日本文化紹介の英文雑誌として発行された。古田文庫長は「松ヶ岡文庫の建った前後」のなかで発行の経緯を詳しく述べている。その記述は当時の社会情勢を彷彿とさせる。

「印刷も紙も思うようにならない頃であり、汚いザラ紙の印刷であったが一部の外人に注目され、帝国ホテルや横浜のニューグランド・ホテルで、ある部数は売れた。ニュー・グランド・ホテルの野村洋三氏などはよくこの雑誌の宣伝につとめて下さった。雑誌の刊行費は吉田茂氏が外務大臣、岡崎勝男氏が外務次官の時であり、外務省から三十万円の助成金を貰って始めた。吉田茂氏と先生(鈴木大拙:注筆者)との間は古くからの知り合いであり、吉田氏の義父、牧野伸顕氏と先生との間も旧知の間柄であった。・・・吉田氏と先生の会談で偶々談が英文雑誌のことに及び、日本文化を占領軍の人達に認識して貰うことが必要であるといったことから、雑誌発行の件が急速にきまったように思う。・・・私も含めて三人の者がこの雑誌の編集に当たって、印刷所のジャパン・タイムス社に出張校正などした。」<sup>150</sup>

ブライスは晩年に親友の新木正之介に、「『俳句』4巻(1949~1952)の出版費用は吉田茂が出してくれた」と語ったことは既述したが、すでに『俳句』の出版の3年前にも、吉田茂は『カルチュラル・イースト』の発刊に力を貸していたことになる。

なぜ吉田茂は『カルチュラル・イースト』をはじめ、『俳句』などブライス関連の出版物に経済的サポートをしたのであろうか。

これは吉田を含め宮内省、政界、財界の人々からのブライスへのプレゼントだったのではないだろうか。勿論『カルチュラル・イースト』発刊の主なる目的は、古田博士の指摘のように、GHQや占領軍軍人への日本文化啓発であるが、同時にブラ

イスが今後研究者として業績を挙げるための準備として、鈴木大拙と吉田茂、そして二人と親交のあった山梨勝之進らの陰の力もあったのではないかと筆者は推測する。

『カルチュラル・イースト』発刊に協力したThe Culture of The East Society「東洋文化協会」のサポートメンバーの名前が『カルチュラル・イースト』1巻1号の裏表紙に記載されている。

明石照男、安宅弥吉、R.H.ブライス、団伊能、古田紹欽、五島慶太、畠山一清、平田佐矩、石井光雄、小林一三、近藤滋彌、牧野伸顕、松永安左衛門、長井真琴、荻野仲三郎、関屋貞三郎、鈴木大拙、宇井伯寿、八代幸雄（アルファベット順）

このメンバーは、鈴木大拙を中心にした文化サロンに集う人々であるが、そこには吉田茂を軸に天皇・宮中グループと戦後の日本の財界保守リベラルグループの系譜が見えなくもない。また山梨勝之進はメンバーではなかったが、吉田茂とは30年のロンドン海軍軍縮条約締結会議以来の知友であった。吉田茂の義父であり内大臣を務めた牧野伸顕、宮中官僚として牧野に仕え、敗戦後天皇無罪工作に奔走したクリスチャン官僚の関屋貞三郎、明石照男、安宅弥吉、団伊能、五島慶太、畠山一清、小林一三、近藤滋彌、石井光雄、加納実、松永安左衛門ら元貴族院議員の多くを含む財界人たち、東西の宗教、美術、文化に通じている哲学者鈴木大拙、印度哲学の重鎮である宇井伯寿をはじめとする古田紹欽、長井真琴らの宗教学者、さらに日本文化研究のR.H.ブライス、荻野仲三郎、八代幸雄らの美術史家をメンバーにするThe Culture of The East Society「東洋文化協会」は、敗戦後の日本における当代一流の芸術文化政財界サロンであったと言えよう。協会のメンバーが吉田茂のもとに集い、天皇制保持に対するブライスの貢献に対する心づかいと、ブライスの日本での仕事への期待を示したのではないかと筆者は思う。

さてこの雑誌は、わずか2号しか続かなかったものの、1947年10月3日、英字新聞*The Japan Times*「ジャパン・タイムズ」の前身である*NIPPON TIMES*「ニッポン・タイムズ」に、米人ベス・ブレイク(Betsu Buraiku)が次のような書評を出している。

“Mr. Blyth’s choice of ‘haiku,’ and his cozy-like remarks about ‘haiku’ and Zen are the very best bed-time reading after these merry-go-round days. And, what is more, after reading this article one really feels a sort of personal understanding of ‘haiku.’ ”

「特にブライスの選んだ俳句、そして俳句と禅に寄せるブライスの心地よい意見は、一日の終わりのベッドタイムブックとして最高のものである。そしていつしか俳句をも理解することが出来る」<sup>151</sup>

『カルチャル・イースト』は、当時のGHQをはじめ、占領軍関係者の日本理解促進

へのタイムリーな刊行物であり、鈴木大拙とブライスを、日本文化を語るにふさわしい人物であると絶賛している。

#### (14) ブライスと民芸運動

ブライスは民芸に対しても造詣が深く、日本民芸運動の父と言うべき柳宗悦をはじめ、浜田庄司や河井寛次郎らと交流を深め、日本民芸館の接收解除に尽力した。そしてそれらの交流を通じて、同じイギリス人のバーナード・リーチと出会い、親交を深めていった。

柳宗悦は東京駒場に1936年(昭和11)10月24日、「日本民芸館」を開館した。柳が1926年(大正15)4月1日に、富本憲吉、河井寛次郎、浜田庄司らと「日本民芸美術館」設立を宣言してから開館まで実に10年の月日が流れていた。日本民芸美術館設立趣意書の中で、彼らは「民芸にこそ、純日本の世界があり、民衆の生み出す美がある」と主張しているが、それは、典雅な美術品にではなく、実生活から育まれる日用品に「用の美」に見いだしたブライスの美意識と重なる世界であった。

民芸運動が求めるものは、ブライスの求める禅・俳句の本質とつながる精神世界であった。ブライスが民芸を愛したことは、柳らの民芸運動の根本精神に、ブライスも影響を受けたドイツ中世紀の神秘主義思想家マイスター・エックハルト(Meister Eckhart 1260?-1328?)の影響や、アメリカのラルフ・ウォルドー・エマーソン(Ralph Waldo Emerson 1803-1882)らによって継承された超絶主義の影響が見られることと重なる。

ブライスの民芸に対する理解は、京城帝国大学予科教授でブライスと同僚であった小西英一が『回想』の中で、「美術品ことに日本、朝鮮の古美術に深い関心があり、工芸品など愛好していたが骨とう物趣味とは全く異なるブライス流で、美の要素を備えているものなら昨日作られたものでも、デパートの台所用品部に並んでいるものでも、安くて美的なものを手に入れては悦に入っていた」<sup>152</sup>と語っているように、彼独特の美意識で貫かれている。

さらに小西は、「どうして日本の人たちは古来のよいもの、よい習慣を無反省、無雑作に振り捨てて、外来のよくないもの、よくない習慣を無批判に生活の中へ取り入れるのだろうか」<sup>153</sup>とブライスが残念がっていたことも回想している。

柳らの趣意書は、このようなブライスの美意識の根幹と同じくするものであった。柳らは民衆に用いられた日常の雑具の中にこそ美の本質があることを疑わず、「美が自然から発する時、美が民衆に交わる時、そしてそれが日常の友となる時、その時を日本人は、過去に持ち現在それを発掘しさらに未来においてもその美の世界を見いだすために日本民芸美術館の仕事を出発させる」と誓う。柳らは日本の民衆が、民衆の為につくる雑器に純日本の美を発見した。それはブライスの求める世界でもあった。柳が、富本憲吉、河井寛次郎、浜田庄司らとともに世に問うた日本民芸美術館設立趣意書は次のように「日本民芸美術館」の出発を告げる。

「時充ちて志を同じくする者集り、茲に「日本民藝美術館」の設立を計る。自然から産みなされた健康な素朴な活々した美を求めるなら、民藝の世界に来ねばならぬ。私達は長らく美の本流がそこを貫いてゐるのを見守つて来た。併し不思議にも此の世界は餘りに日常の生活に交る為、却て普通なもの貧しいものとして、顧みを受けないである。誰も今日迄その美を歴史に刻まうとは試みない。私達は埋もれたそれ等のものに對する私達の盡きない情愛を記念する為に茲に此の美術館を建設する」<sup>154</sup>

柳の説く民芸の世界には、ブライスの求めてやまない純日本の世界があった。外来の手法に陥らず、外国の真似ではなく、民衆が作る用の美は日本の自然と人々の暮らしから生まれたものであり、そこには日本の民衆の心と生命が生きづいていた。まさにブライスの求める世界の具現化したものが民芸の「用の美」であった。

この民芸運動を通して、ブライスはイギリス人バーナード・リーチに出会い、親交を深めた。リーチは、日本の民芸運動と切り離して考えることが出来ないほど日本民芸運動と根深くかかわっているが、そのリーチが1955年に毎日新聞から出版した『バーナード・リーチ日本絵日記』の中で、ブライスに初めて出会った印象を書き残している。

「ブレーク一家との夕食の席上、<sup>ママ</sup>ロバート・ブライスと会う。坐つて五時間ほど語り合った。禅、俳句、工芸、日本、生活などについて。わたしは東洋の内面を知っている感覚豊かな英国の詩人と会えて全く嬉しかった。われわれは意気投合した。わたしは俳句についての彼の著書を一行々々読んだ。その本は東洋の詩情に対する窓をわたしに開いてくれた。それも彼の翻訳—彼の翻訳は東洋の形式をいたずらに追っていない—によってだけでなく、前もって示唆的な説明をしてくれたからでもある。」<sup>155</sup>

どちらかと言うと、気難し屋のブライスが5時間も語り合ったということは、よほど相手と共鳴しあったのであろう。この『日本絵日記』は1953年2月16日から1954年10月26日まで続いており、ブライスとの出会いは、1953年の6月30日であった。その時、ブライス55才で、前年には彼の『俳句』4巻が完結し、翌年には東京大学より文学博士号を受け、俳句、川柳、禅古典、英文学関連テキストの執筆など、彼の人生において最も充実していた時期であった。『日本絵日記』の講談社学術文庫(2002)では、前述の引用に補訳があり、ブライスの業績を以下のように紹介している。

「ブライスは永年朝鮮の禅院で過し、その源泉から深く学んだ。彼は東京では多種の英文書を出しているが、英国では一冊もない。私は彼の『英文学における禅』という本に大いに啓発された。彼は、東京の学習院で教えている。」<sup>156</sup>

ブライスとリーチの交友はブライスの没年まで続く。ブライスが病に倒れた1964年6月16日付の新木正之介への手紙には、「バーナード・リーチが会いたいと言っているそうだが、東京へ出てゆくことができない。自分の病気は何が原因だかわからない。原稿を書く仕事が多すぎたのかもしれない。」<sup>157</sup>と述べている。当時、ブライス二日本での活躍を母国イギリスに紹介し、さらにブライスと日本の民芸の世界について共鳴しあったイギリス人はリーチをおいて他にはないであろう。

学習院時代鈴木大拙の教え子の一人であった柳宗悦は、松ヶ岡文庫理事長として、同文庫の発展に力を注ぐとともに、日本の民芸運動の第一線に立って日本文化の紹介と発掘に生涯を捧げたことは周知の事実である。

ブライスは、鈴木大拙を通して柳宗悦と出会った。そして柳宗悦がブライスを非常に身近な人間として意識し始めたのは、民芸館がGHQに接收される事態に陥ったときであった。敗戦後GHQの接收にあった邸宅はかなりの数に上った。今は某大使館に貸与してあるが、ある白金台にあるイギリスのチューダー様式の洋館も、当時接收され、庭石にペンキを塗られてしまったと聞いている。<sup>158</sup>

「民芸館」が1946年11月に接收の命を受け、さらに翌年1月「民芸館」西館と柳家住宅が再度接收命令を受け、3月20日までに退去するよう迫られた。これに対し、「民芸館」西館は公の施設だから保護されるべき建物であることや、この接收が民芸館の活動を衰退させてしまうという抗議が、100名近い民芸協会会員をはじめとして、同志社のミス・デントン(Miss Mary Florence Denton)、安部能成、さらには文部省、商工省などから出された。しかし、これらの抗議はほとんど実らず、接收後に住む住人はオランダの将校と決まった。しかし、西館をペンキで塗り潰す事だけは漸く抗議が通って免れることになった。

ここに、柳の言葉で云えば「救い主の3B」があらわれたのである。その接收を解除させるために、GHQに強く働き掛け、接收解除の処置をなさしめた三人の英米人のことである。柳は彼らの頭文字をとって、民芸館接收解除の3Bと呼んでいるが、その3BとはR. H. ブライス (R.H.Blyth)、ベス・ブレイク (Mrs.Beth Blake)、そしてバンカー大佐 (Colonel Bunker) である。

ベス・ブレイクは当時アメリカ赤十字社の代表であった、とバーナード・リーチは彼の著書『日本絵日記』で記し、この3Bの民芸館接收解除の努力を紹介している。ベス・ブレイクは、英字新聞「ニッポン・タイムズ」の書評欄で、鈴木大拙とブライスによる『カルチュラル・イースト』を紹介をした人物でもある。もう一人のBは、イギリス最員のマッカーサー直属の士官であるケンブリッジ大学出身のバンカー大佐であり、彼とブライスは、ブライスの「黒衣」としての仕事を通してすでに親しい間柄であった。この3Bは、接收解除に向けて驚くほどの迅速さで行動し、接收完了日の前日に民芸館にとって大朗報の接收解除の知らせをもたらした。柳の喜びは大きく、彼は日本各地の友人にその経過を書簡で知らせただけでなく、後に柳は民芸館の歴史的事項として、3Bの尽力によって接收解除に到った経緯を『工藝』第117号で述べている。<sup>159</sup>

民芸館接收は、ブライスにとって、純日本の崩壊であり、自己の美意識の抹殺に等しかった。民芸館の柱がペンキで塗り潰されることは、ブライスの求めてやまない純日本の世界への圧迫であり、弾圧であった。民衆が作る用の美は外来の手法に陥らず、外国の真似ではなく、日本の自然と人々の暮らしから生まれた純日本の結晶であった。そこに育まれる人間の生活を愛するブライスにとって、民芸館を守る行動はブライス自身の日本文化への愛を守ることであった。ブライスのこのような民芸理解があつてこそ、民芸館接收解除がなされ、民芸館は守られたのである。

さらに、民芸館接收反対の運動は、占領側の人々以上に日本人に対して、民芸館の存在と民芸運動の意味や役割を印象付け認識させるというおまけも生み出した。また人々の目に民芸館の存在を強烈に知らしめたのは、接收騒動から7ヵ月後の1947年10月3日に行なわれた天皇・皇后の民芸館行幸であった。時代が変化したとはいえ、私的な施設への訪問は異例で稀なことであったが、二時間にも及ぶ見学であった。

驚くべきことに、翌日から俄然として入場者の数は増えた。行幸は多くの人々に民芸館やその仕事の価値を広めるきっかけとなった。天皇が民芸、つまり庶民の生活の美を見学に来るということ自体が、最大級の宣伝となったし、民芸が純日本の結晶であることの証明ともなったのである。ブライスから見れば、この天皇の行幸は、天皇という「尊厳」そのものが、ブライスの愛する美の世界を認めたことであった。

この時、ブライスとブレイク夫人は、天皇の拝謁を得ている。かねてブレイク夫人は、皇太子の英語教師であるブライスに、天皇に会ってみたいとの希望を洩らしていた。当時占領軍側の人間の天皇に対する興味は異常なほどであり、彼女の希望もごく当然のことであつたろう。そこでブライスは、天皇の民芸館行幸の機会をとらえて、ブレイク夫人が天皇に自然に接見できるよう配慮したのである。付録資料の写真では、ブレイク夫人の天皇への視線とブライスの丁寧なお辞儀姿が印象的である。この時、天皇が「ブライスさんは、今日は何しにきたの」と尋ねられたので、ブレイク夫人のことが脳裏にあつたブライスは思わず「私は天皇陛下を御覧に来ました」と答えてしまったと、後にブライスはNHKの対談で敬語の難しさの例として、このエピソードを紹介している。<sup>160</sup>

## (15) 旅立ち

1964年(昭和39)5月末から、ブライスは体調を崩して大学を休講していた。新木正之介が心配して電話をすると、ブライスは「ひどい頭痛が続いて寝ている。食欲がない。医師に往診を頼んで診てもらっている」という返事であった。ブライスはその後入退院を繰り返したが、一向に回復せず、1964年10月28日この世を旅立った。行年66才。脳腫瘍であった。

この間、10月に大磯の細い坂道を担架で下っていく際に、ブライスは山茶花を詠んだ句「山茶花に心残して旅立ちぬ」を残しており、これが辞世の句となった。愛犬家のブライスには多くの愛犬家友達がいて、その中の一人はかつてサンフランシス

コに住んでいたことのある老婦人で、ブライスとは犬の散歩時に声を掛け合う相手であった。ブライスが自宅で静養中、この老婦人のお見舞いを受け、季節の花であった山茶花が二人の話題になったという。山茶花の句はそんな状況から生まれたらしい。

一枚一枚、風に乗ってはらはらと散る山茶花に、ブライスは自分のどんな心を残して旅立っていったのであろうか。朝鮮時代の終わりに、「葉の下に青い夢みるかたつむり」と詠んで、自分の{内なる運命}を日本に向けたブライスは、この辞世の句と「かたつむり」の俳句を残し、自分自身の私的なことは余り語らないまま旅立っていった。

ブライスは今、北鎌倉東慶寺の松ヶ岡文庫の奥にある杉と竹の林のなかに、鈴木大拙に寄り添うようにして眠っている。円覚寺の朝比奈宗源師によるブライスの戒名、「不来子古道照心居士」は、ありし日に鈴木大拙が、「ブライスさん、あなたはなかなか鎌倉へ来ないね。だからBlythは不来子だね」とシャレを言った挿話に起因している。

大拙は、「ブライスの死によって世界は日本文化の最も卓越した解説者の一人を失った。彼の禅の研究は、俳句や日本人のユーモア感覚の研究同様、東西の世界の相互理解に独特の貢献をしている」と、『ブディスト・イースト』(1965)の中で、ブライスの業績を評価し、彼の死を悼んでる。

また、ブライスを信奉したジェイムス・ハケット (James W. Hackett) は来日の度にブライスの墓所に詣で、苔むしたブライスの五輪塔の墓碑に佇み、師ブライスと「俳句の道」を語りあう。

Over Blyth's grave:

An offering of Spring rain

muddy knees and brow.

ブライスの墓碑覆う/供物春雨/膝と額ぬかるみに (拙訳)

この句はハケットから筆者に贈られた彼の著*The Zen Haiku and Other Zen Poems of J.W. Hackett*『禅俳句と禅詩』(Japan Publications, INC.1983)に、墨でしたためられている。おそらくブライスの墓所で詠まれたものであろう。

ハケットがブライスの死を報せる手紙をハロルド・G・ヘンダーソンから受け取ったのは、ブライスの死から2ヵ月後、1964年クリスマスのことであった。

手紙の主であるヘンダーソンは、ブライスを俳句の世界に足を踏み入れさせるきっかけとなった人であり、そして奇しくも初めて両者が出会った占領期の日本で、彼らは政治の世界で一緒に働くことになった。ブライスにとりヘンダーソンとの出会いも、彼の二つ「内なる運命」の接点であったといえよう。

最後に、「ブライス小伝」のエピローグとして、ハケットの好意で筆者に譲られたヘンダーソンの手紙をここに記す。

1964年12月25日

ニューヨーク 東78番通157

親愛なるハケット様

今朝、ブライスの死というショッキングな報せを聞きました。あなたが誰よりもブライスに親しかったと思い、この手紙をしたためました。ブライスを失ったことは、私にとりましても、俳句の世界にとりましても測りがたく大きなことです。そしておそらく他の誰よりも彼を知っているあなたには、深い哀しみでありましょう。

あなたはご存じであるかどうか判りませんが、私とブライスは、以前俳句以外の世界で非常に親しくしておりました。私たちはマッカーサーと宮内省の秘密裏の連絡ルートを作っておりました。彼は天皇の神性放棄に責任ある職分にありましたが、その事による諸々の事柄に関しても、彼は決して正当な評価は受けませんでした。

ブライスの死は私にとって二つの意味の損失です。一つは全く個人的なことですが、私たちの間の絶交状態を私たちの生前中に、氷解しておきたかったことです。ブライスに最後に会ったのは今から5年程まえですが、彼は私に対して丁重ではあるけど、非常に冷たく突放した様子でした。私が何かで彼の感情を傷つけたのかも知れませんが、今になっても何が原因かわかりません。ある俳句の翻訳に関して意見を述べたことがあります。彼を傷つけたのはそれ以上のことだったにちがいないでしょう。私への感情をこわばらせたまま、ブライスは亡くなってしまいました。悲しみでいっぱいです。

二つ目は、彼の広範な知識が英語で俳句を書くのに役立ってほしいと願っておりました。（彼は私以上に俳句に通じておりました。）私は、実にこの報せが来た時ブライスに手紙を出しかけていたのです。

ブライスの死を伝えてきたブル<sup>161</sup>は、ブライスに対して私は異なる不和を抱えていると思うのですが、そのブルが「ブライスの全業績に対して深く敬服している。ブライスの死は彼個人の死ではなく、私たちの死である。」と語っていますが、私も同じ思いです。

否応無しに、ブライスの成した俳句の世界はあなたの肩に被さってきているように思います。そのあなたでさえ、ブライスがそうだった俳句論の大黒柱にはなれないかもしれません。でも、どうかなってもらいたいと私は強く願っています。

ショックと悲しみで  
ハロルド・ヘンダーソン

追伸 奥様のパトリアによるしく



大磯のブライス家では、ブライスが愛用したピアノの上に、はるか遠くを見つめる眼差しをしたブライスの写真が置かれている。<sup>162</sup>そしてその写真の傍らに朝比奈宗源師による漢詩「安骨香語」が寄り添い語りかける。

四十餘年住日東

愛深禪道興蕉翁

而今臥松丘上

夢穩翠杉修竹中

「東洋の日本に四十年余り住み

禪の道と芭蕉を深く愛し

そして今松ヶ岡に横たわり

夢安らかに翠の杉竹林の中に修むる」(筆者拙訳)

### 第三章 R.H. ブライスの主な著書

テキスト版を含めブライスの44冊(著書20、テキスト版24)に及ぶ著書の中で、俳句の翻訳が紹介されていないのは一冊とてない。専門の英文学や語学テキストにおいてさえ俳句が登場する。中でも、とりわけブライスの俳句観が読み取れるのが、『禅と英文学』(北星堂書店 1942)、『俳句』4巻(鎌倉文庫 1949、北星堂書店 1949-1952)と、英文雑誌『カルチュラル・イースト』1巻1,2号(松ヶ岡文庫1946,1947)である。

鈴木大拙の禅書からの影響が色濃く見られる『禅と英文学』は、ブライスが英文学をはじめ西洋文学・文化の中に禅の精神を見いだそうとした彼の処女出版物である。

『俳句』は、俳句を全東洋に咲いた花として取り上げ、俳句を東洋文化の系譜の中に位置付け、さらにその中心の思想をなす禅思想を俳句によせて語っている。

ブライスは鈴木大拙の協力者として、2冊の『カルチュラル・イースト』の執筆・編集にあたった。戦後初の日本文化を紹介する英文雑誌である。『カルチャー・イースト』の出版時期が『禅と英文学』と『俳句』の中間の時期であることから、これら2点の著作となんらかの繋がりを持っているのではないかと、かねてより思っていた。そこで、第三章では、この関連性をさぐりつつ、『カルチュラル・イースト』、『禅と英文学』と『俳句』を紹介、さらに俳句の著作と同時期にブライスが精力的に取り組んだ川柳書について、そして創作に関心のなかったブライスであったが、自作の俳句と川柳を紹介する。

#### 第一節 『禅と英文学』

ブライスは交戦国民間人として神戸に抑留中の1942年12月、北星堂書店より『禅と英文学』を出版する。1924年イギリスより京城に赴いたブライスの心を捉えたのは、俳句であり、そして仏教の日本的展開、つまり禅仏教であった。そこで、彼は「東西文学や文化の最高のものは、全てその中に禅精神との調和が観られるはずである」という信念から、禅精神を東西の文学や古典に求めるという困難な作業に取り組んだ。

##### (1) 出版目的

『禅と英文学』の執筆の目的は、英語圏の読者に禅の観点から英文学をもう一度見なおそうと示唆することにあつた。ブライスはその序文の冒頭で次のように禅の書いている。

“Zen is the most precious possession of Asia....It is a world-power, for in so far as men *live* at all, they live by Zen. Wherever there is a poetical action, a religious aspiration, a heroic thought, a union of the nature within a man and the Nature without, there is Zen.”<sup>163</sup>

「禅は東洋の最も尊い財産である。・・・・禅は現在世界で最強の力であ

り、人間が生きるかぎり禅によりて生きるのである。そこに詩的活動があるかぎり、宗教的欲求があるかぎり、英雄的思想のあるかぎり、人間の内なる本性、外なる自然との合一があるかぎり、そこには禅がある」

さらに、ブライスは中国禅の慧能や雲門、日本の北条時宗、芭蕉の中に、キリストに、エックハルトに、バッハの音楽に、シェイクスピアやワーズワースの文芸に禅を見いだすのである。<sup>164</sup>中でも、全世界の文学でドン・キホーテほど禅の精神で生きている人物はないとして、『禅と英文学』の一章をドン・キホーテに当て、ドン・キホーテを禅精神のアナロジーとして引用することなど、少し強引過ぎるかとも思える比較をやっている。もっとも、彼自身も、これら東西の文学と文化のアナロジーには、多少の強引さのあることを認めており、「英文学を理解しているが禅については何も知らない英語圏読者と、そのほとんど両方に通じていない日本人読者の間で、二兎を追って一兎をも得ずとなるかも知れない危惧を抱いている」<sup>165</sup>と正直に述べている。

## (2) 構成と内容

『禅と英文学』は28章からなり、禅と詩の関係や詩と日常生活とのつながりを説いている。「禅とは何か」、「宗教は詩である」、「日常生活が詩である」、「率直が全てである」、「汎神論、神秘主義、禅」、「宗教的な詩」、「無執着」「ドン・キホーテ」などといった目次からもブライスの関心の矛先が窺える。

ブライスは、陶淵明、白楽天、芭蕉の詩句における禅の影響を論じ、シェイクスピア、ワーズワース、ディケンズ、スチーブンスン等の作品には、禅の直接的な影響は少ないにしても、清純な孤高を尊ぶ禅の思想と相寄る部分が見られるとブライス独特の禅観を展開している。<sup>166</sup>

例えば18章の「無執着」においては、イギリス人には「執着」という語の意味は、19世紀のイギリスの代表的小説家ディケンズの『荒涼館』に登場する、冷たい利己主義の代表のような人物であるハロルド・スキンプールの性格のようなものであると示唆する。<sup>167</sup>

次に本題の「無執着」への導入部で、別の無執着の種類があるとして「愛」を例に取り挙げる。そこでは、仏教の経典や聖書から無執着の愛と執着の愛を語り、聖書の語る愛と仏教の愛、禅の愛の意味の違いを説明する。ブライスによれば、聖書では、愛は「激情に依って生じる自己同化」であり、禅では「執着なしに愛すること」であり、一般仏教では「存在するあらゆるものを愛すること」だと、それぞれの違いを説明している。<sup>168</sup>

さらにイギリス人の理解を得るために、「執着愛」の例を西洋・イギリス文芸の主人公や登場人物の中に探し、ユダのスーへの愛、アレックスのテスへの愛、ロメオのジュリエットへの愛、リヤ王のコーディリアへの愛、ハムレットの母への愛がそれに相当すると述べている。このような作業になると、ブライスは、東西の文芸作

品、宗教書物を天駆ける龍の如く縦横に駆使し、彼の詩人としての天分をいかになく発揮している。煌めくばかりの文学的博学さで禅を東西の文芸・宗教にアナロジー化させるとき、彼自身はまさに至福の境地であったのではないかと思われる。

禅と詩の関係をほとんど同意語 ‘I understand Zen and poetry to be practically synonyms’ や、俳句は禅の観点から理解されなければならない ‘Haiku are to be understood from the Zen point of view’ とブライスは考えていた。ここで言う「禅と詩の関係」は「禅と俳句」とも取れる。そして当然のことながら、『禅と英文学』に俳句を登場させている。ここには芭蕉(44句)、蕪村(5句)、一茶(14句)をはじめとする古典俳句が中心に取り上げられ、さらに子規(3句)の俳句にも言及し、合計122句の俳句の英訳がなされている。勿論それらの俳句がブライスの禅の視点から選ばれていることは明らかであるし、芭蕉が禅の影響をうけていたことは広く知られていることである。

『芭蕉と仏教』、『芭蕉と禅』(共に桜楓社)の著書で知られる佐藤圓は、芭蕉と芭蕉の古典文学への接触を「古事記万葉以下、日本古典のすべてを渉猟した作家といってよい。それだから懐古主義者かというところ、そうではなく、意外に近代自然主義に優る新しさを示している場合もある。つまるところ芭蕉の懐古趣味は、単なる回帰性ではなく、古典から吸収したものをエネルギー源として、前進するためのものであったということになる。」<sup>169</sup>と述べている。ブライスは、『禅と英文学』の序文で論語二、十一から「温故而知新、可以為師矣」<sup>170</sup>(故きを温ねて新しきを知る以て師と為るべし)を紹介していることから、佐藤の指摘する芭蕉の古典文学への傾斜と同様の姿勢を持っていたと云えよう。さらに芭蕉の中国文学読破は、「中国文学の読破も、同様といってよい。杜甫、楽天、蘇東坡などを読みあさっているが、これは中国化するためではなく、独立独歩の創造者として、自己自身の成長を助けるためであった。同化することではなく、踏み越え乗り越えるためである。このような芭蕉の積極性を支えたものは、恐らく禅の精神であろう。」<sup>171</sup>と述べる佐藤の言葉は、禅の視点から俳句を捉え、芭蕉を重んじたブライスへ贈られた言葉のようにさえ伝わる。「英語圏の読者は、禅の観点からもう一度英文学をみつめることを勧める」<sup>172</sup>とブライスが述べるように、『禅と英文学』はブライスが英語圏読者に贈った彼の禅書ではないだろうか。

英文学者の寿岳文章は「やはりブライスさんは大拙博士の禅をも含めて、最もよく禅の真髓をとらえていた稀な西洋人の一人だと私は考えるようになった。禅はブライスさんの言う通り、民族も人種も宗教も、時も処も越えて遍満する空気のようなものだ。それに気付くとき、人は禅に生きる。禅は強制しない。禅はあらゆるものから自由である。ブライスさんのようにキリスト者であることが、禅に生きることの喜びと少しの撞着も示さない。真の禅者は、宗派としての禅に属さなければ禅の体得は不可能だなどと言うまい。それはあらゆるものを包むと共に、あらゆるものから抜けでている。これを、論理としてではなく、文学を通じ、深層心理的につかんでいたのが、ブライスさんであった。」<sup>173</sup>と述べている。この時期にはブライスは

すでに基督教から離れ禅に帰依していた。しかし寿岳の述べる禅の本質、つまり「それはあらゆるものを包むと共に、あらゆるものから抜けでている」がブライスを禅に魅了させたのであろう。

## 第二節 *The Cultural East* 『カルチュラル・イースト』

### (1) 出版目的

第一章で『カルチュラル・イースト』は、吉田茂と鈴木大拙の発案により、占領軍へ「日本文化」を紹介することを目的としていたことは既述した。日本の敗戦直後に押し寄せた占領軍への「日本文化」紹介であり、東洋文化と西洋文化の異文化相互理解のための出版物であった。また天皇制維持のため黒衣として徹したブライスへの心遣いではないかと筆者は推測する。

Editorialには「本誌は東洋文化に関する正確な知識を多様な側面から紹介するだけでなく、その裏に潜む精神世界を西洋に知らせるために出版する」<sup>174</sup>とある。精神世界が、禅仏教を指していることは言うまでもない。

さらにEditorialは、「私達の相互理解は寛容と無我の精神から生まれる」とも、「文化の相互理解には愛（大悲）<sup>175</sup>が大きな役割を果たす」とも述べているが、ここで言う「愛」とは、異文化の相互理解の媒介となるものであり、この「愛」は仏教哲学者がプラジュニャーやハンニャと呼ぶ超自然的智とともに育っていくものであると規定している。

そして文化とは、「イギリス文化」がシェイクスピアの作品そのものではなく、人々がシェイクスピアの諸作品を通じて、自己の思考や感情を作品中の主人公と重ねあわせて日常生活に役立てていくところに、生きているごとく、「日本文化」も、短詩型文学の俳句、和歌や、茶花道、弓道、能自体にあるのではなく、それらが平均的日本人の日常生活に如何に生かされているか、あるいは人生観にどう生かしているかという点に、「日本文化」は存在すると考える。『カルチュラル・イースト』が東西文化の相互理解のために、日本人の実生活、あるいは彼らの生き方から、日本人の感情や思考の様を伝えることを目指している。

『カルチュラル・イースト』が東洋と西洋の異文化相互理解発信のために出版された。「我々の使命は大いなる愛がその目的を達成できるように、東洋と西洋の文化的懸け橋を築く手助けをすることである。」<sup>176</sup>ことが、鈴木大拙とブライスの望みであった。二人の出版の使命を記述した第一号第一巻Editorial<sup>177</sup>の部分の翻訳をここに提示する。

### *The Cultural East* 倉町千りにあたって

The Cultural East 第1巻第1号

1946（昭和21）年7月

我々は力の論理が世界を支配している限り、国家間における恒久的な平和はありえない

と確信しており、また、力の論理を越えた崇高な価値概念が必ず存在しているであろうことも堅く確信している。力の論理とは、一方の力が他方を押え込むという二項対立的なものであり、力の論理はその本質において相互間の対立と敵対を引き起こすものである。力の論理がそれを越える高次の規範によって統御されていない場合、力の論理の行使は常に悲劇を生みだし、世界は破滅の時を迎えるに違いない。

では、力の論理を抑制する高次の規範とは何か。それは大いなる愛である、正義のみならず不正義に対してもあまねく照らす太陽のように、すべてを受け入れる愛である。力の論理は大いなる愛を生み出しはしないが、愛は力を生み出し、そしてその力を支配するのである。力の論理をそのまま放置すれば、それは確実に自己増殖を始め、言語に絶する悲惨な状況を我々にもたらすに違いない。

我々の中の完璧な相互理解こそが大いなる愛を可能とさせるのである。無知は侮蔑を生み出し、侮蔑は力の論理の忠実な仲間でもある。他者に対する侮蔑と力の論理が結びつけば、個人の衝突から世界大戦に至るまで、様々な争いを起こすに違いない。それゆえ世界的な恒久平和を勝ち取るためには、善なる相互理解及びお互いの尊重とお互いを愛することが必須となるのである。如何なる形におけるものであっても、無知は一掃されなければならない。愛は必ず広められなければならない。

相互理解は寛容な無私の精神から生まれる。利己主義と無知とは表裏一体の関係にある。利己主義は寛容性を閉じ込め、広がり続ける精神世界の理想像を見えなくし、あいまいなものとする。文化とは人間の精神世界の到達点を反映したものであるが故に、精神世界の理想像が無いところに文化というものは存在しないのである。精神が精神を直接的に動かす、これが悟りである。悟りを得れば、無知が前面に出ることはなくなり、相互理解が可能となる。悟りを開いた精神はいつも創造的であり、そこから文化の多様性が新たに生れるのである。したがって文化を相互に理解することは人間の精神性を高めることを意味するのである。

文化というものは東洋文化、西洋文化、南方文化、北方文化といわれるように、それぞれの地域性と地域独自の特徴を持っている。人種的あるいは国民的気質というような心理的要因と同様に地理的、気象的、気候的特性などの環境要因もまた文化の形成に関係しているように思われる。しかし結局のところ、文化とは、属性としての環境的、心理的偶然性に影響された精神の表現であり、それゆえ、その文化独自の価値観を持つのである。文化の違いは避けることができないものである。自らの精神の深奥を確かめたい時、人は異なる時代や場所における、人々の精神の多様な表われ方を媒介にして、それらの精神の深奥を検証するのであるが、その際に、それらに対して虚心坦懐に検証しなければならない。それによって人は精神的に成長し、ついに大いなる愛の意味を悟るのである。大多数の人々が精神的に成長した時に初めて、世界は恒久的な平和を望むことが可能となり、また真の幸せを謳歌することができるのである。

哲学的に言えば、東洋文化は神秘主義的傾向を持っており、一方、西洋的精神は生命や

世界に対して二元論的な解釈をする素地を持っている、と言える。しかし、神秘主義とは、東洋的精神の基底的な傾向である、と、その意味を明確に措定しておかないと、神秘主義という言葉は用語としていくぶん漠然としており、その意味を取り違えてしまうことになる。西洋人が真摯に東洋文化の研究を始めれば、「無心」、「無念」、「虚心」、「只麼」、「如是」などの用語と頻繁に出くわすであろうし、またこれらの用語の類語も数多く存在する。これらの用語は明らかに（西洋的）意味を欠いており、一般的な理解を越えているので、西洋的精神にとってはまったく不可解なものとなるのである。しかし、精神的背景として二元論的精神を持っている西洋人が、東洋的精神の深奥を探求することを真に望むなら、彼らにとって「無意味」と映る用語であっても、東洋文化において育まれてきた所産としての、それら用語をすべて正確に理解する努力を惜しんではならない。

古より、芸術の師といわれる人々は、その芸術の領域における「密伝」や「秘伝」または「奥義」を述べた書物を残しているが、それらは本来、これらの貴重な書物を授けるに相応しいと師が判断した弟子に、師から伝授されたのである。如何なる芸術においても、技術のみの、あるいは独創性のない技能だけでは、人は師となるに十分では無く、師となるにはそれらの技能以外の何かを身に付けていなければならない、それは人智を、すなわち論理的理解を超越した精神的洞察に他ならないのである。簡潔に言えば、師とは単なる技能練達者ではなく、創造者であらねばならないのである。

二元論的傾向を持っている西洋的精神は、論理的かつ方法論的発想を持っており、一般的に神秘主義や直観主義と対立する精神である、と言える。したがって東洋と西洋は(その精神において)対極に位置しているといえるであろう。というのは、東洋の「そのもの自体である精神」と、西洋の「そのもの自体を知ろうとする精神」とに東洋と西洋の精神は二極分化しているからである。それゆえ、その精神を総体として理解するためには、東洋は西洋から多くのことを、とくに一般的な事柄に対しての科学的方法論や科学技術的取扱い方法を学ぶ必要があり、他方西洋は、師によって厳重に守られている秘伝や奥義などの蘊奥を徹底的に探究することによって何かを得ることができるであろう。

先に述べたように、力の論理が世界を支配している限り、争いや苦しみや世界中の人々の苦難が終わりを迎えることはない。世界平和を達成するためには、力の論理を越える高次かつ強固な価値概念が力の論理を統御しなければならない。現在、世界中で顕然と現れてきている運動はすべて、大いなる愛によって生まれたものではなく、単に力の論理を強く追い求めているものに過ぎない。共産主義、ファシズム、民主主義、大工業主義、ナショナリズム、社会主義、科学崇拜、工業技術主義やその他その世界的優位性を主張する思想は、自らの思想の根幹に大いなる愛を持っていない限り、すべて力の論理を希求しているに過ぎないのである。混乱する世界を救うのは、正にこれらの思想であると強く主張する前に、まずそれらの思想の中身を十分検証しなければならない。また、それらの思想から生れる政策や方針の根幹に、どれほどの大いなる愛が存在しているのかについても検証しなければならない。

しかしながら、大いなる愛は盲目的、本能的なものであってはならない。それは人間的、理性的かつ精神的なものであらねばならない。すなわち、大いなる愛とは、現実というものものの真の姿及びそれに対する理性的な解釈を、精神的に洞察することから生れでる愛でなければならない。多様性を持つ現実世界と部分的には重なっているが、完全に混じりあっているわけではない精神世界というものがあり、その精神世界はありのままの俗世間と離れて存在しているわけではないが、「超自然世界」とでも呼ばれるべき世界なのである。この世界は超絶的世界であると同時に内在的世界でもあり、洞察によって得られた純粹最高の知識、すなわち、仏教哲学者によって梵語でプラジュニャー（智慧）あるいはパーリー語でパニャー（般若）と呼ばれる知識に導かれて大いなる愛が大きく開花するのは正にこの世界なのである。

本誌『カルチュラル・イースト』は、総体としての東洋文化を形づくる様々な文化に関する正確な知識を広めるためだけでなく、東洋文化総体の基礎をなす精神世界を明示することを目的として発刊されたものである。というのは、前述したように、文化の名に値する如何なる文化も精神性なしには、換言すれば、その文化の基盤が世界精神の中にあることなしには存在し得ないからである。如何なる所の文化であろうと、人がその文化に精通すれば、世界精神の一つの反映である自らの精神生活の中に、その文化の片鱗を垣間見ることができであろう。精神の中にある文化を垣間見る、というこのことは、大いなる愛の発生の根源を探ることに他ならない。大いなる愛は個人のみならず国家間の相互理解をももたらすものである。力の論理の前提である尊大な自己中心主義に、大いなる愛から生れた、この相互理解が徐々に影響を及ぼし、ついには、力の論理は完全に大いなる愛の原理に拝跪するのである。したがって、お互いを愛し合うことが相互理解であり、逆に言えば、その相互理解の基盤を築き上げるのが大いなる愛である、とすることができる。実際のところ、大いなる愛と相互理解には、どちらが先か後か、という順序はない。大いなる愛と相互理解は相関的であり、かつ融合しているのである。この二者は「生命の息吹」の二つの側面なのである。大いなる愛と相互理解の融合こそ「生命の息吹」であり、それは大いなる愛と相互理解を通して発現されるのである。言いかえれば、それは大いなる愛と相互理解を媒介として「生命の息吹」に出会う我々の人類的意識でもある。それゆえ『カルチュラル・イースト』は、東洋に対する公正かつ偏見のない理解を促進し、ついには東洋への愛にまで導く、という意図のもとに東洋文化についての詳細な情報の提供を目指しているのである。

文化といっても、百年あるいは千年前になされたり、語られたり、描かれたり、演じられたりしたものを我々は対象としているのではない。英国の文化とはシェークスピアの作品そのものではなく、英国人や米国人にとっては、自分たちの思考や感情の動きがシェークスピアのそれと変らないという点で、また、英国文化が自分たちの身体の中にすでに取り込まれており、彼らの日常生活の中でも英国文化が息づいている、という点において、英国文化とは英国人や米国人がシェークスピアを読み、味わうことなのである。このこと



は東洋文化においても日本文化においても同様である。我々は本誌において日本人の生活の実相、すなわち過去の日本人ではなく、今まさに生きて生活している彼ら日本人の感情と思考及びその喜怒哀楽の様相について伝えたいと思う。本誌掲載の「茶」（茶室瞑想）についての論考はこの一例である。それゆえ、ここで対象としている「現に生きている文化」とは俳句や和歌、華道や茶道、弓道や能のみを意味しているのではない。「現に生きている文化」とは、普通の日本人の日常生活の中で、これらの文化がどのように生きているのか、人を誉める時、何を誉めるのか、自らの人生において何を理想と感じているのか、ということの意味しているのである。「現に生きている文化」とは、「いつもそこに存在している何か」なのである。

現在、人類の幸福を話題にする限り、戦争の問題に触れない訳にはいかない。軍国主義者のみならず少数の政治家が心に抱いていた間違った力の論理によって、非常に多くの無辜の民の血が流されざるを得なかったことは、非常に不幸なことであった。軍国主義は壊滅し、その思想は挫かれたとはいえ、戦勝国は神に与えられた使命を厳粛に思い起こし、勝利の美酒に酔い痴れ、道を踏み外すことのないように切に願わねばならない。敗者が屈辱と無念の苦杯をなめるのは避けられないが、勝者もまた、力の論理が持つ自己中心主義と独断専行主義に陥ることがあってはならない。力は愛の前にひれ伏すべきであり、愛こそ生命の息吹であり、世界の真の支配者なのである。

それゆえ、『カルチュラル・イースト』は、力は愛の前にひれ伏すべきである、という目的の下に、それによって国家間の相互理解の友好的な交流が始まることを願いながら、世界に対して、東洋が文化的遺産として持っているものに関する詳細かつ正確な情報を提供するつもりである。とういのは、世界において、愛の力を効果的に生み出す、好意的な関心や相互理解がなければ、我々は如何なる形態であれ恒久的な平和を望むことはまったくできないからである。

我々は東洋の人々が現在直面している、全力でもって解決しなければならない様々な問題も同時に呈示するつもりである。西洋文化の影響で古来より連綿と伝承され、享受されてきた東洋の伝統や文化に深い溝が生じているのである。これは東洋の絶対理想主義的一元論と西洋の本質的経験主義的二元論の衝突とも言えよう。西洋の二元論的かつ時間重視の発想法は、時間超越と空間重視とでもいえる特徴を持つ東洋文化をその深部において侵蝕したのである。簡潔に言えば、東洋にはもはや静かな安逸した生活は許されず、積極的に行動しなければならないのである。米国人が言うように、一分たりとも時間が浪費されてはならないのであって、そこには有益性あるいは能率性が要求されるのである。社会的・経済的生活水準の問題に加えて、建築、絵画、政治倫理、宗教、教育の領域において、文化における衝突と同様の様々な問題が起きている。実際、東洋はその東洋的人生観や世界観を危うくさせる多くの問題を抱えている。西洋もまた自ら固有の難題を抱えているのは確かである。西洋はそのパワーポリティックス的発想の再検討及びキリスト教の聖遺物などの開帳に見られる神概念の再検討を図らねばならないことも、その一例と言えよう。

簡潔に言えば、我々の使命は大いなる愛がその目的を達成できるように、東洋と西洋の文化の懸け橋を築く手助けをすることである。

## (2) 構成と内容

一号・二号ともに紙質は仙花紙で、印刷も不明確なところもあるなど、当時の出版事情からみて不十分であるが、表紙に達磨大師（一号 総48頁）と寒山拾得を載せた（二号 総54頁）*The Cultural East*は、彼らの日本文化発信の意気込みがみなぎり、以下の目次からも彼らの気概が感じられる。

### 一卷第一号

#### Editorial

禅と俳句 R. H. ブライズ<sup>178</sup>

大乘仏教と信徒 ビアトリス、鈴木

茶室瞑想 鈴木大拙

書評子 R. H. ブライズ

長谷川如是閑『日本人の国民性』（日本国有鉄道1942）

原田治郎『日本人の理想像』（国際文化振興会1938）

### 一卷第二号

禅と俳句（続き） R. H. ブライズ

能の根本 梶原道太郎

剣士と猫 （翻訳）鈴木大拙

書評子 R. H. ブライズ

道畑泰正『釈迦からキリストへ』（キリスト教出版1937）

『カルチュラル・イースト』の一号、二号の両号ともブライズによる論文「禅と俳句」、鈴木大拙夫人のビアトリス女史による日本人の日常生活からみた仏教研究論文の「大乘仏教と信徒」、鈴木大拙「茶室瞑想」、作者不祥とあるが、日本の剣道によせて「悟り」を語る大拙の手によると思われる英文翻訳「剣士と猫」が掲載されている。書評は両号ともブライズが担当している。東京国立博物館の事務官として日本文化の解説・編集にあたり日米文化交流に捧げた原田次郎『日本人の理想像』、長谷川如是閑『日本人の国民性』、さらに当時の社会情勢としてGHQ側に十分な日本理解への橋渡しとなった道畑泰正『釈迦からキリスト』の著書にブライズがコメントを寄せている。

## (3) ブライズ論文「禅と俳句」

『カルチュラル・イースト』には、「禅と俳句」と題するブライズの論文が主論文として42頁にわたって掲載されている。ブライズに大きなスペースを与えることは、大拙がブライズの俳句観、禅観に強い関心を寄せていたことを意味する。論文の冒

頭でブライスは「私たちは俳句の中に禅の心を見いだす。禅の世界の理解なしには俳句の目的としていることは解らない。俳句は、月を間違えないように指す指である。」<sup>179</sup>と述べる。「禅と俳句」では、俳句詩人の心と禅の繋がりに焦点を当て、禅の観点から俳句を紹介し、仏教、日本の禅、道教、儒教、中国の詩歌や絵画などが、俳句にどのような影響を与えてきたかを考察している。

### ① 構成

「禅と俳句」では禅の精神を表す次のような13の項目、selflessness「無我」、loneliness「孤絶」、grateful acceptance「受容」、wordless「不言」、non-intellectuality「無知性」、contradiction「矛盾」、humour「ユーモア」、freedom「自由」、non-morality「無道徳」、simplicity「簡素」、materiality「物性」、love「大悲」、courage「勇気」に、俳句を分類する。それまでの蕉風俳諧の根本理念として知られる「わび」（閑寂な風趣）、「さび」（閑寂味の洗練されて純芸術化されたもの）、「しおり」（人間や自然を哀憐をもって眺める心から流露したものがおのずから句の姿にあらわれたもの）とする分類とは異なるものである。

また、なかでもユーモアの項目では、ユーモアをthe laughter of disillusionment「幻滅の笑い」、the laughter of studied idiocy「知悉な愚者の笑い」、spontaneous idiocy「自発的な愚者」、hyperbole「修辭的誇張」、dilemma「両刀論法」、scatological humour「糞便的ユーモア」、dry humour「辛口のユーモア」、breaking with conventionality「慣習からの離脱」、dropping from the sublime to the ridiculous「崇高から馬鹿ばかしさへの落下」の9項目<sup>180</sup>に細分している。これらの項目にはユーモアに対するブライスのユニークで独創的な解釈がうかがえる。これは彼が後に興味を抱く川柳への前兆といえるであろう。

### ② 内容

ニッポン・タイムズの書評欄で、ベス・ブレイクはブライスの「禅と俳句」について、“this current issue starts with a discourse on Zen and ‘haiku’ that takes the sanctimonious idea right out of any conception that ‘haiku’ is cocooned in transcendental mood.”「繭のように超絶的な雰囲気では生み出されているという概念から敬虔ぶった部分を取りのぞいたのが俳句である。」と紹介し、さらに“Humour is an indispensable element of poetry and religion that has so often been omitted with disastrous results.”「ユーモアは詩の欠くべからざる要素であり、また破滅的な結果をもたらすがゆえに、しばしば無視されてきた宗教にとっても欠くことのできないものである」として、ブライスの禅の中に潜むユーモアに着目している。

そして俳句が根源にウイットと駄洒落を有していることの例として、(Having slept, the cat gets up / And with great yawns, / Goes out love-making.)「寝て起きて大あくびして猫の恋 一茶」の俳句を例に取り上げ、日本の俳句は西洋圏では詩の主題には決してならない「猫の恋」といった奇妙な主題が、そのおかしみを表現する。西洋

圏文化の読者への異文化理解への鍵になると、ベス・ブレイクは語る。

ベス・ブレイクの絶賛するブライスの論文「禅と俳句」では、1,2号合わせて俳句、川柳、和歌、漢詩、仏典も含め91に及ぶ詩歌の英訳解説で成り立つ。処女出版の『禅と英文学』と同じく、俳句の英訳は一茶(11句)、芭蕉(9句)、蕪村(8句)そして子規(5句)が多く、ブライスはこの4人の俳句を重んじていたといえる。

ブライスが『禅と英文学』において西洋文学古典から天衣無縫に禅のアナロジー化をしたのと同様に、「禅と俳句」においても東洋・中国古典、仏典、または俳句、禅、さらに我々には思いもよらない人物、例えば「忠臣蔵」の大石良雄や西郷隆盛、井原西鶴などの詩歌をもアナロジー化しており、それらの奇想天外な引用は日本人による俳句論を越えて、我々をブライス独特の世界に誘う。

例えば、前述の13のキーワードのうちの「無我」について、ブライスは芭蕉、蕪村、和風や鞍風の俳句、一遍上人の和歌、荘子の齋物論といった文人の作品を例示して解説する。「無我」の有り様を“**There is no desire that things should be other than they are, because there is no one to desire them so.**” 「物はありのままよし。人はありのままでない物を求めてはいけない。」と述べ、芭蕉の (Misty rain: / Today is a happy day, / Although Mount Fuji is unseen.) 「霧時雨富士を見ぬ日ぞ面白き」を取り上げている。つまりブライスは、晴れあがった富士も、霧に包まれた富士もありのままの姿を受け入れるべきであると解釈している。

「無我」の状態では、私たちはあらゆる物事を見聞することができ、さらに翼をつけ飛ぶことすら可能であると、俳人和風の (The butterfly having disappeared / My spirit / Came back to me ) 「蝶消えて魂我に返りけり」を紹介している。

さらに無我の境地を説明するものとして「声ばかり落ちて跡なき雲雀かな」が引用され、“**the personality of the poet, together with that of the bird, is swallowed up in its thrilling notes.**” 「詩人は鳥そのものと同化してスリリングな音の中に呑み込まれる」と語る。

一遍上人の和歌 (When uttered / There is no I / No Buddha / Namu-amida-butsu / Namu-amida-butsu) 「唄ふれば我も仏もなかりけりなむあみだぶつなむあみだつ」も、一心不乱に経を詠み、そこに生まれる没我の状態こそ、無我の境地だと説明する。

蕪村の句(Standing still / The voice of frogs / Heard in the distance) 「ただづめば遠くも聞こゆ蛙かな」では、「蛙は静寂であるのだが、詩人の蛙的性質ゆえに蛙の話し声が聞こえてくる」とブライス特有の表現で、蕪村の蛙の句を解釈する。「無我はあらゆる物事と自我が浸透しあうことから生まれる現象であり、その無我到達したものだけが、すべては一つなりと悟る」と禅的な表現でブライスは語る。

そして荘子の『齋物論』二より「唯達者知為一 為是不用 寓諸傭」(道に達した者のみが、すべてが通じて一たるを知る、だから達人は分別を用いず、すべてありのままの働きに任せる) というフレーズを引き出して、禅の無我の境地を中国の道教にまで広げる。このように、「俳句の中に禅の心を見いだす」ブライスは、禅の無我の世界で自由奔放に遊ぶ。したがって、『カルチュラル・イースト』は敗戦後の日本に

やってきたごく普通の西洋文化圏の人々への異文化理解に役立ち、ブライスの禅から見た俳句論文は彼らの日本理解、ひいては東洋理解への入口となったといえるであろう。しかしそれらはいくまでもブライスの世界から見た恣意的な俳句観であることを忘れてはならない。

このユニークな英文雑誌『カルチュラル・イースト』は、資金的事情により、2号をもってやむなく終刊になったが、ブライスは2号の「禅と俳句」論文の終わりに「続く」と記している。そして2年後の1949年に、ブライスはその「続き」として北星堂書店から出版の『俳句』に転載する形で継続したのである。

ブライスは、師の鈴木大拙と共著で松ヶ岡文庫より出版した『カルチュラル・イースト』は、アメリカの俳句の研究者であり、俳句詩人であるコル・バン・デン・フーヴェル(Cor Van Den Heuvel)が指摘する「占領軍との増進するコンタクト」の必要性から生まれた産物であった。ブライスの代表著書である『俳句』4巻(1949~1952)出版以前の1946年、1947年の2年にわたって出版され、戦前から欧米で禅仏教の研究・普及に講演のあった鈴木大拙との共同編集であったことは、その後のアメリカにおける禅への関心の契機になった雑誌といえるであろう。

### 第三節 *Haiku* 4vols. 『俳句』4巻

1942年の『禅と英文学』、1946、1947年の『カルチチュラル・イースト』の出版に続いて、ブライスは1949年に『俳句』4巻、つまり*Haiku* Vol.1(Eastern Culture)、1950年に*Haiku* Vol.2(Spring)、そして1952年には*Haiku* Vol.3(Summer-Autumn)、*Haiku* Vol.4(Autumn-Winter)を北星堂書店より刊行する(以下『俳句』と表記)。通巻そて1300頁に及ぶ大著である。出版の翌年1950年3月に、『俳句』1巻の書評*The Times Literary Supplement*「イギリスのタイムズ文芸付録」が出た。“It is the design of Mr. Blyth, who knows the Far Eastin life, art and letters in a way attainable by few, to interpret “haiku in a comprehensive work, of which the first of four volumes is published.” 「広範囲な作業で、俳句を解釈することがブライス氏の意図とすることであり、ある意味、ほとんどの人に手が届かない極東の生活、芸術、文芸を知っているブライス氏の企画による『俳句』4巻のうちの第1巻が出版された」<sup>181</sup>とブライスの偉業を讃えている。

#### (1) 出版目的

英語圏の読者に禅の観点から英文学をもう一度見なおそうと示唆したのが『禅と英文学』であり、俳句の中に禅の精神を見いだそうとしたのが『カルチュラル・イースト』であるが、この両者を集大成したのが『俳句』4巻であった。『俳句』の序文でブライスは、“Haiku is the “final flower” of all Eastern culture; it is also a way of living.” “Haiku are to be understood from the Zen point of view.” 「俳句は全東洋に咲いた精華である。」、「俳句は生きる道でもある。俳句は禅の観点から理解される

べきである」<sup>182</sup>と述べているように、俳句を東洋文化の系譜のなかに位置付け、さらにその中心の思想をなす禅の心を俳句に語らせたのである。

## (2) 構成

東洋文化という副題のついた第一巻は、第一章 ‘The Spiritual Origins of Haiku’ 「俳句の精神的系譜」、第二章 ‘Zen, The State of Mind for Haiku’ 「禅、俳句の精神」、第三章 ‘Haiku and Poetry’ 「俳句と詩」、第四章 ‘The Four Great Poets’ 「四大俳人」、第五章 ‘Technique of Haiku’ 「俳句の技法」と章分けされている。第二巻は春、第三巻は春一夏、第四巻は秋一冬と、歳時記風に季題が分類されており、外国人の俳句研究者でこの歳時記風の方式を用いたのはブライスが初めてである。

ブライスの俳句観は、『俳句』第一巻の第二章：「禅、俳句の精神」から窺え、ここでは『カルチャル・イースト』で紹介したのと同じ13項目のキーワードとして「無我」「孤絶」「受容」「不言」「無知性」「矛盾」「自由」「無道德」「簡素」「物性」「大悲」「勇氣」を禅精神の特質として取り上げる。そして“*There are some of characteristics of the state of mind which the creation and appreciation of haiku demand.*” 「これらのキーワードは俳句の創作と理解に必要な要素である」<sup>183</sup>と述べる。ここで注意を惹くのは、この第二章の構成がまさしく『カルチャル・イースト』のブライスの論文Zen and Haiku「禅と俳句」にそっくり当てはまることである。『俳句』の第二章：「禅、俳句の精神」は、ブライスの論文「禅と俳句」に肉付けされて再度登場したのである。つまり『カルチャル・イースト』の(続き)が再現されたと云える。また『カルチャル・イースト』の論文「禅と俳句」は、『俳句』第二章の草稿であるとも云えよう。

## (3) 内容

### ① 四人の俳人

俳句四巻でブライスは2645句の俳句を英訳している。芭蕉(348句)、蕪村(544句)、一茶(513句)、子規(503句)とこれら四人を中心に、江戸期の俳人までを扱っている。明治時代に活躍した子規は特例といえる。日本に来て俳句に興味を持った外国人は数多いが、これほど多くの俳句を研究し、外国語に翻訳した者はブライスの他にはいない。

ブライスは、『禅と英文学』、また『カルチャル・イースト』の「禅と俳句」においても上記の四人の俳人を重要視している。“*Buson follows Basho, Shiki follows Buson, but Basho and Issa imitate no one; their life is their own.*” 「蕪村は芭蕉に従い、子規は蕪村に従った。しかし芭蕉と一茶は誰の真似もせず、彼ら独自の道歩んだ」<sup>184</sup>と、ブライスらしい評価をしている。

これら四人のなかで、ブライスが一番重んじたのは、言うまでもなく芭蕉であり次に一茶である。禅の造詣が深かった芭蕉を、‘the poet of life’ 「人生の詩人」と呼び、芸術家蕪村を‘the poet of the studio’ 「画室の詩人」、波瀾万丈の厳しい人生

を送った一茶を、‘the poet of destiny’「運命の詩人」と呼んだのは、ブライスの詩人としての感性からでた表現である。<sup>185</sup>

ブライスは四人の中で一番日本人らしいのは一茶の句であると言ひ、そのことを最もよく表している句として、「俳句と日本の国民性」(『大法輪』)に(For you fleas too, / The night must be long, / It must be lonely.) 「蚤どもゝ夜永だろうぞさびしかる」の句を紹介している。<sup>186</sup> そしてこの句から、仏教思想が人間の真性を示し、最も日本人的な人は最も人間味豊かな人でもあるとして一茶を評価している。ブライスは一茶も禅の体現者と考えたのである。

## ② 歳時記風体裁

俳句が翻訳されて海外に紹介される場合、ブライスの英訳以前では、有季定型という特性を持つ俳句の季語季題はなおざりにされがちであった。ところがブライスの『俳句』では、歳時記風に構成され、新年は別にして春夏秋冬に分け、さらに時候、天文、地理、神仏、人事、動物、植物の7部門に分類されていて、日本語の俳句で用いられる歳時記を見倣っている。この分類はブライスの卓見であり、ブライスが『禅と英文学』で参考にした宮森麻太郎の『俳句選集』もH. G. ヘンダーソンの『竹箒』も歳時記の体裁は採っていない。

『俳句』に添付されている参考文献から、ブライスが日本の歳時記を参考にしたらしいことは理解できるが、ブライスの歳時記風構成にはブライス独特の体裁がある。例えば日本の歳時記<sup>187</sup>では「人事」に入れる神仏を、新たに項目として立てている。この「神仏」の項目を、“This is called in Japanese 神仏、Gods and Buddhas. To this belong the Buddhist and Shinto festivals, pilgrimages, visiting graves.”「日本語で神、仏と呼ばれるものであり、これには仏教や神道における祭式や、お寺参り、墓参も含まれる」<sup>188</sup>と説明している。

さて日本の歳時記では「人事」にはいる項目で、ブライスの「神仏」の項目に入っているのを見てみると、涅槃像、伊勢参り、祭り、魂祭り、魂棚、鉢たたき、十夜、寒念仏、お取り越し、神の留守などがあり、さらに日本の歳時記ではどの部門にも入らない念仏、地蔵、仏を「神仏」に入れている。「神仏」にとりわけ関心が深いブライスだからこそ「神仏」を独立部門としたのであり、神仏との出会いが日本の人々の生活に深く関わっていると考えたのであろう。例えば、ブライスは芭蕉の神無月の句を次のように英訳し、説明する。

留守の間にあれたる神に落葉かな 芭蕉

The god is absent;  
His dead leaves are piling,  
And all is deserted. Basho

“The god has gone to the gathering at Izumo. On this day, the whole shrine

is usually lonely and neglected. The fallen leaves lie here and there, and no one seems to care. The attitude of the Japanese to the gods is worth nothing here; it strongly resembles that of the Greeks, but the outlines are softer, lacking the rather hard clarity of the western mythology.”

「神は出雲に参集している。この日、神社はいつもと違って人気もなく手入れもされていない。落葉があちこちに散らばり、それを気にする人は誰もいないようだ。この時期の日本人の神への態度は、注目に値する。神に対する尊崇さが欠けているようだ。それはギリシャ人の神への対応とも似ているが、その外観は柔軟で、西洋の神話の持つ厳しすぎる堅さに欠けている。」<sup>189</sup>

この例のように、ブライスは芭蕉の神無月の句から、西洋と日本と神への対応の異同を説明している。ブライスは日本の宗教と、人々との関係そのものを愛した。そのためブライスは「神仏」の部門を自分で新設し日本の俳句を押し込むという、日本人では思いもつかない試みをしたのである。また上記の解説では日本人と神の関係、さらにヨーロッパの神にまでアナロジーを展開したのである。

#### 第四節 ブライスの俳句観

##### (1) 俳句は全東洋の精華

ブライスは俳句を、東洋の一大現象として捉えている。今までに俳句をブライスのような形で捉えた外国人はなかった。俳句を最初に英訳し、解説をしたW.G.アストン(William George Aston)は、俳句を短歌の一部、短歌の初めの部分という理解であった。バジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)は、俳句を日本の機知に富んだ寸鉄詩として紹介し、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)もチェンバレンの俳句理解の域を出ていない。ブライスは『カルチュラル・イースト』で、上記の人物らと異なる次のような俳句観を述べる。

“In haiku we have an expression of the Zen state of mind. All the deep thoughts and experiences of the Indian, Chinese, Korean and Japanese races flower in them. In spite of their deceptive simplicity, (or because of it) haiku are as profound as the music of Bach, as deeply concerned with the mind of man as the plays of Shakespeare, as a great contribution to world-culture as the **Commedia** or **Don Quixote**.”<sup>190</sup>

「俳句にはインド、中国、朝鮮および日本の人々の思考と経験が開花したものである。人を驚かさず簡潔さにもかかわらず、俳句はバッハの音楽と同様の深さ、シェイクスピアの演劇と同程度に人間の心に深く関与し、「コメディア」や「ドン・キホーテ」のように世界文化へ偉大な貢献をしている」

また「俳句と日本の国民性—中心をなす仏教思想」(『大法輪』)といった一般雑誌



にも、「俳句は全東洋の文化の精華であり、最高峰であって世界の半においてホームー、ダンテ、シェイクスピアやゲーテなどが占めているのと同様の地位を、他の世界の半において持っているという見解を抱いている」<sup>191</sup>と、俳句が東洋文化の花であるとともに世界文芸としての価値を持つとの評価も下しているのである。このような気宇壮大なユニークな俳句観こそブライスの真骨頂といえよう。

## (2) 俳句は禅と同義語

ブライスにとっては俳句イコール禅でもあった。例えば “In haiku we have an expression of the Zen state of mind.「私たちは俳句の中に禅の心を見いだす。」<sup>192</sup>や、“Haiku is to be understood from the Zen point of view.” 「俳句は禅の観点から理解されるべきである」<sup>193</sup>と語る。ブライスの俳句と禅の関連を如何に考えているかを示している。ブライスにとっては、俳句も禅と同様、手段として提供されるのであり、目的ではない。またブライスは、俳句と禅はほぼ同意語と次のように断定している。“I understood Zen and poetry to be practically synonyms, but as I said before, if There is ever imagined to be any conflict between Zen and poetry of haiku, the Zen goes overboard; poetry is the ultimate standard.” 「もしも禅と俳句の間で何か食い違いがあると思われれば、見捨てられるのは禅の方であって、俳句は究極の規範となるのである」<sup>194</sup>とか、“If we say then that haiku is a form of Zen, we must not assert that haiku belongs to Zen, but that Zen belongs to haiku. In other words, our notion of Zen must be changed to fit haiku, not vice-versa.” 「もしも、俳句が禅の一形式であると言うならば、俳句が禅に依存しているのではなく、禅が俳句に依存していると断言しなければならない。換言すれば禅の概念は俳句に合わせるように変えられねばならず、その逆ではない」<sup>195</sup>と俳句と禅の関係を説明する。

ブライスの禅について、師鈴木大拙は、ブライスの死去に際しての『イースタン・ブディスト』(1965)の追悼文で、“his thoughts were closely connected with Zen, though not always in the orthodox tradition.” 「ブライスの思想は禅に強く結びついているが、必ずしも正統的な伝統の禅ではない」<sup>196</sup>と語っているが、もとよりこれは非難の言葉ではない。それは第一章で述べたが、鈴木大拙が著書『禅と日本文化』(プリンストン大学 1959)に、禅の見地にたったブライスの俳句論からの引用を納めていることからみても、非難に当たらないことは明らかである。

仙北谷晃一が「ブライスにおいて、禅と俳句とブライス自身とは三位一体であった。ブライスは禅と俳句の間に本質的な差異を認めていなかった。禅を宗教の一形態と考え、俳句を芸術の一ジャンルと見ること自体、非禅的な見方とブライスの叱責を買うような気がする。」<sup>197</sup>とブライス像を語るように、ブライスの俳句はそのままブライスの禅でありブライスの生き方でもあった。

## (3) 自己の内的世界の表現

ブライスは俳句と川柳で代表される日本の短詩形文学の翻訳、鈴木大拙の影響を

うけた禅の解説、専門の英文学における学生用の英文学概論などを媒介にして、自己の内的世界を表現しようとした。彼は日本語や英語による創作俳句で自己表現をするのではなく、日本の俳句を英語に翻訳し、解説・説明し、さらにそれを英語圏文化における詩歌にアナロジー化することによって、自己の内的世界を表現した。つまりブライスは日本文化を通して自己表現を試みるという困難な作業に挑戦したといえるであろう。

実際現在知られている彼の俳句作品が、朝鮮時代に生まれた「かたつむり」の句と、辞世の句として世に知られる「さざんか」の句、そして反古になった川柳一句が最近発見されたものを含み三句のみであることは、ブライスが自己の創作俳句には意味を見いださなかったことを示している。俳句を無文学の文学と規定し、「俳句は詩を作る道ではなくして、生活の道である」<sup>198</sup>という禅的な俳句観を持つブライスには、日本語や英語での俳句や川柳創作は彼の目的ではなかった。

したがって、ブライスの俳句翻訳書及び研究書を読むにあたっては、それらに詩人としてのブライスの主観や恣意性が多分に含まれていることを前提として読まなければならない。

とはいえ、ブライスの俳句観には、日本人には見だし得ない独特の視点があり、それが彼の俳句観の魅力になっていることも間違いない。少なくとも外国人の俳句に対する理解度において、ブライスは最高のレベルに達しているといえるであろう。

結果として彼の翻訳や解説が、日本文化を西洋に紹介し、東西の異文化交流に大きく寄与し、さらに西洋を中心にして全世界の詩人に文学的影響をもたらしたが、ブライス自身にとって、俳句・川柳の翻訳紹介を素材として、自己の内的世界を示すことが第一の目的であった。

## 第四章 ブライスと川柳

ブライスの業績に関して川柳に関する記述は非常に少ない。一般人の利用頻度が高い『デジタル版日本人名大辞典』（講談社2000）では、「禅や俳句に関する著作がある」との記述はあるが、川柳についての言及はない。『来日西洋人名事典』<sup>199</sup>でもブライスの業績は禅および俳句研究と記されているだけである。

禅を背景にした俳句の解釈や、英文学の中に俳句的要素や禅を見出すブライスは、来日した外国人の中でも日本文化への傾倒には特異なものがあつた。ブライスは「俳句は生き方そのものである」とし、禅的な俳句理解の点で大きな特徴が認められる。しかも、彼は俳句と同様に川柳にも強く魅了され、川柳の英訳書を多く残している。それにもかかわらず、上述の『デジタル版日本人名大辞典』が物語るように、川柳とブライスの関連は、俳句解説者としてのブライスほどには取りあげられていないのが現状なのである。

ブライスは『俳句』1（1949）と同じ年に英訳 *Senryu* を出版し、翌1950年には『俳句』2の出版と、吉田機司と共著で『世界の諷刺詩川柳』を出している。1952年には、『俳句』3、『俳句』4を出し、1957年には *Japanese Humour* を、1959年には *Oriental Humour*, そして2年後の1961年には *Japanese Life and Character in Senryu* と *Edo Satirical Verse Anthologies* を立て続けに出版した。これらの著書の出版年次から判明するように、ブライスは俳句関連の書物とほぼ同時期に川柳の英訳書も世に問うている。*Edo Satirical Verse Anthologies* の中で、彼は *Senryu, Japanese Humour, Oriental Humour, Japanese Life and Character in Senryu, Edo Satirical Verse Anthologies* を通して総数3742句の川柳を英訳したと記している。<sup>200</sup>

W.G.アストン、バジル・ホール・チェンバレン、ラフカディオ・ハーンをはじめとして日本の短詩形文芸に興味を持ち、業績を残した外国人は数多くみられるが、俳句にもそして川柳にも心を寄せて多大な英訳をした人物はブライスをおいて他にはない。「ブライスと俳句」に焦点を合わせた先行研究は見られるが、「ブライスと川柳」の関連を視野に入れないと、ブライスの日本文化観は理解できないと考える。ここでは英訳川柳の黎明期から興隆期、国際化の流れを加味しながら、ブライスの川柳翻訳活動を考察する。

### 第一節 英訳川柳の黎明期から興隆期まで

#### (1) 初めての英訳川柳：和田垣 謙三著『吐雲録』（1914）

英訳川柳史を振り返ってみれば、ブライスが初めて川柳の英訳を手掛けたのではなく、大正時代の教養人であり洒落、ユーモア、諧謔の達人であつた帝国大学教授和田垣謙三が、彼の著書『吐雲録』<sup>201</sup>に収録した古川柳1句が本邦初の英訳である。和田垣の選んだ古川柳は「あの男この男とて古くなり」である。彼は三段階の英訳を行った。最初は直訳で、(That man, this man, so saying gets old.)と1行で訳し、それを意識して (Said she “Nor this nor that,” / And now she’s old and fat.)と2行にし、さらに展開して (Of many a young man, / Said she, “Nor this nor that,” / And now she’s old

and fat.) と 3 行訳にし、2 行目と 3 行目は脚韻を踏んだ英訳を提示する。<sup>202</sup> 英訳の最終段階で和田垣は(And now she's old and fat)を加え、和田垣の感情が強く入った英訳に仕上げています。

和田垣が成した他の分野の英訳について、蘆川忠雄<sup>203</sup>が「・・・新渡戸稲造、櫻井錠二郎、和田垣謙三を三大英文家とし、新渡戸稲造—カーライルに似てゴツゴツでヘビーな文章、和田垣謙三—新渡戸稲造をジョンソン博士の文章とすれば、和田垣はゴールドスミス の文章で、軽快流暢で垢ぬけている・・・」<sup>204</sup>と評し、和田垣の翻訳が秀でていることを述べているが、川柳の翻訳に関してはこの 1 句のみであるので、彼の短詩型の翻訳を語るには少なすぎる。和田垣の英訳川柳のあらたな発掘が待たれる。

## (2) 英訳川柳書の出版：成見 延亀・上床 新助共訳 *Senryu, short witty odes* 『英譯川柳名句選』(1924)

和田垣の『吐雲録』の出版から 10 年後の 1924 年に、成見延亀・上床新助共訳によって *Senryu, short witty odes* 『英譯川柳名句選』<sup>205</sup> (以後『英譯川柳名句選』) が宮崎市の日州新聞社から出版された。成見と上床の経歴は『川柳総合辞典』<sup>206</sup>にも掲載がなく、経歴の詳細は判明していない。

ブライスはこの『英譯川柳名句選』を日本初の英訳と誤解<sup>207</sup>しているが、『吐雲録』に次いで出版されたものであるから、本邦第二弾の英訳川柳といえよう。ブライスは『吐雲録』に入っている和田垣の英訳川柳を見落としたと思われる。『英譯川柳名句選』は柄井川柳選の古川柳 300 句からの英訳で、300 頁から成る。その意味で『英譯川柳名句選』は川柳としては初めて纏められた英訳川柳書である。本書のはしがきで「一般社會の空氣と民衆の感情とを藝術にて表はしたるものを民衆藝術とせば川柳の如きは實にその第一位を占むべきものならずや」と時代の要請を謳い、「柄井川柳の選になる一萬以上の中より最も優秀の名句のみ三百句を抜きしものを集めて一卷となし英譯せし」「川柳は一般詩歌の如く風韻を吟味するものにあらずして徹底を主眼とし字句の美を云ふものにあらずして力あるものたらしむを主旨とする」と、英訳川柳先駆者としての高邁な矜持がうかがえる。さらに「重に形容詞と名詞と僅かの動詞と多くの感嘆詞との排列にて川柳を試んか如何にして川柳獨特の機智とユーモアとに溢れしめ得べき、滑稽、深刻、徹底、人情の機微を穿ち得べき、寸鐵の鋭鋒と活殺自在の妙技とをはし得べきや」と述べ、英訳の工夫と川柳の形態の独自性を述べている。後にブライスは『英譯川柳名句選』にはあまり良いものはない、と *Japanese Life and Character in Senryu*<sup>208</sup>で述べている。しかし、それはブライスからみて英訳が適正でないと思ったからで、本邦初の英訳川柳書として出版の意味をけなしているのではない。『英譯川柳名句選』は大正時代に成された画期的な英訳川柳書であった。『英譯川柳名句選』から一例が挙げる。

「よく見れば手の届く丈澁い柿」

Good gracious!  
Only unripe persimmons  
Are left within my reach.

### (3) 古川柳研究誌に上床新助の英訳川柳：『やなぎ樽研究』（1925）

『英譯川柳名句選』出版の翌年（1925）には古川柳の研究誌『やなぎ樽研究』<sup>209</sup>が、岡田三面子、阪井久良伎、今井卯木、西原柳雨ら当代の代表的な川柳作家を執筆人に迎えて、岐阜の柳書刊行会から創刊される。全 104 冊のうち創刊号から第 5 巻第 1 号（1929）までの 45 冊の見開きに、『英譯川柳名句選』の共訳者の一人である上床新助が S.U.生と称して英訳川柳を寄せている。毎号第 1 頁に 3 句、総数 135 句に及ぶ。上床新助は前年に出した成見延亀との共著『英譯川柳名句選』の出版によって、英訳川柳を受容する時期が到来したと感じたのかもしれない。一方、読者は 4 年間（1925～1929）にわたり 45 冊の見開きに掲載される川柳の英訳が醸し出す言葉の世界を、川柳の新展開として楽しんだ。それゆえに 4 年間にわたり英訳川柳の連載が継続したのであろう。川柳の短さに合う語彙を吟味して、状況を理解しやすくした上床新助の英訳を『やなぎ樽研究』から引いてみる。『英譯川柳名句選』に続き、精力的に川柳の英訳をこなした上床新助に関する資料は乏しく、彼に関する新しい資料の発掘が待たれる。

「あいさつに女は無駄な笑ひあり」（古川柳）

In exchanging salutations  
Almost all women will use  
Empty words and forced smiles.

ちなみに、ブライスはこの訳について *Japanese Life and Character in Senryu* の序文の中で英訳はかなり良いとほめている。和田垣謙三の『吐雲録』を除く、前出の『英譯川柳名句選』と『やなぎ樽研究』の 2 点は、ともに上床新助が関わっているが、ブライスの川柳に関する著書の出版よりかなり以前のものである。ブライスが自分の著書の序文に『英譯川柳名句選』と『やなぎ樽研究』について記述していることから、ブライスはこれらの英訳川柳書を資料として意識していたと思われる。

### (4) 辞典の訳例に川柳：斎藤 秀三郎『斎藤和英大辞典』（1928）

さらに、明治・大正期を代表する英語学者・教育者であった斎藤秀三郎(1866～1929)は多くの英語教科書とともに、英語辞書・文法書の編纂に従事した。中でも『斎藤和英大辞典』<sup>210</sup>は復刻されていて、現在も多くの読者を確保するほど内容の濃い辞典である。序文で「日本人の英語は、有る意味で、日本化されなければならない」と述べる。そして文例に、和歌・俳句・漢詩・川柳・都々逸などの短詩の英訳を 170 例以上も取り上げる。その一例と

して川柳の英訳を引いてみる。

「居候三杯目にはそつと出し」

The dependant asks

A third refill of rice

In a hardly audible voice

居候はアメリカ英語では **dependent** となるが、『斎藤和英大辞典』出版当時の日本は、イギリス英語の全盛期であった。斎藤はイギリス英語の **dependant** を使っている。また斎藤の短詩型の英訳は全て脚韻を踏み、英詩の影響が見て取れる。

##### (5) 阿部佐保蘭の活動：「川柳翻訳研究会」(SHK) の創設

和田垣謙三『吐雲録』(1914)、成見延亀・上床新助共訳『英譯川柳名句選』(1924)、『やなぎ樽研究』(1925)、斎藤秀三郎『斎藤和英大辞典』(1928)の4点は、英訳川柳の黎明期の所産といえる。

これらの所産のうえに、英訳川柳の研究活動は一段と盛大になる。先ず第一に1937年には、宮森麻太郎の指導のもと、阿部佐保蘭を中心に「川柳翻訳研究会」が創設されたことが注目される。第二に、同研究会は『SHK』という機関紙を発行したことが特筆される。

創設に至る前段階として、1933年には笠原路生が『川柳雑誌』に「川柳の翻訳について」(同書110号)、麻生路郎が「五七五の翻訳(1)」(同書116号)、「五七五の翻訳(2)」(同書121号)等の川柳英訳に関連する論文を出し、「川柳翻訳研究会」設立の準備は十分に整っていた。「川柳翻訳研究会」が設立された1937年は、阿部佐保蘭による「川柳の翻訳について(1)(2)」、「宮森氏の英訳川柳」(『川柳きやり』)など川柳翻訳に関する論文が続出し、川柳は翻訳興隆期に突入する。

また、この1937年は「川柳翻訳研究会」の機関誌である『SHK』第1号が出版された。編集兼発行人は阿部潔志(佐保蘭)であり、宮森麻太郎訳「川柳英訳名句集」、麻生路郎「SHKの首途に」、諸家推薦「英訳向き古今川柳名句集」などが誌上を飾った。

阿部佐保蘭の考えた「川柳翻訳研究会」の目的は、川柳の海外普及のために外国人にも分かる英訳をすることであった。「浮世絵は、海外でWONDERFULということで、日本内地でもワンダフルということになりました。川柳もどうもこの道を辿りそうです。そこで必要なのは、川柳を海外に普及することです。それには、まず外人にも、わかるように、川柳を翻訳することであります。このことは、非常にむずかしいです。それだけにこのことに手をつけた人は暁天の星であります。その前人未到とも言うべき世界を開拓するのが、我々「川柳翻訳研究会」の仕事であります。」<sup>211</sup>と抱負を述べている。

阿部は、まずジャパニズムへの関心が浮世絵の海外移入から始まったように、川柳も海外の詩人に関心を持たせることが、翻って国内での川柳翻訳への道に通じると考えた。彼

は、戦後、慶応大学教授の堀英四郎の推薦でブライスと交流する機会を得た。日本の川柳人と川柳の心を理解する外国人とが翻訳にあたることこそ、川柳にとってベストの翻訳が生まれると確信していた阿部は、川柳作家であり英語にも理解のある前田雀郎<sup>212</sup>と、ブライスの両者により、海外へ発信可能な英訳ができないかと考えた。川柳の翻訳を通して川柳を海外へ紹介することをライフワークとした阿部にとって、ブライスは待ち望んだ人物であった。しかし、阿部の夢が実現しないままブライスは1964年に死去した。それでも阿部はブライスの死から2年後に、当時の川柳翻訳活動（主に英訳川柳）を『川柳と翻訳』に纏め、英訳による川柳の海外発信の意義を考察し唱道している。

## 第二節 ブライスと川柳の出会い

川柳と同様に短詩形の俳句は、明治時代に来日したバジル・ホール・チェンバレンなどのお雇い外国人によって初めて翻訳されたのに対して、川柳は大正時代に和田垣謙三の『吐雲録』、成見延亀・上床新助共訳の *Senryu, short witty odes* 『英訳川柳名句選』、上床新助が『やなぎ樽研究』に掲載した英訳川柳、『斎藤和英大辞典』の訳例として川柳の英訳を出した齋藤秀三郎ら日本人によって初めて英訳された。そのなか、ブライスは外国人として初めて川柳の英訳を試み、彼の著書 *Senryu* が出版されたのは日本の終戦から4年後の1949年であった。ブライスは京城帝国大学教員時代に、禅仏教に興味を持ち、鈴木大拙の著書に影響を受けた。同時に日本語学習<sup>213</sup>の手段として俳句の英訳書を読み始めた。それではブライスと川柳の接点はどこにあったのだろうか。この疑問への答えは、前述した *Japanese Life and Character in Senryu* の序文にある。ブライスは、自分の「内なる運命」として、ワーズワース William Wordsworth の持つアニミズムを自己の文学的アイデンティティとし、菜食主義に至り、俳句の道に入る。そして、鈴木大拙の禅書を通して禅に出会い、川柳に行きついた。ブライスにとっては、俳句—禅—川柳は三位一体であると理解できる。それゆえブライスの俳句観ならびに川柳観には、彼の信条となった禅仏教というフィルターがかかっていることを理解しなければならない。

ブライスは1942年に初めての著書である *Zen In English Literature And Oriental Classics* 『禅と英文学』<sup>214</sup> を出版する。16年間過ごした朝鮮時代から鈴木大拙の禅書に影響を受け、臨済宗妙心寺京城別院に参禅し、華山大義老師の指導を仰いだ。ブライスは *Zen In English Literature And Oriental Classics* 『禅と英文学』に華山大義老師への献辞を記している。1940年、日本本土に家族と共に移住し、第四高等学校の傭入外国人教師となる。翌年1941年に金沢で、禅の師と仰いだ鈴木大拙に初めて会う機会を得る。その後、ブライスは俳句関連書のみならず、川柳書や東洋のユーモアについての著書に、「Dedicated to DAISSETZ SUZUKI who taught me that I know」<sup>215</sup> や「Dedicated to DAISSETZ SUZUKI who taught me not to teach」<sup>216</sup> を入れるほど鈴木大拙を信奉した。

さらにブライスは禅世界を世界に発信する鈴木大拙の手助けをするとともに、最初に出版した1942年から没年の1964年に至るまで、学習院大学をはじめ多くの教育機関で教鞭

をとりながら、禅書関連書、俳句関連書、川柳関連書、学生用英文学テキスト、論文、エッセイ、視聴覚教材、さらに『国立大学入学試験英語問題選集』<sup>217</sup>など膨大な著作物を生み出していった。

### 第三節 ブライスと川柳人の交流

#### (1) 宮森 麻太郎

慶応義塾の教授ならびに東洋大学教授を歴任した宮森麻太郎(1868-1952)は、「川柳翻訳研究会」の阿部佐保蘭がもっとも尊敬した英文学者であった。宮森は『近代劇大観』(玄文社、1921)、『英米近代劇一幕物十種』(春秋社、1926)、『近松とシェークスピア：傑作俳句の英譯』(同文社、1929)などの著書において、欧米近代劇の紹介をするとともに、『英譯近松傑作集』(丸善、1928)、*One Thousand Haiku, Ancient and Modern*『英譯古今俳句一千吟』(以下『英譯古今俳句一千吟』)(同文社、1930)、*An Anthology of Haiku, Ancient and Modern* (Maruzen, 1932)など、日本文学を英訳して海外へ紹介することに努めた。そして『近松とシェークスピア：傑作俳句の英譯』、『英譯古今俳句一千吟』、*An Anthology of Haiku, Ancient and Modern*の三冊は、宮森が日本通といわれる西洋人の英訳の間違いを正したいとの思いから英訳に取り組んだ。

例えば『近松とシェークスピア：傑作俳句の英譯』においても「私が俳句を翻譯するに至った動機は、……一口に言へば英米人の翻譯に誤譯の多いのを不満に思ひ、己むに己まれずして執筆したのである。今一つ英米人は兎角『簡潔は俳句の魂だ』(Brevity is the soul of a haiku.)と云ふ事を理解し兼ねる所為か、くだへしいパラフレーズにして俳句の妙味を殺すのも遺憾である。私は原句のまゝの姿を如實に寫し出さうと努めた」<sup>218</sup>と、英米人の俳句の翻譯に相当の不満があったことが俳句英訳の第一の理由であったと述べている。

1932年出版の*An Anthology of Haiku, Ancient and Modern*は、1930年出版の『英譯古今俳句一千吟』の内容を増幅し改定したものであると宮森は述べる。<sup>219</sup>『英譯古今俳句一千吟』の出版の目的は、①一般の英文研究者にたいする日本文学日本文学英訳の参考資料の提供、②大学及び専門学校の和文英訳教科書としての使用であった。<sup>220</sup>さらに宮森は英訳の俳句に題を付けた。「便宜上著者が勝手に附けたものでありますから、茲にちよつと斷つて置きます」<sup>221</sup>と、述べる。二年後に出版された*An Anthology of Haiku, Ancient and Modern*は英語で執筆され、英訳俳句には日本語の原文が付き、その翻譯、そして『英譯古今俳句一千吟』よりさらに詳細な注釈が加わってハンディな俳句紹介書であったので、海外の日本文学研究者に愛用された。

またブライスは京城帝国大学勤務時代に、日本語学習の一環として、宮森の*An Anthology of Haiku, Ancient and Modern* (Maruzen, 1932)を読み、俳句を学ぶなどの影響を受けた<sup>222</sup>。

宮森は阿部佐保蘭の「川柳翻訳研究会」の顧問的な存在であったので、阿部は宮森に川柳の翻譯を手紙で依頼した。すると宮森は*An Anthology of Haiku, Ancient and Modern*の序文にある*Haiku and Epigrams*の中に、川柳の英訳を引用したのが19句あると返事<sup>223</sup>を出した。



その中で宮森は、西洋の最短詩エピグラムと、17音節の諷刺の詩である川柳とが非常に似ていると述べている。<sup>224</sup>次に引用した川柳は宮森がなした英訳の1句である。

盗み心のないのが乞食の自慢なり 半文銭

It is a begger's pride

That he has not a thieving mind.<sup>225</sup>

## (2) 吉田 機司

ブライスは1949年に*Senryu*を出版し、翌1950年には吉田機司(1902-1964)と『世界の諷刺詩川柳』を出版する。戦後の混乱から脱しきれていない時代であった1950年10月25日に、「英訳川柳史」にとっても、また「川柳の国際化」にとっても記録すべき出版が『世界の諷刺詩川柳』であった。ブライスにとって初めての日本語による出版であった。

吉田は阪井久良伎に川柳を師事し、千葉で「川柳祭」を主宰していた。この書が共著で出版された経緯を吉田は記している。<sup>226</sup>それによると、ブライスが突然彼の自宅を訪問し、日本人は自国の文化を軽んじていると嘆いた。吉田が「日本人というのは外国人からほめられないと自分の持つてゐるものを有難がらない国民です。……一般の日本人に川柳を紹介して頂けませんか」と言うと、ブライスは「それはいい考えです、殊に日本の知識人にね……、二人で分擔をきめて書きましょう。日本人の皆さんに、国際的名誉と、自身に対する尊敬の念を起させるためにも」と答えた。<sup>227</sup>このような二人の対話から生まれたのが『世界の諷刺詩川柳』であった。同書はB6判、定価190円、茜色の表紙には二匹の蛙が水たまりを眺めている。蛙の大きな目玉は世の動きを鋭く観察する川柳人そのものである。ブライスは川柳を世界に通じる諷刺詩と認識していた。彼は初対面の吉田に、「なぜ、日本の方は、先祖や、自分たちの持つてゐるものの良さを自分自身で認めることが出来ないのでしょうか。日本人が、俳句や川柳に見られる理想主義、……ほんとうに価値あるものと見なさなかつたら、どうして、他の國の人々がそれらを尊敬することを期待出来ましょう。川柳は日本獨特の人生詩で、日本民族が生んだ世界に大いに誇ることの出来る傑れた諷刺詩です。そして、詩の精神というものは、すべての人間に共通なもので、詩の心には國境がありません。だから、川柳は、ヨーロッパの人にも、アメリカの人々にもよくわかるのですし、又、つとめてわからせるようにしなければならないのです。」<sup>228</sup>と語り、吉田はブライスの川柳観に驚愕する。

それまでブライスのように川柳について詳しく論じ、また獨特の川柳観を持つ外国人は皆無であった。しかし1950年当時、日本社会が急速にアメリカナイズしていく中で、日本人自身に自国の文化に自信を持つてほしいと云うブライスの意見に耳を傾ける日本人は少なかった。

## 第四節 川柳は諷刺詩：(『世界の諷刺詩川柳』出版)

『世界の諷刺詩川柳』(1950)を吉田機司<sup>229</sup>とともに出したブライスは、前年に出版した *Senryu* の副題を *Japanese Satirical Verses* と付けており、ブライスは川柳を日本の諷刺詩と捉えていたことが分かる。これは川柳の根本に諷刺の要素を持つことをブライスが認識していて、この共著の題名にも『世界の諷刺詩川柳』と名づけたと思われる。出版の動機の中でブライスは吉田に「川柳は日本獨特の人生詩で、日本民族が生んだ世界に大いに誇ることの出来る傑れた諷刺詩です」<sup>230</sup>と述べている。このことからブライスは川柳を「諷刺詩」と捉えていることがわかる。また川柳は「笑いの詩」であり、「滑稽詩」であるとの認識が、吉田とブライスの共通の認識であった。つまり川柳は「諷刺詩」、「笑いの詩」、「滑稽詩」と両者は捉えていた。

草野心平が「川柳は永い歴史をもつていて、日本に於ける諷刺詩のなかで最もはつきりした系譜をもつ重要なジャンルである。……(中略)……いま東と西の研究者が深い愛情と理解とを以て共著することも、川柳が好事家の埒内に止まるものでなく、国際的性格をすらもつていることを暗示している」と、『世界の諷刺詩川柳』の題名の特徴を捉えた推薦の辞<sup>231</sup>を添えている。ここで草野は川柳を「諷刺詩の系譜を持つジャンルの詩」と断言している。

『世界の諷刺詩川柳』の構成と内容をみると、まず吉田が第一編「笑の詩川柳」を担当し、(日本国民性と川柳)、(笑と川柳)、(川柳の可笑味)に分類している。(笑と川柳)のなかで、吉田は「川柳は、笑の詩で、人生に愉しさを興える文藝である。劇でいえば喜劇であり、絵畫であれば漫畫であり、小説でいえばユーモア小説である。川柳は、十七文字に簡素化された滑稽詩である」<sup>232</sup>と述べ、川柳は「笑の詩であり、滑稽詩」とであると定義する。そして吉田は{素材上の特質}の中の一項目に(諷刺川柳)をいれ、「時の権力者に對する皮肉や諷刺は、一種の滑稽味を醸し出すものである。その對象となる矛盾や不正が、萬人の憤りであればあるほど強い共感が得られ、その穿ちが深刻であるほど、効果的となる」<sup>233</sup>と述べ、賄賂の異名である(にぎにぎ)を使った川柳、「役人の子はにぎへをよく覚え」<sup>234</sup>を例示して、諷刺は川柳の素材上の特質の一つであると述べる。

ブライスは第二編「川柳のいのち」を担当し、(川柳の滑稽味)の項目で、「川柳の可笑味については、共著者が詳述している。私はこの章に於て、ちがった観点から、川柳に見られる種種の滑稽を例證して行つて見たいと思う」<sup>235</sup>と述べ、{峻厳なる滑稽さ}、{悲劇的な滑稽さ}、{皮肉}、{言葉の面白味}、{温和な滑稽さ}、{優しい滑稽さ}、{間接的な滑稽さ}、{沙翁流の滑稽さ}と滑稽さの種類分けをする。なかでも{沙翁流の滑稽さ}では日本人に見られない観点にたち、「シェイクスピアの滑稽というのは、機智、簡潔、人間性、容赦、理解、必然性等、あらゆる種類の性質が独特に結合されて起るものである」と述べ、「有つてさへ況や後家に於ておや 古川柳」を例に出して、「人妻でさえ徳の道を踏み外すかも知れないし、後家の場合は一層容易に了解する事が出来る」と解説<sup>236</sup>を付ける。「川柳のいのち」にあるブライスの成した項目分けは、日本人にはない川柳への視点を提示して日本人読者を刺激した。

吉田は(笑と川柳)でウィット、サタイヤ、ユーモアの定義の拠り所として、『帝国文学』の編集委員であった武島羽衣<sup>237</sup>が『帝国文学』に書いた(川柳と滑稽)を引いて、「滑稽の起る場合には三つある。その一つは、二つの事物の間に意外の關係の發見される時で、その二は、尊きもののがけなされる場合である。そして、後者には二つの場合があり、中傷諷刺の目的ある者と、ないものとである。第一の場合に起る滑稽をウキットといひ、第二の場合に起る滑稽にして諷刺の傾向のあるものをサタイヤといひ、その傾向のないものをユーモアといふ。」<sup>238</sup>と説明している。つまり滑稽はウィット、ユーモア、サタイヤという要素を持つ。滑稽は二者間の意外性が發見される時、そして尊敬されるべきものがけなされる時に起る。また尊敬されるものがけなされるのに、中傷諷刺の目的のあるものとないものがある。滑稽にして諷刺があるものをサタイヤ、滑稽にして諷刺の傾向のないものをユーモア、そして二者間の意外性の發見に生ずるのをウィットと呼ぶと纏めている。

ブライスは「川柳の道は、川柳を笑ったりほほ笑んだりしながら万物を理解する」と、「川柳は笑い」であるとも、別著 *Japanese Life and Character in Senryu* の序文において述べる。ではなぜ両者は「川柳は諷刺」と意味するタイトルを『世界の諷刺詩川柳』につけたのかと疑問がわく。吉田は、『世界の諷刺詩川柳』で、川柳を「笑の詩川柳」と捉えている。ブライスと吉田の両者で、川柳は「笑いの文藝」であることは一致している。

『広辞苑』(第六版 岩波書店)では川柳を「発句とは違って、切れ字・季節などの制約がない。多く口語を用い、人情・風俗、人生の弱点、世態の欠陥等をうがち、簡潔・滑稽・機知・諷刺・奇警が特色」と説明しているように、滑稽・機知・諷刺は川柳の特色として同一線上に置かれている。その意味で川柳は「滑稽の詩、機知の詩、諷刺の詩 奇警の詩」と言ってもおかしくない。

ブライスはユーモアと川柳について、「日本のユーモアは川柳に最高のものがある」(*Japanese humour is at its best in senryu*)<sup>239</sup>と述べていることからしても、ブライスも吉田も川柳は「笑いの詩」であり、「滑稽詩」であると認識し、滑稽はウィット(機知)、ユーモア(滑稽、可笑味)、サタイヤ(諷刺)という要素を持つので、その中のサタイヤ(諷刺)を、滑稽の特質として際立たせ、『世界の諷刺詩川柳』の題名に使ったのではないだろうか。

## 第五節 ブライスの川柳観

ブライスの川柳観を示す記述が *Edo Satirical Verse Anthologies* 『江戸川柳』<sup>240</sup>の序文にある。

“When we look back over the satirical verses given in *Senryu*, *Japanese humour*, *Oriental Humour*, *Japanese Life and Character in Senryu*, and *Edo Satirical Verse Anthologies*, a total of 3,742, we cannot help recalling the Greek “Know thyself!” This is also the injunction of Zen as it comes down from early Upanishad times in India, which discovered that the self is the Self. Each of these verses then has its value in that it reveals something of the self and the Self, of

human nature and the Nature of Things.”

「わたしの著した『川柳』、『日本のユーモア』、『東洋のユーモア』、『川柳における日本人の生活と気質』、『江戸風刺詩選集』の総数 3742 句におよぶ川柳を振り返ってみると、ギリシャの箴言「汝自身を知れ」を思い起こさざるを得ない。「汝自身を知れ」とは、自分自身が何であるか見出したインドの初期ウパニシャッド時代から梵我一如の禅にも受け継がれている戒めである。これらの詩の其々は、自我や宇宙の原理が何かを示す時に価値を持ってくる。」

上記のように、ブライスは川柳の本質はギリシャの箴言「汝自身を知れ」にあり、人間の本性は何であるのかを思い起こさせることが川柳の根本精神であると述べている。自省を促す「汝自身を知れ」という言葉は、アポロンの神殿に掲げられた語であり、ソクラテスはこの語を自らの行動上の標語としたと言われ、欧米人の暮らしに深く根付いた指針であることから、英語圏の読者はブライスの川柳解説を容易に受け入れることができたであろう。さらにホーマー、シェイクスピア、ラテン語の詩、聖書らの西洋古典を川柳と比較・対照・相似させることで、川柳の内容が西洋の文学の中にも見出されると説明する。ブライスは川柳のみならず俳句の解説書においてもこの方法を駆使した。

*Japanese Life and Character in Senryu* の表紙ジャケットには「日本人が川柳を作り上げたが、川柳それ自身もまた日本人を作り上げた。川柳の心は日本人の心の一部であります。川柳は日本人自らの生き方です。……川柳はどんな状況であろうとも世間を真面目に、そしてユーモアを以って捉えようとします。日本人の暮らしと気質を理解するだけでなく、英国人や英語圏の人々が自分自身の暮らしや気質を見つめることができる」<sup>241</sup>と、川柳にこそ日本人の暮らし方や気質が表現されていると記述がある。さらに、川柳は人間観や人間理解、そして海外の読者による日本人理解には最適の文芸だと、ブライスの川柳に対する向き合い方を述べている。川柳の本質が「汝自身を知れ」にあるとするブライスの川柳観を示した記述である。ブライス自身、「日本人はわたしのことを、川柳を賛美しすぎる外国人と言わないだろうか、いや言うだろうね」<sup>242</sup>と、ユーモアたっぷりに自己の姿を露呈している。

## 第六節 俳句と川柳の違い

ブライスは自己の俳句観について、「蕪村は芭蕉に従い、子規は蕪村に従った。しかし芭蕉と一茶は誰の真似もせず、彼ら独自の道を歩んだ」<sup>243</sup>と述べる。禅の造詣が深かった芭蕉を「人生の詩人」、芸術家・蕪村を「画室の詩人」、波乱万丈の人生を送った一茶を「運命の詩人」と呼んだ。四人の中で一番日本人らしいのは一茶で、「蚤ども、夜永だろぞさびしかる」を紹介し、「この句には仏教思想が人間の真性を示し、一茶は人間味豊かな人である」<sup>244</sup>と評価する。

ブライスは人間の喜怒哀楽を表現する文芸として、俳句同様に川柳を好んだ。例えば「蚤」

の句では井上剣花坊の「肥りたる蚤を潰せば孕み居り」を提示し、俳句でも取り上げられる(蚤)が、川柳では孕んだ(蚤)の不条理性を詠むところにブライスは着眼した。「蚤を潰した時、澤山の卵が出て来た、という経験を持たぬ人は殆どいないであろう。しかしこれは胸悪くさせる事なので、川柳作家以外には歌にふさわしい等と考える様な人はいない。……宇宙は絶えず破壊しつゝ又創造して行く美を持つているにも拘わらず、我々はそれを厭うべきもの、嫌らしいものと見ている。食べたり食べられたり、潰したり潰されたりするこの世界が、人生のあらゆる歩みの中に繰り返されて行く。我々は孕んでいる蚤を潰し、神は妊婦を破壊し給うのである」<sup>245</sup>と述べるブライスの解説は、川柳解釈に新たな見解を示した。

また川柳を「人生の批評」<sup>246</sup>と言い切るブライスは、日本の知識人が川柳を俳句よりも低く評価することが理解できなかつた。俳句も川柳も世界文芸と考えるブライスにとって、川柳と俳句は表現の内容と視点が異なるだけであつた。

俳句と川柳の違いを「エマソンがいつている様に『事物が権力を握つて、人間を支配している。』」のである。之が、川柳の見方である。川柳と俳句の大きな相違は、俳句が、平安時のものであり、……人生の精華であるのに對し、川柳は、苦難、不幸、屈從時のものである。川柳は、地中の迷路を手探りで行く人生という苦い根を表現する物なのである。」<sup>247</sup>と述べた。

また両者の滑稽における相異を、「川柳の方が、目的と結果、理想と現實、肉體と精神、威厳と無恥との對立が容易に見られる。俳句の滑稽は、川柳のより遙かに不鮮明であるが、深くて、老獪で、隠れながらもほのかに匂つている」<sup>248</sup>と述べる。

ブライスは川柳と俳句の相違を取り上げる題材にも違いがあるという。特に性に対する川柳と俳句の違いである。「俳句には性は殆んど存在しているといえないが、川柳に於ては甚だ多く取扱われている。基角、嵐雪、蕪村、虚子等の半戀愛的な句も多少ある事は事實だが、それらは無いのと同じである。川柳は先ず第一に、男と男、男と女との生き〜とした關係に干與している。吉原を主題に扱つている句が非常に多くあるのもこのためである」<sup>249</sup>と述べる。例えば、古川柳の「すつぱりと癒りましたと鼻が落ち」の句を「しば〜介入する肉體の病である。我々は、その男の顔を見る時、その醜さの蔭にうるわしき営みを見、『あらゆる過失は真理の影像である』ということのを想起す事が出来る」<sup>250</sup>とする解説は、日本人の川柳作者も一般の日本人にも、ましてや日本の短詩形文芸に興味を持ったお雇い外国人や在留外国人にも見られないブライス独特の解釈であつた。

## 第七節 ブライスの創作した俳句と川柳

ブライスは俳句や川柳の作品創作に関心を持たなかつた。ブライスは「俳句は文学を超越した文学、いわば“無文学の文学”」と思います。俳句は詩を作る道ではなくして、生活の道であるというのが私の俳句観であります。俳句は遊びではない。生活の道であり、修身の道であります。従つて佛教、道教、儒教等の研究なくして俳句はわからないと思いま

す」と、自己の俳句観を述べている。<sup>251</sup>ブライスは、俳句の創作に関心を持つのではなく、俳句を通して自己の精神修養を確立しようとした。また「俳句を余りにも尊敬しているので、俳句を創作することはできない」とも言い、創作への関心のなさを示している。川柳に対しては、むしろ自己の嗜好に合った古川柳や川柳を英訳して、そこから日本人の暮らしを読みとることを好んだ。とはいえほんの少数であるが、よく知られているブライスの俳句作品が2句残っている。

一つは京城帝国大学時代に創作された「葉の裏に青い夢見るかたつむり」で、これにはブライス自身の英訳 (A snail/Dreams a blue dream/On the back of a leaf.) も付いている。この俳句をブライスは気に入っていたのだろうか、いくつかの変化形が生れた。調査すると、現在、下記のような七種類のバリエーションが判明した。①が最初の俳句であるが、③④⑤はブライス自身が取材した記者に紹介したものである。②は京城帝大時代の教え子である笠井清 (昭和7年京城帝大法文学部卒、元神戸大学教授) が直接ブライスから聞いた俳句である。<sup>252</sup>

- ①葉の裏に青い夢見るかたつむり (京城帝大時代作 1938) (『回想のブライス』1984)
- ②葉がくれに青い夢見るかたつむり (京城帝大時代作 1938) (『回想のブライス』1984)
- ③木下闇青い夢見るかたつむり (『北国毎日新聞』1940.12.6)
- ④葉の下に青き夢見るかたつむり (『北国毎日新聞』1941.4.13)
- ⑤下やみに青き夢見るかたつむり (『北国俳壇』6月号 1950)
- ⑥木の裏に青き夢見る蝸牛 阿部佐保蘭『川柳と翻訳』(中央公論事業出版 1966)
- ⑦下闇に青き夢見るかたつむり 尾藤三柳編『川柳総合事典』(雄山閣 1984)

いくつかの変化形③④⑤にブライス自身の手が加わっているとはいえ、①の「葉の裏に青い夢見るかたつむり」がブライスの俳句として定着している。

もう一つは、辞世の句として知られる「山茶花に心残して旅立ちぬ」<sup>253</sup>である。これにも、「山茶花に心残して旅路かな」<sup>254</sup>という変化形があるが、この句は阿部佐保蘭<sup>255</sup>がブライスの死後、ブライスの富子夫人より聞き取ったものなので、阿部の聞き違いではないかと思われる。ゆっくりと着実な歩みのかたつむりに自分を重ねて青い夢を育む未来志向型人間ブライスを語る「葉の裏～」に比べれば、「山茶花～」は非常に日本的な感性の俳句である。朝鮮時代に作句した「葉の裏～」から日本在住の年月を経て最終の場で得た「山茶花～」はまさにブライスの日本文化受容の具現化とみることができる。

1999年には今まで予想もしなかったブライスの川柳作品が発見された。『世界の諷刺詩川柳』出版の4日後、1950年10月29日開催の第2回京浜川柳大会に参加したブライスは、4句の川柳を書きとめていた。榎田珍林が捨てられたブライスの4句が記載された句箋の1句を所持していた。それが出現したのである。<sup>256</sup>その句はブライスの唯一の川柳作品といえる。発見された句箋には「ねずみ取り買うぼんさんのまあるい目」と日本語で書かれていた。(ねずみ取り)(ぼんさん)(まあるい目)が浮かびあがり、日本人川柳作者では取り上げない組み合わせがユーモラスな作品である。残りの句箋も捨てられずに現存してい

ばと惜しまれる。

## 第八節 川柳の現況

ブライスにとって、俳句は禅の修行と同様の位置づけで「俳句の道」であった。そして川柳は、人間の喜怒哀楽を礎におき、40年の長きにわたる日本での暮らしのスパイスであった。特にユーモア、滑稽、諧謔、諷刺はブライスの好む世界であったので、川柳の中に自己の心を遊ばせた。ブライスの長女である春海ブライスは、父は「シェイクスピアの四大悲劇で、共通のことはユーモアがないと言っていた。川柳は本当に好きだった。川柳のことを健康を保つための栄養と言っていた」<sup>257</sup>と語る。その言葉は川柳がブライスの暮らしのスパイスであったことを物語っている。俳句を生きる道として修業し、生活の喜怒哀楽を川柳の道に託すことで、ブライスは異国での「ブライスの道」を歩いた。

日本文化を愛し、俳句や川柳の英訳をこなし、それによって自分の文学的な世界を構築していたブライスに、戦後の日本人が自国の文化を認識しないことはいたたまれない苛立ちをもたらした。自著 *Senryu* で、「平均的な日本人や特にいわゆるインテリは、川柳を低く見なしているが、これは全くの不平等である。川柳は文化として高い価値を持っている。川柳は確かに人生の批判主義であり、川柳の中に絶対的な哲学を持ち、堅苦しい表現を否定する美德と永続性を川柳は含意している。」<sup>258</sup>と述べ、川柳を高く評価した。

ブライスが懸念を示した時代から60数年経たる現在も、川柳は日本人に冷遇されている。そんな状況を切り開こうとするシンポジウム「川柳が文芸になるとき」が、2011年9月17日に名古屋で開催された。パネリストの一人である荻原浩幸は「川柳というジャンルが『冷遇』されているとしか言いようのない状態をめぐる社会的な状況を打破して、川柳の現在に大きな活気を与えるためには何が必要となるのかが、パネルディスカッションのスタイルで議論された。近年においてははっきりと、方法論や川柳観の曖昧さを打ち破ろうとする方向へスライドしたのを感じる。昨今、良質の川柳評論集の刊行なども増えつつあり、川柳が文芸としての力をいかに見せつつあるのは間違いないようだ」<sup>259</sup>と、現況と今後の期待を述べている。

60数年前に登場したブライス独特の川柳観は、「冷遇」されている川柳に大いなる栄養を与えてくれると筆者は確信している。しかし日本人の中でも、川柳作者においてもブライスの業績は広く知られていないのが現況である。さらにブライスを知る数少ない日本人も、ブライスと俳句ならびに禅との関連は認識しているが、ブライスの川柳への傾斜を知る人は非常に少ないのが現状である。ブライスの著書がほとんど英語で書かれ、その英訳川柳が周知されなかったことが一因であることは否めない。しかし今後、ブライスの川柳英訳と彼の川柳解説が、英語の解説というバリアを越えて、日本の川柳の活性化につながることは大いに期待できるであろう。

海外には俳句同様に川柳に関心を持ち、川柳を書く詩人も増えてきている。一方、日本人川柳作家にみられる川柳の国際化に対する関心の低さ、川柳人の英訳に対する認識の低

さなどの問題はあるが、インターネットを通して海外との川柳交流は瞬時に行えるようになった。内外の外国人による川柳や日本人による川柳の英訳が増えてくると、川柳の英訳に貢献したブライスのなした仕事が再評価されるに違いない。



## 第二部

### 第一章 R.H. ブライスに影響を受けたアメリカの詩人

筆者がブライスの名前を初めて目にしたのは、ピューリッツァー賞受賞詩人ゲイリー・スナイダー(Gary Snyder 1930-)をモデルにしたジャック・ケルアック(Jack Kerouac 1922-1969)の小説『ダルマ・バンズ』*The Dharma Bums*<sup>260</sup>を手にした時だった。その後、この小説の翻訳が『禅ヒッピー』、『ジェフィ・ライダー物語』<sup>261</sup>という題で出版された。日本の読者は、アメリカの若者の東洋への飽くなき関心の深さを知ることができたのであるが、筆者が興味を持ったのは、ダルマ・バンズつまり達磨の放浪者と付けられた表題からも分かるように、主人公が仏教に興味を持ち、寒山の詩を英訳し、そして彼の愛読書の中に仏教書に混じって、ブライスの『俳句』のテキストや鈴木大拙の全集があることであった。このケルアックの小説を読んで、アメリカ現代詩へのブライスの影響に少なからず驚いた。そして東西文化の出会いの場を提供する源になったブライスという人物と彼の著作に興味を持ちはじめたのである。

第二次世界大戦後の俳句の海外普及は、ブライスに負うことが大であり、彼の功績を抜きにしては語れない。今日、世界各地で俳句を作る詩人のほとんどが、英語で書かれたブライスの*Haiku*『俳句』4巻を入門書の一つとして参考にしているほど、彼は俳句紹介の先達としての役割を果たしてきた。戦後アメリカでは、日本文化や日本の宗教への強い関心が沸き起こった。俳句への関心も例外ではなく、鈴木大拙の説く禅仏教とともに高まった。禅と俳句を同義語におくブライスが著わした『俳句』4巻は、ジャック・ケルアックやアレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg)、ゲイリー・スナイダー、リチャード・ライト(Richard Wright)、J.D.サリンジャー(J. D. Salinger)ら詩人や小説家にも多大な影響を与え、1950年代のアメリカの詩壇を席卷したのである。

中でも、アメリカ俳句の創始者の一人である禅俳句の巨匠、ジェイムズ W・ハケット(James W. Hackett)は、ブライスの唯一の弟子として、「俳句の道は人の道なり」(the way of haiku is the way of man)をモットーに現在も詩作を続けている。俳句を禅仏教と結びつけて欧米に広めたのは鈴木大拙やブライスであるが、それを創作として具現化し、創作の上で俳句は禅なりという俳句観を確立したのがハケットである。第二部はブライスアメリカ俳句を中心に第一節「ブライスのアメリカ俳句への影響」、第二節「ジャック・ケルアックと俳句」第三節「アレン・ギンズバーグと俳句」第四節「アメリカ俳句の真髄」を紹介することで、今日のアメリカ俳句の礎を築いた1950年代から1960年代のアメリカ俳句を紹介する。

#### 第一節 ブライスのアメリカ俳句への影響

アメリカが、初めて俳句を受容した1920年代のイマジスト詩人たちを第一世代と呼ぶなら、1950~60年代の俳句受容は第二世代に当たる。学校教育の中に俳句を導入

したり、俳句雑誌の創刊 (*American Haiku* 1963)、アメリカ俳句協会(1968)の設立、俳句グループや、俳句詩人を生み出すなど、今日のアメリカ俳句隆盛の土台になった時期であった。ジャック・ケルアック、アラン・ギンズバーグ、といったビート派詩人が俳句創作をしたり、ハケットとブライスの交流が始まるなど、50~60年代は戦後最大の俳句受容時代であったといえる。

ここで少し、第二次世界大戦後のアメリカの俳句運動と日本文化の關係に目を向けると、*Haiku*(4 vols)『俳句』, *Zen and English Literature*『禅と英文学』の著者であるブライスを抜きにしては語れない。このことは、北アメリカ最初のアメリカ人による俳句選集*The Haiku Anthology*を纏めたコル・バン・デン・フーヴェル(Cor Van Den Heuvel)によるブライスの評価からも明らかである。その時代の俳句運動を詳細に伝えているので引用する。

“Haiku in English got its real start in the fifties, when an avid interest in Japanese culture and religion swept the postwar United States. Growing out of the increased contacts with Japan through the Occupation and a spiritual thirst for religious and artistic fulfillment, this interest centered on art, literature, and Zen Buddhism. Alan Watts, Donald Keene, D.T.Suzuki, the Beats, and others all contributed to both arousing and feeding this interest, but it was R.H. Blyth's extraordinary four-volume work *Haiku* (published between 1949 to 1952), *Kenneth Yasuda's The Japanese Haiku* (1957), and *Harold G. Henderson's An Introduction to Haiku* (1958) that provided for the first time the solid foundation necessary for the creation of haiku in English.”<sup>262</sup>

「英語俳句が実際に始まったのは1950年代においてである。戦後のアメリカに日本文化や日本の宗教への強い関心がわき起こった。占領軍による日本との増進するコンタクトと宗教的、芸術的な充足を求める強い渴望から芽生えて、こうした関心は芸術、文学、禅仏教に集中した。アラン・ワッツ、ドナルド・キーン、鈴木大拙、ビートニックの詩人、その他が俳句への関心の高め育てるのに貢献した。しかし英語俳句の創作に関して確固たる基盤を作ったのは、驚異的な著書であるR・H・ブライスの『俳句』4巻、ケネス・ヤスダの『日本の俳句』、ハロルド・G・ヘンダーソンの『俳句入門』であった。」

この引用は、アメリカ俳句草創期にあたる1950年代には、日本文化や日本の宗教に対する強い関心が全米に広がったこと、また占領軍と日本との密接なコンタクトは鈴木大拙やブライスの活動が実を結んでいたことを示すものである。フーヴェルがブライスと並んで挙げたハロルド・G・ヘンダーソンは、GHQの初代教育・文化担当課長であり、ブライスと組んでマッカサーと宮内省との橋渡しをした人物である。竹前栄治著『GHQ』によると、「ヘンダーソンは、ニューヨーク生まれ、コロンビ

ア大学卒。同大学で化学・工学を専攻して修士号を取得、私的研究助手、鋼管会社などに勤務したあと、コロンビア大学助教授。俳句や日本の骨董品に関心をもち、日本文化に造詣が深いのと、ダイク局長の下で対日心理作戦のスタッフをしていた関係で初代課長になった。」<sup>263</sup>とある。またヘンダーソンは、1946年1月1日に発せられた昭和天皇の「人間宣言」の草稿をブライスと一緒に作成している。彼はブライスが朝鮮時代に俳句開眼のきっかけとなった*Bamboo Broom*『竹箒』の著者でもあり、その後コロンビア大学教授となり、アメリカ俳句協会の創設者としても知られている。

また東京大学への博士号取得論文であった『日本の俳句』の著者であるケネス・ヤスダはカリフォルニア生まれの日系二世として、戦争中はアメリカの日系収容所に収監され、そこで初めて俳句に出合ったと云われている。英語俳句研究の第一人者であった佐藤和男は、著書『海を越えた俳句』で、ヘンダーソンとブライスに言及し、「この二人の著書はアメリカにおける俳句普及におおきな役割を果たした。もし戦争がなく、米軍の占領がなければ、おそらく日本文化への興味がアメリカで大衆的に広がることもなく、俳句の普及は現在のような状況にはならなかつただろう。」<sup>264</sup>と述べているように、アメリカにおける日本文化の大衆伝播は、日本占領をきっかけとして開花したのである。

ブライスが、師の鈴木大拙と共著で松ヶ岡文庫より出版した『カルチュラル・イースト』も、コル・バン・デン・フーヴェルが指摘する「占領軍との増進するコンタクト」の必要性から生まれた産物であった。ブライスの代表著書である『俳句』4巻（1949~1952）出版以前の1946年、1947年の2年にわたって出版され、戦前から欧米で禅仏教の研究・普及に講演のあった鈴木大拙との共同編集であったことは、その後のアメリカにおける禅への関心の契機になった雑誌といえるであろう。

## 第二節 ジャック・ケルアックと俳句

ゲイリー・スナイダーをモデルにした小説『ダルマ・バンズ』*The Dharma Bums*を書いたジャック・ケルアックは、ケルアック自身、仏教に関心をもち、いくつかの英語俳句、俳句風短詩を残している。<sup>265</sup>そして死後33年を経た2003年に、新たに発見された俳句500句以上を集めた俳句集、*Book of Haikus*<sup>266</sup>が出版された。ケルアックは『ダルマ・バンズ』を中国の詩人、寒山に献辞している。尊敬する寒山の体験を再現しようとしたのだろうか、ケルアックは孤立して山に63日間籠り、瞑想し禅の心で執筆をする。*Book of Haikus*に未発表の*Desolation Pops*が収録されている。‘*Desolation*’は山の名前で、‘*Pops*’はアメリカのシラブルに左右されない自由なスタイルの俳句であると説明している。ケルアックは山中で孤独に自然に向き合い神秘的な体験を*Desolation Pops*に纏めている。ケルアックが*pops*という名前で俳句を呼ぶことを決めたことは、伝統的な俳句からの離脱を意味しているのかもしれない。*pop*とは、炸裂する、弾ける、飛び出す、破裂する、麻薬を注射するなどのイメージがある。元来の俳句から飛び出す弾丸のような衝撃を*pops*と呼んだ

のかもしれない。

ケルアックは、popsを日本の俳句ではなくアメリカの俳句と呼ぶ。そしてそれは3行の短い詩、韻を踏んでもよし、無韻でもよし、佛教徒が悟りに向かう意味も含有する精神の安定した状態であるSamadhisのほとんどない状態を言葉で描写すること、と述べる。<sup>267</sup>『広辞苑』によると三摩地とは梵語samadhiの音訳で、定・正定・等持・寂靜などと訳す。心が統一され、安定した状態のことを指すとある。この状態の離脱である popを、ケルアックはアメリカ俳句と決めたのであった。

(Morning meadow--- / Catching my eyes, / One weed)

「朝の草原目に入る一本の雑草」 (筆者拙訳)

(In the chair / I decided to call haiku / By the name of Pop )

「椅子に座り俳句を衝撃と呼ぶことに決めた」 (筆者拙訳)

### 第三節 アレン・ギンズバーグと俳句

1997年4月5日に70歳で亡くなったアレン・ギンズバーグは、ビート詩人、政治詩人、ゲイ詩人、仏教詩人として広く知られているが、彼が真面目に俳句に取り組んでいたことはあまり知られていない。まして日本の俳句界で彼の俳句を知る人は非常に少ない。彼もブライスの『俳句』を読んで俳句創作に取り組み、俳句に関わり続けた一人であったことを付け加えておきたい。

彼は、『吠える』(1956)の前年に「四つの俳句」"Four Haiku"(1955)<sup>268</sup>を書いた。この俳句を読むと、彼が俳句を日常生活の瞬間の印象を具体的な事象で表現するものと捉えていることがわかる。19世紀末から20世紀初頭にかけて日本の俳句を欧米に紹介したバジル・ホール・チェンバレン、ラフカディオ・ハーン、ポール＝ルイ・クーシュたちは、俳句をきわめて微小なる作品であり、ほんの輪郭だけのスケッチとして説明したが、ギンズバーグの場合は、彼らの俳句観の延長線上にありつつも、さらにブライスの影響も受けていると言えよう。ギンズバーグのブライスへの関心について、夏石番矢は『ビート読本』で次のように述べている。

「日記によると、ギンズバーグは一九五五年に、R・H・ブライスの『俳句』(全四巻、1949-1952)を読んでいた。この『俳句』第一巻の序文には、「俳句はワーズワースが『時間の点』とよんでいるもの、つまり、かなり神秘的な理由から特別の意味を持つ瞬間を記録する」と述べられている。ギンズバーグの俳句は、ブライスのやや一面的な俳句観に従って生み出された。・・・瞬間的な印象が書き留められているだけでなく、「四つの俳句」は共通して、スタティックで、静かで、いくぶん瞑想的だった。・・・十九世紀末から、俳句は禅と結びつけられて、西洋へ紹介された。ギンズバーグも、俳句を禅的な瞑想にひきつけたかもしれない。」<sup>269</sup>

またNaropa大学の詩学部で、約10年間ギンズバーグの同僚であったパトリシア・

ドネガン(Patricia Donegan)<sup>270</sup> は、「アレンが初めて俳句に触れたのは1950年代初頭のことであり、すでに禅とブライスの俳句の本を読んでいるケルアックやスナイダーからもたらされた」<sup>271</sup>と語っている。1955年秋にアメリカ西海岸のバークレイで作られたギンズバーグの”*Four Haiku*”を見てみよう。

(Looking over my shoulder / my behind was covered / with cherry blossoms.)

「振り返るとお尻は桜で覆われて」 (筆者拙訳)

(Lying on my side / in the void: / the breath in my nose.)

「建物の開口部に横向きになっていると 鼻を通る呼吸」 (筆者拙訳)

(I didn't know the names / of the flowers—now / my garden is gone.)

「あの花の名前を知らなかった 今 私の庭は無くなっている」 (筆者拙訳)

(On the porch / in my shorts— / auto lights in the rain.)

「短パン姿でポーチにいると雨の中に車の灯」 (筆者拙訳)

これらの俳句には、俳句の「花鳥風月の世界」を飛び越えたギンズバーグ独特の俳句世界がうかがえる。ドネガンによると、彼は西洋詩の教授をしながらも俳句に言及していたそうである。ギンズバーグの俳句歴にはイマジニストの影響もあるが、ブライスの*Haiku*に影響を与えられたことは確実であろう。

アメリカ詩壇の一大潮流であった1950年代のビート派詩人の中で、「俳句は禅なり」<sup>272</sup>と説くブライスの『俳句』を読破しなかった詩人は皆無であろう。アメリカの禅ブームとともにブライスの著書は俳句愛好者の聖典とみなされるに至った。アメリカ詩壇のグレート・ポエットとしての地位を確立したギンズバークも彼の詩業を見るかぎり、依然として禅仏教あるいはヒンズー教的東洋の叡知をその魂のよりどころとしているようであり、彼の背景の奥底にはブライスの存在があった。

#### 第四節 アメリカ俳句の真髄 (アメリカ俳句におけるブライスの俳句観の受容)

アメリカでは、俳句イコール禅とみなすブライスの俳句観はどのように受け入れられたのであろうか。ブライスは俳句を “Haiku record what Wordsworth calls these "spots of time," those moments which for some quite mysterious reason have a peculiar significance.”<sup>273</sup> 「特別な意味を持つ瞬間を記録するもの」と捉え、さらにその「瞬間」を捉える俳句詩人は、意外性の発見に対して鋭い認識力があると述べる。

ブライスのいう「特別な意味を持つ瞬間・刹那を記録する」という考えは、アメリカ俳句の詩人たちに “the essence of a moment” (刹那のエッセンス)、“here and now” (いまここ)、“haiku moment” (俳句的瞬間) という概念を植えつけていった。

またブライスの俳句観は、彼の禅の師であり、西洋圏に禅仏教を広めた鈴木大拙の著書の中に次のように紹介され、禅仏教と俳句は両輪として西洋圏に広がっていったのである。

“To quote Dr. R. H. Blyth, an authority on the study of *haiku*: "A *haiku* is

the expression of a temporary enlightenment, in which we see into the life of things.”<sup>274</sup>

「俳句研究のブライス博士の言葉を引用すると、俳句は瞬時の悟りを表現したもので、そこに我々は物事の命を見ることが出来る」

この鈴木引用からも判るように、ブライスの俳句観である「俳句はほんの瞬時の悟りの表現であり、そしてその中に事象の生命が見える」には、ブライスが俳句と禅を表裏一体のものと認識していることが理解できる。この瞬時の悟りがアメリカの詩人の心を捉え、“haiku moment”「俳句的瞬間」というキーワードが定着したのである。実際、伝統的な俳句形式から前衛的なものまで多様な俳句の要素を歓迎するアメリカ俳句協会は、俳句を“A poem recording the essence of a moment keenly perceived, in which nature is linked to human nature.”<sup>275</sup>「自然は人間と結びつくという刹那のエッセンスを記録する詩である。」と定義している。また創作ガイドンスには、“Haiku must be brief, fresh, using clear images to express the essence of haiku—the 'suchness' of the moment.”<sup>276</sup>「俳句は真如の瞬間を簡潔で、鮮やかに明確なイメージで表現すると考えられる」と記している。

このように1950~1960年代のアメリカ俳句は、ブライスから多大な影響を受け、多くの詩人が東洋や日本文化に対する憧憬と相まって、ブライスの説く俳句に引きつけられた。

しかし一方、日本文学の西洋圏への影響について書かれたアール・マイナー(Earl Miner) の名著*The Japanese Tradition in British and American Literature (Princeton, 1958)* には、イマジズム詩人の俳句の影響は取り上げられているが、ブライスに関しては一行の言及もない。日米両国、さらに彼の母国イギリスの文学研究者や学者からもブライスは無視され続けた。それは俳句をほぼ禅の同意語とする彼の俳句観の根本、つまり俳句という文学形態を宗教的基盤において捉えることが、彼らから遠ざけたことは否めない。確かに俳句を禅仏教の基盤に乗せて西洋圏に送り出したブライスの業績の功罪は明らかである。

しかし、「ブライスにとって、禅と俳句とブライス自身とは三位一体であった。ブライスは禅と俳句の間に本質的な差異を認めていなかった。禅を宗教の一形態と考え、俳句を芸術の一ジャンルと見ること自体、非禅的な見方とブライスの叱責を買うような気がする。」<sup>277</sup>とブライス像を仙北谷晃一が語っているように、ブライスの俳句はブライスの禅であり、ブライスの生き方そのものであった。

## 第二章 ジェイムズ・W・ハケットの世界

このブライスを俳句の師であり、生き方の師であると信奉するのがアメリカ俳句の草創期のハイキストであるジェイムズ W・ハケットである。

ハケットは師の俳句観を基にして、俳句の特徴を “Characteristic of true haiku is a spirit of suchness, wherein nature is reflected just as it is.”<sup>278</sup> 「真の俳句の特徴は、真如の心であり、そこに自然があるがままに映しだされている」と述べ、俳句の真髓を “a spirit of suchness” と断定して、俳句創作への道を進んだ。

*The Shambhala Dictionary of Buddhism and Zen* によると、“suchness” とは、「真如」の英語訳とある。「真如」は、本来サンスクリット語の “tathata” が中国語に訳されたもので、「真如」そのものはその日本語の音読みと記されている。また “Suchness is the true nature of all things, true reality, which, though it can be directly experienced in enlightenment.”<sup>279</sup> ともある。つまり「真如」はあらゆるものの真相、実体であり、それは直接に悟りを経験することで得られることらしい。「直接に悟りを得る」という表現は、文学から離れ禅仏教に導入している。しかし、ここでは辞典からの理解を基本に据えて “suchness” を捉えることにしてみよう。広辞苑によると、「真如」は、「<仏教> (梵語tathata)一切存在の真実のすがた。この世界の普遍的な真理。とある。では、「如」の説明はと言うと、「(仏教)実体。本体。真相。真実。真如。」とある。ここで「真如」は、物の本体であることが理解出来る。

一方、英語の辞書<sup>280</sup>では、“suchness” には、1. 基本的性格、本質、特質。2. (仏教) =Tathata とある。そこで、“Tathata” を見ると、【仏教】真如：空 (Sunya) の絶対性、あるがままの姿との解説がある。

つまり、“suchness” は人間を含む自然界のあるがままの姿なのである。アメリカの俳句は、あるがままの自然界の刹那の瞬間を明確なイメージで表現することを目標としていることが理解できる。これは日本の俳句の客観写生と共通する点である。アメリカを代表する俳句協会が、俳句の真意をこのように人間と自然との鋭く浸透しあった交感や、あるがままの姿の刹那に求め、少なからず禅仏教の宗教的特性に重心を置いていることは、「禅と俳句は同義語である」とするブライスの影響があると言っても過言ではないだろう。

### 第一節 ハケットの経歴・俳句との出会い

ジェイムズ W・ハケットは俳句及び禅詩人、哲学者。1929年8月6日、ワシントン州シアトルに生まれ育つ。ワシントン大学で歴史、哲学を治め、ミシガン大学大学院にて美術史を学ぶ。英語俳句のパイオニアとして知られる。ブライスを信奉し師友とする。ハケットが俳句に出会うのは、日本航空主催のJALアメリカ俳句コンテストでグランプリを獲得する数年前のことである。

英語俳句雑誌 *Woodnotes* 編集長(John Budden) によるインタビュー記事<sup>281</sup>で、ハケットは俳句との出会いを、「俳句と禅に対する興味は、ワシントン大学で哲学と歴史を学んでいた1950年代はじめの頃に遡ります。1954年に友人が日本から持ち帰ったブ

ライスの俳句の本を手にするまでは、頭でっかちで観念的な世界に暮らしていました。その頃パシフィカラジオ番組で、アラン・ワッツ(Alan Watts)の道教と禅の講義を聞き始め、その中に感服する知恵を見出しました。哲学の勉強に付属して、禅に関する鈴木大拙の本を読みました。最初の俳句は、“かかし”についての句で、これは宮本武蔵に関する美術史の論文に入っています」と語っている。これによって、ハケットは、学生時代にすでに俳句に関心を寄せていることが判る。

彼は1957年か1958年に、自作の英語俳句の評価を求めて、ブライスに初めて作品を送った。するとブライスから作品を賞賛する返事が返ってきた。これが契機となって、ハケットは本格的に俳句で身を立てて行こうと心に決めた。ブライスとの親密な交信と友情は、1964年のブライスの死まで続く。ハケットにはブライスとの交流が、俳句創作への精神的サポートであったが、ハケットが俳句創作への最も強い衝動を覚えたのは、大学を卒業して生死を危ぶむほどの事故に遭遇した時であった。肉体の傷害からの精神的な生還が、創作の原動力になった。この精神的トラウマの経験は、ハケットをそれまでの知的偏重の人間から直観的な人生崇拜者に変えたのである。

苦痛と迫り来る死を前にして、彼は極限の状況の中で、Eternal Now (永遠の現在)の実在と、一期一会で生きる重要さを知った。人生について抽象的に考えるよりも、自分の感性に素直になることで、一瞬一瞬の自然の創造物の厳かな美しさや、価値を見出すことができるようになった。自然や時に対峙しながら、生きることへの愛(大悲)を表現できる最高の手段が俳句創作であると気づき、自分の人生とエネルギーを俳句創作に捧げる道を選んだ。

彼が俳句を書き始めた1950年半ばから、彼にとって俳句は文学として追求するものではなく、座禅の瞑想を通して精神的に成長し、世界を共有することが出来る禅の修行と同一のものであった。かつてブライスが、自己の俳句観として「俳句は文学を超越した文学、いわば“無文学の文学”だと思います。別の言葉で言うならば、俳句は詩を作る道ではなくして、生活の道であると言うのが私の俳句観です。」<sup>282</sup>と述べているが、ハケットの俳句観にも同様の観点を見ることができるのである。

## 第二節 ブライスとの交流

ハケットが自作の英語俳句の評価を求めて、1957年か1958年頃にブライスに作品を送ったのがきっかけで、彼らの交流が始まったことはすでに述べた。ブライスはハケットの作品を講評し、(A tiny spider/ has begun to confiscate/ this cup's emptiness)には俳句のエッセンスが宿っていると誉めた。さらにハケットの俳句の資質を高く評価するブライスは、ハケットへの手紙で “I realised that it was that Bashō should not have you for his pupil (and he as your pupil) instead of the rather mediocre disciples he actually had.”<sup>283</sup> 「ハケットこそ芭蕉の弟子になるべきであった」と書き記すほどであった。この手紙によって、ハケットは自分の人生を俳句に捧げる決心をした。筆者が取材のために彼を訪問した時(1996)、ハケットはこの手紙を鍵のかかった小箱から取り出して見せてくれた。ブライスはハケットの作品集 *The Zen Haiku*



*and other Zen Poems*(1983)の序文 (Forward and Comments by R.H.Blyth) に、この手紙を入れた。ブライスは、校了間際の *History of Haiku* Vol.2 (1964) に、「世界の俳句」の第一人者としてハケットを紹介し、彼の作品30句を12頁にわたって組み込んだ。ブライスが英語俳句詩人を自著の中で紹介したのは、後にも先にもハケットをおいて他にはない。ブライスはハケットの俳句の特徴を次のように紹介する。

“They are in no way mere imitations of Japanese haiku, nor literary diversions. They are (aimed at) the Zen experience, the realising, the making real in oneself of the thing-in-itself, impossible to rational thought, but possible, “all poets believe,” in experience.”<sup>284</sup>

「ハケットの俳句は単なる日本の俳句の模倣にあるのではなく、文学的な気晴らしでもない。作品は禅の経験、禅の具現化、自らの中に実在を生み出すことを目指している。そして理性的な思考では不可能かもしれないが、経験のうちに存在そのものを信じる詩人には可能である。」

ハケットの作品を “imitations of Japanese haiku” でもなく、“literary diversions” でもないとブライスが断定するのは、そこに自分と同じ道を歩むハケットの姿を見ているからであろう。“the Zen experience, the realizing, the making real in oneself of the thing-in-itself” というハケットの道は、ブライスの極めようとする世界でもある。

しかしながら俳句創作の技法に関しては、ハケットはブライスと意見を異にしている。ブライスはハケットから郵送されてくる俳句をチェックし、「形容詞や冠詞をできるだけ省き、俳句全体をシンプルにするように」と注意したが、この点に関しては、ハケットは自説を曲げようとはしなかった。そのあたりの経緯を、ハケットは私への手紙で述べている。

“Blyth and I differ slightly on one major point: how the haiku experience could best be expressed in English by an American poet. Blyth believed that haiku in English should be almost as simply-expressed as a haiku written in Japanese, i. e., with just the fewest words possible. I have always believed that because of profound cultural and linguistic differences, haiku written in language other than Japanese should be expressed in the other culture's natural usage/ syntax. Only in this way will world haiku achieve respect and success. Certainly, I believe that simple language and brevity should be the keynote of haiku writing in any language. However, some articles and modifiers (adjectives, adverbs, etc.) should be used if they help the reader to understand and appreciate the haiku moment the poet wishes to share.”<sup>285</sup>

「ブライスと私はアメリカの詩人が英語で俳句経験を以下に表現するかということに関して意見が少し異なっていました。ブライスは英語で書く俳句は日本語で書くのと同様にできる限り少ない語彙で単純化した表現をすべきだと思っ

ていました。私は日本語以外で書く俳句は書かれる国の文化の自然な語法や統語法で表現されねばならないと考えていました。この方法において世界の俳句は信頼を得て成功していくでしょう。確かに短い語句や簡潔さはどの言語で書かれようと、俳句創作の基本をなすものですが、詩人が分かち合いたいハイク・モーメントを読者に理解し鑑賞させる助けになるなら、冠詞や形容詞、副詞といった修飾語は使われるべきだと思います。」

俳句をできる限り短く、簡潔に書くことにおいてはブライスとハケットは立場を同じにしたが、俳句創作の技法に関しては、異なっていたことがこの手紙で知ることができる。「日本語以外で書く俳句は書かれる国の文化の自然な語法や統語法で表現されねばならない」「短い語句や簡潔さはどの言語で書かれようと、俳句創作の基本をなすものですが、詩人が分かち合いたいハイク・モーメントを読者に理解し、鑑賞させる助けになるなら、冠詞や形容詞、副詞といった修飾語は使われるべきだ」というハケットの意見は、彼が俳句をどの国の人々も表現できる詩の形式であると考えているからである。またハケットが優れた俳句を“I have written in the conviction that direct and immediate experience with nature, and that his intuitive experience can expressed in any language.”<sup>286</sup>「自然との直接的な経験、自然との直観的経験はあらゆる言語で表現されうるという信念で俳句を書いている」と主張するのは、彼の信念で書く禅的な俳句が世界文芸としてなりえると確信しているからであろう。

### 第三節 ハケットの俳句観

ハケットは俳句の本質を、「俳句的瞬間」haiku momentや、「真如」suchnessの表出として捉える。同時に、新たにintuitive interpenetration（直観的相互貫入）という概念を持ち出してくる。彼はintuitive interpenetrationを、禅の特質である一体化onenessへの直観的知覚として捉えているのである。そして、芭蕉の『猿蓑』の「冬の部」の巻頭句である、「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」を例証として取り上げ、初時雨に震える猿の様子への芭蕉の感情移入こそが、intuitive interpenetrationであると説明する。<sup>287</sup>つまり、詠む人(俳句詩人)と詠まれる対象との間に距離がなく、一つになりきっている様態が、ハケットの捉えるintuitive interpenetrationである。

ハケットの俳句観は、彼の著書である*The Zen Haiku and other Zen Poems*の最終頁に掲載されている「英語俳句作詩法」Suggestions for Writing Haiku in Englishに示されている。ハケットの「英語俳句作詩法」は、Harold G. Hendersonの*Haiku in English*<sup>288</sup>にも取り上げられ、北アメリカの英語俳句創作の基準を生み出した。この「英語俳句作詩法」には、アメリカ俳句の特徴を示すhaiku moment, suchnessや、ハケット俳句の特質でもあるintuitive interpenetrationが含まれていることは言うまでもない。

*The Zen Haiku and other Zen Poems*の1-18までの「英語俳句作詩法」を紹介すること

でハケットの俳句の一端を探る。ブライスの英語俳句作詩への示唆を*A History of Haiku*より紹介する。

1. The present is the touchness of the haiku experience, so always be aware of this present moment.

「現在は俳句的瞬間の試金石である。常にこの現在の瞬間を留めること。」

2. Remember that nature is the province of haiku. (Carry a notebook for recording your haiku experiences.)

「自然は俳句の領域であることを覚えておこう。俳句的経験を記録するために常に手帳を携帯すること。」

3. Contemplate natural objects closely...unseen wonders will reveal themselves.

「自然の対象物を凝視しなさい。目に見えない偉観が自ずから現われてくるでしょう。」

4. Interpenetrate with nature. Allow subjects to express their life through you. "That art Thou."

「自然と深く行き交いなさい。あなたを通して主体がその生命を表現するのに任せなさい。それがあなたです。」

5. Reflect upon your notes of nature in solitude and quiet. Let these be the basis of your haiku poems.

「孤独で静寂の中であなたの自然への調べを省察しなさい。これらをあなたの俳句の基盤に据えなさい。」

6. Write about nature just as it is...be true to life!

「ありのままの自然、生命にあるがままでありなさい。」

7. Choose each word very carefully. Use words that clearly express what you feel.

「其々の言葉を注意深く選びなさい。あなたが感じていることを明確に表現する言葉を使いなさい。」

8. Use verbs in present tense.

「現在時制を使いなさい。」

9. For added dimension choose words that suggest the season, location, or time of day.

「加えられる要素として、季節、場所、時を示唆する言葉を選びなさい。」

10. Use only common language.

「ごく普通の言葉を使いなさい。」

11. Write in three lines which total approximately 17 syllables. Many haiku experience can be well expressed in the Japanese line arrangement of 5,7,5 syllables--but not all.

「全体としておよそ17音節、3行で書きなさい。多くの俳句的経験は5-7-5音節の日本の行の配列で表現できるはずだが、すべてそうはいかない。」

12. Avoid end rhyme in haiku. Read each verse aloud to make sure that it sounds natural.

「俳句は韻を踏まない。自然な音調であるかどうか確かめるために声を出して読みなさい。」

13. Remember that *lifeliness, not beauty, is the real quality of haiku.*

「美ではなく、生命感に溢れていることが俳句の本質であることを忘れないようにしなさい。」

14. Never use obscure allusions: real haiku are intuitive, not abstract or intellectual.

「あいまいなほのめかしを決してしないように。真の俳句は直観であり、抽象化や知性ではない。」

15. Don't overlook humor, but avoid mere wit.

「ユーモアを見落とさないように、しかし単なるウィットは避けるように。」

16. Work on each poem until it suggests exactly what you want others to see and feel.

「どの俳句でもあなたが人に伝えたいと望む事が正確に示唆されるまで熟考しなさい。」

17. Remember that haiku is a finger pointing at the moon, and if the hand is bejeweled, we no longer see that to which it points.

「俳句は月を指す指であり、その指が宝石で飾られていれば、それが指さす先は見えないことを忘れないように。」

18. Honor your sense with awareness, and your Spirit with zazen or other centering meditation. The Zen-haiku mind should be like a clear mountain pond: reflective, not with thought, but of the moon and every flight beyond...

「あなたの認識力、禅的な精神、さらに集中的な瞑想を大切にしなさい。禅的俳句の精神は山中の澄んだ湖のようなもので、思考で反映するのではなく、月の反射と彼方への月の動きが映っているようなものだ。」

これらの作句アドバイスには、*haiku moment*を喚起させるもの(1、8)、*suchness*(3、6、13、18)、*intuitive interpenetration*(5、7、14)、英語俳句作詩技術(2、8、9、11、12、15、16)など、英語圏の人々への俳句創作の手引きを非常に明確に示した。このアドバイスは、多くの詩人にハケットの俳句創作の論理性を示した。因みにブライスの英語俳句作詩を *A History of Haiku* から引用してハケットのブライスからの影響を見てみよう。

“The haiku form is thus a simple and yet deeply “natural” form, compared to the sonnet, blank verse, and other borrowed forms of verse in English. The ideal, that is, the occasionally attainable haiku form in English, would perhaps be three short lines, the second a little longer than the other two; a two-three-two rhythm, but not regularly iambic or anapaestic; rhyme avoided, even if felicitous and accidental. A season word is not necessary, nor even a season,

but is greatly advantageous, as suggesting one quarter of the year in time.”<sup>289</sup>

「俳句を英詩のソネット、無韻詩、英詩に借用された詩と較べると、俳句は簡素で気取らない詩です。時には英語で成し遂げられる最善の形は3行の短詩で、2行目が1行目、3行目よりやや長くなり、2-3-2の韻律を持つが、常に弱強格韻律(iambic)や弱弱強格韻律(anapasetic)ではなく、たとえその韻律がその場に適切で、合っている、俳句では韻を避けなければならない。季語や季節の言葉は必ずしも必要ではないが、一年のある時期を示唆するのが良いでしょう。」

ブライスのこの英語俳句作詩への示唆は*The Genius of Haiku*<sup>290</sup>にも記載されていて、英語俳句を作る指針にもなっている。ハケットの英語俳句作詩技術(2,8,9,11,12,15,16)は、ブライスの指針とも重なり、ハケットのブライスへの信奉ぶりが明白である。アメリカの俳句研究者であり俳句作家でもある Cor Van Den Heuveは、*The Haiku Anthology (Simon & Schster 1986)*の中で、ハケットに関して次のように言及している。

“A reclusive and fiercely independent spirit," J.W.Hackett has not been directly involved with the haiku movement since the sixties, when his work appeared in the haiku magazines, but his haiku continue to attract new readers and writers to the genre. They are probably better known than those of any other non-Japanese poet, and have been praised by R.H.Blyth, Alan Watts, and Jack Kerouac. However, for more than a decade now he has been mainly interested in writing longer poems, a number of which are in *The Zen Haiku and Other Zen Poems of J.W. Hackett* (1983), a book that, happily, also contains all the haiku from his long-popular *The Way of Haiku*. ”

ここでハケットは "A reclusive and fiercely independent spirit"「隠遁した猛烈に独立独歩の人」といわれているが、必ずしも隠遁ハイキストではない。発表する作品の数こそ少ないものの、より長い詩型に挑戦し、中国の自然詩、環境保全への関心から啓発された詩などを精力的に創作しているのである。ハケットの作品は、数多くの選集や教科書に紹介されており、アメリカ俳句の重鎮として国際俳句コンテストの審査をこなしている。また、ブライスの母国のイギリス俳句協会は、ブライスとハケットの師弟関係を評価して、ハケットの業績に応じてJWH俳句賞を設けている。

彼の著書は俳句全作品集でもある*Zen Haiku and Zen Poems* (Japan Publications, INC.1983)をはじめ、*That Art Thou: My Zen Way of Haiku* (未刊)、*Haiku Poetry Vol.1-4* (Hokuseido,1964)、*The Way of Haiku*、*Bug Haiku*ある。

最近の論文には、“Suggestions for Teaching and Writing Poetry” (1994), “Haiku and Spiritual Penetration” (Blithe Spirit, 1994), “Haiku: Another Endangered Species”(1993) など多数の俳句関連論文がある。彼の文書がボストン大学ムーガー図書館に保

管されることになった。2004年には*A Traveler's Haiku* (北星堂書店)を出版するなどの活動が続けている。アメリカ俳句の基盤を築いた創設期の俳句詩人として、そしてブライスの禅俳句を繋ぐ禅詩人としてのハケットの活動を今後も見過ごすことはできない。

### 第三章 川柳・俳句の英訳3行の定着

『広辞苑』は俳句の説明を「俳諧の発句の意で、もと発句といい、俳諧の連歌の初句を称したが、のち独立の一体となった。五・七・五の十七音で、古来言い切りの句（完結した表現形態）とし、必ず季を入れるならいで、室町末頃から俳諧の連歌の発句として行われた。芭蕉以後は発句のみでも行われるに至り、明治に及んで正岡子規がその革新を企て、俳句と言ひ、新派俳句が勃興。」<sup>291</sup> としている。ここでは5・7・5の17音とあるが、現在英語俳句で行われる3句や3行に分けることは記されていない。

しかし英英辞書のhaikuの項目では、“an unrhymed Japanese poem of three lines containing 5,7, and 5 syllables respectively, referring in some way to one of the seasons of the year...”<sup>292</sup>とある。つまり3行それぞれが5,7,5の17音節からなる無韻の詩であり、季節の一つを加えると言及している。

一方川柳においては『広辞苑』では、「前句付から独立した十七字の短詩。明和ごろから隆盛。発句とは違って、切れ字・季などの制約がなく、多くは口語を用い、人情・風俗、人生の弱点、世態の欠陥等を穿ち、簡潔・滑稽・機知・風刺・奇警が特色。」とある。英英辞書においても“The name of Karai Senryu(1718-90), a Japanese poet, used to denote a type of Japanese verse, similar in form to HAIKU but more intentionally humorous or satirical in content and usually without seasonal references.”とある。

つまり『広辞苑』では17音節は入っているが、行数の言及はない。英英辞書においても、季語は必要ないとの説明は入れているが、ほぼ日本語辞書を踏襲している。川柳や俳句が英語をはじめ他の外国語に翻訳された行数は、1行から2、3、4行まで見られる。行数は流動的であるが、全体的には3行に定着しつつある。川柳と俳句の翻訳で3行訳が定着した経緯を時代的に見てみよう。

#### 第一節 川柳の場合

大正時代に、帝国大学教授で教養人として活躍した和田垣謙三は自著『吐雲録』（1914）で川柳を1行から3行の英訳をした。成見延亀・上床新助著の『英譯川柳名句選』（1924）に納められた300句の古川柳の英訳は、2行から7行に及んでいて、3～4行訳が80%を占める。上床は『やなぎ樽』（1925-1934）で、ほぼ4行にしている。齋藤秀三郎は『齋藤和英大辞典』（1928）に3行訳の川柳を掲載している。和田垣が『吐雲録』を著した1914年から、宮森麻太郎が川柳を掲載した*An Anthology of Haiku Ancient and Modern*の出版年である1932年までは、川柳の英訳の行数は固定していなかった。

次に紹介する川柳は宮森麻太郎の訳である。宮森は俳句も川柳もほぼ2行に訳している。例に挙げる半文銭の川柳は宮森によって2行でなされている。宮森はW.G.アストン(1864-1887：日本在任)をはじめ外国人による翻訳に不満を持っていた。彼らの翻訳が説明すぎて俳句の意味をなさないと思ったからである。

芝居見た晩は亭主が嫌になり 半文銭

The night she sees a play,  
A woman hates her husband.<sup>293</sup>

一方、ブライスはこの川柳を以下のように3行の英訳にしている。

The night  
She goes to the theatre,  
She dislikes her husband.<sup>294</sup>

これは（芝居を見た晩）と（亭主が嫌いになる）の二句切れの川柳である。魅惑的な役者の演技に魅せられた妻が芝居から帰宅した夜、亭主の無骨な姿に嫌気がさすと云う、大正時代に活躍した木村半文銭の軽妙な川柳である。この川柳の翻訳を試みた宮森は、紹介したような二句切れの句意に添った2行の英訳をしている。一方ブライスは、1行目に **the night** を入れて（芝居を見た晩）を明示し、2行、3行のそれぞれの頭に **she** を並べて、彼女の行動と感情を強調するという工夫を凝らしている。

ブライスは1949年に、北星堂書店から出版した *Senryu* では上記の句も含めて3行にしている。1957年には *Japanese Humour*、1959年には *Oriental Humour*、1961年には *Japanese Life and Character in Senryu*、そして同年 *Edo Satirical Verse Anthology* を出版している。*Japanese Life and Character in Senryu* には、二句切れの川柳に2行訳を僅かに試みているが、ほぼすべての出版物の翻訳は3行の英訳で成された。ブライスの3行訳によって一般的に川柳の英訳は3行に行われるようになったと云えるであろう。

## 第二節 俳句の場合

日本の文学として初めて俳句を紹介したのは、1864年に日本に来日した英国の駐日外交官W.G.アストンであった。日本文芸や日本語学に興味を持ったアーネスト・サトウ（1895-1900:Ernest Satow）、バジル・ホール・チェンバレン）、そしてラフカディオ・ハーンらのお雇い外国人や外交官の中で、アストンはより早く日本に赴任した。アストンは「名をなすことより学問に専心した日本学者」<sup>295</sup>であった。彼は日本の歴史、文化研究のための公開討論の場であった日本アジア協会の創立メンバーの一人であり、一時は会長をも務めた。

1869年には日本語学の著書である『日本口語文典』*A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*、1872年に『日本語文語文典・諸家名文集付』*A Grammar of the Japanese Written Language* を出版した。これらは1877年と1904年に再版されるほど成功をおさめた。1899年出版の『日本文学史』*A History of Japanese Literature*は、アストンの存命中に英国で版を重ね、また米国では9回も再版されるほどであった。この1899年初版の『日本文学史』において、初めて英書において俳諧の説明がなされた。

“In the sixteenth century a kind of poem known as Haikai, which consists of seventeen syllables only, made its appearance. The Haikai is a Tanka minus the



concluding fourteen syllables, and is made up of three phrases of five, seven, and five syllables respectively,....”<sup>296</sup>

「16世紀に、17音節だけで構成された俳諧として知られる詩のようなものが登場した。俳諧は短歌の最後の14音節を欠かしたもので、それぞれ5、7、5音節の三つの言い回しから出来上がっている---」

アストンは、俳諧が5,7,5,7,7音節で成り立つ短歌から最後の2行の7,7音を欠いた5、7、5音節の三つの言い回しから出来上がっていると『日本文学史』で述べる。この説明は *Webster's Third New International Dictionary* の説明に取り入れられている。そしてアストンは『日本文学史』の中で取り上げた18種類の俳諧を3行で翻訳している。さらに、1904年3版『日本語文語文典』では、*Revised and Corrected* が加味されて、1899年出版の『日本文学史』 *A History of Japanese Literature* の俳諧に関するほぼ同様に説明が記述されている。アストンは3行の行数はゆるぎないものであった。その後、宮森麻太郎は、『英譯古今俳句一千吟』 *One Thousand Haiku Ancient and Modern*<sup>297</sup> で、川柳同様に俳句を2行で翻訳しているが、2行訳の定着には至らなかった。しかし外国人の翻訳に対する宮森の不満は、俳句を知る日本人にとってはまともな見解であった。芭蕉の名句「枯枝に烏の止まりけり秋の暮れ」を例にしてアストン、チェンバレン、宮森、英訳に対する宮森の見解を見てみよう。

“On a withered branch  
A crow is sitting  
This autumn eve.” Aston *A History Japanese Literature* p.295 1899

The end of autumn, and some rooks  
Are perched upon a withered branch. Chamberlain 宮森『英譯古今俳句一千吟』  
p.15 1930

Upon a bare branch  
A crow is perched,  
An autumn evening. Miyamori 宮森『英譯古今俳句一千吟』 p.15 1930

Lo! A crow sits on a bare bough;  
'Tis a dreary autumn evening. Miyamori 宮森『英譯古今俳句一千吟』 p.15 1930

宮森は『英譯古今俳句一千吟』で、2行と3行訳の2種類の英訳を試みているが、行数の判断は読者に任せようとしたのか、どちらの行数が良いとの説明は加えていない。宮森はChamberlainの英訳における意味の違いや誤訳を『英譯古今俳句一千吟』で説明する。例えば、「Chamberlainが「秋の暮」をThe end of autumn（晩秋）と譯したのはよくな

い。「秋の暮」は俳句では秋の夕暮の意味に用ひる。晩秋は「秋の暮」といふのである。又枯枝を *withered branch* 即枯死せる枝としたのもよくない。枯枝は枯死せる枝と葉の落ちた枝との両義に用ひる。そして此句では後者の義である事は明かである。又五六羽の鳥としたのも面白くない。一羽の鳥としてこそ秋の夕暮の淋しい気分が出るのである。」<sup>298</sup>である。ここで宮森は、俳句における「秋の暮」、「枯枝」、「鳥の数」の意味の取り違えがチェンバレンの誤訳の源であると述べる。宮森は「秋の暮」を *autumn evening*、「枯枝」を *bare branch*、*bare bough* そして「鳥の数」を *a crow* と訳している。アストンの英訳も *withered branch* となっていて宮森の気に入らないところであった。ブライスが日本語の習得もかねて学んだハロルド・G・ヘンダーソンの *The Bamboo Broom* (1933) では、「枯枝に鳥の止まりけり秋の暮れ」をヘンダーソンは次のように 3 行の英訳をしている。

On a leafless bough

A crow is sitting;---autumn

Darkening now---<sup>299</sup> Henderson *The Bamboo Broom* 1933 p.31.

宮森の指摘した「枯枝」の英訳は、ヘンダーソンでは *leafless bough* となり、「秋の暮」は 2 行と 3 行をまたいで *autumn/ Darkening* となる。ヘンダーソンは英語の俳句の形式は今後いかになるかと自問している。そして「最終的な形式は自分も判断できない。2 行か、3 行か、4 行になるかもしれない。韻をつけるか無韻であるかもしれない。しかし俳句がどのように定義されようとも、俳句は詩であり、散文の一滴ではない」<sup>300</sup>と述べている。宮森の英訳から 22 年を経たブライスの英訳は、53 年前のアストンの *withered bough* (1899) と変化はあまりない。

Autumn evening;

A crow perched

On a withered bough. Blyth *Haiku Vol.3*, 1952 p.898.

英訳の語彙の選択は、翻訳者の俳句に対する言葉のセンスを問うことになる。行数に関しては、ブライスがヘンダーソンの *The Bamboo Broom* に魅了されて俳句を学び出したことからヘンダーソンの 3 行訳に影響を受けた可能性が強いと推察される。ブライスは 1964 年に出版した *A History of Haiku* の *World Haiku* の章で、英語で書く俳句は 3 行が適当と記している。<sup>301</sup> またブライスを師として信奉したハケットは 1983 年に出版した *The Zen Haiku and other Zen Poems of J.W.Hackett* 中の英語俳句創作法で、英語俳句は 3 行でするようにと読者に示唆している。ヘンダーソンが 1967 年に出版した *Haiku in English* 『俳句の作り方』(Charles E. Tuttle Company) の中には、ハケットの *Haiku Poetry* (Hokuseido 1964) で記した俳句創作の二十カ条の提案を引いている。チェンバレン

や宮森麻太郎による 2 行訳俳句も登場したが、1899 年出版のアストンによる『日本文学史』で俳諧の 3 行訳が紹介されて以来、3 行訳はアストン、ハロルド・ヘンダーソン、ブライス、ハケットへと継続していった。その結果、俳句と川柳の英訳は 3 行に定着したと云えよう。さらにブライスの俳句・川柳書の欧米への普及と共に、英語圏に 3 行の俳句・川柳訳が普及したと結論づけることができる。

## 第四章 海外に広がる俳句の未来—スウェーデンの俳句活動

### 第一節 俳句に魅せられた駐日スウェーデン外交官

岐阜県大垣市は、松尾芭蕉が著した『奥の細道』の最終章に登場する「結びの地」として知られている。この大垣で2014年5月18日に国際俳句講演会が開催された。自身も俳句を作り、俳句に造詣の深い前駐日スウェーデン大使のラーシュ・ヴァリエ (Lars Vargö 1947-) が、「スウェーデンとヨーロッパの俳句」について講演した。

ラーシュ・ヴァリエは「古代日本国家の形成過程と社会・経済状況」研究でストックホルム大学から学位を得た日本研究者であるとともに、『井戸におぼれた月』(1995)、『種田山頭火句集』(2002)、『日本の俳句—世界で最も短い詩』(2003)、『夜明けは声も無く始まる—スウェーデン式俳句』(2008)、夏目漱石に俳句訳書『コオロギを思い出す』(2010)、俳句集『冬の月』(2011)などの著書を持つ文人外交官である。

またスウェーデンは、1999年に俳句協会(2015年現在会員約120名)が設立された。第2代国連事務総長を務めた故タグ・ハマースホルド(Dag Hjalmar Agne Carl Hammarskjöld 1905-1961)や、2011年にノーベル文学賞受賞の詩人トーマス・トランストロンメル(Tomas Tranströmer 1931-2015)<sup>302</sup>といった優れた俳句詩人を生み出した。ラーシュ・ヴァリエからスウェーデンの俳句事情を聞くにつれて、日本発信の文芸である俳句は、英語圏諸国の受容はもとより英語を母語としない国にも広がり、今後も受容されていくことを確信した。

ラーシュ・ヴァリエの講演の柱は3点あり、①俳句のヨーロッパ、特にスウェーデンへの移入の沿革、②スウェーデン俳句の特徴、そして③スウェーデンで出版された『APRILSNO 四月の雪』から、スウェーデン語の俳句の紹介が主なる内容であった。

①では、1960年代に欧米の国々の俳句受容と同様に、アメリカの対抗文化の影響でビートニック詩人の詩や俳句がスウェーデンの若者の間に浸透した。このことによってビートニックの詩人に影響を与えた鈴木大拙の禅と、R.H.ブライスによる俳句の英訳がスウェーデンに入ったと語る。

②では、5-7-5音節・写生を忠実に守るグループと、俳句の音節を気にせず、自由俳句としての短詩を楽しむグループに分かれている。さらに戦後のスウェーデンを代表する詩人で、臨床心理学者であり、俳句も書いている「隠喩の巨匠」と呼ばれるトーマス・トランストロンメルは、スウェーデン語の俳句を5-7-5音節から解放することを示唆した。さらに彼は俳句を短詩で書けばよいとの見解を示し、その後のスウェーデン語の俳句に影響を与えた。しかしラーシュ・ヴァリエは、「スウェーデンでは、60年代より続く5-7-5音節・写生派と自由俳句派の二つ流れがある」と語る。

③スウェーデンの俳句協会設立に尽力し、会長を務めたカイ・フォークマン(Kaj Falkman)は、ラーシュ・ヴァリエの前に来日した外交官(東京に在任1959-1961, 1980-1985)で、日本の俳句をスウェーデンに紹介した。その集大成が『Aprilsnö 四月の雪—スウェーデ

ンの俳句百句・日本の俳句百句』<sup>303</sup>の出版であったと語る。

筆者は日本の俳句に魅了された在日外国人による日本文化紹介の系譜が、明治時代の外交官<sup>304</sup>やお雇い外国人<sup>305</sup>から脈々と続いていることをラーシュ・ヴァリエの講演によってあらためて認識した。また文人外交官でもあったカイ・フォークマンのまとめた『Aprilsnö 四月の雪—スウェーデンの俳句百句・日本の俳句百句』では、題名からも判るようにそれぞれの100句に日本語とスウェーデン語が付いている。例えばカイ・フォークマンの作品ではスウェーデン語による俳句 (Solen borta / Staketets skugga / kvar I graset rimfrost) が紹介され、日本語でその直訳 (日は隠れ/垣根の影は/草の霜に残る)がつけられる。さらにその直訳を日本語の俳句 (垣の影日暮れて残す霜芝生) に直すという試みをしている。一方日本語俳句の金子兜太の作品を例にとれば、(冬早眼鏡を置けば陽が集う) の日本語俳句にスウェーデン語訳、(Vintertorka/när jag lägger ned glasögonen/samlas solstrålar) が付く。そしてそれぞれ100句の読み方がローマ字で記されている。そのローマ字表記によって、日本語とスウェーデン語の表音がとらえられる工夫がある。媒介語としての英語を通さず、自国の母語に対する強い愛を主張する俳句集となっている。2015年9月に開催されたスウェーデン俳句協会の句会の様子が、「北欧に HAIKU を訪ねて—スウェーデン俳句協会 110 回目の句会」題する新聞記事 (朝日新聞 2015.11.4) に紹介された。

それによるとスウェーデン俳句協会には「スウェーデン的な俳句の定義」があり、「そのまま」を詠む。つまり自分の感情の起伏とは無縁に存在する自然や、人々の生活を写生する。詠み手の五感表現や、抽象的な比喩は少ない。具体的な表現こそ、より読者に思索的な解釈をもたらすと考えられている。この定義の背景には「禅」への関心があった。60年代、欧米に東洋文化が積極的に紹介され、禅文化に共に瞑想や俳句も紹介された。そこには禅を根底として俳句を紹介したブライスの『俳句』もスウェーデンの詩人や若者に浸透していた。

会長のカイ・ファルクマンは「日本の現代俳句は想像した風景や心情の揺れを詠む句が多い。しかしこちらの句は比喩を避け、写生に徹しています。松尾芭蕉や与謝蕪村に近いのが、スウェーデン俳句です。」と述べる。では、スウェーデンでは日本の現代俳句に多用される比喩をどのように扱っているのでしょうか。

写生派のカイ・ファルクマンによると「スウェーデンでは、技巧的な現在詩が広まり、比喩を多用する表現に慣れていた。むしろ感情表現や比喩を使わず、かつ読者の心を揺さぶることが楽しいのです。」とも述べる。つまり日本では明治時代の正岡子規が提唱した写生俳句からの脱皮が、社会性に富んだ比喩の多い現代俳句や実験俳句の中に認められる。しかしスウェーデンでは比喩の多用を避けて、「そのまま」を詠むと云う姿勢がスウェーデン俳句の現在の主流である。この句会で (Över morgondiman / okända öar / av trädtoppar 朝もやに 島々をなす 森のいただき) が優秀句に選ばれた。今回の句会の日本語訳を監修した俳人の金子兜太はスウェーデンの俳句の特徴について、「修辞ではなく即物的に現実

をつかむことで、感覚は鋭くなる。写生から入るのは、歓迎すべきことだ。」と述べる。

スウェーデンは人口約 975 万人のうち、15%ほどが外国出身者である。シリア難民も多く受け入れ、市民も積極的に歓迎の姿勢を示す。句会では (Ljudet av flygplan / från den kylklara himlen, / barnen utan skor 飛機の音 空はさえて 靴を履かぬ子供) も選ばれた。「裸足の子は、難民の姿を表しているようにも読める」と、元駐日大使のラーシュ・ヴァリエは語る。そして彼は異文化を受け入れることが活力につながると述べ、さらに「風景は、国の文化を表します。風景を詠む句の変化は、その国の変化でもあります。難民がスウェーデン語で書く俳句が生まれたら、素晴らしいことだと思います」とも述べる。シリア難民がスウェーデン語で俳句を書くことは、日本の俳句界では想像もつかないことであるが、すでにスウェーデンでは可能性のある将来の姿といえよう。

スウェーデン語による俳句創作がスウェーデンの文化を背景に育つことは、世界各地で母語による俳句が生まれることも期待できる。そうなれば日本の俳句という文芸形式の真の移植となりブライスが俳句は世界文芸であると信じたことが、すでに始まっていると云えるであろう。

## あとがき

イギリスの文学の教養と日本の禅を土台にしたブライスの俳句・川柳日本文学観の独自性を本論の根幹として、イギリス人 B.H.ブライス像を描出することが目的である。ブライスはイギリスのみならず西洋文学、そして東洋文学と俳句や川柳を比較対照させ、それを解説することで自己の内的世界を表現した。本論では、主に R.H.ブライスという人物像を母国イギリス、日本統治時代の朝鮮、そして戦後の日本での生きざまを纏めたブライス小伝と、彼の俳句観が鈴木大拙の禅仏教の伝播とともに、1960年代のアメリカの詩人に受容され、影響を与えたかに焦点を当てた。さらにブライスとハケットの禅俳句の系譜を描くことで、日本から欧米に自己の日本文化観を発信したブライスの姿を描いた。今日、世界の俳句詩人から見れば、「ブライスはすでに過去の人、俳句イコール禅という俳句への偏見を生み出した意味で功罪がある」という評価と、「依然ブライスの俳句観に魅了されている俳句詩人」とに二分される。筆者が海外で行ったブライスの評価アンケート調査<sup>306</sup>においても、この二分された評価は変わっていない。この評価はブライスの俳句翻訳の解説には、彼の主観や恣意性が含まれていることから予想されることである。しかしブライスの俳句や川柳の解説が、日本文化を西洋に紹介し、東西の異文化交流に大きく寄与し、さらに西洋を中心にして全世界の俳句詩人に文学的な影響をもたらしたことは、在日外国人の中でもブライスを置いてほかにはいないことを、日本人としてもっと認識する必要があると思う。しかしながらブライス自身にとってはどのような評価であろうとも、俳句・川柳の翻訳、解説を素材として禅を背景にした自己の文学世界を示すことが第一義であったといえよう。

本論では、ブライスの業績に焦点を当てたが、ブライスは朝鮮時代には京城帝國大学の教師として日本で第一歩を踏み出した。40年間にわたり教育者であったことを忘れてはならない。彼の小伝で記したように、すでに十代の時から未資格教師として教育に携わっていた。この意味でブライスの教師としての業績に目を向ける必要があると思われる。李氏朝鮮の王家の李王と共著で韓国語テキストである *A First of Korean* (Hokuseido 1951) をはじめ、国立大学の英語入試問題集、英文学を学ぶ学生用の42冊に及ぶテキスト、さらに「おしゃべりひよこさん・電話の取り次ぎ」(日本英語教育協会 Teichiku 1950) のレコードなど、戦後の視聴覚教育教材に力を注いだ。ブライスの全体像を把握するためには、ブライスの教育者としての姿を論考する必要があるが、これは次の課題としたい。

執筆に際しまして、愛知学院大学大学院の鈴木俊次教授の的確なご教示を頂きました。御礼申し上げます。また論文執筆を促して頂きました愛知学院大学大学院の田中泰賢教授、愛知学院大学大学院安藤充教授、ブライス研究をお薦め頂きました日本英学史学会関西支部長、名古屋大学名誉教授、加藤詔士愛知大学教授に心より御礼申し上げます。また R.H. ブライスの遺族である春海ブライスとナナ武田(故人)姉妹には常に執筆の励ましを頂きました。ブライスの教え子である荒井良雄駒沢大学名誉教授(故人)、上田邦義静岡大学名誉教授から励ましを頂戴しました。ここに御礼申し上げます。

注

- 1 *THE GENIUS OF HAIKU Reading from R.H.Blyth on poetry, life, and Zen*, British Haiku Society 1994, 『THE GENIUS OF HAIKU 一俳句のこころ一』(北星堂書店 1995) .
- 2 *MR TIMELESS* (*Essex, Countryside Magazine*, February 1994) pp.24-25.
- 3 『回想のブライス』 p.223 で、新木正之介はブライスの従妹である Dora Orr からの手紙で、ブライスの前夫人の名前は Anna Berkovitch と記している。しかし本論では、ロンドン大学における科目履修証 (1920-1924) の登録名が Annie BERCOVITCH になっていることから、Annie BERCOVITCH を採用した。しかしブライスの親族、学習院関係者には「アンナ」と呼ばれている。
- 4 R.H.Blyth, *Zen and English Literature* (Hokuseido, 1942).
- 5 R.H.ブライス・吉田機司『世界の諷刺詩川柳』(日本出版共同、1950)。
- 6 三重県伊賀市「芭蕉翁生誕 370 年記念事業実行委員会」2014.2.14。
- 7 国際俳句協会、有馬朗人会長「俳句をユネスコ無形文化遺産に」(『朝日新聞』文化欄 2014.6.11)。
- 8 外国語俳句は、HAIKU・俳句と表記されることが多い。
- 9 英語俳句サークル Evergreen (前身 RAINBOW1988 開設)、自治体主催の英語俳句講座開設(大垣市教育委員会 2014)、英字新聞の英語俳句欄 (The Asahi Herald Tribune)、企業の英語俳句も含む英語俳句コンクール(お茶かん俳句コンクール) など。
- 10 Steve Shapiro, *little consequence HAIKU* (Unpublished Manuscript Press, 2007).
- 11 First Prize of Robert Spiess Memorial Haiku Award Competition For 2014, *Modern Haiku Vol.45.2 Summer* (Modern Haiku, 2014) p.6.
- 12 William J. Higginson, *Haiku World- An International Poetry Almanac* 『世界俳句歳時記』(Kodansha International, 1996).
- 13 Damir Damir, *Otisci Snova 夢のこん跡 Imprints of Dreams* (Trablmejker, Beograd, 2012).
- 14 Reginald Horace Blythの片仮名表記は「ブライス」、また「ブライズ」と記されている。『回想のブライス』では小西英一氏も鈴木大拙博士も「ブライズ」と表記する。ブライス自身も、1942年8月21日、神戸イースタン・ロジ・ホテルに置かれた交戦国民間人抑留所で係官に提出した履歴書に、片仮名で「レヂナルド・ホレス・ブライズ」と書いている。ブライス本人もブライズと言っていたと『回想』の中で親友の新木正之助は語る。朝鮮時代に出したブライスの論文 ‘How I became a Buddhist I’ (『文献報 国』(1939.7.1)、同II (1939.8.1) 、同III(1939.9.15)の翻訳「余は如何にして佛教徒となりしや」の翻訳者である橋本徳松はアール・エイツチ・ブライズとしている。しかし同時期の講演「宗教とユーモア」では、京城帝國大学豫科講師アール・エイチ・ブライスとなっている。また満州日日新聞の記事「祖國英に三下り半を叩きつけて翻然佛門に歸依 城大豫科講師レヂナルド・ホレス・ブライズ」(1936. 6. 30)と記載されている。日本へ移住した時期の新聞取材記事「何の惜しかる祖國」(北国毎日新聞1941. 4. 13)においてもレヂナルド・ホレス・ブライズとある。鈴木大拙博士がブライスの協力で編集出版した *THE CULTURAL EAST* 『カルチャル・イースト』にも編集者名に「ブライズ」とある。しかし富子夫人も「ブライス」と言い、次女のナナさんも旧姓時代は「ブライス」を使っていたとのことで、1984年に刊行の『回想のブライス』では「ブライス」に統一された。



本稿ではそれに従って、第一資料の文献で「ブライズ」と表記してあるもの以外は、「ブライス」と表記する。

- 15 R.H.Blyth, *History of Haiku vol.2*. (Hokuseido, 1964) p.459.
- 16 セレベス (Celebes) インドネシア共和国の一島。
- 17 エスキモー(Eskimo) (アメリカ先住民の語で「生肉を食う人」の意) グリーンランド・カナダ・アラスカ・シベリア東端部の極北ツンドラに居住する民族。カナダではイヌイト(Inuit)と自称し、公的にもそう呼ぶ。
- 18 ピグミー(Pygmy)アフリカ中部の熱帯雨林に住む採集狩猟民ムブティ族などを指す。
- 19 Jawuuchulan Begdzijin (Mongolia): mouth gaping/all day long the gelding camel/lows for rain. (William Higginson, *Haiku World*, Kodansha International, 1996) p.118.
- 20 William Haupt (South Africa) Moving black shadows, /crawling moonlight show the way/to where lions drink. *African Nights* (Toetssteen-Keywords,private edition, 2000).
- 21 *OCOLID IAZUL ROUND THE POND, An Anthology by Ion Codrescu*(Editura Muntenia, 1994).
- 22 イギリス俳句協会事務局長デビッド・コブ氏より、ブライスに関する日本での調査依頼状が筆者に来信(1993.1.8)。ジェイムズ・カーカップ氏からの依頼状も来信(1993.6.19)と(1993.7.17)。
- 23 ジェイムズ.W.ハケット James W. Hackett(1929~)シアトルに生まれる。アメリカの俳句詩人。R.H.Blythを師とする。著書に *Haiku Poetry, Vol.1-2* (Hokuseido Press 1964/6), *Haiku Poetry, Vol.1-4* (Japan Publications 1966/8), *The Way of Haiku*( The Japan Publications 1968), *Bug Haiku*(Japan Publications 1968), *The Zen Haiku and other Zen Poems of J. W. Hackett* (Japan Publications 1983), *30 Zen-Haiku* (1994). *English, With Gaelic Versions by poet Gabriel Rosenstock, Illuster. Publ: An Cumann Um Haiku, Dublin, Le Cri Du Faucon* (1996). *French Translation By Voix D'Encre, Montelimar, France* がある。
- 24 *The Brief* No.13 ( Newsletter of The British Haiku Society, November 1993).
- 25 ジェイムズ・カーカップ氏から筆者への手紙(1993年10月3日)。
- 26 Donald Richie, *The Japan Times*, May 3. 1994.
- 27 Edited by Stella Stocker, *Orbis*, No.92-93, spring-summer 1994.
- 28 Edited by Kevin Baikey, HQ, *The Haiku Quarterly*, No.11&12 1994.
- 29 バーナード・リーチ、柳宗悦訳『日本絵日記』(毎日新聞社 1955) p.92。  
バーナード・リーチ、柳宗悦訳 水尾比呂志補訳『日本絵日記』(講談社学術文庫 2002) p.51。本論では、後者を引用に使用。
- 30 バーナード・リーチ「喜びと悲しみ」『イースタン・ブディスト』(1969)『回想鈴木大拙』(春秋社 1975)に収録。
- 31 Phillippe Jaccottet, "*L'ORIENT LIMPIDE*" (1954), "*UNE TRANSACTION SECRETE*" (Gallimard, Paris 1987).
- 32 ジェイムズ・カーカップ氏から筆者への手紙 (10.3.1993).
- 33 *Journal of The British Haiku Society*, Vol.2,No.3 (July 1992).
- 34 注13を参照。
- 35 北星堂書店から筆者への返事 (1992年6月)
- 36 *Journal of the British Haiku Society* (May 11,1993).
- 37 Andrian Pinnington, 'R.H.Blyth, 1898-1964,' Ian Nish ed., *Britain & Japan, Biographical Portrates*. Japan Library, Kent, 1994, pp.252-267.  
Andrian Pinnington「R. H. ブライス」イアン・ニッシュ編『英国と日本一日英交流人物列伝』(博文館新社 2002)。

- 38 Alan Spence, *Night Boat* (Canongate 2014).
- 39 R.H.Blyth, *Japanese Life and Character in Senryu* (北星堂書店 1961) preface.
- 40 出生登録証明書、General Register Office(1993年9月8日発行).
- 41 Mallory Fromn, *R.H.Blyth:A Brief Biography and Appraisal* (津田塾大学紀要 1983, p.259).
- 42 R. H. Blyth, *Zen and Zen Classics*, Vol.5. p.145 (Hokuseido Press 1962).
- 43 川島保良編『回想のブライス』(回想のブライス刊行会 1985) p.88。
- 44 同書 p.78。
- 45 ブライスの二代目の秘書・岩村智恵子氏にブライスの次女・武田ナナ氏の配慮で、筆者は聞き取り調査をする。(1993年3月3日武田ナナ氏宅)
- 46 ブライスの三代目秘書・山田達子氏へブライスの母 Hetty からの手紙。(1959年4月6日) .
- 47 デビッド・コブ(David Cobb)氏から入手のブライスの両親 (Henrietta Williamsと Horace Blyth) の結婚証明書。General Register Office (1993年12月6日発行) 。 HertfordのStustead教会において1987年9月16日に結婚したことが判明。
- 48 平川祐弘『平和の海と戦いの海-二・二六事件から「人間宣言まで」-』(新潮社1983) p.143. (講談社学術文庫1993)p.167。
- 49 『回想』 p.188。
- 50 平川『平和・戦いの海』(新潮社 1983)p.146。(講談社学術文庫 1993) p.170。
- 51 『回想』 p.19。
- 52 デイヴィッド・ボウルトン、福田晴文・加藤泰三・山本恒訳『異議却下-イギリスの良心的兵役拒否運動』(未来社、1993)。
- 53 丸谷オー『笹まくら』(新潮文庫、1974)。
- 54 阿部知二『良心的兵役拒否の思想』(岩波新書、1969)。その他日本で出版された関連書物:菊地邦作『徴兵忌避の研究』(立風書房、1977)。稲垣真美『兵役を拒否した日本人--灯台社の戦時下抵抗』(岩波新書、1972)。山村基毅『戦争拒否十一人の日本人』(晶文社、1987)。
- 55 デイヴィッド・ボウルトン、前掲書 p.7。
- 56 木下道雄『側近日誌』解説・高橋紘(文芸春秋、1990) p.335。
- 57 平川『平和・戦いの海』(新潮社1983)p.149。(講談社学術文庫1993) p.173。
- 58 白米満行「R.H. ブライスの人と業績(一)」(皇学館論叢20・6、1987)。
- 59 『回想のブライス』 p.19。
- 60 Blyth, *Zen in English Literature and Oriental Classics* (Hokuseido,1942) p.98.
- 61 Blyth, *A History of Haiku* 1 (Hokuseido 1963)p.29.
- 62 平川『平和・戦い』(新潮社1983) p.152。(講談社学術文庫1993) p.176。
- 63 『回想』 p.63。
- 64 同書 p.63。
- 65 平川『平和・戦い』(新潮社 1983)p.153。(講談社学術文庫 1993) p.178。
- 66 『回想』 p.88。
- 67 同書 p.34。
- 68 正しくは、京畿道高陽郡崇仁面典農里
- 69 同書 p.18。

- 70 仙北谷昇一「禅・俳句・生活の三位一体」(*Haiku International* NO.2, 1962) pp.10-12。
- 71 諸留寛「R.H.Blythの詩について」(愛知大学史研究 4, 1972) pp.87-90。  
*The London Mercury*, (August 1927) ブライスの詩2編:"Mortality"  
"Snow in Moonlight".
- 72 同書 p.90。
- 73 Mallory Fromm, "R.H.Blyth:A Brief Biography and Appraisal"  
(津田塾大学紀要 1983) p.261。
- 74 『回想』 p.152。
- 75 平川『平和・戦い』(新潮社 1983) p.176。(講談社学術文庫 1993) pp.204-205。
- 76 『回想』 p.85。
- 77 同書 p.90。
- 78 同書 p.130。
- 79 R.H.Blyth, *Haiku* Vol.1(The Hokuseido Press 1949) p.11。
- 80 『回想』 pp.128-129。
- 81 ロバート・エトケン(Robert Aitken 1917- 2010 ):ハワイにあって、ダイヤモンド・サンガ主宰。彼には、W.S.マーウィンW.S.Marwinや、ゲイリー・スナイダーGary Snyderなど、アメリカの代表的な作家たちが師事しており、アメリカ人 師家として強い影響力を持つ指導者の一人である。彼が日本と縁を持つようになったのは、第二次世界大戦中、グアム島で文官として日本軍の捕虜となり、1942年、神戸の収容所に入れられた時からである。そこで出版されたばかりの『禅と英文学』を読み、たまたま同じ収容所にいたその著者のR.H.ブライスとの交友によって、エトケンは禅と俳句に深い関心をもった。その後、鈴木大拙、中川宋淵老師、安谷白雲老師、山田耕雲老師に参禅する。著書: *A NEW WAVE* 重松宗育訳「禅のこころ芭蕉のこころ」(禅文化1990) *TAKING PATH OF ZEN*(North Point Press,1982) *THE MIND OF CLOVER:ESSAYS IN ZEN BUDDHIST ETHICS*(North Point Press,1984)
- 82 『回想』 p.110。
- 83 平川『平和・戦い』(新潮社 1983) p.174。(講談社学術文庫 1993)p.202。
- 84 『回想』 p.219。
- 85 『鈴木大拙の人と学問』(新版鈴木大拙禅選集別巻 春秋社、1993) p.37。 *Essays in Zen Buddhism, First Series*(Luzac and Comapany, London 1927)。
- 86 白米満行「R.H.ブライスの人と業績 (一)」(皇学館論叢20 ; 6 1987)。
- 87 NHK放送番組「日本語のおもしろさ、むずかしさ」(「言葉の研究室」NHK第二放送 1950年12月17日午前7時15分放送)対談:学習院大学教授、東大講師 R.H.ブライス氏と松野アナウンサー。
- 88 『回想』 p.65。
- 89 R.H.ブライス (増原良彦訳)「禅と鈴木大拙」『鈴木大拙の人と学問』 p.37。
- 90 同書 p.41 (増原良彦訳)。
- 91 Daisetz T.Suzuki, *Zen and Japanese Culture* (Charles E.Tuttle Company, Inc.1993) p.228。

- 92 『回想』 p.153。
- 93 R.H.Blyth, *Zen in English Literature and Oriental Classics* 『禅と英文学』  
(Hokuseido Press 1942).
- 94 R.H.Blyth, *Zen and Zen Classics* Vol.1 (Hokuseido 1960) p.11.
- 95 『回想』 p.23。
- 96 R.H.Blyth, *How I became a Buddhist* 『文献報国』(京城帝国大学図書館 1939.7.1)  
pp.296-298.
- 97 アール・エイツチ・ブライズ、橋本徳松譯 「余は如何にして佛教徒徒なりしや」『文献  
報国』(京城帝国大学図書館 1939.7.1)p.316-317。
- 98 R.H.Blyth, *How I became a Buddhist* p.298.
- 99 橋本徳松譯 「余は如何にして佛教徒徒なりしや」p.317
- 100 R.H.Blyth, *How I became a Buddhist* p.298.
- 101 橋本徳松譯 「余は如何にして佛教徒徒なりしや」p.317
- 102 『回想』 pp.154-155。
- 103 同書 p.163。
- 104 同書 p.155。
- 105 北国毎日新聞(1940.12.6)。
- 106 『回想』 pp.155-156。
- 107 満州日日新聞 (1939.6.30)。
- 108 北国毎日新聞(1941.4.13)。
- 109 『回想』 p.109。
- 110 「英文学会報」(学習院大学英文学会、1964)。
- 111 『回想』 p.177。
- 112 『回想』 p.109。
- 113 同書 p.110。
- 114 「戦後十一年目の日本に望む」(神戸新聞、1956・8・10)。
- 115 「英文学会報」(学習院大学英文学会、1964)。
- 116 「日本人へ・・・ひと言」(朝日新聞、1949・11・9)。
- 117 『日本評論』(日本評論社 2月号、1949) p.14。
- 118 同書。P.27。
- 119 原田種雄・赤堀侃司編『国際理解教育のキーワード』(有斐閣、1992)p.5。
- 120 『回想』 p.106。
- 121 同書 p.108。
- 122 同書p.109。
- 123 同書 p.109。
- 124 同書 p.155。
- 125 白米満行「R.H.ブライズの人と業績 (一)」(『皇学館論叢』 20(6) 1987) p.8。
- 126 平川『平和・戦い』(新潮社 1983) p. 204。(講談社学術文庫 1993)p.235。
- 127 ブライズの次女、武田ナナ氏所蔵の英文原稿「In Praise of Suzuki Daisetsu and  
Zen by R.H.Blyth」より転載。
- 128 北国毎日新聞(1941.10.16)。
- 129 『回想』 pp.159-161。
- 130 平川『平和・戦い』(新潮社 1983) p.206。(講談社学術文庫 1993)p.238。

- 131 William P. Woodard, *The Allied Occupation of Japan 1945-1952 and Japanese Religions*, E.J.Brill, Leiden, 1972. ウィリアム・P・ウッドワード・阿部美哉訳『天皇と神道』(サイマル出版会、1988) p.302。
- 132 同書 pp.302~303。
- 133 『回想』 p.162。
- 134 H.G.Henderson から Hackett への手紙 (Dec.25,1964).
- 135 平川裕弘『平和・戦い』(新潮社1983) p.239。(講談社学術文庫1993) p.276。
- 136 E.G.ヴァイニング・小泉一郎訳『皇太子の窓』(文芸春秋新社、1953) p.86。
- 137 相沢源七「宮城の私学」『宮城県の昭和史』下巻(毎日新聞社、1983) p.18。
- 138 袖井林二郎「山梨勝之進 海軍大将」『百年の日本人』その二(読売新聞社、1985) p.177。
- 139 山梨勝之進『歴史と名将一戦史に見るリーダーシップの条件』(毎日新聞社、1981) p.362。
- 140 E.G.ヴァイニング p.49。
- 141 E.G.ヴァイニング p.30。
- 142 高橋紘・鈴木邦彦『天皇家の密使たち[秘録]占領と皇室』(現代史出版会、1981)。  
袖井林二郎、解説『天皇家の密使たち一占領と皇室』(文春文庫、1989) pp.282~283。
- 143 『回想』 p.176。
- 144 同書 p.176。
- 145 同書 p.177。
- 146 同書 p.177。
- 147 西谷啓治編『回想鈴木大拙』(春秋社、1975)
- 148 財団法人松ヶ岡文庫『鈴木大拙の人と学問』(春秋社、1992)
- 149 坂東性純『教化研究』(1966)(この論文は西谷啓治編『回想鈴木大拙』春秋社、1975に収録)。p.271。
- 150 古田紹欽『心』(1966)(この論文は西谷啓治編『回想鈴木大拙』春秋社、1975に収録)。p.426。
- 151 *Nippon Times* 1947・10・3.
- 152 『回想』 pp.22~23。
- 153 同書 p.17。
- 154 柳宗悦『柳宗悦全集』第16巻(筑摩書房、1981) p.41。
- 155 バーナード・リーチ・柳宗悦訳『日本絵日記』(毎日新聞社、1955) p.92。  
*A Potter in Japan* (Fabaer & Faber, 1960).  
バーナード・リーチ・柳宗悦訳・水尾比呂志補訳『日本絵日記』(講談社学術文庫、2002)。p.137。注151は『日本絵日記』(毎日新聞社、1955) p.92を参照する。
- 156 バーナード・リーチ・柳宗悦訳・水尾比呂志補訳 p.138。
- 157 『回想』 p.183。
- 158 『銀花』第58号(文化出版局、1984)。

- 159 柳宗悦「民藝館・民藝協會消息及び寄付報告」『柳宗悦全集』第16卷(筑摩書房、1981) pp.488-491。
- 160 NHK放送番組「日本語のおもしろさ、むずかしさ」(「言葉の研究室」NHK第二放送、1950年12月17日午前7時15分放送)対談:学習院大学教授、東大講師R.H.ブライス氏と松野アナウンサー。
- 161 James Bull,1960年代アメリカの俳句雑誌編集者、H.G.Hendersonの知人。
- 162 Visiting R.H.Blyth's Home (<http://www.hacketthaiku.com/RHBlythsHome.html>)  
2002年9月11日、ハケットは妻を伴い、北鎌倉の東慶寺内にあるブライスの墓に詣でた。その後、初めて大磯のブライス家を訪問した。3匹の犬がハケットを迎えた。音楽家のパトリシアがブライス愛用のピアノでバッハの曲を弾いた。ブライスの次女夫妻、孫娘、そしてハケット夫妻、筆者にとって芳醇な時間を共有した。
- 163 R.H.Blyth, *Zen in English Literature and Oriental Classics* 『禅と英文学』(北星堂書店、1942) p.vii.
- 164 同書 p.vii.
- 165 同書 p.x.
- 166 同書 pp.412-435.
- 167 田村完誓訳「R.H.ブライス『無執着』」(立正大学紀要19、1986) p.89。
- 168 同書 p.90.
- 169 佐藤圓『芭蕉と禅』(桜楓社、1973) p.11。
- 170 R.H.Blyth p.xi.
- 171 佐藤圓『芭蕉と禅』(桜楓社、1973) p.11。
- 172 R.H.Blyth p.xi.
- 173 寿岳文章「ブライスさんの思い出」『禅文化』第38号(禅文化研究所1965) pp.72-73。
- 174 Daisetz Suzuki & R.H.Blyth *The Cultural East*, Vol.1, No.1 (The Matsu-ga-oka Library 1946) p.4.  
吉村侑久代「英文雑誌*The Cultural East*からの東洋文化相対の基盤をなす精神世界*Editorial*の翻訳を試みて」『松ヶ岡文庫研究年報』第18号  
(松ヶ岡文庫2004) pp.145-157.で*Editorial*の翻訳を行う。*Editorial*を「創刊にあたって」とした。
- 175 鈴木大拙の宗教観では、「大悲」であり、それは英語ではLOVEと訳されている。  
よってこの本稿でも「大悲」イコール「愛」と解する。
- 176 *The Cultural East*, Vol.1, No.1. p.5.
- 177 吉村侑久代「英文誌 *The Cultural East*からの東洋文化総体の基盤をなす精神*Editorial*の翻訳を試みて」『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』第18号(松ヶ岡文庫2004)。
- 178 *The Cultural East*の Vol.1, No.1, No.2ともにブライズの表記である。
- 179 同書 p.7.
- 180 ユーモア9項目の日本語訳 上田真『蛙飛び込む一世界文学の中の俳句』(明治書院、1979) p.232。
- 181 *The Times Literary Supplement* (3 March 1950).
- 182 R.H.Blyth, *Haiku* vol.1 (Hokuseido Press 1949) p.5.
- 183 同書 p.154.
- 184 同書 p.302.

- 185 同書 p.303.
- 186 R.H.ブライス「俳句と日本の国民性—中心をなす仏教思想」『大法輪』6月号(1950) p.43。
- 187 高浜虚子編『新歳時記』(三省堂1951)、角川書店編『合本俳句歳時記』(1988)。
- 188 R.H.Blyth, *Haiku* Vol.1 p.338.
- 189 R.H.Blyth, *Haiku* Vol.4 pp.1235~1236.
- 190 *The Cultural East* Vol.1 p.7.
- 191 ブライス「俳句と日本の国民性—中心をなす仏教思想」『大法輪』6月号(1950) p.40.
- 192 同書 p.7.
- 193 R.H.Blyth, *Haiku* Vol.1 p.5.
- 194 R.H.Blyth, *Haiku* Vol.1 p.7.
- 195 R.H.Blyth, *Haiku* Vol.1 p.6.
- 196 D.T.Suzuki, "Reginald Horace Blyth" *THE EASTERN BUDDHIST*(New Series) Vol.1, No.1(September 1965) p.135.
- 197 仙北谷晃一「禅・俳句・生活の三位一体」*HI* No.2  
(HAIKU INTERNATIONAL1991)。
- 198 R.H.ブライス「無文学の文学—わたしの俳句観—」『北国俳壇』6月号(北国新聞社 1950) p.1。
- 199 武内博『来日西洋人名事典』(日外アソシエーツ、1995) p.370.
- 200 R.H.Blyth, *Edo Satirical Verse Anthologies* (北星堂書店、1961) p.307.
- 201 和田垣謙三『吐雲録』(至誠堂書店、1914)。
- 202 速川和男「短詩型文学の英訳—特に俳句・川柳について」『英語教育』Vol.XXXVI.No.13(大修館 1988年1月) p.25。
- 203 蘆川忠雄:『読心術修養』(1907)。『和田垣博士の兔糞録』(1913)をはじめ人生处世術 等の著書多数。
- 204 蘆川忠雄『東京経済雑誌』より、和田垣謙三『吐雲録』に再引、巻末 pp. 13-14。
- 205 成見延亀・上床新助共訳の *Senryu, short witty odes* 『英譯川柳名句選』(日州新聞社 1924)。
- 206 尾藤三柳編『川柳総合辞典』(雄山閣、1980)。
- 207 R.H.Blyth, *Japanese Life and Character in Senryu* (北星堂書店、1961) vi.
- 208 R.H.Blyth, 同書 vi.
- 209 『やなぎ柳樽研究』(柳書刊行会、1925~1934)。
- 210 斎藤秀三郎『斎藤和英大辞典』(日英社、1928)。
- 211 阿部佐保蘭『川柳と翻訳』(中央公論事業出版、1966) vi。
- 212 前田雀郎(1897~1960)、阪井久良伎の弟子。「川柳の原点は俳諧の“こころ”」を主張。
- 213 吉村侑久代『R.H.ブライスの生涯—禅と俳句を愛して』(同朋舎出版、1996) pp.75-78。
- 214 R.H.Blyth, *Zen In English Literature and Oriental Classics* 『禅と英文学』(北星堂書店、1942) .
- 215 Blyth, *Oriental Humour* (北星堂書店、1959) .
- 216 Blyth, *Edo Satirical Verse Anthologies* (北星堂書店、1961)。
- 217 Blyth 西崎一郎共編『国立大學入學試験英語問題選集』(北星堂書店、1949)。
- 218 宮森麻太郎『近松とシェークスピア:傑作俳句の英譯』(同文社、1929) 序、pp.3-4。
- 219 Asataro Miyamori, *An Anthology of Haiku, Ancient and Modern* (Maruzen,1932)。

- 220 宮森麻太郎 *One Thousand Haiku, Ancient and Modern* 『英譯古今俳句一千吟』  
（同文社、1930）緒言 p.2。
- 221 同書 緒言 p.4。
- 222 Blyth, *Zen in English Literature and Oriental Classics* 『禅と英文学』  
（北星堂書店 1942）xi.
- 223 阿部佐保蘭 『川柳と翻訳』 p.53。
- 224 Asatarō Miyamor, *An Anthology of Haiku, Ancient and Modern* 序 p.16.
- 225 同書、序 p.19.
- 226 R.H.ブライス・吉田機司 『世界の諷刺詩川柳』（日本出版協同、1950）序 p.4。
- 227 同書、序 pp.2-3。
- 228 同書、序 p.3。
- 229 吉田機司（1902-1964）阪井久良木伎に川柳を師事。千葉で「川柳祭」を主宰。医師。
- 230 R.H.ブライス・吉田機司 『世界の諷刺詩川柳』（日本出版協同、1950）序 p.3。
- 231 草野心平「推薦の辞」R.H.ブライス・吉田機司 『世界の諷刺詩川柳』  
（日本出版協同株式会社刊、1950）。
- 232 同書 p.11。
- 233 同書 p.31。
- 234 同書 p.31。
- 235 同書 p.147。
- 236 ブライス・吉田 『世界の諷刺詩川柳』 pp.151-152。
- 237 武島羽衣（たけしまはごろ 1872~1967）詩人、国文学者、作詞家。宮内省  
御歌所寄人。本名・武島又次郎 1895年に創刊された『帝国文学』の編集委員。  
元日本女子大学教授。著書に『修辞学』（博文館、1900）『文章入門』（大倉書店、1907）。
- 238 ブライス・吉田 『世界の諷刺詩川柳』 p.12。
- 239 R.H.Blyth, *Japanese Humour*（日本交通公社、1957）p.2.
- 240 R.H.Blyth, *Edo Saterical Verse Anthologies*（北星堂書店、1961）.
- 241 R.H.Blyth, *Japanese Life and Character in Senryu*（北星堂書店、1961）。  
表紙ジャケット。
- 242 Blyth 同書、epilogue.
- 243 Blyth, *HAIKU Vol.1*（北星堂書店、1942）p.302.
- 244 R.H.ブライス 「俳句と日本の国民性」『大法輪』17巻6号（1950年6月）。
- 245 ブライス・吉田 『世界の諷刺詩川柳』 p.205。
- 246 Blyth, *Senryu*（北星堂書店、1949）preface p.1.
- 247 ブライス・吉田 『世界の諷刺詩川柳』 p.154。
- 248 同書 p.159。
- 249 同書 p.161。
- 250 同書 p.130。
- 251 ブライス 「無文学の文学ーわたしの俳句観ー」『北陸俳壇』六月号（北陸新聞社、1950）  
p.1。
- 252 『回想のブライス』（回想のブライス刊行会、1984）pp.73-74。
- 253 同書 p.75。
- 254 阿部佐保蘭 「ブライス先生の憶い出」『川柳塔』p.39、阿部『川柳と翻訳』（1966）p.14。
- 255 阿部佐保蘭（1906-1968）東京商科大学に学び、学生時代から川柳翻訳運動に参加。  
英譯川柳の成果をまとめた『川柳と翻訳』（中央公論事業出版、1966）を刊行。
- 256 『オール川柳』六月号（葉文館、2000年6月）pp.22-23。
- 257 筆者と対談：春海・マーガレット・ブライス、ナナ子・エリザベス・武田



- (大磯Blyth邸にて、2004.11.27)。
- 258 R.H.Blyth, *Senryu* (北星堂書店、1949) preface.
- 259 荻原浩幸「川柳が文芸になるとき」(『朝日新聞』中部版、2011.9.24)。
- 260 Jack Kerouac, *The Dharma Bums* (Andre Deutsch 1958).
- 261 小原広忠訳『禅ヒッピー』(太陽社 1973)。  
中井義幸訳『ジェフイー・ライダー物語』(講談社 1982)。
- 262 Cor Van Den Heuvel, ed., *The Haiku Anthology* (Simon & Schuster 1986) p.24.
- 263 竹前栄治『GHQ』(岩波書店 1983) p.118。
- 264 佐藤和夫『海を渡えた俳句』(丸善 1991) p.149。
- 265 池澤夏樹・高橋雄一郎訳『ジャック・ケルアック詩集』  
(アメリカ現代詩共同訳詩シリーズ①、思潮社、1991)。  
SOME WESTERN HAIKUS by Jack Kerouac  
This July evening, / A large frog / On my door still.
- 266 Regina Weinreich ed., Jack Kerouac *Book of Haikus* (Penguin Poets 2003).
- 267 同書 p.59.
- 268 Allen Ginsberg, *Collected Poems 1947-1980* (Harper & Row, 1984) p.137.
- 269 「四つの俳句」(夏石番矢訳)『ビート読本』(思潮社、1992)p.24。
- 270 詩人、翻訳家、俳句編集者。
- 271 Patricia Donegan, speech on “Homage to Allen Ginsberg and His Haiku”  
(The Second HIA-HAS Joint Haiku Conference, Tokyo, 19-20 Apr. 1997).
- 272 R.H.Blyth, *HAIKU* Vol.1, Eastern Culture(First published by Kamakura-bunko,  
1949,second and following printings by Hokuseido Press) p.7.
- 273 R.H.Blyth, *HAIKU* Vol.1, preface.
- 274 Daisetz T. Suzuki, *Zen and Japanese Culture* (Charles E.Tuttle Co.,) p.228.
- 275 “Draft Difinitions Submitted for Member Comment” (Haiku Society of America,  
Inc. January 1994).
- 276 Sylvia Forges-Ryan,ed., “Information and Guidelines” (The Haiku Society of  
America 1992 Information Sheet, 1992).
- 277 仙北谷昇一 *HI* No.2 (Haiku International 1991) p.10。
- 278 James W. Hackett, *The Zen Haiku and other Zen Poems* (Japan Publications,  
Inc.1983) Author’s Introduction.
- 279 Ingrid Fischer-Schreiber, ed., *The Shambhala Dictionary of Buddhism and Zen*  
(Shambhala Publications, Inc., 1991) p.198.
- 280 *New Random House*, 2<sup>nd</sup> ed. (1987).
- 281 John Budden, *That Art Thou: An Interview with James W. Hackett Woodnotes*  
Autumn, 1996.
- 282 R.H.Blyth 「無文学の文学—私の俳句観—」『北国俳壇』6月号(北陸新聞社、1950)  
p.1。
- 283 The first letter from Blyth to Hackett, 1958.
- 284 R.H.Blyth, *History of Haiku* Vol.2 (北星堂書店 1964) p.351.
- 285 Lettr from James W. Hackett to Ikuyo Yoshimura 19 August 1997.
- 286 James W.Hackett, *The Zen Haiku and other Zen Poems of J.W.Hackett* (Japan  
Publication, Inc., 1983) Author’s Introduction.
- 287 John Budden, *That Art Thou: An Interview with James W. Hackett* (Woodnotes  
Autumn, 1996) p.9.
- 288 Harold G. Henderson, *Haiku in English* (Charles E. Tuttle Co., 1967) p.60.
- 289 R.H.Blyth, *A History of Haiku Vol.2* (Hokuseido 1964) p.351.

- 290 *The Genius of Haiku Reading from R.H.Blyth* (The British Haiku Society 1994) p.137.
- 291 新村出編『広辞苑』第二版補定訂版（岩波書店、1980）。
- 292 *Webster's Third New International Dictionary* 2002.
- 293 Asataro Miyamori, *An Anthology of Haiku Ancient and Modern* (Marizen Company Ltd. 1932) p.17.
- 294 R. H. Blyth, *Senryu* (Hokuseido 1949) p.184.
- 295 P.F.コーニツキー(P.F.Kornicki)「ウィリアム・ジョージ・アストン」『英国と日本：架橋の人びと』（思文閣出版 1998） p.108.
- 296 W.G.Aston, *A History of Japanese Literature* (D. Appleton and Company 1899) p.289.
- 297 宮森麻太郎『英譯古今俳句一千吟』 *One Thousand Haiku Ancient and Modern* (同文社 1930)。
- 298 同書 p.15。
- 299 Harold Gould Henderson, *The Bamboo Broom* (J.L.Thompson & Co.(Retail) Limited 1933) p.25.
- 300 Harold Gould Henderson p.128.
- 301 R.H.Blyth, *A History of Haiku* Vol.2 (北星堂書店 1964) p.351.
- 302 (スウェーデンの詩人、心理学者、ノーベル文学賞受賞者) ノーベル財団などによると、26日にストックホルムで死去。83歳。1954年、23歳の時に発表した最初の詩集「17編の詩」で注目を集めた。日本の俳句に影響を受けた「俳句詩」に傾倒し、短い言葉で叙情に満ちた世界を表現することから「隠喩の巨匠」と呼ばれた。90年に脳卒中で右半身不随となり、失語症の後遺症も抱えたが、96年には病気の詩人の心象風景を描いた「悲しみのゴンドラ」を発表。50以上の言語に翻訳された。2011年にノーベル文学賞を受賞した。(朝日新聞 2015.3.29)
- 303 Kaj Falkman, Sten Svensson, Shimizu Tetsuo, 『Aprilsnö 四月の雪』 (podium LYRIK 2000) .
- 304 W.G.アストン(William Gorge Aston 1841-1911)英国の外交官。*A History of Japanese Literature* (D. Appleton and Company 1899)において初めて俳諧の記述をする。pp.289-297. *A Grammar of the Japanese Written Language*” third edition, Revised and Corrected (Luzac & Co. Lane, Crawford & Co. 1904) pp.189-190. 『日本文語文典』第三版にも俳諧に言及。
- 305 バジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain 1850-1935)英国の言語学者。近代国語学の樹立の貢献。『日本事物誌』”*Things Japanese*”1890. において「詩歌の項目で俳句を「超小人国的な一種の詩で、十七音節（五・七・五）しかもたない」と説明。
- 306 吉村侑久代「海外に広がる俳句—ブライスと世界俳句」『吟遊』 No.10 (吟遊 2001) pp.10-15。

## R・H・ブライス年譜

1898(明治31)	12月3日、英国エセックス(Essex)州のレイトン(Leyton)に生まれる。父はHorace Blyth、母はHenrietta Blyth。出生地はトランピングトン通り93、レイトン(93 Trumpington Road, Leyton)。レイトンは現在レイトンストン(Leytonstone)と呼ばれている。ブライスは、乳幼児期に数マイル東のイルフォード(Ilford)に移転したらしい。
1903(明治36) 5歳	イルフォードのクリーブランド・ロード・スクール(Cleveland Road School:七年制小学校)に入学する。
1910(明治43) 13歳	カウンティ・ハイ・スクール (County High School:五年制中学校)に入学する。
1914(大正3) 16歳	1914年から1916年まで、ロンドンの北部のハイバリ・パーク・スクール (Highbury Park School)でフランス語、スペイン語、英語(国語)を教える。
1916(大正5) 18歳	中学校卒業。第一次世界大戦兵役忌避のため、ロンドンのワームウッド・スクラブズ(Wormswood Scrubbles)監獄に収監される。
1919(大正8) 21歳	監獄より釈放。出身校のイルフォードのクリーブランド・ロード・スクールで6ヶ月間教える。
1920(大正9) 22歳	ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ(University College London)に入学する。
1923(大正12) 25歳	ロンドン大学(英文学専攻)を優等第一級で卒業。日本人留学生の藤井秋夫より京城帝国大学予科備入外国人教師として、京城赴任をすすめられ、即座に受諾する。
1924(大正13) 26歳	6月、ロンドン・デイ・トレーニング・カレッジ(the London Day Training College)にて、ロンドン大学教育科教員免許を受ける。アニー・ベルコヴィッチ(Annie Bercovitch、ユダヤ系英国人)と結婚する。8月、神戸に着く。9月より京城にて教職につく。(京城帝国大学予科教師 備入契約)
1926(大正15) 28歳	この年より京城帝国大学で英文学の講義をする。(9月、京城帝国大学英語教師備入契約)京畿道高陽郡崇仁面典農里に居住する。
1927(昭和2) 29歳	鈴木大拙のDaisetz Suzuki:Essays in Zen Buddhism,First Series: Luzac and Company, London 1927。(禅仏教に関する諸論第一集)を読み感動。鈴木大拙の説く禅思想の熱心な信奉者となる。8月、ブライス自作の英詩をThe London Mercuryに発表する。

1930(昭和5) 32歳	4月、京城高等商業学校兼任講師となる。この時期、父ホレス・ブライス(Horace Blyth)死去。
1932(昭和7) 34歳	4月、京城高等商業学校(京城高商)に来任した新木正之助を知り、以後親しくなる。 宮森麻太郎の <i>An Anthology of Haiku, An Ancient Haiku and Modern</i> 出版される。
1933(昭和8) 35歳	4月、同居させ面倒を見ていた李仁秀が京城高商に入学する。 ハロルド・G.ヘンダーソン (H.G.Henderson) の <i>The Bamboo Broom</i> 出版される。この頃、藤井秋夫夫人、元子に俳句の勉強を依頼する。
1934(昭和9) 36歳	4月、妻アニー、李仁秀を伴って英国へ去る。
1935(昭和10) 37歳	3月、英国に帰国。アニーと法的に離婚。アーサー・ウェリー (Arthur David Waley)英訳『老子』(1934)に感銘を受ける。
1936(昭和11) 38歳	3月、京城に戻り、大学予科、大学、高商の教職復帰。京城旧市内梨花町に借家し、昭和15年京城を去るまで居住する。
1937(昭和12) 39歳	3月、来島富子 (22歳) と結婚する。
1938(昭和13) 40歳	長沙洞妙心寺別院にて、老師華山大義につき禅の修行を始める。ブライスの日本語俳句、「かたつむり」の句が生まれる。鈴木大拙の『禅と日本文化』( <i>Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture</i> :英文)が出版される。
1939(昭和14) 41歳	3月、京城商業高等学校講師の職を解かれる。 6月28日、日本へ帰化願いの素願を朝鮮総督府へ提出する。 9月3日、英国、フランスがドイツに宣戦、第二次世界大戦が始まる。
1940(昭和15) 42歳	3月21日、ブライスが京城に来るきっかけを作った京城帝国大学予科の藤井秋夫教授、狭心症にて逝去 (42歳)。 4月、ブライス夫妻日本へ移住。富子の郷里萩市に3カ月滞在。 8月、富子と共に東京へ移転する。 11月、京城帝国大学予科講師の職を解かれる。金沢第四高等学校の傭入外国人教師となる。金沢市鷹匠町の官舎に居住。この間『禅と英文学』の執筆に努める。

1941(昭和16) 43歳	<p>4月、日本への帰化願いを日本政府に出す。帰化願いは願書提出のままで終る。</p> <p>5月、『禅と英文学』(<i>Zen in English Literature and Oriental Classics</i>)の原稿脱稿、北星堂書店が出版を引き受ける。</p> <p>金沢で鈴木大拙に初めて会う。(1940年11月から1941年12月、太平洋戦争直前までの間)</p> <p>12月8日、太平洋戦争が起る。石川県警察に保護され、広坂警察(現在、中警察)署内に抑留される。</p>
1942(昭和17) 44歳	<p>2月、長女、春海誕生。</p> <p>3月、金沢第四高等学校教師の職を解かれる。同月、神戸市神戸区北野町一丁目のイースタンロッジ・ホテルの交戦国民間人抑留所に収容される。</p> <p>12月、『禅と英文学』(英文)を北星堂書店より出版。</p>
1943(昭和18) 45歳	<p>神戸市灘区青谷町一丁目のカナダ人学校の寄宿舎に移動。</p>
1944(昭和19) 46歳	<p>神戸市内に分散収容されていた収容者は、再度公園内にある旧感化院の建物に収容される。この収容所でRobert Aitken(ロバート・エトケン)は、ブライスに出会う。</p>
1945(昭和20) 47歳	<p>8月、日本敗戦降伏。抑留者は解放される。ブライスは家族と共に抑留所時代を共にした神戸在住のルイス・ブッシュ(Lewis William Bush)方に暫時寄寓。</p> <p>10月、上京、鈴木大拙および斉藤勇を訪ねる。またGHQに民間情報教育局中佐で俳句研究者でもあるハロルド・G・ヘンダーソンを訪ねる。</p> <p>11月、斉藤勇の推薦により学習院備入外国人教師となる。当時の学習院長、山梨勝之進の下で、その考えのもとで皇室のために働き、また学習院存続の運動をする。外務大臣、吉田茂の委嘱により日本政府とGHQとの間の連絡係を務める。</p> <p>12月、ヘンダーソンに天皇の「人間宣言」の主要部分の草稿作りを依頼する。ブライスはそれによって天皇の「人間宣言」の英文草案を作る。</p>

1946(昭和21) 48歳	<p>1月1日、天皇人間宣言の詔書発布。</p> <p>4月、皇太子に英語個人教授はじまる。(以後、御進講となり、ブライス 没年の昭和39年5月まで続く)。外務省研修所講師、東京大学講師、日本大学兼任教授となる。</p> <p>7月、鈴木大拙、ブライスの協力を得て、英文雑誌『カルチュラル・イースト』1巻1号(<i>The Cultural East Vol.1, No.1</i>)を北鎌倉・松ヶ岡文庫より発刊。</p> <p>10月、東京教育大学講師になる。ヴァイニング夫人(Elizabeth Janet Gray Vining)来日。</p> <p>11月3日、日本の新憲法公布。</p>
1947(昭和22) 49歳	<p>7月、次女ナナ誕生。</p> <p>8月、『カルチュラル・イースト』1巻2号(<i>The Cultural East, Vol.1, No.2</i>)を刊行。(2号にて終刊)</p>
1948(昭和23) 50歳	<p>実践女子大学、早稲田大学、自由学園講師となる。</p> <p>3月、<i>Dorothy Wordsworth's Journal</i></p> <p>8月、<i>The New Vista English Readers Senior I</i></p> <p>11月、<i>R.L.Stevenson's Will O' the Mill</i></p> <p>鈴木大拙の『禅による生活』(英文版)の校正をする。</p>
1949(昭和24) 51歳	<p>1月、Blyth 西崎一郎共編『国立大学入學試験英語問題選集』</p> <p>4月、<i>Selection from Thoreau's Journals</i></p> <p>8月、<i>Haiku Volume I:Eastern Culture</i></p> <p>9月、<i>An Outline of English Literature</i></p> <p>9月、<i>William Hazlitt: An Anthology</i></p> <p>9月、<i>The Poems of Emerson: A Selection</i></p> <p>10月、<i>A Chronological Anthology of Nature in English Literature</i></p> <p>11月、<i>Senryu:Japanese Satirical Verses</i></p>
1950(昭和25) 52歳	<p>3月、李王と共著<i>The First of Korean</i></p> <p>8月、<i>Haiku Volume II:Spring</i></p> <p>9月、<i>An Anthology of Nineteenth Century Prose</i></p> <p>10月、ブライス・吉田機司共著『世界の風刺詩川柳』</p> <p>11月、ヴァイニング夫人帰米する。</p> <p>12月、<i>Thoughts on Culture---Or, How to Be a Human Being---</i></p>

1951(昭和26) 53歳	4月、 <i>A Shortened Version of A WEEK ON THE CONCORD AND MERRIMACK RIVERS by Henry David Thoreau</i> 9月、 <i>A Chronological Anthology of Religion in English Literature</i> 10月、 <i>English Through Questions &amp; Answers</i>
1952(昭和27) 54歳	1月、 <i>HAIKU Volume III: Summer-Autumn</i> 4月、 <i>An Anthology of English Poetry</i> 5月、 <i>HAIKU Volume IV: Autumn-Winter</i> 7月、 <i>Buddhist Sermons on Christian Text</i>
1953(昭和28) 55歳	4月、 <i>R.L.Stevenson:Fables</i> 6月、 <i>A Short History of English Literature</i> Bernard Howell Leach(バーナード・リーチ)に初めて会う。
1954(昭和29) 56歳	11月、『禅と英文学』および <i>HAIKU I,II, III,IV</i> にて東京大学より文学博士号授与。英国へ一時帰国を計画したが、十分な外貨を日本政府から供与されないため断念する。
1957(昭和32) 59歳	10月、 <i>Japanese Humour</i>
1958(昭和33) 60才	4月、 <i>A Survey of English Literature</i> 4月、 <i>How to Read English Poetry</i> 前学習院長山梨勝之進の世話で、大磯に住宅購入。
1959(昭和34) 61歳	3月、 <i>Easy Poems, Book One</i> 3月、 <i>Easy Poems, Book Two</i> 5月、 <i>Oriental Humour</i> 5月、 <i>Humour in English Literature: A Chronological Anthology</i> 5月、勲四等瑞宝章授与される。 8月、英国女王から外国勲章佩用許可状を受く。 目白の学習院舎宅から大磯の家に移転。
1960(昭和35) 62歳	3月、 <i>Zen and Zen Classics, Volume I:General Introduction, From the Upanishads to Huineng</i> 4月、 <i>More English Through Questions &amp; Answers</i>
1961(昭和36) 63歳	2月、 <i>Japanese Life and Character in Senryu</i> 9月、 <i>Edo Satirical Verse Anthologies</i>
1962(昭和37) 64歳	5月、 <i>Zen and Zen Classics, Volume V: Twenty-five Zen Essays</i>
1963(昭和38) 65歳	10月、 <i>A History of Haiku, Volume I: From the Beginnings up to Issa</i>

1964(昭和39) 66歳	6月、平塚の杏雲堂病院に入院。 7月、退院。 <i>A History of Haiku, Volume II: From Issa up to the Present</i> <i>Zen and Zen Classics, Volume II:History of Zen</i> 9月、東京の聖路加病院入院。 10月、新宿区の清和病院に移る。 10月28日、脳腫瘍により死去。 11月1日、学習院旧図書館で葬儀。 鎌倉東慶寺山内、鈴木大拙・夫人ベアトリス女史の近くに埋葬。 法名、不来子古道照心居士
没後、出版物 1966(昭和41) <i>Zen and Zen Classics, Volume IV: Mumonkan</i> 1970(昭和45) <i>Zen and Zen Classics, Volume III: History of Zen, Nangaku Branch</i>	

(年譜作成参考資料)

- ① 『回想のブライス』（回想のブライス刊行会事務所、1984）
- ② Kuniyosi Munakata, "R.H.Blyth Bibliography with Quotations"  
(The Department for Liberal Arts, Shizuoka University)
- ③ 交戦国民間人抑留所・神戸イースタン・ロジホテルにおいて提出したブライスの履歴書(1942・8・21)
- ④ 学習院大学保存ブライスの履歴書
- ⑤ "In Praise of Suzuki Daisetsu and Zen" by R.H.Blythの英文原稿
- ⑥ バーナド・リーチ『日本絵日記』（毎日新聞社、1955）
- ⑦ 金沢で刊行された新聞記事1941
- ⑧ General Register Office出生登録証明書の写し(1993年9月8日発行)
- ⑨ ロンドン大学資料室
- ⑩ 満州日日新聞 (1939.6.30)
- ⑪ 北国毎日新聞 (1940.12. 6) (1941.4. 13) (1941.10.16)



## ブライスの著作目録

### I R. H. ブライスの著作

#### (主要著書)

- 1 *Zen in English Literature and Oriental Classics*. Hokuseido, December 29,1942, and also Dutton Paperback Edition,1960. To be reprinted.Hokuseido,1993.
- 2 *Haiku (Volume I: Eastern Culture)*. First published by Kamakura-bunko, August 25,1949;Second and following printings by Hokuseido.To be reprinted.
- 3 *Senryu:Japanese Satirical Verses*. Hokuseido, November 10,1949 Out of print.
- 4 *Haiku (Volume II: Spring)*. Hokuseido, August 10,1950. To be reprinted.
- 5 『世界の風刺詩川柳』 R. H. ブライス、吉田機司共著、(日本出版協同、1950年10月25日)、絶版。
- 6 *Haiku (Volume III: Summer-Autumn)*. Hokuseido, January 18,1952. To be reprinted.
- 7 *Haiku (Volume IV: Autumn-Winter)*. Hokuseido, May 31,1952. To be reprinted.
- 8 *Buddhist Sermons on Christian*. Kokudoshia, July 15,1952. Out of print.
- 9 *Japanese Humour*. Japan Travel Bureau, October 30,1957. Out of print.
- 10 *Oriental Humour*. Hokuseido, May 10,1959.
- 11 *Humour in English Literature: A Chronological Anthology*. Hokuseido, May 21,1959.Out of print.
- 12 *Zen and Zen Classics (Volume I: General Introduction, From the Upanishads to Huineng)*. Hokuseido, March 25,1960. To be reprinted.
- 13 *Japanese Life and Character in Senryu*. Hokuseido, February 15, 1961. Out of print.
- 14 *Edo Satirical Verse Anthologies*. Hokuseido, September 25, 1961.To be reprinted.
- 15 *Zen and Zen Classics. (Volume V:Twenty-five Zen Essays)*. Hokuseido, May 31, 1962.
- 16 *A History of Haiku. (Volume I: From the beginnings up to Issa)*. Hokuseido, October 3, 1963. Out of print.

17 *A History of Haiku. (Volume II: From Issa up to the Present).*

Hokuseido, July 15, 1964. Out of print.

18 *Zen and Zen Classics. (Volume II: History of Zen,713-867).*

Hokuseido, July 15, 1964.To be reprinted.

-----POSTHMOUS PUBLICATIONS-----

19 *Zen and Zen Classics. (Volume IV: Mumonkan).* Hokuseido, April 25, 1966.

20 *Zen and Zen Classics. (Volume III: History of Zen, Nangaku Branch).*

Hokuseido, February 20, 1970.

21 *Buddhist Sermons on Christian Texts.* August 1, 1976. Heian Intl Pub Co.

22 R.H.Blyth Frederick Frank Zen and Zen Classics. Vintage, May 12, 1978.

(テキスト版)

1 *Dorothy Wordsworth's Journals.* Hokuseido, March 25, 1948.

2 *The New Vista English Readers Senior I.* Sanseido, August 29, 1948.

3 *R.L.Stevenson's Will O' the Mill.* Hokuseido, November 15, 1948.

4 Blyth 西崎一郎共編『国立大學入學試験英語問題選集』(北星堂書店1949.1.25)

5 *Selection from Thoreau's Journals.* Daigaku shorin, April 30, 1949.

6 *An Outline of English Literature.* First published by Ginryu-shobo, September 12, 1949. Second and following printings by Hokuseido, April 20,1952.

7 *William Hazlitte: An Anthology.* Kenkyusha, September 30, 1949.

Kenkyusha Pocket English Series. Out of print.

8 *The Poems of Emerson: A Selection.* Kenkyusha, September 30,

1949. Kenkyusha Pocket English Series. Out of print.

9 *A Chronological Anthology of Nature in English Literature.*

Kairyudo,October 5, 1949. Out of print.

10 *An Anthology of Nineteenth Century Prose.* Hokuseido, September 15,1950.

Out of print.

11 *Thoughts on Culture---Or, How to Be a Human Being---*

Nihon-Kyoukasho, December 5, 1950. Out of print.

12 *A First of Korean.* Written with Lee Eun. Hokuseido, March 1951. Out of print.

13 *A Shortened Version of A WEEK ON THE CONCORD AND MERRIMACK RIVERS by Henry David Thoreau.* Hokuseido, April 5, 1951.

14 *A Chronological Anthology of Religion in English Literature.*

Bunkyo-shorin, September 10,1951. Out of print.

15 *English Through Questions & Answers.* Hokuseido, October 10, 1951. Out of print.

16 *An Anthology of English Poetry.* Nan'un-do, April 10, 1952.

17 *R.L.Stevenson: Fables.* Nan'un-do, April 5, 1953.

- 18 *A Short History of English Literature*. Nan'un-do, April 25, 1953. To be reprinted.
- 19 *A Survey of English Literature*. Hokuseido, April 25, 1958. To be reprinted.
- 20 *How to Read English Poetry*. Hokuseido, April 25, 1958. To be reprinted.
- 21 *Easy Poems(Book One)*. Hokuseido, March 15, 1959. To be reprinted.
- 22 *Easy Poems(Book Two)*. Hokuseido, March 15, 1959. To be reprinted.
- 23 *More English Through Questions & Answers*. Hokuseido, April 18, 1960.

## II R. H. ブライスの論文

- ・”How I became a Buddhist” 『文献報國』 5巻7号 (朝鮮総督府図書館1939.7.1) pp.2-4.
- ・「余は如何にして佛教徒となりしや」橋本徳松訳 『文献報國』 5巻7号 (朝鮮総督府図書館1939.7.1) 22-23頁。
- ・”How I became a Buddhist II” 『文献報國』 5巻8号 (朝鮮総督府図書館1939.8.1) pp.2-4.
- ・「余は如何にして佛教徒となりしや」(中) 『文献報國』 5巻8号 (朝鮮総督府図書館1939.8.1) 25-27頁。
- ・”How I became a Buddhist III” 『文献報國』 5巻9号(朝鮮総督府図書館1939.9.15) p.2-4.
- ・「余は如何にして佛教徒となりしや」(下) 『文献報國』 5巻9号 (朝鮮総督府図書館1939.9.15) 16-18 頁。
- ・「宗教とユーモア」 『文献報國』 5巻11号 (朝鮮総督府図書館1939.11.1) pp.4-8.
- ・"ZEN AND HAIKU"THE CULTURAL EAST(Volume 1, Number 1).  
The Matsu-ga-oka Library, July 5, 1946. Edited by Daisetz T. Suzuki and R. H. Blyth. Out of print.
- ・"ZEN AND HAIKU (continued)" *THE CULTURAL EAST(Volume 1,Number 2)*.  
The Matsu-ga-oka Library, August 5, 1947. Edited by Daisetz T. Suzuki and R. H. Blyth. Out of print.
- ・“The position of haiku and senryu in world literature” *Contemporary Japan*. pp.537-551 1950.
- ・「世界文学に於ける川柳の地位」 (『番傘』 39巻1号 1950.1) pp.2-4.
- ・「世界文学における俳句と川柳の位置」 (『朝日評論』 12月号 1950)。
- ・「川柳と仏教」 (『大法輪』 18巻6号 1951.6) 41-45頁。
- ・「花は誰のために咲くか」 (『大法輪』 22巻2号 1955.2)。
- ・「何のために読書するのか？」 (『読書春秋』 6巻12号 春秋会編1955.10) 。
- ・ “Buddhist in Senryu” *Young East* (Vol.3, No.4) The Young East Association.
- ・ Tohkai,Inc.1977. pp.21-31 (This article is reprinted from *Young East*, the old series, 1956 issue).
- ・「日本のどこがそんなにいいのか」 (『心』 9巻2号 1956.1)。

- ・「鈴木大拙博士と禅を讃えて」（『鈴木大拙選集』春秋社、1957）。  
English manuscript "In Praise of Suzuki Daisetsu and Zen".
- ・「川柳と詩」（『國文学：解釈と鑑賞』7月号 1958）。
- ・「日本文学とヨーロッパ文学におけるユーモア」酒井善孝訳（『國文学：解釈と教材の研究』5巻1号 學燈社 1959.1）。
- ・R. H. ブライス翻訳「前田雀郎自選川柳三十五句」（『川柳雑誌』9月号10月号1960）。
- ・「禅と鈴木大拙」（『鈴木大拙禅・選集』春秋社1961）。
- ・「川柳の価値と歴史的な位置」（『國文学：解釈と教材の研究』7巻12号 學燈社 1962.9）。
- ・"Why nobody likes senryu" *Orient/West*(Vol.7, No.3) March 1962. pp.11-13.
- ・"Zen, Mysticism, and Existentialism" *Orient/West* (Vol.8, No.2) 1963.3-4, pp.11-16.
- ・"Love and Literature" *Orient/West* (Vol.8, No.5)1963.9-10, pp.88-92.
- ・"After Zen-Zen and the Object of Life" *Young East* (Vol.1. No.3, Summer, 1975)

### III R. H. ブライスのエッセイ

- ・「俳句の思想上・下」（『雲母』3、4月号、1950）。
- ・「外人の見た川柳」（「第二回京浜川柳大会会報」11月1950、4頁）。
- ・「俳句と日本の国民性—中心をなす仏教思想—」（『大法輪』6月号、1950）39-43頁。
- ・「無文学の文学」（『北国俳壇』6月号、1950）。
- ・"The position of haiku and senryu in world literature" *Contemporary Japan*.1950, pp.537-551.
- ・「世界文学における川柳の位置」（『朝日評論』12月号、1950）。
- ・「俳句とはどんなものか」（「秋蘭」10月号、1951）。
- ・「川柳」（『読売グラフ』顔欄11月号、1955）17頁。
- ・「歴史をつくる児童文學」『婦人の友』12月号、1956. 146-148頁。
- ・「学生に造られた先生」『輔仁會雜誌第184号』（学習院輔仁會1962）25-26頁。
- ・"Why nobody likes senryu" *Orient/West* (vol.7, No.3). March 1962. pp.11-13.
- ・"Zen,Mysticism,and Existentialism" *Orient/West* (vol.8, No.2). 1963.3-4. pp.11-16.
- ・"Love and Literature" *Orient/West* (vol.8,No.5). 1963.9-10, pp.88-92.
- ・「日本文化と世界文化」『国際文化』No. 161.（財団法人国際文化振興会1967）2-7頁。

### IV 新聞の寄稿記事、講演、その他

#### （新聞の寄稿記事）

- ・「祖国英に三下り半を叩きつけて 翻然佛門に歸依」（満州日日新聞、1939年6月30日）。

- ・ 「日本人へ・・・ひと言」（朝日新聞東京版、1949年11月9日）。
- ・ 「戦後11年目の日本に望む一俳句の精神をこそ、  
決して成金民族になりなさるな」（神戸新聞、1956年8月10日）。
- ・ 「日本の学生と私―教師生活35年を顧みて」（読売新聞 1959年2月23日）。

#### （講演）

- ・ 「俳句と川柳」（俳文学会春季総会にて講演、5月27日、1951）。
- ・ 「仏教とユーモア」（仏教文化講座・浅草寺教化部、7月23日、1959）。

#### （ラジオ、視聴覚教材）

- ・ おしゃべりひよこさん ジュニア3号 A面Book 2  
(Unit 4) Lesson 6 電話の取り次ぎ B面Book 3(Unit 6)  
(文部省決定通信教育 財団法人日本英語教育協会Teichiku 1950)。
- ・ 少年と盗賊(1) シニア1号 A面Book 1(Unit 1)  
少年と盗賊(2)、ハンス・アンデルセンから少女への便り  
(文部省決定通信教育 財団法人日本英語教育協会Teichiku 1950)。
- ・ 「日本語のおもしろさ、むずかしさ」『ことばの研究室・対談』  
(NHK第2放送、1950年12月17日)。
- ・ 「川柳と日本人・座談会前田雀郎、R. H. ブライス、石川欣一」  
(NHK第2放送、1950)。

#### （その他）

- ・ Foreword by R.H.Blyth, *The Tsutsumi Chūnagon Monogatari*, translated by Umeyo Hirano (Hokuseido Press 1963).
- ・ Foreword by R.H.Blyth, *HAIKU POETRY BY J.W.HACKETT*. (Hokuseido Press, 1964).
- ・ Foreword and Comments by R.H.Blyth, *Zen Haiku and other Zen Poems of J.W.Hackett*. revised edition of *The Way of Haiku* (Japan Publishing, Inc.1983).

## 参考文献

### I R. H. ブライスの業績について、あるいはブライスについて述べた書物 (俳句・川柳・禅関係)

- Philippe Jaccottet: essay entitled "L'Orient limpide" first published in "Promenade sous les Arbres", 1954, and subsequently reprinted in "Une Transaction Secrete" (Gallimard, 1987).
- Daisetz T. Suzuki, *Zen and Japanese Culture* (Princeton University Press as revised edition, 1959) (Charles E. Tuttle Company, First Tuttle edition, 1988) pp.228-238.
- Harold Stewart, *A Net of Fireflies* (Charles E. Tuttle, 1960) pp.124-128.
- 山屋三郎「人間と神・実存と禅」『鈴木大拙禅・選集』（春秋社 1961）62頁。
- Clay Lancaster, *The Japanese Influence in America* (Twayne Publishing, Inc. 1963) p.243.
- J.D. Salinger, *Raise High the Roof Beam, Carpenters and Seymour: An Introduction* (Boston: Little, Brown and Co., 1963).
- 下村寅太郎「鈴木大拙先生」『現代日本思想大系、第8巻、月報17』（筑摩書房 1964）。
- D.T. Suzuki, "Reginald Horace Blyth", *The Eastern Buddhist, New Series, VOL. I, NO. 1.* (Otani University, Kyoto, September 1965.) p.133 f.  
翻訳転載 鈴木大拙「ブライス博士を悼む」川島保良編『回想のブライス』回想のブライス刊行会事務所 1984）28頁。
- Shojun Bando, "In Memory of Professor Blyth"  
*The Eastern Buddhist, New Series, VOL. I, NO. 1.* (Otani University, Kyoto, September 1965) pp134-137.  
一部翻訳転載 坂東性純「ブライス先生と仏教」川島保良編『回想のブライス』（回想のブライス刊行会事務所 1984）113～116頁。
- 寿岳文章「ブライスさんの思い出」『禅文化』38 72-72頁（禅文化研究所1965）。
- 阿部佐保蘭『川柳と翻訳』（中央公論事業出版 1966）。
- Harold G. Henderson, *Haiku in English* (Charles E. Tuttle Company, 1967) pp.13,31,62.
- バーナード・リーチ「喜びと悲しみ」『イースタン・ブディスト』（1967）『回想鈴木大拙』に収録（春秋社1975）。
- 安藤正瑛著『アメリカ文学と禅』（英宝社 1970）53頁。
- 岡島義恵著「日本文芸の外国に対する影響（1）」『日本文芸と世界文芸』（宝文館出版 1971新修版第一刷）34～37頁。
- 坂東性純「大拙先生と西欧世界」『回想鈴木大拙』（春秋社1975）。
- 古田紹欽「松ヶ岡文庫の建った前後」『回想鈴木大拙』（春秋社1975）。
- Atsuo Nakagawa, *Studies on English Haiku* (The Hokuseido Press, 1976).

- ・ 上田 真『蛙飛び込むー世界文学の中の俳句 (明治書院1979)  
15頁～16頁、232 頁～233頁。
- ・ Robert Aitken,*Taking the Path of Zen* (North Point Press,1982).
- ・ Hazel Durnell, *Japanese Cultural Influences on American Poetry and Drama*  
(The Hokuseido Press, 1983)pp.178-181.
- ・ Hiroaki Sato, *One Hundred Frogs From Renga to Haiku to English*  
(Weatherhil,1983)p.129,154.
- ・ William J.Higginson, *The Haiku Hand Book* (MacGraw-Hill 1985)  
pp.57,64-65,67,78,102-103,113,126-127,152.
- ・ Cor van den Heuvel ed. *The Haiku Anthology*  
(A Fireside Book, Simon & Schuster,1986)  
pp.17,21,27.
- ・ Rick Field, *How the Swans Came to the Lake:A Narrative History  
of Buddhism in America* (SHAMBHALA 1986) pp.201-202, 214
- ・ 佐伯彰一・芳賀徹編「レジナルド・H・ブライス (俳句)」  
『外国人による日本論の名著』(中公新書 1987) 194 ～201 頁。
- ・ 佐藤和夫『俳句からH A I K Uへ』(南雲堂 1987) 4 頁。
- ・ 佐藤紘彰編著『英語俳句ーある詩形の広がり』(サイマル出版会1987)  
4 頁、83頁、93頁、172 頁、250 頁。
- ・ Yagi Kametaro, *Haiku--- Messages from Matsuyama*  
(Katydid Books, Oakland University,1991) pp.17, 31.
- ・ 佐藤和夫『海を越えた俳句』(丸善ライブラリー 1991)  
21頁、22頁、31頁、59頁、105 頁、109 ～121 頁、123 頁。  
130 ～131 頁、148 頁、160 頁。
- ・ 重松宗育『モモも禅を語る』(筑摩書房 1991) 102 ～103 頁。
- ・ 川本皓嗣『日本詩歌の伝統ー七と五の詩学ー』(岩波書店1991) 209～210 頁。
- ・ 重松宗育『禅の贈り物』(法蔵館 1991) 20頁、79頁、178 頁。
- ・ 持留初野『文化の国際化ー英詩と俳句を巡ってー』  
(近代文芸社1992) 137ー139 頁。
- ・ 佐藤紘彰『アメリカ翻訳武者修行』(丸善ライブラリー 1993) 93頁
- ・ 星野慎一『俳句の国際性』(博文館 1995)。
- ・ 吉村侑久代『R.H.ブライスの生涯ー禅と俳句を愛して』(同朋舎出版 1996)。
- ・ 速川和男・川村ハツエ・吉村侑久代『国際化した日本の短詩』(中外日報社 2002)  
pp.112-122, pp.233-235, p.240-241。
- ・ 吉村侑久代・阿部貢『HAIKUのすすめー日本人のための英語ハイク入門』(ジャパ  
ンタイムズ 2003) pp.152-157。
- ・ 荒井良雄『ブライス禅の世界ー平和は詩心から』(北星堂書店 2004)。
- ・ 内田園生『世界に広がる俳句』(角川書店 2005)。

- ・上田邦義『ブライズ先生ありがとう』（三五館 2010）。

#### （「人間宣言」関係）

- ・前田多門 {「人間宣言」のうちそと} 「文芸春秋3月号」（1962）85頁、90頁。
- ・山梨勝之進『山梨勝之進講話集』全11巻（海自幹部学校 1968）。
- ・山梨勝之進『山梨勝之進先生遺芳録』（水交会 1968）。
- ・読売新聞社社会部編『天皇・その涙と微笑』（現代出版 1976）52頁～56頁。
- ・市来俊男ほか編『歴史と名将一戦史に見るリーダーシップの条件一』（毎日新聞社、1981）362頁～369頁。
- ・高橋紘・鈴木邦彦著『天皇家の密使たち一占領と皇室』（文春文庫 1989）。  
79頁、80～84頁、86～92頁、95～96頁、228頁（親本・現代史出版会刊 1981）。
- ・杉本健『海軍の昭和史一提督と新聞記者』（文芸春秋 1982）。
- ・宮城県百科事典編集本部『宮城県百科事典』（河北新報社 1982）572頁、1062頁。
- ・竹前栄治『GHQ』（岩波新書 1983）。
- ・中村光夫・袖井林二郎他「山梨勝之進一海軍大将」『百年の日本人』その二（読売新聞社 1985）168頁。
- ・高橋紘著『陛下、お尋ね申し上げます』（文春文庫 1988年）18頁、280頁。
- ・ウィリアム・P・ウッダード著 阿部美哉訳『天皇と神道』サイマル出版 1988）  
296～297頁、302～311頁。
- ・阿部美哉著『政教分離』（サイマル出版、1989）56頁。
- ・木下道雄『側近日誌』（文芸春秋、1990）。
- ・寺崎英成、マリコ・テラサキ・ミラー『昭和天皇独白録、寺崎英成・御用掛日記』（文芸春秋、1991）203～204頁、211頁、219頁。
- ・吉田裕『昭和天皇の終戦史』（岩波新書 1992）82頁。

#### （「日本民芸館」関係）

- ・「工藝」117号、1947（『柳宗悦全集』16巻、筑摩書房、1981）488～499頁。
- ・バーナード・リーチ『日本絵日記』（毎日新聞社、1955）。
- ・柳宗悦著『柳宗悦全集』21巻中（筑摩書房、1989）472～491頁。
- ・柳宗悦著『柳宗悦全集』22巻下（筑摩書房、1992）277～279頁。

#### （全般）

- ・エリザベス・グレイ・ヴァイニング『皇太子の窓』（文芸春秋 1952）38～39頁、  
58～59頁。
- ・平川祐弘著 {「人間宣言」の内と外一ブライス教授と山梨提督をめぐって一}  
『平和の海と戦いの海』（新潮社、1983）139～255頁、269～286頁。  
講談社学術文庫版へのあとがき講談社学術文庫 1993）348～352頁。
- ・川島保良編『回想のブライス』（回想のブライス刊行会事務所 1984）。



- *The Genius of HAIKU, Readings from R.H. Blyth* (The British Haiku Society 1994).
- David Cobb, "MR TIMELESS" (ESSEX, Countryside Magazine February, 1994).
- Donald Richie, "The Japan Journals-collected diaries, 1947-1994." (The Japan Times 1994).
- Edited by Kuniyoshi Munakata and Michael Guest, *ESSENTIALLY ORIENTAL, B.H. Blyth Selection* (The Hokuseido Press 1994).
- 吉村侑久代『R. H. ブライスの生涯—禅と俳句を愛して』(同朋舎出版1995)。
- コータツツイ & ダニエルズ編『英国と日本—架橋のひとびと』(思文閣出版1998) 348~350頁。
- イアン・ニッシュ編『英国と日本—日英交流人物列伝』(博文館新社2002) 371~398頁。

## II R・H・ブライスについて(雑誌、紀要)

- 「R. H. ブライス先生追悼特集」『日本大学英文学会会報』第16巻(1966) 70~87頁。
- 諸留 寛「R. H. Blythの詩について」『愛知大学英学史研究』4(1972)  
転載:川島保良編『回想のブライス』(回想のブライス刊行会事務所1984) 56~61頁。
- Kuniyoshi Munakata, "THE MOST REMARKABLE AMERICAN: R.H. Blyth on Henry David Thoreau". (OTSUKA REVIEW No.9, The English Literary Society of The Graduate School Tokyo University of Education (1972) pp.56-67.
- 宗片邦義(Kuniyoshi Munakata) "R.H. Blyth Bibliography with Quotations" 『静岡大学教養部研究報告』8(1972) pp.69-91.
- 岡国臣(Kuniomi Oka) "A Biography of Reginard Horace Blyth---Through His Book--『久留米大学論叢』第20巻(1972) 一部翻訳転載川島保良編『回想のブライス』(回想のブライス刊行会事務所, 1984) 100~104頁。
- 宗片邦義「R. H. Blythと日本文化」『英語青年』117(10)(1973)。
- 田村完誓「R. H. Blythにおける禅と英文学」『立正大学教養部紀要』9(1976) 68~73頁。
- 田村完誓「R. H. Blythと英学」『立正大学教養部紀要』10(1976) pp.105~111.
- 大塚裕悟「文化と言語——R. H. Blyth "Oriental Humour" の英訳 について」『帝塚山短期大学紀要』14(1977)。
- Mallory Fromn, "R.H. Blyth: A Brief Biography and Appraisal" 『津田塾大学紀要』(1983) pp.259~268.
- 田村完誓「R. H. ブライス『無執着』」『立正大学教養部紀要』19(1986) 89~96頁。
- 白米満行「R. H. ブライスの人と業績—1—」『皇学館論叢』20(6)(1987) 1~17頁。
- 白米満行「R. H. ブライスの人と業績—2—」『皇学館論叢』21(3)(1988) 1~17頁。

- ・夏石番矢「『吠える』と「四つのハイク」ーアレン・ギンズバーグの1955年ー」  
『ビート読本・ビート・ジェネレーションー六十年代アメリカン・カルチャーへの  
パスポート』（詩潮社 1988）。
- ・速川和男「短詩型文学の英訳ー特に俳句・川柳について」『英語教育』（1988）。
- ・Thomas Paul Lynch, *An Original Relation to the Universe:Emersonian Poetics of  
Immanence and Contemporary American Haiku* (A DISSERTATION, Presented to  
the Department of English and the Graduate School of the University of Oregon  
in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy,  
(1989). PP.141-148.
- ・仙北谷昇一「禅・俳句・生活の三位一体ーブライスの「俳句」」  
(HAIKU INTERNATIONAL No. 2, 1991) 10-12頁。
- ・平井照敏「フランス・ハイカイ詩運動の展開」  
(HAIKU INTERNATIONAL No. 2, 1991) p.26。
- ・ロバート・エイトケン、重松宗育訳「禅のこころ芭蕉のこころ」『禅文化』  
第136号～第143号（花園大学内、禅文化研究所1990～1992）。
- ・William J. Higginson, "On the Translation of Haiku"  
(HAIKU INTERNATIONAL No.5, 1992) pp.10-11.
- ・James Howe, "A Buddhist's Shakespeare:Affirming Self-Deconstructions"  
(Associated University Presses, 1994).
- ・吉村侑久代「R. H. ブライスのルネサンス」『松ヶ岡文庫研究年報』第9号  
(1995) 29～58頁。
- ・星野慎一「俳句の国際性」『学会会報』No.810 (学会1996)。
- ・吉村侑久代「アメリカ禅ハイクの一系譜ーR.H.BlythとJames W. Hackett-」  
(『東海英米文学』第6号 東海英米文学会 1997) 141～158頁。
- ・新垣紀子「天皇陛下に川柳を教えた男R. H. ブライス」『月刊オール川柳』  
(葉文館出版 1998) 17～25頁。
- ・井上 暹「R.H.BLYTHと俳句ー外国人の俳句理解をめぐってー」『日本現代詩歌研  
究』第3号（日本現代詩歌文学館 1998）119～139頁。
- ・堅山道助「ブライス先生のこと」『霞関會會報』No.632 (霞関会 1998)
- ・Ikuyo Yoshimura, "R.H.Blyth and American Haiku-R.H.Blyth, James W. Hackett and  
Richard Wright"(Journal of Liberal Arts and Science, Asahi University, 2001)pp.79-87.
- ・吉村侑久代「海外に広がる俳句ーブライスと世界俳句」（『吟遊』第10号 2001）  
10～15頁。
- ・鶴田恭子「出会いーブライスと俳句とー」『俳句を創る会会報』No.17  
(俳句を創る会 2002) 3頁。
- ・平 辰彦「小林一茶とマザーグース、R.H.ブライスの俳句の翻訳をめぐって」  
『マザーグース研究V I』（マザーグース研究会研究誌6号2004）14～27頁。
- ・吉村侑久代「英文誌The Cultural Eastからの東洋文化総体の基盤をなす精神世界

Editorialの翻訳を試みて」 (『松ヶ岡文庫研究年報18号』松ヶ岡文庫 2004)  
145～157頁。

資料

- ①David Cobbから筆者への手紙 (January 8, 1993・June 11,1993・ December 8, 1993).
- ②James Kirkupから筆者への手紙 (June 19, 1993・July 17, 1993・October 3, 1993).
- ③『俳句の心』出版前 (1993年頃) の英国におけるブライスの情報 (David Cobb氏提供)。
- ④Hetty Blyth から山田達子 (ブライスの秘書) への手紙 (April 6, 1959).
- ⑤H.G.HendersonからJames W. Hackettへの手紙 (December 25,1964, Hackett氏提供).
- ⑥ブライスの出生届 (1899年1月13日、Leytonの出生登録所に父 (Horace Blyth)より提出)。
- ⑦ブライス両親結婚証明書 (1887年9月、Hertfordの独立教会にて結婚)。
- ⑧ブライス履歴書2種類 (神戸抑留所提出・学習院大学提出)。
- ⑨ブライスの自筆筆跡コピー。
- ⑩鈴木大拙とブライスの初会見を示す英文原稿(武田々氏提供)。
- ⑪Newsletter of British Haiku Society (May,1993・November,1993).
- ⑫James W. Hackettから筆者への手紙 (August 17, 1997).
- ⑬*THE CULTURAL EAST* の表紙。
- ⑭*THE CULTURAL EAST Vol. No.1*のEditorial (英文) の掲載部分 pp.1-6.
- ⑮吉村侑久代「英文雑誌 *The Cultural East* から東洋文化相對の基盤をなす精神世界 Editorialの翻訳を試みて」『松ヶ岡文庫研究年報』第18号 (松ヶ岡文庫2004)。